
魔法先生ネギま！～異界を切り裂け! A.C.E.(R)の翼～

冒険ファンタジー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜異界を切り裂け！A・C・E・(R)の翼〜

【Nコード】

N5883P

【作者名】

冒険ファンタジー

【あらすじ】

神様のミスによって死亡した剣崎桃也は元居た世界には戻れない為、詫びとしてA・C・E・(R)の能力を与えネギまの世界へと転生する。まったくの不定期で駄文の為時間が空いてしまいますのでご了承願います。

プロローグ（前書き）

前の小説、魔法先生ネギま！〜最強無敵のチート降臨〜は、あまりの酷評でしたので、新しくやり直しました。

一部前と同じがありますが、出来れば気にしないで下さい。

プロローグ

俺の名前は剣崎桃也、高校三年生でそこらの平凡な凡人の筈だったが、今は真っ白な空間の中でポツンとしています。

「ここ、どこだ？」

思わず呟いた言葉だった。

「すまん！」

「うわっ誰だ!?!」

突然後ろから謝罪の言葉が聞こえて驚いて振り返った。
そこに居たのは三十代後半くらいの渋いオッサンがいた。

「申し訳ない、私のせいで君を死なせてしまって」

えっ?君を死なせてしまっってどういう事だ?
まさか俺って!?!

「あの、もしかして俺死んだって事ですか？」

「そう、君は死んだのだ」

俺死んだ、おれしんだ、オレシンドって!?!

「ちょ、ちょっと何ですか!?!何で俺死ななくちゃいけないんですか!?!」

俺は必至で目の前のオッサンに問い詰めた。

「実は、私のミスで…」

えっ、ミスってどういう事だ？

まさかこのオッサン！？

「私の手違いで君を死なせてしまった」

手違いでって！？

「ちょっとまって！？じゃあ何が、あんたのせいで俺は死んだのか！？」

「そつゆう事になるな」

「ふざけんな—————！！」

~~~~~

「少しは落ち着いたかね？」

「なんとかね…」

正直納得はしていないけど、なってしまったからしょうがないと受け入れるしかない。

「それで死んだ俺をあの世界へ連れて行くのか？」

「いや、君には別の世界で生きてもらう」

「えっ？別の世界って！？」

てっきり死んだらあの世界に行くとはかり思っていた。

「こちらの不手際によって、本来ある筈の未来を奪ってしまったから、その詫びがしたい」

「お詫びつて、何か特殊な事でもしてくれるのか？」

「そうゆう事だな。君の望む力を与えよう！」

「俺の望む力つて…ん？」

何だつてそんな事が出来んだ、このオツサン……まさか!?

「オツサン、あんたつて…神なのか!？」

「まあな」

軽い返事が来たよ、マジで神なのか？

「それから君の望む力と言っても、一つだけだよ」

やっぱその辺、限りがあるのね。

「そうだなあ。……………やべ、思い付かねえ」

「…そうゆうのは、好きなマンガとかゲームとかでも良いからね」

それだと多すぎるよな。あつそうだ！生前やってたゲームにしよう。

「じゃあ、アナザーセンチュリーズエピソードRの全機体の能力をくれ！」

「分かった。ついでに、それに出てくるキャラの身体能力とか特殊能力等も付けよう。思った事を形にするような感覚で出してくれ」

それつて、エレメント能力とか、ゼロのギアスとかそうゆうものか!?

「ちなみに身体機能は、SEED・Dのコーディネーターの体、コードギアスのスザク、フルメタルパニツクの宗介。視力は、マクロスのミシエル、フルメタルパニツクのクルツ。技術力は、マクロス、アクエリオン、コードギアス。特殊能力は、ガンダムZ/Xボーンの新タイプ、SEED・DのSEED、マクロスの歌唱力、アクエリオンのエレメント能力、コードギアスのギアスとコード、オーバーマンのオーバースキル。その他諸々を付けるね」

チートだな、これだけ揃うと。……ん!?

「ちょっとまって、さっきコードって言ってたよね?それって……」

「そう、不老不死だ」

「マジでか!？」

「そう、額にコードの証があるから、後で見してみなよ」

あるのかよ。そうだもう一つあった!

「ちなみにギアスの方は?」

「ギアスは、一人につき一回きりというだと不便だと思うから、何度でも使えるようにしたから。後、暴走もしない様にしたから」

それ最高じゃん。

「それで、容姿はどうしたい?」

「そうだな。各作品の中で一番人気の奴をお願いします!」

「じゃあ、早乙女アルトの容姿ね。後、髪は銀髪にしとくね」

アルトって、ぱつと見て女みたいに見えるやつか。しかも、何故に銀髪?

すると、光が満ち、そして光が収まった。

「はい変化終了。次に君の新たな名前なんだが？」

「えっ名前を変えるんですか？」

「もしこれから行く世界で名前が横文字しかなく、一人だけ縦文字だったら変だろ？」

まあ、ある意味死んで転生する訳だから名前を変える必要はあるな。じゃあ前から気に入ってる名前があるからそれにしよう。

「よし、今日から俺はラウル・クルセイドだ！」

「ではラウル君、最後に君の行く世界なのだが？」

神のオッサンが十枚程の紙差し出して来た

「なんですかこれ？」

「どれか一つ選びたまえ、そこが君の行く世界だよ」

アバウトな選び方だな。

「え〜と、じゃあこれで」

俺は一枚引き抜いて、そこに行く世界の名前を見てみたら

「魔法先生……ネギま……!？」

これって、子供先生が活躍する世界じゃないですか!？  
まあ本も全巻持つてるし、なんとかなるか。

「どうやら決まったようだね。そちらで生きていける様に、魔法を



使える様にしたり、体力・魔力・気力を最大限にしておいたから。あつ始動キーは、自分で考えてね」

「（もうチートを超えてバグキャラになった気分だよ）」

「それではラウル君。新しい世界に旅立つのだ！」

その瞬間、俺の足元に穴が空きそこに落ちた。

「わあああああああ~~~~~!!!!!!」

ネギまの世界に突入

ただ今俺は、かなり高い所から落下中です。何で空の上に出るんだよ!?

「しかし、このまま落ちたら痛いだろうなって現実逃避してる場合じゃなかった。こんな時は、そうだ」

俺は早速デステニーガンダムのウイングユニットで大空を飛んだ。

「ははっ、鳥になった気分だ。風が気持ちいい」

このまま当てもなく飛んで行こうと思った。

でも、いつまでもこうしてる訳にはいかないからな。

「さてと、この辺で降りてみよう」

俺は、広大に広がる森の中に降りた。

その時、目の前に紙きれが浮いていた。

手に取って見ると「ラウル君へ」と書いてあった。

神のオッサンからだ。

「ラウル君、君がこれを読んでいるとゆう事は無事に辿り着いた様だね。

早速だが、今君は原作より500年前の時代にいる。何故この時代かと言うと、君の能力を把握してほしかったからである。不老不死だから寿命の事は気にしないでいいからね。後、魔力とか気とか最大限の設定が、ナギとラカン以上になっちゃった。それと魔法はまだ使えないよ、それは誰かに教えて貰った方がいいと思ったから。それじゃあ、第二の人生を楽しんできてね」

おいおいナギとラカン以上って……もうバグキャラ超えてないか？  
でもって、魔法はまだ使えないか。

「さて、自分はどんな事が出来るかな？」

とりあえず俺は、気にしない事にした。

すると、近くの茂みから、何か近づいて来る音がした。

「ん、何だ？」

すると、茂みの中から、人並みの大きさの狼が現れた。

「丁度良いや、君で試してみようつと。行くぞ！」

狼に立ち向かったラウルであった。

それから10年後……

時が経つの早過ぎだると突っ込まないで下さい。

自分の能力が分かった。

A・C・Eの力で武器とか兵器等出せる様になった。

武器は基本的に出し入れ自由だから問題無し。

体の一部を変化して、「無限拳<sup>パンチ</sup>!!!」、「オーバースキル（加速）!!!」等を試してみたら、問題無く使えた。

今の武器は、アクエリオンマーズの星空剣、アーバレストの散弾砲にしてみた。

つーか改めて思うと、これらの能力って、チートとゆうよりバグキヤラに近いな。

ついでに分かった事は、今自分が居る場所は、通称魔獣の森と言われ、その名の通り魔獣だらけの森だというのが分かった。まあ、自分の能力を知る絶好の場所だったから都合がよかった。そろそろ世の中を見て回ろうかな。

「よし、能力もだいたい把握出来たし、じゃ…出ば「ドカーーン！」「ん！？なっなんだ!?!」

急に なにか破壊した爆音が聞こえた。

「行ってみよう」

俺は爆音が聞こえた方へと駆け出した。

## プロローグ（後書き）

前の小説のリベンジ版です。  
今度の小説は成功したいです。

## オリ主設定1（前書き）

オリ主設定、すなわちラウルの変身設定等を紹介しますが、今はこれだけです。

## オリ主設定1

オリジナル主人公

<名前>

ラウル・クルセイド（男） 18歳

<容姿>

容姿はマクロスFの早乙女アルト風で髪は銀髪

女顔の為、よく女性と間違われる

髪型は気分によって、髪を結んでポニーテールだったり、結び目を解いておろしたりする

服装はコードギアスのスザクの私服

<能力>

A・C・E・Rの力

頭に浮かんだ武器や鎧や兵装等を作る事が出来る（壊れても再生可）  
全キャラのステータスや特殊能力が使える

<主な特殊能力>

SEED（SEED・Dの全キャラ）

エレメント能力（アクエリオンの全キャラ）

不老不死のコード（コードギアスのCC）

絶対遵守のギアス（コードギアスのゼロ、同じ相手に何度でも使用可）等

<ネギまでのステータス>

習えばネギまの魔法が使える（属性は全部使える）

始動キーはガン・ナイト・バル・アクエリオ

体力・魔力・気力全てがナギ&ラカン以上

<称号>

サウザン・カエボンス  
千の武器使い、色んな武器や兵器など操るから。

エンジンリック・マキナ

機械天使、機械の翼を見たから、アクエリオンになっているからじゃない。

オールサイド・テストロイヤ

広範囲殲滅者、ストライクフリーダムの高マット・フルバースト等で多くの敵を狙ったから。

紅き翼の最終兵器、実は一番強いんじゃないかね？と言われてるから。

<仮契約>

テオドラとの仮契約

千の体を映す水鏡

体が液化状態になり、変身能力のあるアーティファクト

アダットして液化したら、頭に浮かんだ人物・動物を思っただけで形が変わった後、

アベアットしたら、その人と（服装も仕草も口調も）そっくりになる

A・C・E・Rのキャラと機体もこれで変身できる

分裂も可能（ラウルの擬似人格付き（偽物の自覚あり））

ナギとの仮契約

カーズブレイカー

見た目はただのサバイバルナイフのアーティファクト

あらゆる呪いを解呪する事が出来る

エヴァの呪いや永久石化を解く事も可能

エヴァとの仮契約

戦場の歌姫

見た目はただのマイクのアーティファクト

主な効果はA・C・E・Rに出てる作品の歌を歌うと、あらゆる

能力を上昇させる



## オリ主設定1（後書き）

始動キーは、ガンダム、ナイトメア、バルキリー、アクエリオンで決めました。

今までは体の一部を機体化だったが、千の体を映す水鏡で体全部を機体化出来る様になった。

カーズブレイカーについては、エヴァの呪いを解呪する事を前提でこうなりました。

駆け付けたら吸血鬼に勝負を挑まれた！？（前書き）

仕事が長引いた＋風邪引いたで遅くなりました。

駆け付けたら吸血鬼に勝負を挑まれた!?

「?????サイド」

「まったく、身の程知らずが!」

「弱エーナ、オメーラ」

私の名は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。真祖の吸血鬼だ。

こっちは魔法使いの従者のチャチャゼロだ。

私達は今、未熟な賞金稼ぎと、自称正義の魔法使いに命を狙われていたが、軽く返り討ちにしてやった。

最近、私の首を狙ってくる雑魚が多くて嫌になるな。

「ん? またか……性懲りもなくまた雑魚が来たか」

「オツ? ゴ主人、マタ来ルノカ、今度八手強イトイイナ」

そして、私達の目の前に男物の服を着た女が現れた。

~~~~~

「ラウルサイド」

さっきの音が気になって来てみたら、そこには金髪の少女と動く人形が居た。

あれ? この少女何処かで見た事あるよ……そうだ! この子エヴァンジェリンだ!

原作の子に遭っちゃったよ。ん、あれ? 何で臨戦態勢を取っているんだエヴァは、まさか!?

そう思った瞬間、氷の弾が沢山襲って来た。

「うわっ！？あぶねっ！？」

俺は、襲って来る氷の弾を、体に当たる寸前で何とか避けた。

「いきなり何するんだ！」

俺は、何故エヴァが攻撃してくるのか理由を聞いてみた。

「ん？お前、私の首を取りに来たんだろ？」

「はあ！？君みたいな可愛らしい子の首を取る訳ないだろ！」

「！？？」

あれ！？俺今すごい事口走った様な、エヴァも啞然としているし……。
とにかく今はこの状況を何とかしないと……。

くエヴァサイドく

「ん？お前、私の首を取りに来たんだろ？」

「はあ！？君みたいな可愛らしい子の首を取る訳ないだろ！」

「！？？」

なっ！？こいつ……私の事を、か……可愛らしいだと……。

「ドーシタゴ主人？」

「い、いや……何でもない」

「？」

だ…だが、こいつも私の正体を知れば、襲って来るか、もしくは逃げ出すだろう。

くだらん幻想を考えてないでこの女をどうにかしないと。

「そんな事より、貴様は何者だ？」

「俺？俺はラウル、ラウル・クルセイド」

「ラウルか、何の目的でここにいる？」

「ここで10年程前から住んでいるから」

「はあ！？ここに住んでる！？」

「そうだけど……」

つまり、私を始末に来た訳じゃなくて、近くで騒がしいから見に来ただけだと言うのか？

ん……ちよつとまで！？確かここは……。

「ここは魔獣の森だぞ？人が住める土地じゃないぞ？」

「人じゃないから住んでいるんだよ」

なんだと！？この女、人間じゃないだと！？

「貴様、人間ではないのか！？」

「人間だよ。死ぬ事が無いけどね」

「なに！？」

死ぬ事が無いだと！？こいつも不老不死か！？だとすると……私と同じ……。

「お前…お前も吸血鬼か！？」

「いや違うけど」

違うのかい！？

「では、何故不老不死なんだ？」

「俺の額にあるこれが原因で、死ぬ事が無いんだ」

ラウルは、額にある鳥の様な赤い刺青を指差した。

「何だそれは？」

「10年以上前に、ある女性にキスされた後、急に額が熱くなって、鏡を見たらこれがあった」

「何だそれは！？てか、明らかにその女が原因ではないか！」

「そう思っただけで聞いてしまったら、「ようやく、自由になれた」と言っただけで自殺したんだ」

「……………！？」

私は、ラウルの話を聞いて愕然とした。

その女は、不老不死の権利をこの女に譲った後に自殺したのだろう。私も無理やり吸血鬼になってしまったから、その女の気持も解らなくないけど、不老不死の権利を

誰かに譲れるのが少し羨ましいと思ってしまったな。

「それで俺は、何されても死なない体を持つちまったって訳だ」

「お前は、辛くないのか？突然違う存在になった事が！？」

「確かに辛さ。でも、なっちゃった以上は、もうどうしようもないしな。ま、なるようになるだろ」

結構樂觀的だな。

「呑気だなお前は」

「まあね。ところで、君も不老不死かい？さつきから他人事とは思えない目で見ているんだけど」

「！……まあな……」

顔に出てたのか！？

「私は……真祖の吸血鬼だ」

私は思い切って話してみた。
するとラウルは……。

「そっか、君も似た様な過去を持っているんだね」

と優しく接してくれた。ちょっと泣きそうになってしまった。

「君だって、なりたくてなった訳じゃないだろ？だから、そんなに悲觀的にならないでね」

やばい、本当に泣きそうだ。

「周りが君の事を、ただの吸血鬼にしか見ていなくても、俺から見たら、ただの可愛い女の子だよ」

ラウルはエヴァの頭を撫でながら言った。

ラウルの言葉を聞いて、もう限界だった。

「うわあああ~~~~ん」

私は、ラウルの胸に飛び込み、号泣してしまった。

吸血鬼化してから、もう人の温もりを味わう事は無いだろうと思っ
ていた。

私を化け物としてしか見ていない連中が多くいた。
なのにこの女は私を人として見てくれる、それだけでも嬉しかった。
これが、私とラウルとの最初の出会いだった。

「……オーイ、オレノ事忘レテネーカ」

すっかり忘れられているチャチャゼロだった。

~~~~~

（ラウルサイド）

「そんな事より、貴様は何者だ？」

「俺？俺はラウル、ラウル・クルセイド」

「ラウルか、何の目的でここにいる？」

「ここで10年程前から住んでいるから」

「はあ！？ここに住んでる！？」

「そうだけど……」

やっぱり不自然に思われているみたいだな。

「ここは魔獣の森だぞ？人が住める土地じゃないぞ？」

「人じゃないから住んでいるんだよ」

ちよつとした御茶目っぽく言ってみたら、少し驚いた顔してるよ。  
実際事実だけど。

「貴様、人間ではないのか！？」



「人間だよ。死ぬ事が無いけどね」  
「なに!?!」

コードで不死身になっているだけなんだけどね。

「お前：お前も吸血鬼か!?!」  
「いや違うけど」

同族かと思っただのかな？

「では、何故不老不死なんだ?」  
「俺の額にあるこれが原因で、死ぬ事が無いんだ」

俺は、額にあるコードを指差した。

「何だそれは?」  
「10年以上前に、ある女性にキスされた後、急に額が熱くなって、鏡を見たらこれがあった」  
「何だそれは!?!?てか、明らかにその女が原因ではないか!」  
「そう思って問い詰めたら、「ようやく、自由になれた」と言っ  
て死んだ」  
「……!?!」

CCが不死身になった経由を、ちよつともじつて伝えた。

「それで俺は、何されても死なない体を持つちまったって訳だ」  
「お前は、辛くないのか?突然違う存在になった事が!?!」  
「確かに辛いさ。でも、なってしまった以上は、もうどうしようも  
ないしな。ま、なるようになるだろ」

あまり気にしない様に言った。

「呑気だなお前は」

「まあね。ところで、君も不老不死かい？さつきから他人事とは思えない目で見えてくるんだけど」

「！！……まあな……」

こっちの事を言ったんだから、エヴァの事も聞いてみようとそう言ったら、結構驚いてた。

「私は……真祖の吸血鬼だ」

いきなりカミングアウトしたよこの子……。とりあえず……。

「そっか、君も似た様な過去を持っているんだね」

一応知っているからね。

「君だって、なりたくてなった訳じゃないだろ？だから、そんなに悲観的にならないでね」

俺とは違って強制的に吸血鬼になったエヴァは、かなりの苦痛だからな。

優しくしたい気持ちはある。

「周りが君の事を、ただの吸血鬼にしか見ていなくても、俺から見たらただの可愛い女の子だよ」

ラウルはエヴァの頭を撫でながら言った。

あれ？エヴァが震えている。やべっ、怒らせちゃったかな。

「うわあああ~~~~ん」

うわっ！？泣きついてきたよ。てっきり怒るのかと思ったよ。ちょっと思考が飛んじやったよ。

まあ、命狙われる暮らしを強いられたから無理もないけどね。

その後、俺の胸の中で泣き疲れたエヴァは抱きついたまま眠った。とりあえず、俺はエヴァが起きるまでの間、食事の支度をしていた。

駆け付けたら吸血鬼に勝負を挑まれた!?(後書き)

次の方もいまだに悩んでいます。

## ラウルとエヴァ（前書き）

話の流れを繋ぐのに時間がかかりましたが、何とかなりそうです。

……何とかなったのかな？

とりあえず、話続けます。

## ラウルとエヴァ

（ラウルサイド）

「落ち着いたかい？」

「ああ…」

うわあ、目が真っ赤だな

「目が真ッ赤ダナゴ主人」

「うるさい！」

代わりに言ってくれてありがとうとチャチャゼロ。

「まあなんだ、メシにしような」

「うん…」

ちよつと落ち込んでいるみたいだな？

そついやエヴァの名前はまだ聞いてないな。

「そついや君の名前聞いてなかったな？」

「…エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル…」

「エヴァンジェリンか…ちよつと長いからエヴァでいいかい？」

「…うん…」

まだなんか打ち解けてないって感じだな。あつそつだ、ちよつとした意地悪な質問をしようつと。

「なあエヴァ、ミドルネームのA・Kは？」

「えっ！？…………アタナシア……………イ……………」

全然聞こえねえ、そこまで言いたくないのか？キティって部分に。

「えっと、最後の方が、聞こえなかったんだけど……………」

「…キ……………イ……………」

「キ？」

「キティだ！」

うわ〜顔真っ赤。かなり恥ずかしがっているねエヴァ。

とりあえず傷付かない様に答えないと。

「へえ、可愛い名前だね」

「そ、そうか……………」

「よかつたら、エヴァよりキティって呼んでも良いかい？」

思い切って言うてみたら。

「だったらお前の事、ラウって呼ばせて貰うぞ」

ラウね……………。

「別にいいけど、何で？」

「女同士なんだからいいだろ？」

ちよつと待て！？今この子、なにかとんでもない勘違いをしてないか！？

「ちよつと待てキティ！今なんて言ったんだ！？」

「えっ！？女同士なんだか」「俺は男だあああー！！」「ええええ

えー！ー！？」

「ソーナノカ？ テツキリ、オレト同ジ喋リ方ダト思ツタゼ」

「チャチャゼロまで……：そついや早乙女アルトって、普段から女扱いされてたんだつたな。」

「ら、ラウル……：本当に……：男……：なのか！？」

「なんだその信じられない物を見た様な顔は！？  
こんな事ならアルトの顔にするんじゃないか。」

「そつだよキティ」

「！？や、やつぱ駄目だ！？エヴァでいい！エヴァで構わない！！」

男に言われるのは嫌なのかよ。そこまで言われたくないのかよ。

「楽シソウダナ、オ前ラ」

「そついえば君は？」

「すまんチャチャゼロ、後回しにしてた。」

「こいつはチャチャゼロ、私の従者だ」

「なるほど、通りで人形なのに殺気が見え隠れしてる訳だ」

「ソーユーオ前コソ、ナカナカ出来ソーダナ。イツチヨオレト殺ラ  
ネーカ？」

「可愛い外見の割に物騒な事考えてるな……」

「見た目は可愛らしい人形なのに、中身は戦闘狂、悪くて殺人狂なんてな。」

「そう思っていたラウルに、エヴァはある事を言ってきた。」



「そういえばラウル、お前はこの森に10年も居たんだろ。お前は強いのか？」

はあく、さては俺を護衛代わりにしようとしているな。

ま、ここで暮らしてたからな、魔獣に狙われない日は無かったな。

「まあな。ここの魔獣達に後れを取らないくらいは強いと思うよ」

「そ、そうか」

「ダツタラオレト殺ローゼ！ケケケ」

怖いなチャチャゼロ。

「それでエヴァは、何が聞きたいんだ？」

「ああ、私の……私のモノにならないか？」

「……………はい？」

突然何言い出すのこの子！？

~~~~~

〜エヴァサイド〜

正直、ラウルが男だなんて驚いた。

はつきり言って女にしか見えない顔だ。

まあ、その辺は置いとくとして。

そういえばこいつ、強いのか？強かったら、私のモノにしたいな。

「そういえばラウル、お前は魔獣の森に10年も居たんだろ。お前は強いのか？」

さてどう出る。

「まあな。ここの魔獣達に後れを取らないくらいは強いと思うよ」

「そ、そうか」

「ダツタラオレト殺ローゼ！ケケケ」

魔獣程度では話にならないという訳か。

「それでエヴァは、何が聞きたいんだ？」

「ああ、私の……私のモノにならないか？」

「……………はい？」

私は、ラウルが欲しい。

「だから、私のモノになれと言ったんだ」

「いや、何でいきなり!？」

「ケケケ、惚レタナゴ主人」

「なっ、チャチャゼロ!」

「えっ!？」

惚れたとかそうじゃなくて、純粹にこいつが使って、護衛代わりに
なるだろうという意味で、決して惚れているとか惚れたとか、そん
なんじゃ……………/ / /

「えっと、エヴァさん…………。俺達、会って間もないのに、何故そう
いう考えになったのか具体的に説明してもよろしいかな？」

「ん、ああ」

少し話が飛びすぎたか。

「そうだな。お前の事が気に入ったからだ」

「気に入った？」

「ああ、私達は似た者同士だからな」

「まあ、確かにそうだけど、でもそれと君のモノになる理由にはならないんじゃない？」

「うっ、……うるさい！いいから私のモノになれ！」

「無茶苦茶だな……」

「テンパッテルナゴ主人、ケケケ」

~~~~~

（ラウルサイド）

気に入ったって、エヴァはこの先サウザンドマスターであるナギに惚れるんじゃない？

「まあ、君のモノになるかは置いとくとして」「置くな！」

何でこの子はそうまでして俺を？…あ、もしかして。

「え〜と…つまりエヴァは、チャチャゼロだけじゃ寂しいから、側にいてほしいという事か？」

「なっ、そういうわく」それだったら、しばらく一緒に居てあげるけど」っ！？本当か！？」

「結果オウライダナゴ主人」

吸血鬼化してから味方になる者がチャチャゼロ以外いなかったから、寂しくなるのは仕方ないか。

それに俺も、10年もここに居たから、寂しくなっちまったからな。

原作開始前までなら、エヴァの側に居てあげようかな。あっそうだ、魔法も覚えておかないと。

「そのかわり、俺に魔法を教えたくないか？」

「ん？何だラウル、お前は魔法使えないのか？」

「今まで気しか使えないから、魔法も覚えておかないとって思ってたな」

「ふ〜ん、まあいい。良いぞラウル、お前が側に居るなら何でも良い」

それからは、俺とエヴァとチャチャゼロの三人で旅をする事になった。

旅の途中、自称正義の魔法使いと賞金稼ぎを撃退したり、城を手に入れたり等をしてきた。

エヴァから魔法を教わって貰ったが、結構スパルタで、覚えるのが本当にきつかった。エヴァ容赦ないからな。

魔法について使える属性は、意外と全部使えた。

ついでに人形使いの能力も教えてくれて、試しに作ってみたら、マサキ・アンドーのファミリアのクロとシロが出来た。

その対価として血を吸われるならまだ良いが、毎晩妖しい目で俺を襲うのは勘弁してほしかった（数ヶ月程逃げ続いたがとうとう捕まり、エヴァと寝てしまった。こんな感じがしばらく続いた）。

まあ今はこんな感じでも、原作が始まればナギの方に鞍替えすだろうな。

エヴァの思いに気付いていないラウルであった。エヴァの思いに気付くのは、もう少し時間がかかる様です。

そして色々な事があつと言つ間に500年が経つた(さすがに早過ぎだろと思つても突つ込まないで下さい)。

～サイドエント～

~~~~~

～三人称～

そろそろ原作に向けて行動した方がいいな。その為には、エヴァとはここで別れるとしようか。

今日のラウルはなんだか思い詰めた顔をしているな。

「なあエヴァ」

「なんだラウル」

「俺はこれから別行動をとるから」

「はあっ！何で！？」

えっ？何でいきなり！？

そんなの嫌だ、そんなのいやだ、ソナノイヤダ……………。

うわっ、エヴァったら泣きそうな顔してるよ。

しかし、ここは心を鬼にして…。

「エヴァ、今の自分がどれだけ強くなったのか知る為に行くから」

「嫌だ、私はラウルが居ないと駄目だ」

「ゴ主人、素ニナル程ラウルト離レタクネーミテエダナ」

「可愛らしいニヤ」

「素になつてるニヤ」

ラウルと離れたくない、ラウルと離れるなんてできない。

なんかエヴァがすごくかわいく見える……いや心を鬼にしないとつかチャチャゼロ、核心突くようなツツコミは控えてくれ。あとシロとクロも茶化さないでくれ。

「エヴァは最近俺に固執し過ぎているから、しばらく離れようと別行動をとろうと思ったんだ。でも大丈夫、例え離れてても、エヴァの事を思っているから」

言っというて何だが、なんつー気障な台詞を吐くんだ俺は……。

「キザッポイナ（ボソツ）」

「「気障だニヤ」」

言われなくても分かってるよ従者達。

なんかチャチャゼロがラウルに何か突っ込んでる様にも見えただけ、そんな事よりも、ラウルは私の事を思ってる事なのか……。

「……分かった、ずっと待ってるから」

「ああ、分かった」

そして俺はエヴァの頬にキスしたら……。

「／／／／」

ラ……ラウルにキ……キ……キスされた~~~~／／／／／

わゝ顔真っ赤。

「ゴ主人照レテル」

「顔真っ赤ニヤ」

「エヴァ、茹でダコニヤ」

うるさい外野共。

いちいちツツコミをするなよシロ・クロ・チャチャゼロ。
でもやっぱ心配だな。あつそうだ。

「俺から餞別代りにこれをやる」

そう言つてラウルは、何も無い所から剣を取り出した。

俺は虚空からサイバスターのディスクッターを取り出した。

「こいつは魔力が込められている、杖代わりに武器代わりにもなる剣だ。もしかたエヴァの命を狙ってきたら、こいつを使うと良い」

自称正義の魔法使い、賞金稼ぎ対策を込めたディスクッターをエヴァに渡した。

「／／私の 剣／／」

ディスクッターを眺めているエヴァ。

ラウルが、私の為の剣をくれた。／／

「その剣は敵に囲まれた時に、剣に魔力を込みながら「サイフアラ

「ッシュ！」っと叫ぶと、敵が吹っ飛ぶ。「そんな事いえるかあああ
！！」うわっ！？」

「まったく、なんでそう言わないと発動しない物を寄越すんだ？
でも、せつかく私の為にラウルが作ってくれたんだし、これでいい
か？」

「うーん、魔法とかに関わっていきそうなのって、サイバスターくらい
しか思い付かないしな。」

「まあ、せつかくラウルが私の為に用意してくれたんだから、使っ
てやらん事もないが」

「ツンデレだなあエヴァは。とりあえずその剣の説明はしておこう。」

その様子を見ていたチャチャゼロはというと。

「イイナゴ主人、ラウル、オレニモ何かくれ」

「チャチャゼロが、羨ましそうに要求してきたから、フルメタルパニ
ックのASの単分子カッター×2をあげた。」

「単分子カッターを、ケケケと笑いながら振り回すチャチャゼロ（喜
んでんのか？）。」

「チャチャゼロが、羨ましそうに要求していたので、ラウルはナイフ
を二つを渡してた。」

「貰った武器を振り回して喜んでいるチャチャゼロ。なんか複雑な気
分だ。」

「さてと、それじゃ。」

「じゃあエヴァ、またな」

「ノノくん、またねラウルノノ」

「ジャアナ、ラウル」

「行くぞクロ・シロ」

「はいニヤ」

こうして俺はエヴァと別れ、魔法世界へと旅立った。

こうしてラウルは私の元から離れ、旅立っていった。

ラウルとエヴァ（後書き）

自分で書いたいてこの様な流れで良いのかと誤ってしまいました。

相棒設定1 (前書き)

前話で出てた猫型人形(?)をレギュラー化させちゃいました。
まあ使い魔で猫は定番ですからね。

相棒設定1

<名前>

クロ（ ）0～20歳以上

<性格>

性格はスーパーロボット大戦OGのクロ

<容姿>

容姿はスーパーロボット大戦OGのクロ

<立場>

ラウルが作った猫型人形

主にシロと一緒に、ラウルをサポートする使い魔的存在
時々シロと一緒にボケを言ったり、突っ込みをしたりする所がある

<名前>

シロ（ ）0～20歳以上

<性格>

性格はスーパーロボット大戦OGのシロ

<容姿>

容姿はスーパーロボット大戦OGのシロ

<立場>

ラウルが作った猫型人形

主にクロと一緒に、ラウルをサポートする使い魔的存在
時々クロと一緒にポケを言ったり、突っ込みをしたりする所がある

相棒設定1（後書き）

他にも人形を作る予定があります。
でも、かなり後になります。

紅き翼に入るつもりが帝国の騎士になった！？（前書き）

最近ゼロの使い魔のSSと両方を作成しているので、結構間が空きます。

紅き翼に入るつもりが帝国の騎士になった!?

さて魔法世界に来たものの、紅き翼はどこかな〜と。

ちなみに今の武器は、コードギアスのランスロットの両腕、腰のスラッシュハーケン。

当てもなくぶらぶらしてたら、近くに誰か来ていた。

フルメタのM9のECSで透明化して近づいて見ると…。

「むぐむぐ」

「ちよつと〜、大人しくするんだな〜」

「アニキ、これでオイラ達億万長者ですぜい〜」

「おうよチビ、おいデブもつと丁寧に運べ、大事な金づるなんだからよ」

なんつーか、絵に描いた様な三下の小悪党って感じだな。あのデブが背負って、アニキって奴が何か袋詰めにしてある物に向かって金づると言ってたって事は、どこかのお嬢さんを誘拐して身代金を要求するって事だな。じゃさっそく。

「待ちな!」

透明化を解除して三人に呼び掛ける。

「なんだ嬢ちゃん、俺達は今急がさ、誰がお嬢ちゃんだ!」ブヘブオ!?

人を女扱いにしてむかついたから、思わず右手のスラッシュハーケンを飛ばして、アニキをぶっ飛ばした。

「「あつアニキー!!!?」

子供達の悲痛な叫びが響いた

「このアマあ、よくもアニキw」アマあ、じゃねえ!そりゃっ!
へ?」

俺は、左手の方のをチビの向けて撃った。

「フベアー!?!」

チビは遠くまでぶっ飛んだ。

「あゝチビまで、ど・どしよ〜!?!」

俺はデブに詰め寄った。

「で、お前はとうしたい?二人の様に倒されるか?それとも、持つてる物を置いて二人を連れて逃げるか?どちらか選べ!」

そう言ったら、直ぐに袋を置いて二人を連れて「びゅ〜〜」と逃げて行った。

「さて、もう大丈夫だぞ」

ガソゴソ、バサッ

ん、褐色肌の角が生えた少女?綺麗な服を着て…あつこれドレスか。やっぱりどこかのお嬢みいだな。怯えているせいかつずくまっっているな。ん?

「むっ！？ やつと出れたのじゃあー！！」
「ぐふおあー？」

少女が思いつきり飛び上がった為、俺の顔面に激突した。主に角の部分で。

「ん？おお、すまぬ」

心が籠っていないよその謝罪…。

「と…とにかく大丈夫かい？」

俺は顔を擦りながら言った。

「妾よりもお主の方が大丈夫か？」

いや、君がやったんでしょ…。

「ともかく、お主のおかげで妾は救われたのじゃ」

「まあ、偶々目撃して助けた様なもんだから深くとらなくていいからね」

俺が笑顔で答えると…。

「け 謙虚な事言うでない」

何故か照れた様な顔をしているな、この少女？

「それにしてもお主、なかなかの美人じゃのう。妾もどうすればお主みたいに美人の女性になれるのじゃ？」

おいおい、君もかい……。

「あのね、俺は男だぞ」

「なんじゃとー！？う・嘘じゃ、そんなに綺麗な顔をした男が何処に居るんじゃー！！」

「…」ここに居るけど…」

「むく、ずるいのじゃ、世の中不公平なのじゃ」

「そこまで言うことなのか？」

「そうなのじゃ、女物の服を着ても気付かれない程じゃぞ」

そんなにかい。気を取り直して、とりあえずここを離れよう。

「まあ何だ、いつまでもここに留まる訳にはいかないから、移動しようね」

「分かったのじゃ」

「じゃあ行くか…え」と、あつ俺ラウル、ラウル・クルセイドです。君は？」

そういえば自己紹介がまだだったな。

確か、自分から名乗るのが礼儀だったな。

「うむ！妾はヘラス帝国の第三皇女、テオドラじゃ！！」

「えっ！？」

ヘラス帝国って、確か紅き翼と敵対してたところじゃん！！？

このままじゃ帝国側の人間として紅き翼と闘う事になっちまうって！！？

こうなりゃテオドラ皇女を送り届けてそのまま紅き翼探しに専念しよう。うんそうしよつ。

「どうした黙りこんで、妾が皇女だからって遠慮する事は無い。楽にしていいぞ」

人の気も知らないで…。

その後、近衛兵の所まで行きこのままさよならをしようと思ったら、是非お礼がしたいと言われ、断るに断れなかった俺であった。俺ってお人好しなのかな？

ヘラス帝国に着いた俺たちは今、謁見の間へと連れて行かれた。

「うぬが我が娘を助けたか。礼を言う」

俺はヘラス帝国の皇帝から第三皇女を助けたことについてお礼を言われていた。

てかこの皇帝、ブリタニア皇帝に似てないか？カールみたいな頭してるし。

皇帝にお礼を言われている間俺は、ここから抜け出したい気持ちで一杯だった。

「うぬの様な美しい御嬢さん」言っておきますが、私は男ですよ。皇帝陛下」っ！？何い、男であったか。女にしか見えぬな」

どうして会う人揃って同じ事を言うのだろうか？

「うぬはどうかやらかなりの腕に覚えがある様だが、うぬさえ良ければ我が帝国の客将として仕えてみぬか？」

やっば勧誘が来たよ。んで断ろうとしたら、テオドラが前に出て来て…。

「父上、どうせならラウルを、妾の騎士にして下され！」

ちよー！？ちよつとまで~~~~~！！！？

テオドラから爆弾発言により、俺はテオドラ皇女の騎士となつてしまった。

もうここまで来てしまったら、もう引き返せないじゃないか~~~~~
く！！！？

騎士になつてしまったので、もう割り切るしか無いと自分に言い聞かせた。

テオドラからは「テオで構わぬ」と言つてくれた。

テオから仮契約してくれと頼まれ、契約したら何と、体が液状化するアーティファクト（名は千の体を映す水鏡）だった。

「な・なんじゃ、ラウルの体が水みたいになつてしまったぞ！？」

「液体になるアーティファクトか。うをつ！？想像以上に柔らかい！」

「それに、ひんやりして気持ちいいのじゃ」

「いつの間にかみ付いたんだ？」

「でも、液体になるだけなんじゃろうか？」

「うーん、形とか変えられないかな？」

そう言つてラウルは、自分の体を変えてみた。

「おお、妾と似た姿じゃのう」

「やっぱり、頭の中で考えた通りに変化したな」

「のうラウル、そろそろ元に戻つてくれないか？」

「そうだな、アベアット！」

体が液状から実体化していった。

すると……。

「な・なんじゃー!?!?」

「?どうしたのじゃ、テオ?」

あれ、なんじゃろう?なんか言葉遣いが変わった。

するとテオは、鏡を(どこからか)出して来て、覗いて見たら、そこには…アルト風の自分の顔じゃなく、テオの顔をした自分がいた。

「な・なんじゃー!?!?テオの姿になっているのじゃー!?!?」

後から解った事だが、このアーティファクトは、ただ液体化するだけじゃなく、頭の中で描いた姿を思う事によって、その通りに変身する事が出来るアーティファクトだった。

さてさてなんだか帝国と連合の方も戦争が活発になって行き、いよいよ戦場へと駆り出された。

「ラウル、ここから先がもう戦場になっている。必ず生きて戻ってくるのじゃぞ!」

言われなくても分かっているよ。あっそうだ。

「テオ、俺は今からラウルじゃなく…!」

俺は変身して、コードギアスのゼロになった。

「君の騎士、ゼロとして戦いに赴く!」

「ゼロ…それが妾の騎士としての名か!?!」

「ああ!」

「うむ、ではゼロよ。妾達に勝利を捧げるのじゃ!」

「イエス・ユア・ハインス!」

こうして私はヘラス帝国の騎士として戦場へと駆け出した。
ちなみにこの時の戦いは、帝国側の勝利（主に私一人の成果で）と
なった。

二つ名は以下の通りとなった。

帝国の黒騎士（そのまんまそう言われたから）

皇女の仮面騎士（テオドラに仕えているから、仮面を付けている従
者とも言われている）

帝国の黒い死神（ある事があって以来、連合側ではゼロの事をそう
呼んでいる）

黒き閃光（オーバースキル：加速で切りまくっているから、早すぎ
る黒騎士とも言われている）

鬼才の策略家（全ての作戦において、彼の頭脳は計り知れないと思
っている）

等と恐れられた。

紅き翼に入るつもりが帝国の騎士になった!?(後書き)

5/26修正しました。もう少しコードギアスっぽくしてみました。
次はゼロの紹介です。

オリ主設定2（前書き）

別名、ラウルの変身コーナー（笑）でもあります。

オリ主設定2

<名前>

ゼロ(男) 18歳

<容姿>

見た目はコードギアスのゼロ

(当然、仮面・黒マント・黒尽くめの服装)

<二つ名>

帝国の黒騎士

皇女の仮面騎士

帝国の黒い死神

黒き閃光

鬼才の策略家

<立場>

テオドラとの仮契約を行い、千の体を映す水鏡で変身した姿(顔はラウルのまま)

ラウルが側に居る時は分裂(分裂時の素顔はルルーシュの顔)表向きはテオドラの騎士となっている

正体を知っているのは、テオドラとヘラス帝国皇帝
意外と帝国の民と兵たちからは人気がある

オリ主設定2（後書き）

ゼロ魔のSSも作成中なので、またしばらく空きます。

外伝1 テオドラの暇つぶし (前書き)

テオドラ視点で送らせてもらいます。

外伝1 テオドラの暇つぶし

あゝ暇じゃ、ラウルは戦場に行ったきりじゃし、退屈で死にそうなのじゃ。

妾は暇なのじゃ、暇なのじゃ……

「テオ、ただいま！」

！？ラウルが戻ってきた！？

「ラウル！？、お主戦場の方はどうなったのじゃ！？」

「俺が居なくても、今回の戦いはこっちが勝つから姫様の相手をして来て下さい。って言われた」

「そっ！？そっか」

気を利かせてもらったのかの。

「妾は暇をもてあそんでおるのじゃ、だから　ラウルうゝ一緒に遊ぶのじゃ」

「そっだな」

するとラウルは、少し考えていた。
そして……。

「テオ、テオの好きな動物は何？」

いきなりなんじゃその質問は？

まあ、強いて言うなら……。

「猫じゃ！」

「じゃ、アデアット！」

ラウルはアーティファクトを使い、猫の体に変身した。

「！！？らっラウル！？？」

「にゃ／＼」

小猫になったラウルが、にゃ／＼と照れそうに鳴いている姿に、気を失いそうじゃった。

「かわいいのじゃ／＼、他にもなれるかの？」

「モチロンにゃ、にゃにかリクエストはにゃいかにゃ？」

はう／＼、猫っぽい語尾で話しかけてきておる／＼。

「犬はどうかの？」

「それじゃアデアットにゃ！」

ラウルがまた変身したのじゃ。

「わんっ！」

「おおっ！これはまたっ！」

かわゆいのう／＼。ナデナデノノ

「他にもあるけど、テオが好きなのに変身するから、リクエストするワん」

そう言われて妾は、一つやってみたい事を思い付いた。

「ラウル、ドラゴンになって帝国の空を飛んで欲しいのじゃ」
「テオがいいんじゃないワン」

ラウルは小型のドラゴンになり、妾を乗せて大空を飛んだ。

「わゝ、高いのじゃゝ」

「あんまりはしゃがないでくれよ、人を乗せるの初めてなんだから」
「ラウルと一緒に、お空の散歩ゝ、ん」

目の前には、古龍の龍樹がいた。相変わらず大きいので。
するとラウルは…。

「ちよつと体大きくしますね」

対抗心なのか、龍樹くらいに大きくなったドラゴンラウル。
そしたら龍樹が近寄って来た。

「ええつつ!!??」

ラウルがかなり驚いている。

「どうしたのじゃ、ラウル？」

「何故か龍樹が、「素敵な人ー！私と付き合ってー！」って言うて、こっちに近寄って来るんだけど!??」

「な、なんじゃとー!!??」

あれからラウルは、龍樹のアプローチから逃げ続けて、元の姿に戻ってようやく難を逃れた。

それからしばらく帝国の空を飛んでいき、妾は十分満足したのじゃ。

「ラウル、また今度空の散歩に付き合っ
て欲しいのじゃ
」
「いいよテオ」

今度はなにで飛んでもらうかのう。

外伝1テオドラの暇つぶし(後書き)

ちなみに、今回千の体を映す水鏡で変身したのは猫、犬、ドラゴン
(ゼロ魔シルフィード風)です。

次回はいよいよ紅き翼登場。

紅き翼と帝国の黒騎士と連合の吸血鬼（前書き）

題名で薄々気づいている人もいるかもしれませんが、今回コードギアスのキャラが出ます。

多分もう分かったと思いますが、本編をご覧ください。

紅き翼と帝国の黒騎士と連合の吸血鬼

「?????サイド」

俺の名はナギ・スプリングフィールド。

最強の魔法使い!.....の予定の男だ。

俺達紅き翼は連合と一緒に帝国と戦っている。

俺の仲間を紹介するんだが、めんどいからパスして

『紹介(しろ。しろよ。してください。するのじゃ)』

総ツツコミを喰らったので、紹介する。メンド。

まず、黒髪眼鏡が神鳴流剣士の詠春。

次に、いつも笑顔面してるのが、アルビレオ・イマ。

んでもってジジイ口調のちびっ子が、ゼクト師匠。

最後に、この筋肉ダルマが俺と引き分けたジャック・ラカンだ。

今俺らは、帝国の連中が破竹の勢いでオスティアまで攻めてきたの

で、連合の助っ人として戦い、オスティア防衛戦では連合の勝利と

なった所だ。

するとアルが...

「.....どうやら、この戦場に帝国の黒騎士は居ない様ですね」

?.....帝国の黒騎士?

「アル、何だその帝国の黒騎士ってのは?」

俺はアルに質問をした。

「帝国がこうしてグレートブリッジを落とし、オスティアまで攻められる様になった原因とも言える騎士の事です!」

「あの皇女の仮面騎士とも呼ばれてる？」

「ワシも聞いた事がある。帝国の黒い死神・黒き閃光・鬼才の策家等と呼ばれる程の凄腕だとか？」

「俺も聞いたことあるぜ。何でも、帝国が新たに雇った騎士だとか？」

「へー、そんなに強えーのか？その帝国の黒騎士つてのは？」

俺は興味本位で聞いてみたら。

「強いなんてもんじゃありませんよ。なんせたった一人でグレートブリッジを一時間たらずで制圧したのですから」

『なっ！？』

アルビレオ以外全員驚愕した。

マ、マジかよ！？俺らだってグレートブリッジを制圧するのに三時間近くかかるぞ！？

「今回の戦いでは、帝国の勝利目前だった為居ませんでした。次の戦いで現れる可能性があります。もし、出て来たら……私達全員で挑んでも、大苦戦になるのは間違い無いでしょうね」

おいおい、そんなすごいそうなのが帝国に居るってのか！？

そんな奴……そんな奴がいたら……。

「戦ってみてーじゃねーか！」

「オウよっ」

「「「……………」」」

俺はその帝国の黒騎士と戦ってみたいと思った。
ジャックも同意した。
他の連中は呆れた様な顔をしていた。

「……………ああ、やっぱりナギはナギだ………珍しく真面目だと思った
らこれだ……………」

「フフフフ、言うと思いました。やはり期待を裏切りませんね」

「馬鹿の極みじゃのう」

「なんなんだよ三人とも、どーゆう意味だ！」

こいつら好き放題言いやがって、

「んな事より、さっさと帝国の連中を追っ払って、そいつを引きず
り出すぞー!!」

ジャックも帝国の黒騎士と戦いたがっているので、急ぐとする。
つかジャック、帝国の黒騎士を倒すのは俺だぞー!

「さて、紅き翼出撃しますー!!」

「いやアル、なに仕切ってたんだよ！」

ナギ達はグレートブリッジに向かおうとしたら、後ろから声をかけ
られた。

「貴様達が紅き翼か？」

「ん？誰だテメエ？」

俺達の前に、オレンジ色の髪の方が現れた。

「おや？私を知らないとは」

「ま・まさか、連合の吸血鬼か!？」

詠春が怯える様に言った。

「連合の吸血鬼？」

それって何だ? って言おうとしたら、アルが説明してくれた。

「彼の名はルキアーノ・ブラッドリー。かつてはオステイアの吸血鬼と呼ばれた騎士だったが、あまりの残虐非道な振る舞いをしていった為に騎士を辞めさせられ、傭兵に身を置いた元騎士ですね。何でも、人殺しの天才を自称する程の腕前とか」

「おいおい、物騒な奴だな」

何だってそんな奴がここに来てんだ?

「分かっているいな君達は」

「あん? どーゆー意味だ?」

ジャックがケンカ腰に言った。

「お前達に戦場の真実を教えてやろう。日常で人を殺せば罪になるが、戦場ならば殺した数だけ英雄となる!」

「へえ意外だな。連合の吸血鬼ってのは英雄になりてえとはな?」

ジャックの言葉に皆は同意した。

「いや。公に人を殺せるのって最高じゃないかって話だ」

うわあ、つまりあれか? 普段人を殺したくてうずうずしてはいるが、

罪に問われたくないから出来ずにいたが、戦場だから好き勝手に殺しOKって理由で傭兵になったって事か。

「お前って、結構下品だな」

「ふん、ここが戦場じゃなくて良かったな。戦場だったら、直ぐに貴様の命を奪えたものを」

「へえ、俺らと殺り合おうってのか？」

「そうしたいとこだが、戦場でない所で殺ったら罪になるからな。この戦争を終えたら、直ぐに貴様らの命を吸いに行くさ」

「へっ上等だ！」

とつとつと早めに戦争を終わらして、ルキアーノと勝負してえな。

「あっそうそう言い忘れていたよ。貴様達紅き翼は後方で待機との伝令だ！」

『はあっ、なんだそりゃ！？』

俺とジャックは納得がいかなかった。

「私が前線に立つ事になったからだ、例の黒騎士とやらを軽く捻れば、この戦争は早期終結するだろう」

けっ、ゼロは俺が倒すんだ。テメエなんかに譲ってたまるか。

～ゼロサイド～

私は今、グレートブリッジで帝国と一緒に連合軍と戦ってます。

最近の俺は帝国にとって勝利の存在とも言われ、連合側は死神が蹂

躪される思いになる程の存在になった。

帝国サイド

「ゼロさんだ、この戦い勝てるぞ！」とか、

「皆の者、ゼロ殿に続けー！」とか、

「ゼロ様は、帝国の希望だ（よ）！」と言われてる。

連合サイド

「ゼロだー！皆、奴から離れろー！」とか、

「なぜだ？俺達の動きが先読みされている」とか、

「終わりだ、奴の魔の手から逃げられねえ！？」等と言われてる。

これまでチートの流れ進んで来たが、多分そろそろ現れる頃だと思っ。

未来の英雄「紅き翼」が。

今のまま彼らと接触すれば、十中八九戦いになるだろう。

つか、ナギとラカンてかなりの好戦的だから、出会った時に殺し合いが始まる予感がピンピン来てます。

とりあえず俺はと言うと、苦戦している所を探して応援に行かないと。

なんか、帝国の兵達がすれ違う度に…。

「武運を」

「帝国に勝利を」

「ゼロさん、お気を付けて」

等と、帝国の兵達から絶大な信頼を寄せてるみたいだ。

戦闘中なのに皆から激励を貰うなんて、こりゃ頑張らないと。

と思ったら、聞き逃してはならない事を言っていた兵がいた。

「おい聞いたか！？今回の戦いで連合の吸血鬼が出てくるそうだけ
！」

「何い！？あの連合の吸血鬼だと！？」

連合の吸血鬼？何処かで聞いた様な二つ名だな。聞いてみるか。

「その君。連合の吸血鬼とは一体何だ？」

「あつゼロさん、こんにちは！連合の吸血鬼とは、連合側の凄腕の傭兵の二つ名です」

「いや、凄腕の傭兵というのは話の流れから推測出来るが、その二つ名の意味を聞いているのだが？」

「あつすみません。連合の吸血鬼とは、元々オスティアの騎士だったんですが、人を殺す時なんかは、もう残酷という言葉以外見つからないぐらいの無残な殺し方をして、騎士を辞めさせられたという」
「なるほど、その様な人物が相手では皆が怯える訳か……」

「はい……。正直出会いたくない奴NO.1ですからね。あのブラッドリーとかいう男は」

「何！？……その連合の吸血鬼の名は解るのか？」

「はい。ルキアーノ・ブラッドリーです」

「！？そ、そうか」

そうか。あの吸血鬼って時点で何処かで聞いたなと思ったら、本当に本人が出て来るのか。

ルキアーノ・ブラッドリー

原作コードギアスだと、円卓の（オブ）^{ナイト}騎士のナイト・オブ・テンの地位にいて、

人殺しの天才を自称している男か。

確かにA・C・E・Rでも敵として出ていたが、何もここで出なくていいのに、何故いる！？

まさか、私がいるからその補正がかかっているのでは！？

「あの、ゼロさん？どうしましたか？」

「！？い・いや、何でもない」

「でもどうする。連合の吸血鬼が出てくるんじゃ、こっちの方が悪いぞ」

周りが不安に満ちているな。このままでは士気が下がってしまう。
仕方が無い…。

「連合の吸血鬼か、どれ程の腕だろうか」

「！？まさかゼロさん、あなたが連合の吸血鬼と戦う気じゃ…」

「連合に勝利するにはどうしても当たる壁というも物がある。それを打ち碎かない限り、帝国の勝利など夢のまた夢だ！」

「それはそうだけど…」

「安心しろ、私はそう簡単に死にはしない！帝国に勝利を捧げる為に…私は勝つ！！」

私は高らかと言った。

「ゼロさんなら不可能はねえ。皆、俺達にはゼロさんがいるんだ！
いかなる敵だろうと打ち崩すぞー！！」

『オオオオオオオオオオ！！』

よし。これで士気の問題はクリアした。後は私がルキアーノを倒せば、帝国の兵達は破竹の勢いで突き進むだろう。
待っている連合の吸血鬼！貴様は、我が覇道の踏み台となってもら
う。

その為にも、私自身もやり遂げる決意を固めなければな、これは命
をかけたゲームなんだからな！

～サイドエンド～

ルキアーノは、追い詰めた帝国の兵を右手で押さえ付けて…。

「やつやめろっ!」

「貴様に問う。貴様にとって一番大切な物は何だ?」

「えっ?」

ルキアーノの問いに首をかしげる帝国の兵は…。

「か・家族だ…」

「違うな。それはな……」

ルキアーノは、左腕の4連クローを回転させ…。

「命だ!!」

帝国の兵の体に突き刺した。

「ギヤアアアアアアア」

「人にとって大切な物、それは命だ。それを奪う事に私は喜びを感じる!」

突き刺した帝国の兵を、乱暴に投げ捨てた。

「さあ、もっと私に……命を吸わせてくれ!」

今のルキアーノはまさに人の命を奪う事を楽しむバーサーカー狂戦士の様だ。

紅き翼と帝国の黒騎士と連合の吸血鬼（後書き）

ゼロとなっているラウルは、まさにゼロっぽくなっていました。

帝国の黒騎士VS連合の吸血鬼(前書き)

結果は大体分かると思いますが、ご覧下さい。
単身赴任でしばらく更新できません。

帝国の黒騎士VS連合の吸血鬼

（ゼロサイド）

私は、ニュータイプの方で敵味方の位置を特定し、チェスボードで部隊の編成をした後、念話で兵達の指揮を執っていた。

「P-1部隊、魔法の矢、撃て！」

ポーン1を前に押して、敵のポーンを倒す。

「P-3・P-7部隊、挟撃しろ！」

ポーン3と7を左右から近づけて、敵のナイトを倒す。

「N-2部隊、前進しながら、魔法の矢！」

ナイト2を前に押して、敵のポーンを倒す。

「B-1部隊、魔法の矢を打ちまくれ！」

ビショップ1を固定して、敵のポーンとナイトを倒す。

ゼロの指示で次々と撃破されていく連合の兵。

「よし。これで敵の動きは、あと三つに絞られた」

「すごいですゼロさん。こんな策を次々と考え付くなんて」

「気を抜くな！まだ戦いは終わっていない！口出しするな！」

「すっ、すみません！」

そしてゼロは、Xボーンのパニアとランスロットのランドスピナーで、急いでルキアーノがいる戦場へと赴いた。

「もうすぐ敵がいるエリアか」

「ゼロお。貴様の進軍もここまでだ！」

「！？貴様は？」

「私の名はルキアーノ。ルキアーノ・ブラッドリーだ！」

「なるほど、貴方が戦場の吸血鬼ですか」

やはり言動と鎧姿から見てコードギアスの十番目か。

「教えようゼロ。貴様の大事な物とは何だ？」

「ふむ？」

ルキアーノの問いに首をかしげるゼロ。

その問いが原作のままだな。とりあえず、正解を言うておくか？

「そうだな。皇女殿下、騎士の誇り、仲間等色々あるが、やはり一番は自分の命だろうな」

「そう、その通り。命だあ！！」

ルキアーノは、両腕の4連クローを回転させて突っ込んできた。だが、ゼロはそれを絶対守護領域で防いだ。

「そう簡単に、私の命は取らせん！」

「やるじゃないかゼロ」

ゼロはMVSで応戦した。

しばらくゼロとルキアーノの切り合いが続いた。

「ゼロ。貴様は戦場の真実を知っているか？日常で人を殺せば罪になるが、戦場ならば殺した数だけ英雄となる！」
「ほう。連合の吸血鬼殿は英雄になりたいと？」
「いや。公に人の大事な物を、命を奪えるとは最高じゃないかって話だ。それが何処であろうとな！」
なるほど、さすがは殺人狂。

「やはり外道だな。その上、下品だ！」

ゼロはそう言いながらMVSを置き、フラッシュエッジ2ビームブーメランを出し、ルキアーノに向けて投げた。
一つ目はかわし、二つ目は左の4連クローを砕いた。
するとルキアーノはニヤリと笑いながら、右の4連クローを回転させて突っ込んできた。

「甘い！」

MVSで右腕4連クローを砕き、剣先をルキアーノに向けた。

「チエックメイトだ！」

「いいや。これで間合いは詰まった」

ルキアーノの兜の角部分がゼロの方に向けた。

「貴様の大事な物を飛び散らせろおおお！！！」

ルキアーノは、兜に仕込んだ角の部分を飛び出して攻撃してきた。しかし、飛んで来た仕込み角は、ゼロの体を通り過ぎた。そしてゼロは、徐々に透明になっていった。

「何い!?!」

「違うな、連合の吸血鬼。それは私ではない!」

ゼロは、オーバーマンの - XAN - のヤーパンニンポー（分身の術）でルキアーノの攻撃をかわしていたのだ。

そしてルキアーノの前に現れたゼロは、右腕を紅蓮可翔式の徹甲砲撃右腕部に変え、ルキアーノの鎧の胸部分を掴んだ。

「ぐっ!?!」

「どうだルキアーノ、三つ程質問しよう。貴様の大事な物は何だ？自分の命だけなのか？そしてそれを握られた気分は？」

「脅しのつもりか？カス風情g「じゃあな!」」

ゼロは直ぐに輻射波動を展開させた。

「ギヤアアアツ!?!奪われる!?!私の命が……この・猿ガアアアアアアア!?!」

ルキアーノは断末魔を叫んだ後、焼死体の形で絶命した。吐き気を覚える勝利だったかと、心の中で思ったゼロであった。

くナギサイドく

「大変です!?!ルキアーノ殿が、戦死しました!?!」

「何だと!?!?」

「あの連合の吸血鬼、ルキアーノだぞ!?!倒されたのか!?!」

「はい!やったのは、帝国の黒騎士、ゼロです!」

「ゼロだと!？」

「あの仮面騎士か!？」

「なんて奴だ、帝国の黒い死神め！」

この話を盗み聞きしていたナギ達は…。

「へえ、連合の吸血鬼を殺ったのか。ゼロって奴は」

「あのいけ好かねえ野郎を殺っちまうなんざ、相当強えみてえだな。その仮面野郎はよ」

俺とジャックは、ますますゼロと戦いたくなって来たぜ！

上層部は紅き翼に出撃命令を出した。

「じゃ、いつちよ暴れるか！」

「待ってるゼロ! テメーはこの、千の魔法使いが叩きのめす！」
サウ
ザンドマスター

ナギとジャックは気合十分に満ちていた。

「お前達は…相手はルキアーノを倒す程の实力を持った相手だぞ! もつと慎重にだな…」

「よせ詠春、奴らに言っても意味無いじゃろ」

「確かに、セクト殿の言う通りですね。こうなれば我々だけでも慎重に行くしかありませんね」

「……頭痛が……」

いまいち緊張感の無い紅き翼の面々でした。

そして、戦場へと向かって行った。

帝国の黒騎士VS連合の吸血鬼（後書き）

やはり止めは紅蓮の輻射波動にしました。

本当は聖天八極式なんだけど、あえて可翔式にしました。

敵設定1 (前書き)

本編で主人公と敵対する敵
久しぶりの投稿です。

敵設定1

<名前>

ルキアーノ・ブラッドリー（男）20歳？（年齢は適当に決めた）

<容姿>

容姿はコードギアスのルキアーノ・ブラッドリー
服装はコードギアスのパーシヴァル風の鎧と角兜

<武器>

両腕に4連クロー
気で4連クローを回転させる

<二つ名>

人殺しの天才（自称）

前期 オスティアの吸血鬼

後期 連合の吸血鬼

<立場>

連合軍でズバ抜けた戦闘力を誇る戦士

好戦的かつ残虐な性格で、殺人と破壊に至上の快楽を見出す

元々オスティアの騎士だったが、あまりにも残虐な殺しを続けた
為、騎士を辞めさせられた

傭兵となった時に連合軍にスカウトされ、敵味方問わず血祭りにあ
げようとした

戦う前にはいつも「お前にとって一番大切な物は何だ？」と言う
そして答えると「それは命だ。私はそれを奪う！」と言い攻撃する。
最後は紅蓮可翔式の輻射波動で倒された。

敵設定1（後書き）

敵キャラはそのまんま出しています。ちっともオリ敵じゃなくてごめんなさい。

本当は完全なる世界の刺客にする予定だったけど、前座の相手が必要かなと思い、使っちゃいました。

帝国の黒騎士VS紅き翼(前書き)

A・C・E・Rの技どうだすか悩みました。

帝国の黒騎士VS紅き翼

「ナギサイド」

「オラオラオラオラー！！」

ジャックのアーティファクト「千の顔を持つ英雄」で、
沢山の剣を投げ付けた。

「負けてられつかー！来たれ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ
南洋の風……」

ナギも負けじと呪文詠唱をする。

「雷の暴風！！」

ジャックのアーティファクトとナギの魔法でほとんどの敵を打ち倒
した。

「いやはや、あの二人が居ると、戦闘が楽ですね」

アルが呟いた。

「まったく、後先考えず突き進み追って」

ゼクトがぼやいた。

「本当に頭の痛くなるな、あの二人は」

詠春がなげいた。

そんなこんなで、グレートブリッジの半分を制した所、

「よっしゃー、このまま突き進ん「契約に従い、我に従え、氷の女王」!?!」

ナギは、一瞬身震いをした。

「来れ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが!」

今突き進んだらまずい!?

「全ての命ある者に等しき死を。其は、安らぎ也!」

「やべー、皆下がれ!」

ナギ達は勢い良く下がった。

次の瞬間…。

「こおるせかい!」

ナギ達が向かおうとした所に、巨大な氷塊が出来た。

「(危ねー、あのまま突っ込んでたら氷漬けになってたぜ。)」

内心冷や汗をかいた。

「今のはこおるせかいか!?!」

「良くかわせたな」

『!?!?!?!』

氷塊が砕けた後、そこには黒尽くめの男がいた。その姿は、全身黒尽くめなので、マントを羽織り、仮面を付けていた。まさか、あいつが噂の帝国の黒騎士か!?

「やはりあの男、かなり出来るぞ!」

「うむ、只者では無いからのう」

詠春と師匠が慎重になり、警戒している。

「彼に纏う魔力は測り切れませんね」

アルも珍しく警戒してる。

私も警戒はしますよと返して来た、こんな時に心読むなよ。

「へっ!ようやく現れたか!」

ジャックが嬉しそうに言った。

するとあの騎士が、負傷した帝国の兵達に「大丈夫か?」と治癒魔法をかけていた。

「ほう、味方を大事にするタイプの様ですね」

とアルは呟いた。

そして、あの騎士がこっちに向いた。

「私は…ゼロ、ヘラス帝国第三皇女テオドラ殿下に仕えし騎士なり
!」

両腕を広げてポーズを取りながら名乗るゼロ。

「お前達が連合軍最強集団と言われている、紅き翼か？」

「へっそうだ、今からテメーを倒す最強の集団、紅き翼だ!!」

俺は胸張って答えた。

するとゼロは…。

「ならばその最強の集団を、これ以上進ませはしない!!」

ゼロは臨戦態勢をとった。

「行くぜーお前ら!!」

『オウ!!』

俺達は、ゼロに戦いを挑んだ。

~~~~~

～三人称～

遂にこの時が来たか。紅き翼との対決の時が。

だが、私は負ける訳にはいかん!

「先手必勝っ!」

あれはジャック・ラカン!!?

ジャックは剣で切りかかると見せかけて投げて来た。

「そーらよっ!」

ゼロは飛んでくる剣で死ぬのか、と一瞬だけ思ってしまった。

その時、『生きる！』が聞こえた。

そう、A・C・E・R・スザクのギアスの呪縛が発動した。（展開早いと思ってても気にしないで下さい）

「（私は、生きる！）」

ゼロは咄嗟に、キングゲイナーのオーバースキルで、剣の速度を遅くして、片手で剣を受け止めた。

「おっすげーな」

内心驚いた。

小手調べ（三割程本気）で投げた剣を、あろう事か片手で受け止めるなんて。

「なかなかの力だ。なるほど、兵達では荷が重すぎる訳か」

そう言って受け止めた剣を落とす。受け止めた時の感触が今でも残っているので、そうとう力が込められている（多分ラカンも適当に投げた）と思う。

それにしても危なかった。ギアスの呪縛が無かったら、初っ端から死んでたな。って不老不死だから死ぬ事は無いんだっただな。さっき感じたのは普通の感覚としてなのだろうか？

「良く言うぜ。あっさり受け止めたくせによう。」

平静を保ってはいるが、俺は少し冷や汗をかいていた。

ジャックの攻撃を平然と受け止めるたあ、やっぱり強えーな帝国の黒騎士……！

どうやら帝国の黒騎士も、相当なバグキャラの様ですね。

やはりあの騎士、出来る。

奴を倒すには、かなり骨が折れそうじゃな。

上からラカン、ナギ、アル、詠春、ゼクトの五人はそれぞれゼロに  
対しての感想を思った。

「だが、この程度では私は倒せんぞー!!」

ゼロは、ワザと挑発する様な発言をした。  
すると…。

「フン、上等じゃねーか!!」

ナギは、より一層燃えた。

「まつ待てナギ、うかつに戦えば相手の思いつつボだぞ」

詠春は慎重になり、ナギに忠告をする。

「じゃあどうすんだよ!!」

「私が様子を見る」

「大丈夫なのか詠春？」

「少し自信が無いが、奴の力量がどのくらいか確かめる必要がある」

「…分かった。頼んだぞ」

「話は終わりか？」

「ああ」

詠春は前に出て、ゼロに立ち会った。

「私は青山詠春！紅き翼の一人だ！」

詠春は剣を構えながら名乗った。

「ほう…我が名はゼロ！テオドラ皇女に仕えし騎士なり！」

先程名乗った様な気はするが、まあいいだろう。

ゼロは、アクエリオンマーズの星空剣を取り出して名乗った。

「いね…」

「尋常に…」

「勝負！」

両者は駆け出し、剣を交え、切り合った。

「（やはり出来る。）」

「（さすがはサムライマスターの詠春。容易に事は進まないか…こうなれば！）」

しばらく切り合った後、ゼロが少し離れ、突然回転し始めた。

「な、なんだ!?!」

ゼロロテュビアーグレンジイウス  
「嫉妬変性剣」

「!?!?!」

ゼロの回転剣術に為す術も無く吹っ飛ばされる詠春。

「詠春!?!」

「くっ…くっ…」

「さすが紅き翼の一人と言っただけはあるな。この私に必殺技を出させるとはな」

「おおーっし、次は俺が相手だ！」

紅き翼のバグキャラ、ジャック・ラカンがゼロに勝負を挑んだ。  
ジャック・ラカンか…あのバグキャラをどう相手するかな。そうだ、  
あの力を使ってみるか。

「ほう、次は紅き翼のバグキャラと言われている貴方が相手ですか」  
「やはりそちらにもそう呼ばれていましたか」

アルの呟きはスルーしておこう。

「ほんじゃま、始めるか！アデアット！」

ジャックは千の顔を持つ英雄を出した。

「ならばこちらも！」

ゼロは右手にアロンドイトビームソード、左手にムラマサ・プラス  
ターを装備した。

「なんだ？俺と張り合おうって訳か？」

「そう見えるか？」

「いーんや。むしろ上等！」

両者は駆け出し、剣を交えたが…。

「オラー！！！」

「！？」

ジャックは勢い良く振った為、ゼロは吹っ飛ばされた。



「ぐっ！やはりバグキャラか、隙が出るか？」  
「オラー！！」  
「！？」

ジャックが突進してきた為に、一瞬怯んだゼロ。

「やはりバグキャラ相手では分が悪いか、ならばこちらも！」  
「ん？」

ゼロは、腕をソーラーアクエリオンに変えた。

「なんだあ、その腕？」  
「行くぞ！」  
「……！？気合防御！」

何か来ると解った様だがもう遅い。

「喰らえ…無限ムゲンパンチパンチ拳！」

無限拳  
M  
U  
G  
無限拳  
A  
E  
N  
T  
T  
A  
C  
K

一瞬、頭にそれが映し出された。

右腕がすごい勢いでジャックの方へと伸びて（？）行った。

「なに！？ぐうっ！！？」

ジャックはそのまま後ろの方へと押し出された。

「ぬおおおおお！！負けるかああああ！！！」

「何！？」

なんとジャックは、無限拳を止めたのだった。

「へへっ、耐えたぜ！」

「し、信じられん。無限拳を止めたなどと」

「随分と驚いてるな。初めてか、防がれるのは？」

「！！！？」

「隙ありだあ」

「なっ…ぐああっ！？」

ゼロはとりあえず驚いた振りをしていたら、ジャックがいきなり奇襲してきた。

「どうやらこいつは、想定外の事になると隙が出来る様だな」

ルルーシュ属性になっている私の短所を見抜くとは、恐るべしジャック・ラカン。だが、それはフェイクだ。

「さすがはジャック・ラカンといった所か。だが！」

ゼロは仮面の左目部分を展開させた。

「ゼロが命じる……」

「ん？」

そして、絶対遵守の王の力が発動した。

「紅き翼を倒せ！（5分間だけだ！）」

「……！」

ゼロのギアス、絶対遵守のギアスが発動し、ジャックの目がつつすらと赤く光った。

「ジャック、どうした？」

「様子が変わですね？」

ナギとアルビレオは不思議に思った。

ジャックは、ゆっくりと紅き翼の方に向いた。

「ジャック？」

そして、ジャックは紅き翼に向かって突進した。

「ウオオオオオオオオオオオオ！！」

「うわっ！？ジャック何するんだ！？」

「無駄だ。今のジャック・ラカン私の制御下にある」

「なんだと！？」

「では、ジャックはあやつの言いなりになっておるのか！？」

「バグキャラを操るバグキャラという事ですか」

「人をバグキャラ扱いはやめて貰おうか」

しばらくナギと詠春が食い止めていた。  
さて、そろそろ時間か。

「ウオオオオオオオ………って、あれ？俺は一体？」

「えっ！？ジャック…お前、元に戻ったのか！？」

「なっ、馬鹿な！？私の支配から逃れるとは！？」

必要以上に驚いてみたが、意外と疲れるな。

「なんで俺の目の前にお前らがいるんだ？奴の目の前に居た筈なのに？」

「どうやら彼は、人を操作する事に対しては自信がある様ですね」

「なにはともあれ、ジャックが元に戻ったから、反撃のチャンスだな！」

「ふん、多少不具合があった所で、お前達に私を止める事は無い！」

「へっ、だったらその自信満々な面あ、歪ませてやるよ！」

「紅き翼！私を止められると……ん？少し待て」

「なっなんだよ、これからって時に」

「どうやら念話している様ですね」

しばらくゼロは念話をしていた。すると……。

「……なんだと！？……分かった、直ぐに向かう」

ゼロの様子がおかしかった。そして念話が終わった。

「やられたな。まさか貴様達自体オトリだったとはな」

「はあ！？ちよつとまで、俺達がオトリだと！？」

ナギが驚愕した。

「つい先ほど、連合軍がこちらの陣営に奇襲を仕掛けて来た。私はこれから、仲間の撤退を手伝う為に戻らなければならない」  
「……」  
「決着はいずれ付けさせてもらっぞ、紅き翼！」  
「へつたりめーだ！俺も、お前との決着付けてーしな！」  
「では、その時が来るまで……誰にも負けるな。お前達は、この私が討つ！」  
「上等！」

ゼロはレポートで自分の陣地に戻って行った。

～紅き翼サイド～

「くそ、納得いかねーな」  
「そうゆうなナギ。今回ばかりは流石に危なかったんだからな」  
「さすがは帝国の黒騎士、侮れんのか」  
「次はこうはいかないでしょう、ゼロはナギやジャックと同じでバグキャラの様ですから」  
「なーに、次は勝ちや良いんだよ！」  
「次はぜってえー勝つからな、覚えてるよゼロオー！」

ナギ達は打倒ゼロを決めた。

～ゼロサイド～

ゼロは味方を守る為に殿を務めた。

「（やはり紅き翼は強い…いつか共闘できる日は来るのだろうか？）

」

サイドエント

## 帝国の黒騎士VS紅き翼（後書き）

更新するまでかなり日が経ってしまいました。  
アクエリオンの必殺技シーンは苦労しました。  
尚必殺技のロゴは無限拳系のみです。

## それぞれの調査（前書き）

早く話を進めたいあまりに、とびとびになっています。



## それぞれの調査

（紅き翼サイド）

ゼロと戦いを繰り返して幾日後、ナギ達は今、戦痕が癒えていないグレート・ブリッジを見渡せる場所にいる。

ナギはそんなグレート・ブリッジを見ながら呟いた。

「俺の故郷がある旧世界じゃ、超強力な科学爆弾が発明されて、こんな大戦はもう起こらねえそだ。戦を始めたが最後、みんな纏めて滅ぶだろうからだつてよ」

「ナギが珍しく理知的な事をいつてますね「うるせアル！」」

アルの呟きに、ナギが突っこむ。

「だが、こつちのこの戦はいつ終わる？帝都へラスまで攻め滅ぼすつてか？」

ナギはそこで仲間の方に振り返った。

「やる気になりや、この世界にだつて、旧世界の科学爆弾以上の大魔法はある。こんなこと続けてどうなる？意味無えぜツ！！まるで

…」

「…まるで誰かがこの世界を滅ぼそうとしているかのようだ…ですか？」

この場にいる皆はアルの言葉を聞いて真剣な表情を作った（ジャックは興味なさ気）。

「…ある意味、その通りかも知れないぞ」  
「ガトウ」

最近仲間になったガトウとタカミチが来た。  
突然響いた声の主の名前をナギが代表して言った。

「俺とタカミチ少年探偵団の成果が出たぜ」

そこでガトウは一端、声を切った。

「やはり奴らは帝国・連合、双方の中枢にまで入り込んでいる。…  
秘密結社、『完全なる世界』だ」

さらに数日後、彼等紅き翼はガトウに呼ばれて本国の首都にいた。

「何だよガトウ。俺達をわざわざ本国首都まで呼び出してさ」

「あつてほしい人がいる。協力者だ」

「協力者？」

ナギ達はその言葉を聞いて、少しだけ真剣な表情に変えた。そんな状態のまま暫くすると、

来たのは驚きの人物だった。

「マクギル元老院議員！」

ナギと詠春はつい声に出して驚いた。しかし、そんな彼等にマクギル元老院議員は手を振った。

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ」

「（なら来るなよ、紛らわしい）」



にそっくりだった（額の逆三角は無かったけど）。

そいつらにギアスをかけて私の存在を無かった事にして密談を始めた。その内容を録画しているとも知らずに。

録画した内容を皇帝に見せ、二人を逮捕させた。当然二人は白を切るうとしていたが、他にも証拠が出た為に言い逃れも出来なくなったのでそのまま連行された。尚、証拠等についてはギアスで吐かせた。ギアスすげえ。

それから数日後、各方面から連合のスパイ（マクロスFのテムジン似）やら売国奴（キングゲイナーのケジナン、エンゲ、ジャボリ似）やらを粛正しきつた後、テオドラ皇女からの頼みで、連合軍の様子を探ってくれと言われ、王都オスティアに潜入捜査をする事になった。

ちなみに今は、オルソン・D・ヴェルヌになったり、クワトロ・バジーナになったり、アスラン・ザラになったり（どれもサン格拉斯をして）等で、色々探っていた。

すると、スーツ姿の紅き翼を（ナギとラカンはいない）見かけた（今の俺はキョウスケ・ナンブの姿）。

どうやらあの様子だと、彼らと王女は接触した様だな。…！？やべっ！？

アルビレオ・イマが一瞬こっちを見た時は、咄嗟に顔を反らせて裏通りに行き、急いでレポートを行い、その場を去った。

～アルビレオサイド～

私達は今、世界を裏側から滅ぼそうとする組織、『完全なる世界』について調査を行っていました。

しかし、思っていたより情報が取れませんね。

アルビレオは少し嘆いていました。

すると、

「おや？」

私は視線を感じ、そちらの方を見たら、慌てた様子でその場を去ろうとする若者を見た。

もしかしたら、『完全なる世界』に繋がる何か？

アルビレオは、連れの詠春、ゼクト、タカミチを連れて、若者が逃げた裏通りを行つたが、どこにも姿は無かつた。

「アル、どうしたんだ？」

「誰かが私達を尾行していました」

「何！？」

「えっ！？」

「ですが、逃げられましたね」

「て事は、奴等のスパイかのう」

「うむ、少し警戒を強めよう」

さうして、一体何者なんでしょうね？

アルビレオは、逃げた男について疑問を持った。

~~~~~

くラウルサイドく

あの後、帝国に戻った俺は、そろそろ動くだろう『完全なる世界』について調べる為に、片っ端から怪しい連中にギアスをかけて吐かせた。

驚いた事に、帝国の三分の一は、『完全なる世界』と繋がっている事が分かつた。

さっそくこれらをテオに報告した。

「うむ…『完全なる世界』か…あやつらが戦争の元凶じゃとはな」
「テオ、この内容は全部真実だ！後はこれをどうするかだ」
「うむ！さっそく父上に相談して、『完全なる世界』についての対策を取らなければな！」

そう言つてテオは、皇帝の所に向かった。

そして、『完全なる世界』と繋がつた連中は全て逮捕された。

また数日後、何気無くテレビを見たら、メガロメセンブリアでテロの情報が流れた。

多分これは…ナギとアリカが『完全なる世界』の拠点を潰した事だろうな。

となると、テオはアリカと接触イベントがある訳だな。

そして、

「本当に、一緒に行かなくても大丈夫なのか？」

思った通りテオは、アリカ王女と交渉に行く為に行こうとしていた。でも何故俺は付いて行っちゃ駄目なんだ？

「うむ！それに、紅き翼と互角に戦えるゼロが側にいたのでは話ができないかもしれんのじゃ。だから、ここで待っててほしいのじゃ」
「なるほど」

「それに…ラウルは最近休んでおらんのじゃろ、待ってる間は休暇と思つて休んでおると良い」

「…分かった、せめてク口を連れて行つてくれ、何かあつた時に連絡が出来る様にね。テオ…気を付けてね」

「分かつたのじゃ！」

そう言ったテオは、飛行艇に乗り、行ってしまった。

シロはどこか寂しそうにしてた。

まあ誘拐されるのは分かっているけれども、さらうのが何時かは分からないので、クロを同行させた。

何かあったらシロが知らせて来るだろうから、その間はきっちり休んで、鍛錬でもするか。

それぞれの調査（後書き）

結構変な文章になってしまいました。
次は堕天使が魔族として登場します。

ラウルVS完全なる世界からの刺客（堕天使）（前書き）

今回出て来る堕天使は全て魔族です。

オリジナルな展開だと、書くスペースがかなり遅くなります。

ラウルVS完全なる世界からの刺客（墮天使）

（ゼロサイド）

クロからの連絡があった。やっぱりテオとアリカ王女は誘拐されたらしい。

すぐに皇帝にこの事を言い、テオの救出を依頼された。そして私はシロを連れて、彼女達が幽閉されてる夜の迷宮ノクテイヌゼリントウスに向かった。

ヘラス帝国から夜の迷宮まで一直線に飛ぼうと、帝国側の街ヴァルカンの北方にある森に差し掛かった所で、思わぬ妨害があった。何かが襲ってきたのだ。

「うわっ!?!」

「うにゃっ!?!」

そこに現れたのは、

「お前が帝国の黒騎士、ゼロか？」

なんと、アクエリオンに出てくる両翅もろはの乗るケルビム、イスキューロンだった。

「だったら何だ？」

「貴様をこれ以上進ませる訳にはいかんのでな」

「まさかとは思っけど、お前は完全なる世界の手の者かにゃ？」

「我が名は魔戦士、モロハ・イスキューロン！」

やはりそうか。しかし…魔戦士とは？

まさか魔族か！？いくらネギまに魔族が多いからと言つが、ここは魔族設定なのか墮天使は！？

「貴様に戦いを挑む！」

「くっ、ここで時間を食つてる場合では無いのだがな」

ゼロは臨戦態勢を執つた。

「ガン・ナイト・バル・アクエリオ、光の精霊33柱：魔法の射手・連弾・光の33矢！！」

「甘いわ！」

魔法の矢を放つても、奴のハンマー状の手が開き、気を放たれて相殺されてしまった。

「戦士の血がたぎる！もつと熱くなれ！」

「ごちゃごちゃと！無限拳！！」

ゼロはモロ八に無限拳を繰り出した。
が、当たる直前で分離した。

「何！？」

「分離したにや！？」

そうだった、イスキューロンは左右に別れる事が出来るんだった。

「甘いわ！」

分離したモロ八達（？）は、ダブルリアット（？）をかました。

「ぐわあっ!？」

あまりの攻撃力により、かなり吹き飛ばされたゼロ。

「我ら兄弟、二人で一人!同時に倒さない限り倒れはしない!」

「……………(コクツ)」

何だその設定は!?!まさかの兄弟設定とは!?!それに同時にやらないと倒せないって、クンバとニクンバかお前は!?!

さしずめ、顔があるほうが…というより喋ってる方が兄のモロハで、後ろ側の顔の無いのが弟のイスキューロンか?

「そんなものか?ゼロ」

片方を見たらもう片方にやられる、このままじゃ…ん?

天を見れば地が見えず、地を見れば天が見えず…。

空は見えても足元は見えず、足元が見えても空は見えず…。

空に星…、地に花…。

そうだ!空を、大地を、全てを見渡せば!

ゼロは、モロハとイスキューロンを見渡した。

「ようやく本気か…だが遅い!」

モロハは天高く飛び、イスキューロンは地表から攻めて来た。

「また来るにや!?!」

「我が前に屈するがいい!」

慌てるシロ、迫り来るモロハとイスキューロン、そしてゼロは、

「ウオオオオオツ、世界が…見えて来た!!」

ゼロは腕を交差させた。

「^{ムゲン}無限交差拳!!」

無 限 交 差 拳
M 無 限 交 差 拳
U
G 無 限 交 差 拳
E
N C R O
S S

また頭の中にロゴが見えた。

交差させた腕が伸びて行き、モロハとイスキューロンを貫いた。

「グアアアアアアツ!!?」

「……………!!?」

同時に攻撃した為ダメージを負い、貫いた腕が抜け地面へと落ちる
モロハとイスキューロン。

「ふう、手強かった」

「大丈夫にゃ?」

「ああ、障害は取り除いた。行くぞ」

ゼロは夜の宮殿に向かおうとしたその時、大量の闇と風と火の魔法

の矢が飛んできた。

「うにゃ!?!」

「なっ!?!絶対守護領域!」

ゼロは鉄壁の障壁を張り、魔法の矢を防いだ。

「今度は何にゃ!?!」

シロが突っ込んだ。

確かに突っ込みたくなる。今敵を倒したばかりだと言うのに、また敵が出て来たのだからな。

そして現れたのは、シスター服を着た女と黒い男と赤い女だった。

今度は音翹おとほに、マクロスゼロの夫婦(?)軍人か!?

「ふふっ始めまして、皇女の仮面騎士殿」

「こいつが帝国の黒い死神と恐れられた男か…なかなか楽しめそうだねイワノフ?」

「そうだなノーラ」

何だこいつら…何イチャイチャしてんだ…。

何か音翹の方も気のせいか、イライラしてる様に見える。

「…夫婦漫才なら他所で(やっている・やるにゃ)」「」

ゼロとシロは同時に突っ込んだ。

「オホン…とにかく、貴方はここで退場していただきます!」

「行くぜノーラ!」

「そうだなイワノフ!」

「我が名はオトハ！」

「俺はノーラさ、坊やの命は俺が貰った！」

「俺はイワノフだ。ノーラ、行くぞ！」

後ろにいたイワノフとノーラは飛翔し、オトハはケルビム・シユルルクベラに変身した。

やはり変身するか！？

その時、ノーラが近づいて来た。

「踊れ踊れ踊れえ！」

ノーラが火の魔法の矢を連発で撃ってきた。

「くっ！？」

連発して撃ってくるノーラに怯むゼロ。

「まだまだお楽しみはこれからだ！」

風の魔法の矢を撃ってくるイワノフ。

「くっ、キリがないな」

「私を忘れては困りますね」

「！？」

しまった！？

オトハはスカートの部分を取り外して、双剣の如く振る舞った。

「くそっ！？」

咄嗟に単分子カッターで防いだが、威力が強過ぎて吹き飛ばされるゼロ。

「どうするにや！？このままじゃやられるにや！？」

「そう言われても…」

「戦いの最中に余所見をするとは余裕だな？」

「はっ！？」

イワノフとノーラの空中コンボの連携プレーを喰らい、また吹き飛ばされるゼロ。

「くっ…このままでは…」

「ではそろそろトドメと行きますか？」

「覚悟しな坊や」

「なかなか楽しめたぞ」

そうやってオトハは正面、ノーラは少し飛んで側面、イワノフは飛んで上空から魔法の矢を放つ態勢を取った。

待てよ？このポジションは…どこかで？

正面…側面…上空…。

前後…左右…上下…。

そうか！確かこの状況に合う技が合った。

ゼロは、手をフレミングの法則の様に親指と人差し指と中指を三方向に立てた。

だが、これを発動するには何か足りない…ん？そういえば…今の私は何だ？

今の私は…ゼロ。テオドラ皇女の騎士…いや、私はそれになり切っていただけだ！

本当の私は、ラウル・クルセイドだ！

そう考えたゼロは仮面を外し、ラウルの素顔をさらした。

「おや？この状況で仮面を外すとは、もう諦めたのですか？」

「まあいいさ、楽に死なせてやるよ！」

「そうゆう事だ！」

「ちよつとラウル、どうしたのにや！？仮面なんて外して！？」

「少し離れてるシロ」

「！？…分かったにや」

俺は俺だ！自分らしく生きる為にも、負けられないんだ！

「アデアット！」

ゼロは…ラウルは、ソーラーアクエリオンに変身した。

「アベアット！」

「何だその鎧は！？」

「ここにきて奥の手を出したって訳か？」

「だが無駄だね。その前に終わらせるさ！」

「見せてやるぜ、本当の俺を！」

三人は一斉に魔法の矢を放って来たが、それらは全て絶対守護領域によって防がれた。

そしてラウルは、ソーラーウィングを展開した後、徐々に巨大化して行き、高次元合体アクエリオンとなった。

「なっ何だこれは！？」

「嘘だろ！？」

「…下らねえ…下らなさ過ぎる…！？」

「ウオオオオオッ！！太陽に…月に…星に！」

ラウルは頭の中で三人になり、それぞれが矢を放ち、剣を突き上げ、そして正面に殴りかかるイメージが浮かび上がった。

「超3D（高次元）無限拳！！！」ムゲンファタック

S
超 3 D 無 限 拳
U 超 3 D 無 限 拳
P 超 3 D 無 限 拳
E 超 3 D 無 限 拳
R 超 3 D 無 限 拳
M 超 3 D 無 限 拳
U 超 3 D 無 限 拳
G 超 3 D 無 限 拳
E 超 3 D 無 限 拳
N 超 3 D 無 限 拳
A 超 3 D 無 限 拳
T 超 3 D 無 限 拳
C 超 3 D 無 限 拳
K 超 3 D 無 限 拳

また頭の中にロゴが出てきた。

背中ソーラーウィングの右側が弓になり、左側が矢を引き、側面にいるノーラへと放たれた。

左足を上げて、ふくらはぎの部分から腕を出し、そこから剣が出て上空にいるイワノフに向かって伸びて行った。

そして正面にいるオト八に、右腕の無限拳をぶちかました。

「ウアアアアアアアアアアアッ！！？」

今度こそ…終わった。
マーズからラウルに戻った。

「お疲れ様によラウル」

「ああ、ここまで戦闘したのは初めてかな？」

「さあ、早く夜の宮殿に向かうにや！」

「出来れば…少し休ませてくれないか？」

「そんな時間無いにや！早く行くにや！」

「分かった分かった」

ラウルはゼロになり、すぐさま夜の宮殿へと向かった。
少し離れた場所にもう一人いた事を知らずに。

~~~~~

「?????サイド」

離れた場所でラウルの活躍を見ていた男がいた。

「美しい…」

ゼロの始末をするようフェイトの命令でオト八達を差し向けたが、  
思わぬ出会いがあった。

「なんて…美しいんだ…」

そう…彼が鎧姿になった時に、翼を展開させた姿は美しかった。  
私はその姿を、我が記憶に永遠に刻みつけよう。  
その太陽の如き輝きを放つ者を。

私は…君に惚れてしまったよ。

「その輝きの放つ翼……太陽の翼と名付けよう。太陽の翼よ、君と踊れる日が来る事を願っているよ」

男はその場から消えた。

## ラウルVS完全なる世界からの刺客（墮天使）（後書き）

最近、ラウルに魔法必要無くな？と思い始めてる自分がいます。

イワノフの「許さあああん！」「なめるなアアアツ！」「ノーラの仇イイイイツ！！」は無しにしました。

超3D無限拳は大変難しかったです。

超3D無限拳の真ん中の四行は、原作と同じ様に前に出てる感じだと思って下さい。後、半角の方が丁度良かったのでそうした。

次回は夜の宮殿で紅き翼と共闘して、秘密基地である名シーンが…です。

## 敵設定2 (前書き)

本編で主人公と敵対する敵  
その2です。

## 敵設定2

<名前>

モロハ（男）30歳？（年齢は適当に決めた）

イスキューロン（男）30歳？（年齢は適当に決めた）

<容姿>

容姿はアクエリオンのイスキューロン

顔がある方がモロハ

無い方がイスキューロン

<武器>

ハンマー状の腕

気（ほとんどがビーム）

<立場>

魔族設定

完全なる世界の幹部      の部下

初登場時は、モロハ・イスキューロンと名乗っている

一人かと思ったら、実は二人が重なっているだけ

合体・分離が可能

攻撃力が半端ない

気を溜め、放つ事を得意としている

二人で一人の為、同時に攻撃しないと効果がない

最後はラウルの無限交差拳で倒された。

<名前>

イワノフ（男）36歳？（年齢は適当に決めた）



ノーラ（女）25歳？（年齢は適当に決めた）

<容姿>

容姿はマクロスゼロのD・D・イワノフとノーラ

<武器>

イワノフ

風系魔法

ノーラ

火系魔法

<立場>

魔族設定

完全なる世界の幹部 の部下

飛翔能力が高く、二人の連携プレイに苦戦する

最後はソーラーアクエリオンになったラウルの超3D無限拳で倒された。

<名前>

オトハ（女）22歳？（年齢は適当に決めた）

<容姿>

容姿はアクエリオンの音翹（腕から羽が生えている）

戦闘時はアクエリオンのシユルルクベラ

<武器>

両腕の羽

変身した時の爪

腰に付いてる双剣  
闇系魔法

<立場>

魔族設定

完全なる世界の幹部

の部下

眉毛かと思っただら目だった(四つ目)

戦う前はアクエリオンの音翹の様にシスター服(?)だが、戦う時はシユルルクベラに変身する

腕から生えてる翹で攻撃する

闇系の魔法を得意としています

最後は、ソーラーアクエリオンになったラウルの超3D無限拳で怯んだ後、アクエリオンマーズになったラウルの不幸最低拳で倒された。

## 敵設定2（後書き）

本当は堕天使なので光系にしたかったんですが、魔族しか出てなかったので魔族にしちゃいました。

ついでにマクロスゼロの二人も魔族にしちゃいました。

ちなみに　　は少し考えれば分かるキャラです。

紅き翼と共闘（前書き）

更新が遅くなりました。

## 紅き翼と共闘

「ナギサイド」

俺達は今、姫さんを助けに夜の迷宮まで来ていた。

「敵の数が多いな」

「ですが、これらを片付けなければ、アリカ姫を救いに行けませんよ」

「つつたく、面倒だぜ」

「だが、アリカ姫があそこにいるんだ！わめいてる場合じゃないぞジャック！」

「しかし、これだけの数だと、ちと時間かかるぞ？」

ナギ、アルビレオ、ジャック、詠春、ゼクトの順で言った。

確かに数万もいる魔族を相手にするにあ時間がかかり過ぎるな。

「ええ〜いめんどくせー！四の五の考えるのは後回しだ！行くぞ！」

「おっしゃー！」

「またあいつは…」

「しょーのない…」

「あの二人ですからねえ」

うつせーな、とにかく行くっきゃ…!!?

この時ナギは、遠方から来る殺気に気付いた。

「全員下がれええっ…!!」

「「「「「!!?!?」「」「」

俺はこの時程、自分の勘を信じた自分を褒めまくりたかった。俺が見てる光景は、強力な気が放って来て、敵を一掃した光景だった。

敵はほとんど残っていないかった。

「こ、これ程協力な気を放ってくるとは…」

「こんな事が出来る奴は俺ら以外で一人しか知らねえ！」

俺は光を放ってきた方に向くと、そこから飛んでくる黒尽くめの男が飛んで来た。

「へっ…やっぱお前か、ゼロ！」

そう、俺達が手を焼いている黒騎士ゼロが来ていた。

~~~~~  
〜ゼロサイド〜

色々あったが、何とか夜の迷宮に辿り着いた。予想以上の魔族がこった返していた。

「ラウル…敵が多過ぎるにや！？」

「やむを得ん、一掃する！」

私はSEEDを発動し、両手に高エネルギーライフル、両腰にあるクスイファイアス3、胸部分のカリドウス、そしてスーパードラグーンを展開させた途端、視界がレーザーみたいに敵の位置が解った。

「ターゲット・ロック…行けー！！」

そして、ハイマツト・フルバーストを使い、8割程敵を一掃した。

「やったにゃ！敵が思いつきり減ったにゃ！」

「ああ、さて…強行突破と行くか」

私は夜の迷宮に行こうとしたら。

「おいゼロオツ！」

「!？」

「なんにゃ、今の？」

声が出た方を向くと、そこにはナギ達紅き翼がいた。

そういえばそうだったな、攫われたのはテオだけではなかったのだな。

「お前、何でここにいるんだ？」

「待てナギ、相手を刺激しては…」

「どちらにせよ、呼び止めた時点で刺激を与えているようなものですしね」

何なんだこいつらは…とにかく、

「私は主君であるテオドラ皇女殿下を救いに来ただけだ！邪魔をす
るのなら…」

「何、お前もか!？」

「どつゆつ事だ？」

ナギ達の事情を聞いた後、共闘する事になった。

「では行くぞ！」

「この件が終わったら、改めて勝負だ！」

「まあいいだろう、急ぐぞ！」

つい約束してしまったがそれどころではない。

急いで救出に向かったゼロと紅き翼。

そして、テオとアリカ姫のいる牢屋に辿り着いた。

「よお、来たぜ姫さん」

「遅いぞ我が騎士」

「テオ、無事か!？」

「ラウル、寂しかったのじゃ」

そう言っつてしがみ付くテオ。

若干唾然としているアリカとナギ。

「クロ、無事にゃ？」

「シロ、こっちは無事にゃ」

こっちも無事みたいだな。

それで色々あつて、オリンポス山にある紅き翼の隠れ家に到着した。ちなみにテオは私に肩車をしていた。

「何だ、これが噂の紅き翼の秘密基地か。どんな所かと思えば…掘建小屋ではないか！」

「テオ…元来秘密基地というものは、目立つてはいけないものだ。例え掘立小屋でも立派なアジトなんだぞ」

「そうだぞジャリ、俺ら逃亡者に何期待してんだよ！」

「何だ貴様！無礼であろう！」

「へっへっん、生憎ヘラスの皇族にゃ貸しはあつても、借りは無い

んでな！」

「何い？貴様何者だ！」

子供かこいつらは…あっテオは子供か。

ゼロはそんな事を考えていた。

~~~~~

〈ナギサイド〉

「あのやけにゼロに懐いてる元気な少女が…」

「ええ、ヘラス帝国第三皇女テオドラ殿下ですね。アリカ姫と交渉のため出向いたところを一緒に捕えられたようです」

向こうも向こうで苦労してんだなゼロ。

「さーて、どうする姫さん。助けてやったは良いけど、こっからは大変だぜ。連合にも帝国にも…あんたの国にも味方はいねえ」

俺らは今や犯罪者扱いだしな。

「恐れながら事実です。殿下のオステイアも似たような状態で…最新の調査ではオステイア上層部が最も黒いという可能性も上がっております」

ガトウ…いつ調べてんだ？犯罪者にされてから調べてるヒマなんか無かったと思うんだけど。

「やはりそうか…我が騎士よ」

「だあら姫さん、その我が騎士ってなんだよ！？俺はクラスで言っ

たら魔法使いだぜ!？」

ハズカシイだろ、騎士ってガラじゃねえし。

「もう連合の兵でないのじゃろ?ならば主はもはや私のものじゃ  
「なっ!？」

理論おかしくね?姫さん何処のガキ大将だよ。

「連合に帝国…そして我がオスティア。世界全てが我等の敵という  
訳じゃな。じゃが…主と主の紅き翼は無敵なのじゃろ?」

俺達は声が出なかった。いや…ジャックが後ろで「ん?ムテキ?  
と自分に指してる感じに言ってた。後でボコる。

「世界全てが敵…良いではないか。こちらの兵はたった7人…だが  
最強の7人じゃ!ならば我らが世界を救おう。我が騎士、ナギよ。  
我が盾となり、剣となれ!」

「…へっ、だから俺は魔法使いだっつーのに…やれやれ相変わらず  
おっかねえ姫さんだぜ」

世界を救う…か。

「良いぜ、俺の杖と翼あんに預けよう!」

これから忙しくなりそうだぜ。

~~~~~

〜ゼロサイド〜

まさかあの有名なシーンをこの目で見られるとは思わなかったな。

「のうラウル」

「ん？何だテオ」

「妾も、アリカの手伝いをしてあげたい！」

「そうか、ならば……」

私はナギとアリカ王女に近づいた。

「アリカ王女よ、我らも協力しよう」

「そうじゃ！妾達も世界を救う為に協力するのじゃ！」

私とテオの言葉に驚くナギとアリカ、ついでに後ろにいる紅き翼も。

「だ、だが主らはテオドラを助け出したのだから、もう私達に協力する義理はないじゃろう？」

「何を言っている？世界の危機とやらを聞いた以上、互いが争うよりも協力すべきだが？」

「それは……そうだが……」

「ゼロ……俺達と協力してくれるのか？」

「ああ……」

私は仮面を外し、ラウルの素顔をさらした。

「俺とテオは、あんた達に手を貸そう」

ナギとアリカは惚けていた。

「改めて挨拶しようか？俺はラウル・クルセイド。テオの黒騎士だ」

未だ呆然としているナギとアリカ。

「どうした？」

「あついや、ラウル、だっけか？」

「ああ」

「お前女だったのか！？」

「まさか女だとはな！？」

「なっ！？」

またか！？この二人まで俺を女扱いかよ！？

「いやはや、帝国の黒騎士がまさか女性とは…これからは黒の麗人とお呼びしますか？」

「呼ぶなそこ！」

「俺は女にコテンパンにされてたつてのか！？」

「いや俺は…」

「うゝむ、女性とはいえ、なかなかの剣激でした」

「お前もかよ！？」

「ふむ、美しいのう」

「なに見とれているんだ！？」

「可憐だ…」

「何がだ！？」

「わあ、綺麗な人だなあ」

「おおおい！？」

まさか紅き翼全員（ガトウとタカミチまで）に女扱いされるとは…泣くぞコノヤロウ。
するとテオが、

「諦めるラウル、これが現実じゃ」

テオまでえええええつ、俺は…俺は…俺は…、

「俺は男だあああああー！ー！ー！つ！…！！」

俺の心の叫びは虚しく木霊した。

数時間かけてようやく俺が男だと信じてくれた。

紅き翼と共闘（後書き）

結局女として見られるラウルでした。
次回は外伝2行きます。

外伝2 ラウルについて（前書き）

外伝物、二作目行っきます。

外伝2ラウルについて

（ナギサイド）

思えばグレートブリッジで死闘を繰り広げてたゼロが仲間になるなんてなあ。

あっ、そういやジャックも最初は敵だったな。いつの間にか仲良くなっちまったけど。

それにしてもゼロ…いやラウルは最初女かと思ったけど、男だったんだな。本人も、合う人皆揃って女扱いされたって言ってたしな。

あいつのデコの変な模様について聞いてみたら、不老不死の呪いらしい。

なんでもラウルの母ちゃんが、育ての親に騙されて呪われたらしい。呪われた状態で子供が出来る、その子供も呪われてしまうらしい。そうそう、ラウルと仮契約したんだ。…ってキスじゃねーぞ！ちゃんと他の連中と同じで、魔法陣で交わしたんだからな！その所気を付けるよ！

って誰に言い訳してんだ？

あいつのアーティファクトはかなり強力な物だった。

カーズブレイカー、文字通り呪いを解呪する為の代物らしい。

まあ、そんなこんなで、

「もう一度勝負だラウル！」

「お前も懲りないな」

それから戦っていき、10戦中3勝3敗4引き分けに終わった。あいつやっぱ強えーな。

~~~~~



く詠春サイドく

ラウルが仲間になって数週間、彼の剣術は洋風の剣術やら何処か素人のような太刀筋だった。

「ラウル、君の剣術は何処で習ったんだ？」

ラウルの剣術について聞いてみた。そしたら、

「三百年くらい前に、ヨーロッパ辺りで修行してたら、強そうな貴族がいたので勝負したら、知らない間に相手の剣術を覚えてた」

……やっぱりバグキャラだ…。

彼は剣術は素人らしいので剣術指導したら、数日であつと言つ間に上達していった。

……やっぱりバグキャラだった…。

くゼクトサイドく

グレートブリッジで、ジャックを操って見せた事が気になり、ラウルに聞いてみたら、

「この不老不死の呪いと共に、魔眼も扱える様になってな。こんな風に…」

ラウルはそう言った後、左目を見せた。そこには、紅い鳥が舞っている姿が見えた。

ラウルが言うには、その目を見せて命令すれば何でもラウルに従う魔眼、ギアスと呼ぶ物らしい。  
そういえばあの時、ラウルの仮面の左目部分が開いたのはそういう事じゃったとはな。  
しかし、親から受け継いだ呪いとはいえ、使い方次第では完全なる世界よりも脅威じゃな。

～ラカンサイド～

あいつの武器は俺のアーティファクト、「千の顔を持つ英雄」と似た感じで、どこでも武器を取り出せるらしい。  
あのムゲンパンチとかいうのも武器の一つだと言ってた。  
あんなたくさんの武器はアーティファクトで出してる訳じゃないから不思議でしょうがなかったが、聞いてみたら、

「昔、胡散臭いオッサンから習った」

こいつに教えた奴、何モンだ？

～アルビレオサイド～

彼のアーティファクトは、「千の体を映す水鏡」という物らしいです  
ね。

テオドラ皇女と仮契約したそうですね、羨ましいですね。

その使い道はなんと、私の「イノチノシヘン」と同じく変身系のアーティファクトだと言うのです。

しかも、同じに変身するだけじゃなく、声や仕草や口調までそっくりそのままコピー出来るのですから驚きです。試しに、彼に変身の注文をしてみました。

「アル様、病気や怪我はしておりませんか？」

「アルビレオさん、あんまり詠春さんをからかわないで下さいね。命令しちやいますよ？」

「アル！こう見えて私は大人の女なんだぞ！そこの所は理解しておけよ」

「アルさん、一緒に御飯でもどうですか？」

「あ…あの…、その…あう…」

「……………記録」

「アルビレオさん、この度はラウル様に協力頂きありがとうございます」

少女風ナース、天然系女軍人、背が低いインテリ系、雪国にいそうな少女、怖がりな領主、無口な少女、元気な巫女の少女、ありがとうございます！

しかも彼は、

「どうだ？私を崇めなくなっただか？」

真祖の吸血鬼、闇の福音などの二つ名があるエヴァンジェリンと関係があるらしい。

ぜひお近づきになりたい。

~~~~~

〜ガトウサイド〜

あいつの情報網はすごいな。

帝国側の完全なる世界に繋がる手掛かりが、ほとんど彼一人で調べ上げたのだからすごいものだ！

…あれ？でもこれでは、我々の立場が…。

ラウルが俺と手合わせしてくれと頼まれた。

正直、彼の實力を知りたかったから丁度良かった。

手合わせして驚いた事があった。

俺の居合拳を初手で避けたり、その後も連続で放ったが全て避けられたりで一発も当てられなかった。

あの身のこなしは相当なものだった。

しかもあいつは、一歩も動いてなかった事も含めて、あいつもバグキャラなんだなと思った。

～タカミチサイド～

新しく仲間になったラウルさんは最初、女性かと思って惚けていましたが、あの人は男性だと言っていました。ちよつとがっかりでした。この間、師匠とラウルさんが手合わせしてるのを見てたんですが、あの人は師匠の居合拳をことごとく避け続けてたんです。

ラウルさんてすごいなと思った。だって、知っててもアレを避けるなんて出来ない筈なのに、簡単に出来てしまったのですから。やっぱりナギさん達といい、ラウルさんといい、世の中にはすごい人がたくさんいるんだなと思いました。

あつても、アルビレオさんがこの間、寝ているラウルさんにイタズラ（お化粧）して、皆さんは笑っていましたが（師匠と詠春さんは顔を赤くしていた）、僕は危うく惚れそうになりました。

お化粧を施されたラウルさんは、もう女性そのものに見えました。ラウルさんは時々写真を見て落ち込んだりしています。

そして、あの男が夜の迷宮に辿り着く前に、完全なる世界からたくさんの刺客が送られたが、それらを全て片付けたとも言っていた。あの男、計りしれん何かがあるのかも知れん。

~~~~~

（ラウルサイド）

ナギ達に俺の事を説明した。

俺の母親（モデルはC・C）が呪いにかかり、不老不死になった。という設定を話した。

剣術はマジで素人だったので、詠春に教えて貰ったが、コーディネーターの影響からか、あつと言う間に出て来た（尚、神鳴流は習っていない）。

ゼクトからは、魔眼<sup>ギアス</sup>について説明した。

ラカンからは、武器はある人物に教えて貰ったという事にした。

アルからは、アーティファクトについて聞かれた。でもアルは、とんでもない事頼まれた。

それは、「貴方の知ってる限りで構いません、少女に変身してくれないませんか？」と頼んで来たから、オーガスのモーム、フルメタのテッサ、マクロスFのクラン（マイクロン時）、キングゲイナーのアナ姫、コードギアスの天子とアーニヤと神楽耶に変身したら、かなり喜んでくれた。

他にも、エヴァの事もネタ晴れした。

ガトウには手合わせを頼んだ。

ガトウの居合拳はオーバークイックでガトウの動きを遅く見える様にした。それでも早かったからほとんどギリギリ避け切った。

タカミチには伏線狙いで母探しの事を話し、写真（C・Cと子供の頃の自分を捏造して作った）を持たせた。

最近、妙にクルトから尊敬の眼差しで見えて来るんだけど、俺何かし

たかな？

少し寝ている隙に、アルの奴、俺の顔に化粧しやがったから、皆笑ってた（ナギ、ジャック、アルが笑ってた。特にアリ力は爆笑してた。ガトウと詠春とタカミチは惚けてた）。

さて、遊びはこれくらいにして、そろそろ完全なる世界を調べに行きますか。

てか、何で俺は頭脳労働と肉体労働の両方やってんだ？

あつ、そうだ、タカミチとクルト以外の皆で写真撮ったんだ。

ちなみに俺は、左端にいて、ゼロの格好（仮面は右脇に持った状態）で写真を撮った。

## 外伝2ラウルについて（後書き）

超グダグダになりました。

後、いくつか今後の伏線を張りました。

クルトの事をすっかり忘れてたので追記しました。

次回はいよいよ大詰め、ラストバトル編です。



## 最終決戦 ラウルVSトウマ(前書き)

ラウルが戦う相手はもう解りますよね。

ちなみにゼロの正体がラウルだって事は、もう世界中に知れ渡っています。

## 最終決戦 ラウルVSトウマ

（ラウルサイド）

いよいよここまで来ちまったな。思えばここまで来るのが長かった。マジで映画なら3部作、単行本なら14巻分くらいはいくであろう6ヶ月の死闘を行った。

そして遂に、完全なる世界の本拠地を突き止め、追い詰めた！  
ラウルとしての二つ名が付いた。

サウザンオプエボンス  
千の武器使い、色んな武器や兵器など操るから。

エンジェリック・マキナ  
機械天使、機械の翼を見たから、アクエリオンになっているからじゃない。

オウルサイド・デストロイヤー  
広範囲殲滅者、ストライクフリーダムハイマツト・フルバースト等で多くの敵を狙ったから。

紅き翼の最終兵器、実は一番強いんじゃない？と言われてるから。

俺達は今、世界最古の都・王都オステイア・空中王宮最奥部、墓守り人の宮殿が見える位置に立っていた。

ちなみに今の俺の格好は、かつらぎけい桂木桂の服にした。

「不気味なくらい静かだな…奴ら」

「舐めてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

最終決戦の前だというのに、いつも通りなナギとジャックだった。

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました」  
「おう」

ここで現れたのが、未来のアリアドネー総長のセラスさんが来た。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突入できる！頼んだぜ」

「ハッ、それであの…ナギ殿、ラウル殿」

「…ん？」

「ササ…サインを頂けないでしょうか」

「おお？ああ良いぜそれくらい」

「別にいいけど？」

あれ？確かナギだけじゃなかったっけ？  
取り合えず、

R a u l ・ C r u s a d e

って書いた。

「そ、尊敬していました」

そして自分の部隊に戻って行くセラスさん。てか笑うなよジャック。  
すると、ガトウから連絡が入った。

「連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう」

まったく元老院の老害どもは、まあいい、どうせ奴らは二年後に終わるんだから。

俺がこの半年間、ただ完全なる世界の連中を探してた訳じゃない。奴等の不利益になる情報も集めておいたからな。今の内に甘い汁を飲み続けてる狸ジジイ共。

「決戦を遅らせることは出来ないか？」

「無理ですね。私達でやるしかないですね」

「既にタイムリミットだ」

「ええ、彼らはもう「世界を無に帰す儀式」を始めています。世界の鍵「黄昏の姫御子」は彼らの手にあるのですから」

「ああ（待つてるよ…姫子ちゃん！）」

さて、一番槍行きますか。

「んじゃナギ、俺がいつちよ、かましていいか？」

「ん？ああ良いぜ」

「じゃあ始めるか！ルナティック・アーチェリー！」

俺は左腕をアクエリオンルナの左腕にし、弓の様にした。

「弓か、それ？」

「何する気だ？」

「まあ見てろって」

月に狙いを定めるラウル。

夢と現実を月で繋げば…そして狙ってやるぜ。

「夢と現実…ムーンサルト、アター…ック…！」

俺は月めがけて、矢を放った。

すると、月から大量の矢が敵に降り注いだ。

どんどん減っていく敵。

「よし、敵が減った。行くぞ！」

「お、おう……」

何か歯切れ悪いな？

~~~~~

へラスサイドへ

とうとう、この日が来た。尊敬する紅き翼たちと最終決戦に臨むことが出来るのは誇りとなるだろう。

ナギ殿とラウル殿からはサインを貰えました。二人のファンクラブにも入ってますよ。

そんな時、ガトウ殿からの連絡だった。

「連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう」

「決戦を遅らせることは出来ないか？」

「無理ですね。私達でやるしかないですね」

「既にタイムリミットだ」

「ええ、彼らはもう「世界を無に帰す儀式」を始めています。世界の鍵「黄昏の姫御子」は彼らの手にあるのですから」

「ああ」

いよいよ……出陣の時です。

すると、ラウル殿が、

「んじゃナギ、俺がいつちよ、かましていいか？」

「ん？ああ良いぜ」

「じゃあ始めるか！ルナティック・アーチェリー！」

ラウル殿の左腕から弓が出てきました。

これが、千の武器使いたる所業でしょうか？

「弓か、それ？」

「何する気だ？」

「まあ見てろって」

月に狙いを定めるラウル。

月に向けてどうするのでしょうか？

「夢と現実…ムーンサルト、アター…ック！！」

ラウル殿は月めがけて、矢を放った。

すると、月から大量の矢が敵に降り注いだ。

な、何ですか今は！？敵がほとんど減りました。

「よし、敵が減った。行くぞ！」

「お、おう…」

私達って、必要あったのかな？

~~~~~

～ラウルサイド～

何とか墓守り人の宮殿に乗り込んだ俺達は、大広間に辿り着いた。そこには、アーウェルンクスが待ち構えていた。

「やあ千の呪文の男、それに千の武器使い、また会ったね。これで何回目だい？僕達もこの半年で、君達に随分と数を減らされてしまったよ」

そう言つて白髪の青年、アーウェルンクスの後ろから、黒いローブの男、炎使いの筋肉、水使いのロン毛、雷使いの男に……ん！？な、何で…何で頭翅くしほがそこにいるんだよ！？

そう左端には、頭翅がいたのだ。

多分、俺が戦う相手なんだろうな。まあいい、とにかく蹴散らすぞ！

「この辺りでケリをしよう！」

「ナギ！」

「おう行くぞ！！」

俺達紅き翼と、奴ら完全なる世界との最終対決が勃発した。

ナギはアーフェルンクス、ジャックは炎使いの筋肉、詠春は雷使いの男、ゼクトは水使いのロン毛、アルは黒いローブの男、そして俺は頭翅と戦った。

頭翅はケルビム・ヴェルルゼバに変身し、両腕から剣を取り出し、俺は太陽剣と星空剣を取り出して斬り合った。

「私はトウマだ。やっと会えたね、太陽の翼」

「はあ？」

おいおい、よりもよってこいつ…俺の事をそう呼ぶのか、太陽の翼って。

「君がオト八達を倒した時に、私もそこにいたのだよ」

「何！？」

まさかあの時に近くにいたのか!?

「君が太陽の鎧を纏った時に、私は震えたよ」

太陽の鎧? ああソーラーアクエリオンの事か?

「そして同時に…君に惚れてしまったよ」

……………はっ? 今こいつ……………何かとんでもない爆弾投下しなかつたか!?

「君と踊れる日が来ようとは、私は運が良いな!」

「!?!」

斬りつける威力が上がった!?

「君の事は愛しているが、今は使命を全うせねばならないから残念だ」

「俺とお前は敵同士だ! 普通使命とやら全うするもんだろっが!」

「私にとっては正直使命よりも、愛に生きたかったんだ。残念だよ太陽の翼、君と出逢うのが先だったら、違う人生を送っていただろうに」

「テメエの事情何か知った事か! 何なんだよさつきから」

そついや原作でも頭翹つて、アポロニアスの事が好きみたいだから、ホモ的な感じになつてんのかな?

「さあ、太陽の翼。 私にも見せてくれ、君の翼を」



ソーラーアクエリオンになれって事か？いいだろう。  
ソーラーアクエリオンになったラウル。

「おお、太陽の鎧。さ見せてくれ、太陽の翼を」

「もう容赦しねえぞ。喰らえ、無限拳！」

ラウルは無限拳を繰り出したが、トウマは空間に穴を開けて、そこに入ってしまった。

無限拳は、空間の入口の前で止ってしまった。

「何！？」

そうだった、原作でもこの空間の入り口は墮天使以外入れなかったんだっけ？

すると、ラウルの後ろから、トウマが出て来た。

「ハアアアアッ！」

トウマに斬り付けられるラウル。

「なっ、くそっ！？…ってあれ？」

力が…入らない…？

そっだ！？原作のヴェルルゼバは、攻撃を受ける度にテンションゲージが減らされていくんだっだ。

こいつの場合、気と魔力が減らされるのか！？

「どうしたんだい？太陽の翼」

「お前…何をしたんだ！？」

「私の剣は、気と魔力を削ぎ落とす事が出来る。私の攻撃を喰らえ

ば喰らうほど、何も出来なくなるよ」

「くそっ!?!」

取り合えず今の気力で何とかして行くしかないな。

「さあ、太陽の翼よ。安心していいよ。君の遺体は、私が大切に  
てあげるから」

「トオオオマアアアアッ!」

気分が段々下がり気味だったにも関わらず、俺が殴りかかるが、ト  
ウマの双剣で止められた。

「君の亡骸は、永遠とわに私と共に…」

「るっせえ! いい加減、気持ち悪いんだよ!」

剣の隙間を通過して、トウマの顔に蹴り上げた。

「仲間が待つてんだ! あいつらを助ける為に! そして、この世界を  
守る為に! 俺達は行くんだああああっ!」

背中ソーラーウイングが展開すると、体が銀色に光り出すラウル。

「おおっ…美しい! これこそが、我が愛しき太陽の翼の光!」

「ウオオオオオオオオオオオオオッ!」

トウマが別空間に入ってしまった。

ラウルは無限拳を撃ち出す態勢をとった。

俺は今…時空を超え…大いなる一撃を繰り出す!

「フォルド超時空、ムゲンファクター無限拳!!!」

F 超  
時  
空  
無  
限  
拳

O  
超  
時  
空  
無  
限  
拳  
T  
A  
C  
K  
D  
M  
U  
G  
E  
N  
A  
L

またロゴが出て来た。多分もう出ないだろう。  
別空間への入り口目掛けて撃ち出した。  
すると、入り口に張ってたバリアは砕け、トウマ目掛けて伸びていった。

「！？空間を突破して…」

超時空無限拳がトウマに直撃し、空間ごとぶち抜いた。  
空間ごとぶち抜かれたトウマはそのまま上空へと撃ち上げ続けた。

「まだまだああああっ！！」  
「うおおおおおおっ！！？」

空間を貫き、墓守り人の宮殿から出て、そのまま空へと続き、魔法世界（火星）を飛び出した。

「今だ！」

腕を伸ばすのを止めて、核弾頭入りの銃を取り出した。

「無駄だよ、私に銃は……」

「あばよ！」

俺は核弾頭を……フレイヤを撃ち出した。

「こんな物で！」

トウマは、フレイヤを斬り付けた。  
その瞬間、眩しい光が放った。

「（これは！？太陽の翼……ラウル・クルセイド……君の事は……愛していたよ……）」

フレイヤで原子分解されたトウマだったが、ラウルの事を思って消滅していった。

「よし、後はラスボスだけか」

ラウルは急いでナギの所に戻っていった。

## 最終決戦 ラウルVSトウマ（後書き）

頭翹って、ガチホモって思う時があります。

超時空無限拳はA・C・E・R・オリジナルの技なのでここに入れました（巨大化は省きました）。

修正しました。MVSから太陽剣と星空剣にしました。

次回はナギと一緒にラスボスと戦います。

### 敵設定3 (前書き)

本編で主人公と敵対する敵  
その3です。

### 敵設定3

<名前>

トーマ(男) 22歳? (年齢は適当に決めた)

<容姿>

容姿はアクエリオンの頭翅  
服装はアクエリオンの頭翅  
戦闘はヴェルゼバになる

<武器>

両腕にヴェルゼバソード  
舞い踊る様に攻撃する  
光属性の魔法を使用

<立場>

完全なる世界の幹部  
最終決戦でラウルと戦う相手  
ラウルがオト八達と戦っている間に惚れたらしい(原作と同じく)  
空間移動が可能  
攻撃を受けると気と魔力が減らされる  
トドメは超時空無限拳を繰り出して火星を飛び出した後フレイヤで  
消滅した

### 敵設定3 (後書き)

敵キャラはそのまんま出しています。ちっともオリ敵じゃなくって「めんなさい」。



**最終決戦 ナギ&ラウルVS造物主(前書き)**

トウマを退けた後、ナギ達の所に戻ったラウル。

## 最終決戦 ナギ&ラウルVS造物主

（ラウルサイド）

「まったく、変態トウマと戦って、何とか勝った俺は、ナギVSアーウェルンクスの戦ってる所まで赴いた。すると、全くの偶然か、詠春たちが来た。」

「よお、そっちは終わったか？」

ジャックが言ってきた。

「まあな、以外に強かった」

「バグの貴方が苦戦するとは、余程の相手だったんですね」

「うるせアル」

取り合えずナギの方を向いた。

そこには、ナギに首を掴まれて宙ぶらりんになってるアーウェルンクスがいた。

「見事…理不尽なまでの強さだ…」

「ハア…ハア…黄昏の姫御子は…どこだ？…消える前に吐け…ハア

…」

「フ…フフフ…まさか君は…未だに僕が全ての黒幕だと思っているのかい？」

「なん…だと？」

「そうだ！？確かこの後は…、

ラウルは直ぐにレポートを行い、

「ナギ、危ねええええー！ー！ー！ー！つ！！」  
「なっ！？」

ナギを突き飛ばした後、ラウルもテレポートで回避した。  
その瞬間、何かアールウェルックスを貫いた。

「！？」

「誰だ！？」

「！？」

宮殿の奥からゆらりと黒い影が現れた。

「いかんっ！最強防護！！」  
クラウティスター・アイギス

ゼクトは強力な結界を張った。

「間に合えっ！！」

俺は咄嗟に、アーバレストのラムダ・ドライバ（紅き翼を覆う程の半楕円形のバリア）、ランスロットのブレイズ・ルミナス、キングゲイナーのフォトンマット、塵気楼の絶対守護領域、デステイニーとストライクフリーダムのビームシールド（両腕に張った）、クロスポーンX3のEフィールド、バルキリーのピンポイントバリアを（頭部分）張り、そして体をアルファート（アーマーヴァンドウル状態）にして、思い付く限りの防御壁を創った。

黒い影が強力な攻撃を放ち、詠春はナギの防御、俺とゼクトとアルとジャックは放ってきた攻撃を防ぐが、ラムダ・ドライバ、ブレイズ・ルミナス、フォトンマット、が容易く突破され、絶対守護領域の所で止ったが、徐々にヒビが入っていった。

「ぬううううううう！！」

ジャックは必至で防いだが、それも虚しく、両腕が吹き飛んだ。そしてとてつもない爆発が起きた。

俺は脳震盪になりそうなくらい吹き飛んだ。爆煙が晴れると、そこには瀕死の紅き翼だった。

「ぐっ…バカな…！？」

「まさか…アレは…！？」

そこにいる者こそ、

完全なる世界の、

真の黒幕、

ライフメイカー  
造物主が姿を現した。

～三人称～

「ぐっ…（か…勝てねえ…）」

すると、造物主は姿を消した。

「待てコラてめえっ!!」

「任せなジャック」

「!?!」

ジャックの側には、さっきの攻撃で腕から血を流しながら立っているナギが言った。

「い…いけませんナギ!その身体では…」

「アル、お前の残りの魔力全部で俺の傷を治せ」

「し…しかし、そんな無茶な治療ではっ「30分もてば充分だ」ですがつ!?!」

「ふふ…よかるう、ワシも行くぞナギ。ワシが一番傷も浅い」

「ゼクトだけじゃねえぞ、俺も行くぜ」

ナギ以外で立ち上がったのは、ゼクトとラウルだけだった。

「お師匠…ラウル…」

「ゼクト!ラウル!たった三人では、無理です!」

「ここで奴を止めなければ、世界が無に帰すのじゃ。無理でも行くしかなかるう」

「それに、分の悪い賭けは嫌いじゃないぜ」

ナギ、ゼクト、ラウルの三人は、最後の決戦に行こうとしていた。

「ナギ待て!奴はマズイ、奴は別物だ、死ぬぞっ!態勢を立て直してだ」  
「バーカ、んな事してたら間に合わねえよ。らしくねえな、ジャック」

ナギは振り返って宣言した。



「だが、ゆめ忘れるな！全てを満たす解は無い、何れ彼らにも絶望の帳とほひが下りる！」

魔法陣から、黒い閃光が大量に放たれた。

必死でそれらを防ぎ続けるナギと、ハドロンプラスターで応戦するラウル。

「貴様も例外ではない！！！」

「ケツ、グダグダ……」

「うるせえええっ！！！」

ナギは雷を纏った拳と、ラウルがZガンダムの覚醒で死者の思念を取り込んだ後、念動フィールドを纏った盾（ART-1の盾）を左腕に付け、T-LINKクラッシュソードをブチかました。

「例え！」

「明日世界が滅ぶと知ろうとも！」

「諦めないのが！」

「人間ってモノだろうが！！！」

ナギは杖を雷の槍にし、ラウルは両腕を交差させ4つの光球を作り出した。

「くつくく……貴様も何れ、私の語る永遠こそが、全ての魂を救い得る唯一の次善解だと知るだろう……」

「人……間……を……」

そして、





ナギ達は、最後の敵の所に向かって行った。  
俺達は今、治療中で待ってた。

「アレは…マズイもんだった、一目見て解ったぜ。全身の細胞が叫んでたぜ…アレはヤバイ、全力で逃げろってな…」

この俺が恐怖を感じちまったぐらいだ。奴には…勝てねえ。

「さすが最強の剣闘士ラカン。アレのマズさを肌で感じ取りましたか？」

アルも似た様な意見だった。  
すると、詠春が起きた。

「ぐ…ナ、ナギ…た、助けに…行かねば…」

「動いてはいけません詠春！死んでいてもおかしくはない傷なのですよ！」

「だが…あいつらだけでは…あの化け物には…」

「オイッ、どういう事だアル！」

「私の推測が正しければ、アレを…あの化け物を倒す事は…この世界の誰にも不可能です」

「じゃあオメエ！？ナギの野郎とラウルの奴も…！？」

その時、宮殿から凄まじい光が漏れ出した。

それと同時に、一瞬だが、ナギとラウルがあああの化け物を、ブツ倒しちまったのが見えた。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

その衝撃は、宮殿のてっぺんから一筋の閃光が飛び出した。

「……て、オイオイオイオイ、倒しちまったぜあいつら」

「…のようですね」

「…フツ、敵わねえな、テメエらにやよ」

あんな化け物を倒しちまうなんてよう。

~~~~~

くラウルサイドく

「ハア…ハア…や、やった…うつ！？」

やべっ、死者の思念を取り込んだ衝動と、コスモノヴァを使った影響で、精神と生命力がもたないな…それにすぐ眠いし、少し疲れたぜ。

「ナギく、俺あ少し疲れたから…後頼むわ…」

「！？おい、ラウル！？」

ラウルの意識が途切れた。

最終決戦 ナギ&ラウルVS造物主（後書き）

防御については、最初から順に外から内にという順番です。強力な攻撃はコスモノヴァくらいしか思い付かなかった。次回は式典と崩壊と奇跡です。

奇跡のゼロ(前書き)

本当はA・C・E・3のネタなんだけど、ガンダムがあるから使っちゃいました。

奇跡のゼロ

（ラウルサイド）

造物主との戦いから翌日。

「知らない天井だな」

つい言ってみたくなるもんだな。
すると、誰が入って来た。

「やっと起きましたか」

「アル…はっ、あれからどうなった!？」

「世界は救われました。ナギと貴方のおかげで」

「そうか」

という事は、

「ゼクトは？」

「…彼は…死にました」

「…そうか」

あの時は疲労が溜まり過ぎて倒れちまったからな、その瞬間が見た
かったな。

「そっぴや皆は？」

「彼らは今頃「ラウル！起きたか！」来ましたね。では私は失礼し
ます」

「あっ、おい!？」

転移しやがったよおい。

「ラウル元気そうだな。そういや、アルはどうした？」

「ついさっきまでここにいたけど、突然転移して消えやがった」

「逃げやがったな、まあいいや！ラウル、さっさと正装に着替える！今から式典だ！」

アル、怨むぞ…。

「分かった。すぐに行く」

大衆に囲まれながら、連合と帝国の魔法使い達と鬼神兵達に警護されつつ記念式典の場。離宮にて行わる。

その真ん中を歩くのが、ナギ、ジャック、詠春、そしてラウル（ゼ口の格好（仮面無し））だった。途中男女問わず、うっとりした目で俺を見てきたのは気の所為だと信じた…。

表彰台の上に立ち、詠春、ジャック、ナギはアリカが勲章を与え、ラウルはテオドラが勲章を与える事となった。ナギは渡される直前にベロを出し、こんな所でまた引っ叩かれたという。

ナギは記念式典が終わると姫と共に庭園に向かった。

俺はナギが来るまで酒場の前で待ってた。

「よお英雄^{ナギ}、どうした？」

「何だよ英雄^{ラウル}、こんな所で…」

「皆がお前を待ってるぜ」

「そうか…」

そう言って酒場に入ってた。

「真打ち登場！」

「ナギ、てめえこの」

「ナギさあ〜ん」

「来たかナギ」

「アンタ歴史の教科書に載るぜ！」

「うお！？」

ナギが入って来た瞬間に活性が湧いた。
ジャックがナギの所に近づいた。

「てめえ、胸の傷はもういいのかよ！？」

「てめえこそ、両腕ねえくせに偉そうにッ！」

「ガハハハ、良い義手を探さねえとな！」

「傷をド突き合うな貴様らあー！ッ！！」

ナギとジャックがド突き合い、詠春が突っ込んだ。

「詠春、てめーも一番怪我ひでえのによく式典とか出るぜ。ワハハ
！」

「だから傷をド突くな！！死ぬわ！！」

あーあ、次は詠春が標的に…。

容赦なく連打するなジャックの奴…。

「ラウルも頭大丈夫かよ！」

「フゲツ！？頭はド突くなこの馬鹿力！」

今度は俺かよ！？

確かにあの時は、吹っ飛んだ時に頭をぶつけたけどよ…。

「つーかアル、てめえは何で受勲式出ねえんだよっ!？」

「私上がりで症なもので・・・」

「嘘つけーッ!」

しばらく騒ぎまくった。

「まさかあのゼクト殿が逝ってしまわれるとは・・・」

詠春が目を瞑りながら悲しそうに言う。

「なー？あの妖怪じじい、殺しても死なねえ気がしてたんだが。まあ戦争だしよ、他にも大勢死んだ」

「俺とナギがトドメ刺す瞬間まではまだ生きてたんだけどな」

「いや…お師匠は…」

「ナギ」

アルが口元に指を置きながら首を横に振った。

まあゼクトの事は色々あるしな。

「…死んだ奴等と世界の平和に」

コップを向けるジャック。

湿っぽくなったので飲み直すと言う事だろう。

さて…そろそろ動くか。

ラウルは酒場を出ようとしたら、

「どこに行くのですか？」

「!？」

アルが話しかけてきた。

こいつは、普段何考えてるのかよく解らないけど、どこか鋭い所があるから怖いんだよな。

「何か失礼な事を考えている様ですね」

「なっ、何の事だか…」

やっば鋭い…。

「それで、どちらに行かれるのですか？」

「ああ、テオのとこだよ。そろそろ二人だけでいたいしな」

「…そうゆう事にしておきますか」

やっば何か解ってるって感じだなアルは…。

そう考えた後、ラウルは酒場を出た。

「さーで、オスティアを救ってみるか！」

そう言って飛び立ったラウルだった。

~~~~~

（アリカサイド）

「…ナギ」

アリカは以前、ナギとのデートの事を思い出していた。

『はっ！？ソフトクリームも知らねえのか？これはソフ・フト・クリ・ム・ム！』

『ソフ…ト…クリ…クリ？』

『ぐわっ、マジかよ!? 演技じゃねえよな!? どこまで箱入りだよ!?!』

『し…仕方あるまい、王宮以外は知らぬのじゃ…』

王宮の外は初めての物ばかりじゃからの。

『か〜〜〜っ! はー…良しっ決めた! 今度あんたを本格的なデートに連れて行ってやる!』  
『デートとは何じゃ?』

ずっこけるナギ。

『…手え繋いで、仲良くお散歩する事だよ』

『ほ…ほっ? それはなかなか…楽しげじゃの?』

実の所、良く分かってなかったからの。

『……良し…約束だ』

『?』

『いつかきつと、京都にデートに連れて行ってやる。俺のダチの故郷さとな。旧世界あちちなら、俺達を知ってる奴もいねえしよ。そうだな…アスナちゃんも連れて三人でさ。絶対だぜ、姫さん』

スマンなナギ、約束は…叶いそうにないな。

「…案ずるなナギ…妾にはもうそなたの言葉だけで…充分なのじゃ  
やっど気持ちに踏ん切りがついた…。これで私はやっていける。」

「陛下!…!」

ガトウの声が聞こえた。

臣下の礼を取るガトウとクルトがそこにいた。

「時間です。まもなく崩落の第一段階が…」

「進捗状況は？」

「アスナ姫封印直後から全艦艇全力であたっており、現在…37%」

やはりそこまでか。

となると…、

「陛下のお考え通り、式典と称しこの離宮島に全市民を誘導しております。情報統制により混乱もこれまでの所ありませんが…崩落が始まればその限りでは…全市民の救出は困難を極めるかと…!!」  
「……ッ、わかった」

やはり全てを助けるのは出来ぬか？

…だが、ここで諦める訳にはいかない！

「妾も直接指揮にあたる!!」

一人でも多く、犠牲者を減らさなくては！

～ラウルサイド～

げっ!?!もう崩落が始まってんじゃないか!?!ごうしちゃいられない!  
い!

ラウルは急いでアリカの所に向かって行った。

ちなみに今のラウルの装備は、ゼロスーツ、仮面は脇に抱えてる、  
(ニュー)ガンダムのフィン・ファンネル展開状態、Hi-<sup>ハイ</sup>-  
(ニュー)ガンダムの翼で飛んで来てます。  
えっ？魔法が消失してるのに何故飛べるかって？この力は神から授  
かった物であり、機械の翼は魔法や気で飛んでる訳ではないのだから  
な！って独り言を言ってる場合じゃ無かった。  
見えてきた！あれがアリカの乗る船か？  
そう思っって近づくラウル。

『！？そなたは、千の武器使い！？何故お主がここに！？』

サウザンオブエボンス

船から通信が来た。

「それはこっちのセリフだ！どうなってるんだこの状況は！？」

一応知ってるが、体裁で聞いておく。

『見ての通りだ。世界を救う代償に自らの国を亡ぼした』

「なっ、何だと！？」

『じゃが、ある意味好都合かも知れん。ラウルよ、救出活動に全力を尽くした後そなたはそのままここを去れ。そして二度と戻るな！それが最後の命令じゃ』

何で俺にまで偉そうな発言してんだよアリカさんよう。

だから…、

「断る！」

『何じゃと！？』

「納得出来ると思ってるのか？ふざけるな！そんな命令で、はいそうですね！聞いて聞ける訳ないだろうがっ！」

『貴様、貴様も紅き翼の一人なら、妾の命令を聞かんか!』  
「悪いが今の俺は、紅き翼のラウルじゃない。俺は…いや…」

ラウルは仮面を付けた。

「私は帝国の黒騎士、ゼロだ!」

『なっ!?!』

「私はこれより、オステイアの民全てを救う!」

『そ、そんな事が出来る筈が…』出来る、私なら!」なっ!?!』

私はオステイアの中心まで移動した。

「たかが石ころの一つや二つ、私が止めてみせる!」

『馬鹿な真似は止めるラウル!?!』

「何事もやってみなければ解らん!」

『オステイアの崩落はもう始まっておるのじゃぞ!』

「私の…ゼロの名は…伊達では無い!」

翼のフィン・ファンネルが展開して、サイコフレイムが干渉し、光が放出された。放出された光はオステイアに広まった。サイコフレイムから放出される共振エネルギーが、崩落していた物は全てゆっくりと落下して行った。

『これは一体!?!』

『陛下、これはチャンスです!今の内に避難を!』

私のした事により、動揺するアリカ。そこにクルトがアリカを指摘した。

『し、しかし…』

『ゴルアーツ！こんのバカ姫えー！ー！！』

ナギの声が轟いた。

『やいアリカてめえっ！どついうこつたコレは！？』

『ナギ…見ての通りだ。世界を救う代償に自らの国を亡ぼした。案ずるな、妾もいずれ遠からぬうちに地獄へ堕ちる』

『何で話さなかった、この唐変木！！それにラウルもラウルだ！お前まで何で！？』

「私はゼロだ。オスティアの事など知った事ではないが、今は救助活動の為に尽力を尽くしているに過ぎん」

『てめっ！？？』

紅き翼としてじゃなく、黒騎士として動いてる事を主張したゼロ。

『だったら俺も今からそつちに向かう、待つてろてめえら！』

『ここにそなたの力は必要ない！！妾を助ける暇があるのなら、避難民の頭上に落下する浮遊岩の破壊をラウルが居る別の場所で行うよう要請する！！まだ崩落を始めていない地区を頼む！ただし、この魔法消失現象の中ではそなたも満足に飛べまい！』

『むっ…』

『我等の逃亡生活に使用したボ口舟にも対抗呪文処理を施してある！それを…』

『もう乗ってるよ！！』

『ならば良い。では救出活動に全力を尽くした後そなた達はそのままここを去れ。二度と戻るな最後の命令じゃ』

『何！？そりゃどーゆー…』

『切るぞ。この通信の間にも民が死んでいく。通信終了』

『オイツ待て！』

『へ…陛下、しばしお待ちを！アルビレオ・イマ！聞いていますか』

「？クルトです！」

『はい何です？クルト君』

アルが代わりに出た。ナギは詠春とジャケットに抑えつけられた。

『アリカ様のおっしゃる通りにするのが賢明かと思えます。もし戻れば…あなた方はメガロメセンブリアに拘束される可能性が高い！今は身を隠して下さい。時が経てば、事態は好転する筈です！とにかく、コレが終わったら逃げて下さい！！いいですね！？』

『分かりました。ナギの事はお任せを』どけこらアルツ！てめーら離せ！！』

『すみませんナギ…これがアリカ様のお望みでもあるとおもいますので…』

声にならないくらい悔しがるナギ。

『そなた達には世話になったな…さらばじゃ』

『陛下もご武運を』

『お、おい、待てよっ…ア…』

ナギとの通信が切れた。

「良いのか、こんな別れ方で？」

『…良い訳あるまい…それよりもラウ…いやゼロ、お主も早く逃げるがいい』

「バカを言っな、私はまだ…やれる」

『じゃが…』

「行け！私が少しでも長くオスティアを支える！だから…ブフォアっ！？」

『ラウル！？どうしたのじゃ！？』

多少苦しむフリをしておかないとな。

「ハア…何をしている…お前にはまだ…成すべき事があるのだろうか？私などに…構っている時間など無い筈だ！」

『ラウル……すまないな』

そう言つて、アリカからの通信が切れた。

「さあて、救助が終わるまで続けるか」

その後、千塔の都と称えられた空中王都オステイアは、地図から消えた。

尚、重軽傷者は多く出たものの、犠牲者数は以外にも0人だった。そして、この事件の貢献者であるゼロことラウル・クルセイドは、行方不明となった。

その時、オステイアの状況を調べに来たMM兵達は、その中心部に中に吐血の跡が付いたひび割れの仮面が発見された。これらを見てラウル・クルセイドは死亡したと、メガロメセンブリア元老院からの発表された。

この時に付けられた二つ名は、

ラウルの場合：銀色の救世主

ゼロの場合：奇跡のゼロ

と付けられた。

それからしばらくして、ウェスペルタティア王国女王、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアは、父王殺しの罪と完全なる世界との関与疑惑とラウル・クルセイド暗殺疑惑を問われ、連合最辺境ケル



ベラス無限監獄に幽閉された。

ちなみに俺はまだ生きてますからね。不死身だし。

つか、事前にアリカに渡しておいた父王の罪（当然ギアスで吐かせた）を記した書類があったのだが、どうやらその内容が世間に出ていない事が災いし、折角の証拠も元老院たちによって握りつぶされてしまったらしい。

今の姿はくわん枢木スザクの姿になっています。

待ってるよ元老院の腐れジジイ共！2年後が楽しみだぜ！

## 奇跡のゼロ（後書き）

すみません、オスティアの事については、これしか思い付きませんでした。

次回はアリカを救出します。

## アリカ救出（前書き）

ラウルの復活、ナギの葛藤、そしてアリカ救出です。

## アリカ救出

（テオドラサイド）

「ぐすっ…ぐすっ…うっ…」

ラウルの馬鹿あ、何故妾を置いて逝ってしまったのじゃ…。  
テオドラは、オステイアの件でラウルが死亡した事を知った様だ。

「何泣いているにやテオ？」

「テオ、どうしたのにや？」

「だって、ラウルが死んでしもうたんじゃ！もう会えないのじゃ！」

そもそも主人が死んだのに何をそんなに冷静なんじゃこの猫達は…。

「ラウルが死ぬ訳無いにや」

「そうにや」

「じゃが、死んだとの報告が…」

「だったら私達も死んでるにや」

「えっ!?!」

どういう事じゃ？何故ラウルが死ぬと、クロとシロが死ぬのじゃ？

「僕達はラウルに作られたミニステル・ドールにや」

「だからラウルが死んだら、私達は元の人形（猫形？）に戻るだけ  
にや」

「なんじゃとー!?!」

つまり、ラウルが作った魔法猫で、ラウルが生きてるからこの子達

も生きてるって訳なのか？  
だったら、

「ラウルは生きておるのか！」

「だからそう言ってるにゃ！」

「そうか、生きておるのじゃな！」

良かった。生きているのじゃな。

ラウルが生きていた事に喜ぶテオドラだった。

~~~~~

（ラウルサイド）

あれから1年と11ヶ月か…時が経つの早いな。

アリカの方も、いつしか災厄の女王って呼ばれるようになったまっ
てまっ。

それもこれも、あの老害共が保身の為にアリカを利用したからな。
証拠という証拠は手に入れてある。その清算をするのは、あと一月
だ。せいぜい浮かれてるがいい。

ちなみに俺は今、紅き翼の隠れ家の前まで来ていた。

「何者だ！」

詠春が警戒して出てきた。

あっそうだった、まだ枢木スザクのままだったな。

「待て詠春、僕だ」

すぐにスザクの姿からラウルの姿に戻った。

「ラウルだ」

「ラウル!？」

「久しぶりだな詠春」

「何故ラウルが!？ラウルは2年前に死んだ筈…」

「俺は不死身だ。そう簡単に死ねるか」

啞然とする詠春。

取り合えず中に入る事にした。

すると、

「……ラウル?!？」

「ただいまって言えばいいのか、この場合？」

中にいた全員が驚いた。

ナギは落ち込みながら驚いていた。

「しばらく見ない内に随分と情けない面になったなナギ」

「……………」

やれやれ、仕方ない。

「ナギ、お前…今更正義だの何だのって考えてんのか？」

「……………」

するとナギは質問して来た。

「なあラウル…正義ってのは一体何なんだろうな…」

「正義か…500年生きてきた俺の考えだと、自分を正当化して現実を見なくなつた奴の戯言だな」

「戯言？」

「だってそうだろ、自分が正義だと言い張ってりゃ、周りから悪だと言われている無害な奴を平気で殺せるんだからな」

「……………」

実際そうだった。エヴァと一緒に旅をしてた時なんかしょっちゅう狙われてたからな。

「それになぁナギ、正義と相反する存在が悪とは限らないんだ。そこには別の正義が存在するんだ」

「……………」

皆も黙って俺の話を聞いていた。
するとナギは、

「だが…これは…アリカが望んだ事だ…それは…」

「それは…何だ？諦めるのか？アリカが望んだ事だからって、もう諦めちまうのかよ！」

「ラウル…」

「お前は…飛ぶ事を止めちまうのかよ？もう飛べないって言うのかよ？」

「……………」

「お前はもう飛べないのか？お前の翼は、消えちまったのかよ…」

「……………」

「お前の翼は、まだ消えていない！」

「……………!？」

「人は一人じゃ飛べない…飛んじゃいけない。それはナギ、お前も解ってる筈だ！」

「…!？俺は…」

「ナギ、お前の翼は、アリカに預けたままだろ？だったら、取り返

しに行きやいいい

「でも…俺は…」

めんどくさい奴だなホント。

「あゝもろ、ナギ！」

「!?!」

ラウルの左目に、紅い鳥が映し出された。

「ラウル・クルセイドが命じる、ナギ・スプリングフィールド、いい加減…自分の心に素直になりやがれ!!」

「!?!」

ギアス発動!

「おいラウル!?!ナギに何をしたんだ!?!」

「今言った通り、自分に正直になる様ギアスをかけた」

そしてナギは、

「俺は…アリカを助けたい!惚れた女を、是が非でも助けたいんだ!」

「ようやく聞けたな、お前の本心が…だったら、それでいいじゃないか」

「!?!」

「それにな、俺には秘策があるからな」

「『秘策?』」

「そうさ、俺の考えた作戦…聞いてみるか?」

ラウルがそう言った後、全員が頷いた。
そして、全ては一ヶ月後に。

～アリカサイド～

重戦争犯罪人

アリカ・アナルキア・エンテオフュシア
処刑執行日当日

恐怖は無い。ただ…何やら空しいのじゃ。妾は誰かの役に立てたの
だろうか？いや…

「魔獣蠢くケルベラス渓谷。魔法を一切使えぬその谷底は魔法使い
にとってまさに死の谷」

冷たく薄暗い王宮に生まれ、後はただ…

「古き残虐な処刑法ですが、この残酷さを持ってようやく…魔法世
界全土の民も溜飲を下げ、そしてラウル・クルセイドも安らかに眠
れることでしょう」

奪い奪われるだけの日々、

「では、これより処刑を開始する」

「歩け！」

「触れるな下郎、言われずとも歩く」

その終着がここだというのなら…それもよい。

この死が人々の安寧にとって意味のある事をせめてもの慰みとしよ
う。

ただ二つ…心残り…

ナギ

そなたの顔を、もう一度だけ…

ラウル

主には謝りたかった。

主らと過ごした戦いの日々だけが、なぜか暖かだった。

亡き父王はこう言った。人の生もこの世界も全ては儂い泡沫の夢に
過ぎぬ…と。

ならばこれも…きつと、ただの悪い夢…

ラウル…すまなかった。

そして、さらばじゃ…ナギ…

谷底に落ちていったアリカが感じたのは、魔獣に食い散らかされる恐怖でも、地獄に堕ちた苦しみでもなかった。

アリカが感じたのは、最愛の男に抱きしめられた時の温かさだった。

~~~~~

（ゼロサイド）

よし、アリカは飛び降りたな。

さて、ここから先は我々の出番だ！

というより、あの取り仕切っている元老院は、以外にもDr・シキに似ていた事に驚いた。

原作ではラスボスで、ここでは黒幕として出ているのだから違和感はないな。

「よろしくよおーっし、こんなモンだろ。よお〜し御苦労ッ！」

ジャック…まあいい、予定が早まったただけだ。

私が用意した真実を世界中に流した。

これでどう転ぼうとも、元老院は終わりだな。

ふと周りを見ると、鎧を豪快に脱ぐ（弾け飛んだ）ジャックの姿を見た。

「きつ、貴様は！？せ、千の刃の…、ジジャ…ジャック・ラカン  
ーッ！！？」

周りも騒ぎだしたな。

「青山…詠春ッ！！アルビレオ・イマ！！ガ…ガトウ！！」

さて、そろそろ私も出るか。  
ゼロの姿で登場した。

「ば、馬鹿な、ゼ…ゼロだと！？そんな筈は…ラウル・クルセイド  
は死んだ筈…」

「違うな、間違っているぞ！」

仮面を取るゼロ…ラウルだった。

「俺はこの通り生きている！」

「何い！？紅き翼…馬鹿なっ！？では、谷底の女王は…！？」

ラウルはまた仮面を着け、ゼロに戻った。

「その通りだ！」

今頃はド・ダイ改（ディジェの乗り物）に乗って救出してる頃だろ  
うな。

~~~~~

（アリカサイド）

うむ…なんじゃここは…？

ここが地獄か？

もっと恐ろしいモノかと思つておつたが…

何やら温かで…。

力強いものに抱かれているような。

アリカはそつと、目を開けると、

「え…」

自分を抱いているナギの姿だった。

~~~~~

「ナギサイド」

それにしてもすげーな、このド・ダイ改つて奴は。

魔力でも気でも動いてる訳じゃないから自由自在に動かせるなこれ。  
…でも何で改なんだ？

おつと、んな事考えてる場合じゃなかったな。

「ナ…ギ…？え…？…え…？なぜ主が…地獄に…？アレ？」

混乱してやがんなこの姫さんはよお。

「バーカ、あんたを助けに来たんだよ。アリカ」

「え…？何故じゃ？」

まったくこいつは…

「なっ…なぜ…なぜ主がここにおる？」

「何故…ふわっ！？」

危ねえな、でも、お前らに喰わせるモンは無えーぞ！

「何じゃその台は？何故魔法が使えぬこの場でそれが使えるのじゃ！？」

「ああこれか、ラウルから借りたんだよ」

「何じゃと！？ラウルは…生きておるのか！？」

「ああ、ピンピンしてるぜ。それに、アリカの罪も無かった事になつてるぜ」

「！？どうゆう事じゃ！？」

「へっあいつは今頃…」

ナギは、崖の上を見上げた。

~~~~~

（ゼロサイド）

「バカなっ、いかな千の呪文の男とはいえ、あの谷底から生きては…！」

「それはどうか？魔力も気も使えないくらいで、ヤツが死ぬかよ」
「そういう事だ」

さて、そろそろ…

「ぐ…捕らえよ、反逆者だ！谷底の二人も逃がすな！」

「反逆者？違うな、間違っているぞ！本当の反逆者はこれから裁かれるのだ！」

「本当の反逆者あ？そんなモノ、アリカ女王以外にいな」
「これを見てもそう言えるかな？」
「何！？」

ゼロが指を鳴らした瞬間、上空にスクリーンが投影された。

その内容とは、シキ（仮）にとっては10日前の会話が流れていたのだ。

『これはこれは…見るにも耐えぬみすばらしい姿ですな。最古の王家の末裔にこのような仕打ち…まことに心が痛みます。刑の執行は10日後と決まりました。…その前に、今一度お尋ねしましょう』

牢屋の奥にいるアリカに近づくシキ（仮）。

『黄昏の姫巫女と共に封印された墓所の最奥部、そこに至る方法を貴女は知っている筈だ』

黙っているアリカに腹が立ったのか、アリカの髪を引っ張りだした。

『言つのです！完全なる世界が成し遂げられなかった事を我々が行い、世界を滅びから救う我々の為に！さあ言つのです！これは最愛の妹君をお救いする為でもあるのですぞ！？』

この時、世界中が騒然とした。
もちろん元老院側も驚愕していた。
映像に戻ると、アリカは尚も黙っていた。

『フン：使えぬ女だ。…いや失礼、これは言い過ぎました。貴女は10日後の死によつて、十分に世の役に立つ事になるのでしたな。そう…我々が平穏な、世界平和の礎としてね』

ここで映像が切れた。

元老院側は、開いた口が塞がらない状態になっていた。

「これで解つただろう？本当の反逆者が誰なのかを！」

「で、出鱈目だ！こ…このような…事は…ざ、戯言だ！」

酷く慌てているなシキ（仮）、まあこれは私がアリカとシキ（仮）にギアスをかけて録画したのだから、本当に身に覚えが無いと主張しても、今の映像を見せればそうは言つてられなくなるからな。

「何を慌てている？真実が露見すれば、自身の地位が危ういからか？だから私を暗殺しに来たのだろう」

「暗殺？」

当然これはブラフだ。

「2年前のオスティアにいた私は真実に気付いた。だが、真実を知つた私がいると都合が悪いと思つたお前達は、私を暗殺しようとした！」

「ば、馬鹿な！？そんな事は知らぬ、知らぬぞ！」

「見苦しい真似は止める！世界を食い物にする寄生虫、元老院よ！貴様達は、本当に裁かれるべき存在だ！」

「ええい！ならば今すぐ貴様らを葬れば、世間にはれる恐れも無い！そして私の地位も揺るぎはしない！」
「良いのかな？それは自供と判断してもよろしいか？」
「フン、貴様らさえ消せば、いくらでも真実を変えられる！今や世界は我々が握っているも同然なのだからな！」

あーあ、とうとう言ってしまったな。

「ふふっ、フハハハハハハハハハハッ！！」

「なっ、何が可笑しい！？」

「お前達は、遂に自らの首を絞めた事に気付かないとはな」

「何の事だ？」

「この会話は、既に世界中に流れている。お前達が完全なる世界と繋がっていた事も含めてな！」

「な、何だと！？そ、そんなたわけた事が……」

「先程の映像を出した時点で、世界中に報道されているのだ！もうお前達の味方をする者は、この世界にはもういない！」

「そ…そんな…」

とうとう尻餅を付いたか。

シキ（仮）と他の元老院は怯え始めた。

「すごいなラウルって、ここまで計算に入れてたのかよ！？」

「前に戦った時も、その戦術眼で翻弄されてた事があったからな」

「すごい計略ですね」

「さすがは鬼才の策略家、その名は伊達では無いな」

ジャック、詠春、アル、ガトウの順で感想を言った。

「全ての者が元老院の悪行を知った今、義は我らにある！」

今この時を持って、シキ（仮）を筆頭に、完全なる世界に加担した
元老院（八割程）は逮捕された。
さて映像終了させてと。

「これでアリカ女王は公式的に処刑されて、元老院の悪事を暴き、
そしてアリカを救出。俺の考えた策はどうだ？」

ラウルが仮面を取って皆に感想を聞いてきた。

「……………文句無し！……………」

そしてナギとアリカは、杖の上で夕日をバックにキスをしていた。
紅き翼のメンバーは、それを温かく見守った。

アリカ救出（後書き）

途中から元老院の事を、Dr・シキに似てるから、シキ（仮）にしちゃいました。（笑）

処刑の時は、ゼロが中華連邦の悪事をばらした内容と、レオン三島を逮捕する時にした内容に似せたと思って下さい。

好き勝手に元老院を結末を決めちゃいました。

今回は、京都に結婚旅行と両面の鬼出現です。

リヨウメンノスクナノカミをフルボッコ(前書き)

ナギ達の新婚についてきた紅き翼のメンバーと一緒に京都に來ました。

リヨウメンノスクナノカミをフルボッコ

（ラウルサイド）

久しぶりに京都に来たな。

前にエヴァと来た時は60年くらい前だったかな？

あっそうそう、今日は観光に来たんじゃなく、いや観光だけど、ナギとアリカの新婚旅行に京都に来たのだった。もちろん、紅き翼のメンバーと一緒に。

それからアスナちゃんも一緒に来ているから、俺としては初見なので軽く挨拶してみた。

「えっと、こんにちはアスナちゃん」

「……………チハ」

まだうまく感情が出せてないみたいだな。

アスナちゃんはそれなり楽しんでるのかな？

清水寺に到着した一行。

「これが清水寺か…よし、飛び降」止めい！他のお客様に迷惑になるだろうが！」でも詠春、アレ…」

俺が指差したら、

「そりゃああああああああっ！！！」

「何しとるんだお前はあああああっ！！？」

ジャックが飛び降りた事で、思いつき突っ込む詠春だった。

しばらく京都巡りをしていたら、アスナちゃんが近寄って来た。

「ん？どうしたアスナちゃん？」

「オナカヘツタ…アト、タカミチツマラナイ…」

「ええっ!？」

「お腹空いちやっただか？詠春にメシ食えるところ訊いてみるわ」

「ウン」

詠春に訊いてみたら、実家の方に寄るらしい。

「というわけで、もう少し我慢しててね？」

「ワカッタ」

その後、詠春の実家に着いた。

そこで夕食にしたらんだけど、あいづらにかかると、もはや宴会状態になってるからな。…新婚旅行はどうなったんだ？

「アスナちゃんとタカミチは酒飲んじゃダメだぞ」

「ウン」

「はい」

子供は素直で良いな。

そついや昔、エヴァと飲んだ時は大量に飲まされたからな。その時は二日酔いが結構響いたからな。エヴァも何故かものすごく照れていて、「激し過ぎだバカ者ー!!」て言われた時は何でって思ったぐらいだからな。その日以来エヴァは、俺に適度な量で済ませようとしてたからな。

俺って、完全に酔った時はどんな事をしてたんだ？

「おいラウル、お前も飲めよ!」

ジャックが絡んで来た。

「そつだぜラウル、ぱーっで行こうじゃねーか！」

ナギも絡んで来たよ。

「俺、酒は控えてる方だから」「何ー、俺の酒が飲めねえのかコラア
！」「ガボガボツ！！？」

ジャックは無理やり飲ませて来た。
やべっ…意識が…朦朧として来た…。

「何だあ、もうへばったのか？だらしねえなあ」

「まったくだぜ」

「止めんかお前ら！」

詠春…止めるの…遅いよ…。

するとラウルは、目の前にあつた酒瓶を持ってがぶ飲みした。

（詠春サイド）

「何だあ、もうへばったのか？だらしねえなあ」

「まったくだぜ」

「止めんかお前ら！」

まったくジャックの奴、ラウルに絡んで無理やり酒を飲ませるなんて、ラウルがダウンしてしまったではないか。

すると、ラウルは起き上がり、目の前にあつた酒瓶を持つと、ラウ

ルはそれをラツパ飲みした。

「お、おいラウル!？」

「お、イケる口だなラウル」

「良いぞー、もっと飲めー！」

「煽るな！」

ラウルは酔うと飲み続ける癖があるのか？
するとラウルは、

「あゝ…もつと持ってい」

「えっ!？」

「聞こえなかったのか？酒をもつと持っていって言ってんだよ？」

「ええっ!？」

ラウルは静かに言った。

どうやら酔うと飲み続けるみたいだ。

断ると後が怖そうなので大人しく酒瓶を渡した。

「おおー、グイツとグイツと、いけ〜」

ジャック…これ以上煽らないでくれ…。

そんな感じで、夜が更けていった。

その時、彼らに凶報が届いた。

「大変です！スクナの封印が解かれました！」

「何だと!？」

よりもよってあの飛驒の大鬼神、リヨウメンノスクナノカミの封印がだと!？

私達は宴会を中断して、スクナの再封印を行う為に向かった。ちなみにアスナ君はタカミチ君に任せて、留守番させた。

「これ結構デカイな」

「へっ上等だ！」

この二人は、この状況でスクナと戦いたがってるとはな……。確かに二人ならスクナを倒せるだろうけど……、

「おっしゃー、いき「せいっ！」フゲッ!!?」

なんと二人を止めた(というよりド突いた)のは、酔っ払ったラウルだった。

「ラウルテメエー、なにしやがんだ！」

「そっだぜ！これからって時に！」

「……せえ……」

「はっ？」

「……るせえ……」

「ら、ラウル？」

嫌な予感しかしないのだが……。

「うるせえ雑魚が騒いでるんだから、さっさと終わらせて飲み直すぞ」

「ちょっ……ラウル、相手はスクナだぞ!? そもそも酔っ払ってるラウルに対処出来るわk「行くぜえー！」っておいラウル!？」

ラウルはスクナの前まで来て、変身した。

あれは……あの戦いで見せた、確か「太陽の鎧」と言っていたよう

な。

そう、ラウルはソーラーアクエリオンになっていたのだ。

「雑魚が、テメーが鬼神なら俺は…」

何だ！？ラウルからものすごい気が溜まっていく様な！？

「巨人だぁー！！」

ラウルは、高次元アクエリオンになっていった。

何という事だ！？ラウルが徐々に巨大化していつてる！？いくらバグキャラだからって、これは…！？

「ラウルの奴、でつかくなっちまったなあ」

「でけえなー、どうなってんだラウルの奴？」

「おやおや、やはり彼はバグキャラのようですね」

「ははは…どんな怪獣対決だよこれ…」

「ラウルめ、このような事が出来たのか！？」

ジャック、ナギ、アル、ガトウ、アリカの順でラウルの様子を見ていた。

そしてラウルは、スクナと同じくらいの大きさになった。

「ウオオオオオオオツ！！」

そしてラウルとスクナは取っ組み合いになった。

「ぐぬぬぬぬぬっ！！」

どっちも押されずに押している。

するとスクナが、後ろ側の両腕をラウルに向けて来た。

「まずい、ラウル!？」

「なんの!？」

何という事か、背中の翼部分が腕になって、互いに四つの腕で対抗した。

「何でも有りなのかラウルは？」

思わず詠春は呟いた。

「燃え尽きな!？」

ラウルはソーラーウイングの右腕部分を輻射推進型自在可動有線式右腕部（紅蓮聖天八極式の右腕）に変化させた。肘から金色の腕みたいのになった。

「輻射波動————っ!!！」

その腕から強力な熱線を放ち、スクナの後ろ左腕がどんどん膨張していき、破裂させた。

「な、なんだ!？スクナの腕が弾けたぞ!？」

「恐らく、強力な熱を腕に送り込む事で、内側から破壊したのでしよう」

「何だその危ない技は!？」

「ええ、人に使えば間違はなく風船のように膨らんで弾けるか、焼死ですな」

「怖えーなそれ!？」

そうなった時を思い浮かんでしまったではないか!?

つかアル、何で説明口調!?

スクナは、腕が弾けた事に怯んだのか、後退った。

「逃がすかぁー!」

今度は前右腕の部分が変化し、巨大な杭がある右腕になった。

ラウルは前右腕を、アルトアイゼン・リーゼのリボルビング・バンカーを出した。

「喰らいやがれえー!」

ラウルはスクナの左肩部分に杭を打ち込み、何度も撃ち付けた。すると、スクナの左腕が飛んだ。

「これは、杭を何度も撃ち付ける事で破壊力を増す攻撃ですね」

あの杭も危ないなと思った詠春だった。

「まだまだー!」

まだ何かする気か!?

「念写…」

ラウルは額に、両方の人差し指と中指を付けた。

「何してるんだラウルの奴?」

「さあ?」

すると、

「逆念写、爆破!!」

ラウルがそう叫んだ瞬間、スクナの前後の右肩が爆発したのだ。

一瞬だが、スクナの肩に気を送り込んだのを感じたが、今のは!?

「多分ですが、スクナの右肩に気を送り込む事で、爆破させたようですね」

「そんな事出来るのか？」

「実際ラウルがした訳ですしね」

「つかアル、お前さっきから何でラウルの技の解説をしているんだ？」

ガトウが突っ込んで来た。

「何となく説明しなければと思っただけです」

「何だそれは…」

何に対しての説明だそれは？

そしてラウルは、

「トドメだ!」

ラウルは元の大きさと姿になり、剣を取り出した。

「ハアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

剣を取り出した後、空中で剣を地面に突き刺す様な仕草をとると、

「……頭が痛い……」
「もう二日酔いですか？」
「あいつらにだよアル……」

その後、飲み直した私達は、ラウルがまた暴走して、今度はナギとジャックが騒ぎだして勝負したところ、ラウルの圧勝だとか……。しかもラウルは、まだ暴れたりないと言ってきて、私達にまで向かって来た時は肝を冷やした。結果は、途中で酔いが切れたのか、眠ったのだった。以後、私達はある決まり事を立ち上げた。ラウルに酒は飲ませない事を。

～ラウルサイド～

すげ～頭痛え～。
完全に二日酔いだこれ……だるいし。
昨日……ジャックに無理やり飲まされた後の記憶が全然無いな。くそ～、スクナ復活イベントを楽しみにしてたのにな。ジャックの所為で酔い潰れちまったじゃないか！
取り合えず……水でも飲むか。
ラウルは水を取りに言った時に皆と出くわした。

「あつ……おはよう……」
「……おつ、オハヨウゴザイマスっ!？」
「……どうしたんだ皆？」
「……い、イエ、ナンデモナイデスっ!？」
「……」

何か…俺を見て何で怯えているんだ？昨日何があっただ？

するとラウルは、アスナを見かけた。

確かあの子、この先ガトウ達に付いて行って、ガトウの死が原因で記憶を消されるんだっただな。そしてあんなバカっぽい感じになるのか…よし、何とかするか。

俺はアスナちゃんを連れて、この先の事を言ってみた。

「アスナちゃん、君は幸せになるべきだ！この先何が起ころうとも、君は幸せになるべきなんだ！だから…」

「ラウル…」

「君にギアスをかける」

「ギアスッテ!？」

ギアスの事は聞いているみたいだな。

「落ち着いてアスナちゃん、ギアスをかける内容は、「記憶を消した後の普通な暮らしの中、魔法の存在を知った時に本来の記憶が蘇る」というギアスだ」

「本来ノ記憶？ドウシテ？」

「多分俺の勘じゃ、この先普通な暮らしをしても、魔法関連に関する恐れがあるから、知ってしまったら全てを知らなければならぬ。もちろん知らなければギアスは発動せずに、普通の暮らしが出来る訳だからね」

「ソウ…」

「だから、アスナちゃんが今決めてくれ。ギアスをかけるか、かけないか」

「……………」

やっぱりすごく悩むよな。

「……………ガイ」

「ん？」

「才願イ、私ニギアスヲカケテ！」

「……………分かった」

アスナちゃんの覚悟、受け取った。

ラウルは左目を展開させた。

「ラウル・クルセイドが命じる…アスナちゃん、君の記憶が消えた後、普通な暮らしの中に魔法の存在を知った時に、本来の記憶を呼び覚ませ！」

「!?!？」

ラウルはアスナにギアスをかけた。

「モウカケタノ？」

「ああ、それじゃ皆が待ってるから戻ろうか」

「ウン！」

また京都巡りを行った後、紅き翼の京都の隠れ家に行く事になった。そこで集合写真を取る事にした。以前取った写真を置いておく事にした。

ちなみにアリカとアスナが写ってる写真は、皆が持つ様にした。

その後、紅き翼は解散となった。

しかしラウルは、詠春が思いだした事を告げた時、顔が真っ青になったという。

「そう言えばラウル、お前テオドラ皇女はどうしたんだ？彼女の騎士なのだろう？」

「……………あっ!?!？」

すっかり忘れていた!?

2年前の授勳式以来、ほったらかしにしてたんだっ!?

詠春に礼を言った後、急いで帝国の方に戻った。

するとそこにいたのは、久しぶりの再会に喜ぶ顔と、2年も連絡もなしで会わずにいた事に怒る顔と、ほったらかしにされて忘れられたのかと泣き出す様な顔の、三つの顔を入り交わらせた顔をしていた。

すぐ側には、2年もほったらかしにした主人に呆れるクロとシロだった。

「バカモノー！何で連絡の一つもくれなかったのじゃ!？妾がどれだけ寂しい思いをしたか解っておるのか!？」

「あ…あの…その…え〜つと…」

もう何も言えないでいるラウルだった。

その後、一月程、テオの我儘に付き合わされて、ようやく許してくれた。

でもなテオ、俺にはやらなければならない事がある!だから、ごめん!

そしてラウルは、二匹の猫を連れて旅に出たのだった。

身代わりとして、ルルーシュ（ゼロの格好）に変身した分身体を置いていった。

リヨウメンノスクナノカミをフルボッコ（後書き）

ラウルは酔うと最強に近い感じになったり、エヴァに対してはエロモードになります。

四つの腕は、原作でシリウスと戦ってる時の取っ組み合いを考えて使った。

酔っ払ったラウルは若干アポロっぽくしちゃいました。

次回からはラウルの暗躍シリーズになります。時系列は異なるのでご了承ください。

ラウルの暗躍 リーナ編（前書き）

ラウルの暗躍シリーズ行ってみます。
エヴァが久しぶりに登場します。

ラウルの暗躍 リーナ編

「エヴァサイド」

「……………迷った。」

「どこだここは、完全に道に迷ってしまったな。」

「迷ツタカゴ主人？」

「う、うるさい！とにかくこつちだ！」

「（ソツチノ方ハサツキ通ツタヨウナ？）」

くそう、確かにこう迷っては、さすがに腹が減って来たな。ん？

エヴァは、ある一軒家を見つけた。

「アツ家ガアルナ」

「私が先に見つけたんだぞ！まあいい、とにかく邪魔して貰おうか」

「ズウズウシイナゴ主人」

「やかましい！それよりチャチャゼロ、お前は絶対に喋るなよ！そして動くなよ！」

「分カツタヨゴ主人」

「気と魔力は感じないから普通の奴が住んでるみたいだな。」

「エヴァとチャチャゼロは、その一軒家に到着し、ノックをした。」

「……………誰？」

「女の声？…それも子供の声か。まあいい、一日くらいなら大丈夫だろう。」

「スマンが道に迷ってな、一日だけで良い、一晩泊らせてくれんか？」
「……………」

扉の鍵が外れた音が聞こえた。

私は家の中に入ると、車椅子に座った白髪の少女がいた。

「…入って」
「あ、ああ」

随分と無機質な女だな。

「久しぶりの客人ね、私はリーナ」
「エヴァンジェリンだ、邪魔するぞ」

チャチャゼロを抱えて入りこむ私は聞いてみた。

「リーナ、お前親は？」
「親は正義を名乗る魔法使いに殺されたの」
「なっ！？」

こいつも…あんな連中の被害者だったのか。

「私がこんなだから、親は殺されたようなものだしね」
「えっ？」
「だって私…」

この時リーナは衝撃な事を告発した。

「吸血鬼よ。貴女と同じね」

「何だと!？」

驚いた、私以外にも吸血鬼がいたのか!？
歯も見せてもらった。確かに牙の部分があった。

「何ダ、別ニバレテモ良カッタミタイダナ」

「あら?こんにちわ、お人形さん」

チャチャゼロの事を見ても驚かないとは、だがおかしいぞ!？

「リーナ!お前本当に吸血鬼か!？魔力が全然感じないぞ!」

そう、さつき調べたら気と魔力は一切感じなかった筈だ。なのにリーナは裏の関係者の筈なのに何故感じないんだ!？

「それはこのペンダントのおかげね」

「ペンダント?それか?」

一見何の変哲の無いペンダントにしか見えないが?

「これは魔力と気を押さえて、感じさせない為のマジックアイテムよ」

「そ、そんな便利な物があるのか!？」

だから気も魔力も感じなかったのか。

その後は、少し談笑して奥の部屋で休む事にした。
すると、リーナの部屋から歌が聞こえた。

「『~~~~~』」

何の歌だろう？
思わずリーナの部屋に来た。

「『〜』ん？あらエヴァンジェリン、どうしたの？」

「いや、歌が聞こえてな」

「そうだったの、ごめんなさい」

「いや、その歌は何だ？」

少し気になったからな。

「この歌はね、ある伝説を歌にした物よ」

「伝説？」

「1万2千年前に実際あった出来事の伝説よ。聞いてみる？」

「興味は無いが、一応聞いてみよう」

リーナが話した内容は、1万2千年前に人間と天翅族が争っていたという。

普通魔族とかなら解るが、何故天翅が人間を襲うんだ？

しかもその天翅は、人間の生命力を吸収して生き永らえようとしていたのだという。まるで吸血鬼だな。

しかし、人間側もただ食われる訳にはいかないだろうと抵抗もしていた。

そんなある日、天翅側の英雄アポロニアスが、人間の女戦士セリアンに恋をしたという。

いつしかアポロニアスとセリアンは、敵対してるにも関わらず愛し合う様になったという。

そしてアポロニアスは、天翅側を裏切り、セリアン達人間側に味方した。

結果、天翅族は滅びた。

しかし、皮肉にも人間達は、アポロニアスを殺そうとしていた。こ

れは正義を自称している奴らに似てるな。

当然セリアンはアポロニアスを庇おうとしたが、セリアンは人間達の裏切り者として扱われた。随分と勝手だなそいつらは、散々協力したのに、天翅というだけで、天翅を庇っただけでそうゆう風に扱われるとはな。

殺される直前で、愛し合う二人はある誓いを立てた。

「いつの日か、来世で愛し合おう」

そして二人は殺され、二人の魂は、いつの日か、再び出逢える日が来る事を。

互いが種族を越えてまで愛し合っていたのに、周りがそれを許さずに二人を始末するとはな。そいつらは雅に、今の正義を自称している奴らだな。

しかし前世からの恋人か、もし私がセリアンで、アポロニアスが：ラウルだったら最高だと思っなきつと。

そうだとしたら、やはり私達の出会いは、雅に運命的ではないか！

「ドウシタゴ主人？」

「どうしたの？」

「い、いや、何でもない!？」

「そう?」

い、いかな、ラウルと離れて2年が経つというのに、もう寂しくなってきたな。

「ねえエヴァンジェリン、この伝説を憶えてくれる?」

「?何故だ?」

「私はこの伝説の語り部でもあるの。出来れば貴女にも憶えてほしいの」

「……仕方ないな、ここであつたのも何かの縁だ。憶えといておこ
う」

「ドウシタンダゴ主人？イツモナラ断ルノニ」
「うるさい！」

「それと伝説と一緒に歌も憶えてね」
「分かった」

そして私達は、歌った。創聖の歌を。

歌の内容は、創聖のアクエリオン前期を参照

歌い終わった。

「ありがとう。この歌と伝説、忘れないでね」

リーナがわざわざ紙に書いてくれた。

「ああ、すまん」

私は自分の部屋に戻ろうとした。

「……………」

「ん？何だリーナ？」

「お休みと言ったのよ」

「……………」

どうしたんだリーナの奴、何で…、

「さよなら」

って言ったんだ？

部屋に戻って眠るエヴァンジェリン。

翌日、チャチャゼロが騒いでいた。

「ゴ主人ゴ主人！大変ダ！」

「うるさいな、朝から何だ？」

「ソレヨリ周リヲ見ロ！」

「周りつて…なっ！？」

何気無く周りを見たらエヴァンジェリンは驚愕したのだった。

「何故…何故家が朽ちているのだ！？」

そう昨日泊まつたりリーナの家は確かにちゃんとした家だった。
なのに何故朽ちている！？

「リーナは、リーナは何処だ！？」

「ソレガ、見アタラネエ」

「何だと！？」

私はすぐにリーナのいた部屋に来たが、どれも朽ちている物が多かった。

しかし、

「ウワツ！？」

「ん？どうしたチャチャゼロ？」

「ココ、地下ガアルゼ」

「何！？でかした！」

すぐに地下に下りて行ったら、そこにあったのは、棺桶だった。

「まさか…」

私は信じられない気分で一杯だった。

エヴァは棺桶の蓋を開けてみると、そこにあったものは、原型が解らない朽ちた骸骨が入っていた。その首には、見覚えのある壊れたペンダントがあった。

「まさか…お前が…リーナか？」

「既二死ンデタンダナコイツ」

「そうか、だからお前は私に歌と伝説を憶えさせようとしてたのか」

リーナ：まさかお前は既に死者だったのだな。

それである時「さよなら」と言ったのか。

ん？手に何か握ってる。

エヴァは骸骨の手から手紙が握ってるのを見つけ、中を見た。

『まずはごめんなさいエヴァンジェリン、私本当は既にこの世にはいないの。あの歌や伝説を後世まで憶えてくれる人がくるまで待ってたの。だから、ありがとう。エヴァンジェリンへ、私の初めての友達』

エヴァは手紙をそつと棺桶の中に入れ、蓋を閉じた。

「謝るなら直接言ってくれよリーナ」

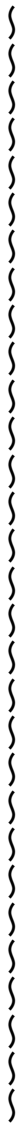
ふっ、初めての友達か、あいつも苦しんでいたのだな。

私が救えて何よりだな。

憶えておくさ、この歌と伝説を。

エヴァとチャチャゼロは旅を続けた。

歌か…少し興味が湧いてきたな。



（リーナサイド）

ふふ、うまくいったわね。

2年ぶりにエヴァにあっただけど、まだ会う訳にはいかないからね。エヴァとは麻帆良で会う予定だから。

それにしても、これ使えるわね。ゲフィオンネットを利用したペンダント。

言ってみれば、機体を動けなくする物を、気と魔力で応用すれば、一般人並に出来るというわけよ。

A・C・E・Rには天才的な頭脳を持つ連中が多いから、楽に制作出来るわね。

それに偶々とはいえ、朽ちている一軒家に、少女の棺桶でこの事を思い付いた自分にちよつと引いちゃった感がある訳だし。

ちなみに一軒家は、メックスブルートのオーバースキル・幻影で朽ちていた物を立派な建物にした。

敵が使うのを何故使えるのかって？初めはそう思ったんだけど、A・C・E・Rに出てるキャラと機体が扱えると知った時は、驚いたわ。

そうゆう訳で、久しぶりに出逢ったエヴァには、別人^{リーナ}として会う事にした。

それにしても、咄嗟に思い付いた事とはいえ、エヴァが歌に興味を持つなんてね。まあいいでしょう。

さて、次はどこ行こうかな。

ラウルの暗躍 リーナ編（後書き）

リーナについては真っ先に思い付いていました。
アクエリオンネタを思いつきり出しちゃいました。
歌について興味を持ったエヴァ。

リーナ（ラウル）の設定です。

<名前>

リーナ・ルーン（女） 11歳

<容姿>

見た目はアクエリオンのリーナ
服装はリーナの私服
車椅子付き

<立場>

エヴァンジェリンと同じく吸血鬼（という設定）
ある一軒家に住んでる所にエヴァンジェリンが迷って行き着いた
話をするにつれ仲良くなる

ある伝説の語り部でもある（嘘設定）

一万二千年に至る伝説をエヴァンジェリンに話す
話して憶えてくれと頼み、消える
実は幽霊だった（という設定）

ラウルの暗躍 千鳥編(前書き)

今回は一気に麻帆良学園まで飛ばします。

ラウルの暗躍 千鳥編

（千雨サイド）

まったく、何なんだよこの学園はよ！

大体なんなんだココは、映画の世界じゃあるまいし、何で大学で口ポットが暴れてるんだよ。

陸上選手並に走り回る小学生とかなんだよ。

なんで忍者が学校に通ってるんだよ。

他にも言い出したらきりがない…

「（あゝもうだめ、頭がおかしくなりそうだ…みんな何事もなかったようにしてるし…私がおかしいのか？）ん？」

ふと気付くと、喚いてる高等部の先輩を見かけた。

「まったくもう何なのよあの運転手は！危うく轢かれそうになったのに悪びれもしないなんて！それに周りの方も変過ぎよ！何が「いつも通りだな」よ！下手すりゃ事故が起きてたつて言うのに騒ぎにすらならないなんて！この学園異常よまったく！」

千雨は驚愕した。

私以外にも異常と感じてる人がいたんだ。

千雨はその高等部の女子に近づいた。

「あの…」

「何？もしかしてうるさかった？」

「あついえ…すみませんが、ちょっと…相談してもよろしいですか？」

「あたしで良かったら構わないけど？」
「ありがとうございます」

その人の名前は千鳥かなめ。

麻帆良学園本校女子高等部一年の先輩だと言っ。

最初に異常と感じたのは、初等部に入ってからだという。私と同じだ。

それから10年間、誰も相談出来ずに過ごして来たという。

私以上に苦しんだ思いをした人がいたなんて思いもなかった。

「そうですか、千鳥先輩もなんですか…」

「そうなのよ。部活で思いつきり体を動かしてでもしなきゃ、ストレス溜まり過ぎて倒れかねないわよ！」

「大変だったんですね先輩も」

「そういう長谷川さんも苦労してきたみたいじゃない？そんな顔をしてるわよ」

「そうですね。でも安心しました、異常と思ってるのは自分だけじゃないって事に」

「そうね。あたし達、気が合いそうじゃない？」

「そうですね」

それから千鳥先輩には、名前でも呼んでもらう事にして貰った。

かなめ先輩とはメールアドレスを交換して、互いに支え合おうって言われた時は、すごく嬉しかったです。

先輩は部活でストレス発散してるみたいだけど、私はネットアイドル・ちうとして閲覧者の賛辞を受けて発散してるから、いくら先輩でも言えないなコレ。

~~~~~

くかなめサイドく

良かった。千雨が元気になってくれて。

千雨の為に初等部から編入して10年ぐらいで、千雨が中等部に入って少したった後に接触して、不安感を削ぐように支えてあげないとね。

しかも、わざわざ千鳥という一般人の所の、子供のいない夫婦だけの暮らしをしてる二人にギアスをかけて、その夫婦の娘って事にしたから、かなり手が込んでいかないと、学園側に怪しまれるからね。メールも交換したし、あの子になにかあつたらメールを出して、少しでも気を良くして行こうと思っています。

さて、本体はうまく行ってるだろうか？

## ラウルの暗躍 千鳥編（後書き）

現実主義なかなめと千雨で気が合う様にしました。

<名前>

千鳥かなめ（女） 16～17歳

<容姿>

見た目はフルメタル・パニックの千鳥かなめ

服装は麻帆良高等部の制服と原作の私服

<立場>

長谷川千雨にとっては良き相談役

かなりの現実主義（原作設定と同じ）

わざわざ千鳥という名字で子供がいない一般人にギアスをかけて娘として育てさせる

そして麻帆良初等部から通わせる

高等部に入って一月ほど経たせて、偶然を装って千雨と話をし、お互いが麻帆良を異常と感じ合わせる事で、千雨の不安感を少しでも和らげる為に行動した

千雨とはメール仲間になった

ラウルの暗躍 ミシエル編（前書き）

子供真名が出ます。

## ラウルの暗躍 ミシエル編

「マナサイド」

ここはとある紛争地帯。

ここでは毎日銃弾が飛び交い、大量の怪我人や死亡者が後を絶たない。

そんな過酷な戦場で私は戦っていたのだけれど、ある男に拾われて、共に傭兵集団のメンバーとして行動してる。

その男の名はミハエル・ブラン。愛称はミシエル。

ミシエルのいる傭兵集団、ミスリルは1〜2年程前から活躍してる傭兵達だ。

「どうしたマナ？行くぞ」

「分かったミシエル」

ミシエルと一緒に皆の所に戻る私達。

でも、私は知っている。ミスリルの皆は、実は同一人物で、ミシエルから作られた存在だという事が。

何故私が分かったかという点、私には魔眼があり、それでミシエル達の事が分かった。

でも私は、敢えて言わない事にした。

今の関係を壊したくなかったからだ。

ミシエルは私に気を遣って大人数にしてくれたんだと思う。

「マナちゃん、俺と一緒にそこらを回らな」子供相手に何やってんのよ！」あたたたっ！？」

「マナ、銃弾の補充は間に合っているか？無ければルカに調達して来るように指示を仰ぐ」

お調子者のクルツ・ウェーバーと、それを叱るメリッサ・マオ、根っからの軍人なソースケ・サガラ（相良宗助）。

「マナ、体力は万全か？体を鍛えるなら付き合っぞ」

体力に自信があるシン・クドー（工藤シン）。

「マナちゃん、弾倉持って来たから、予備に持っておいてね」

パシリに近いルカ・アンジェローニ。

「マナ、戦場で震えない様に気合を入れな！」

私に気合を入れると言うカナリア・ベルシュタイン。

「次のプランについてだが、マナ、お前も来るか？」

厳格だけど、どこか優しいオズマ・リー隊長。

以上がこの隊の様子、ミシエルの分身だけどね。

ミシエルが魔法関係者だというのは分かっていた。

しばらく共に行動していくと、ミシエルとの仮契約を行った。

内容は、フロンティア・アーマードというものらしい。

使用してみると、両肩から小さいミサイルランチャーと、ロケットブースター、それにマシンガンにロングレンジライフルが出て来た。

「へへ、大した装備が出て来たな」

これがあれば空も飛べるし、狙撃も出来る。

そうして私達は、各地を転々と移動し、戦場を渡り歩いた。

だが、任務中に私がドジを踏んで、ミシエルが敵に撃たれた。断崖絶壁だから逃げ場所が無い。でもミシエルは、血反吐を吐きながらも敵を撃ち殺した。

「ハア…ハア…マナ…ごめんな…最後まで…面倒…見切れなくて…ハア…ハア…」

「そんな事無い！ミシエルがいてくれたから、私は…」

「ふっ…将来、美人になるよマナ」  
「なっ!？」

こんな時になに言ってるんだミシエルは!？

「じゃあな…」

そう言っつてミシエルは、絶壁から落ちた。

「ミシエLLLLLLLLLLLLLLLLLLLL!?!？」

崖の下には川が流れてて、ミシエルはその川に落ちた。

その後、皆が待つてるキャンプに行ってみたが、誰も居なかった。

そうだった、全員ミシエルの分身体なんだったな。

こうして私は、また一人になった。

その後、魔法使いによるNGO団体、四音階の組み鈴に所属し、またどこかの紛争地帯を渡り歩いた。

そういえば後から気付いたんだが、通常は仮契約は、主人が死ぬとパクティオカードの従者の名前と全体像以外全部消えるらしい事が分かった。

なのにこのカードは、模様とか文字とかが残っていた。  
アーティファクトは問題無く使えた。

つまり、ミシエルはまだ生きているという事が分かった。

そうと分かったらミシエル、必ずまた逢おうな。

～ミシエルサイド～

紛争地帯っていったらミスリルって思って、ウルズチームとスカル小隊を作ってみただけど、何気に最強の傭兵集団とか言われる始末。

途中マナを見かけたから、銃関係で恋愛があり、殉職をするといったらミシエルなので、ミシエルになって近づき、誘った。

その後は多少ギクシャクはあったけれど、何とか懐いてくれた。仮契約をせがまれた時は驚いたが、別に良いだろうと思ってやったら、マナのアーティファクトが、まさかのアーマード・クラン（それと、原作ミシエルが使うスナイパーライフ付き）の装備が出て来た時はもっと驚いた。

まあマナにピッタリな所がまた……。  
そんでしばらく一緒に行動してたが、不意を突かれて撃たれちゃった。

でも、これは好機と思った。すぐそこには崖があるし、そう思って撃ってきた奴を撃ち殺して、マナに別れの言葉を残して落ちた。  
同時にキャンプにいた残りのメンバーも消えるよう指示を送った。  
さてと、次はどこ行こうかな？



## ラウルの暗躍 ミシエル編（後書き）

克蘭がスーパーパックを装備してアーマード・克蘭なら、マナのアーティファクトならさしずめ、アーマード・マナですね。

マナにフラグを立てている事に気付いていないミシエル（ラウル）でした。

<名前>

ミハエル・ブラン（男） 17歳

愛称はミシエル

<容姿>

見た目はマクロスFのミハエル・ブラン

服装は軍服と戦闘服

<立場>

傭兵集団ミスリル所属の狙撃兵で階級は少尉

ちなみにその集団は、隊長をオズマ、隊長補佐をカナリア、他はルカ、工藤シン、メリッサ、クルツ、宗介（全員ラウルの分身体）がいる

戦場にいたマナを保護（尚、マナは魔眼で全員が同一人物だと気付いてる）

魔法関係者でマナと契約

ある戦場でマナを庇って戦死（という設定）

マナのアーティファクト、フロンティア・アーマード

マクロスFのアーマード・克蘭の様な装備+バルキリー（ミシエル機）のスナイパーライフルを使用出来る

ラウルの暗躍 不動編(前書き)

ようやくネギ君登場。

ちなみに、襲撃事件からタカミチに会うまでの間です。

## ラウルの暗躍 不動編

（ネギサイド）

僕はネギ・スプリングフィールド。

今日はいつもの様に魔法の特訓をしていた。

でも今日は、知らないおじさんに声をかけられた。

「少年よ、魔法の鍛錬か？」

「そうだよ。おじさんは？」

「少年よ、相手の名前を聞く時は、自分から名乗るのが紳士の礼儀と言えるモノだぞ」

「あつすみません！？僕はネギ・スプリングフィールドです」

「私は不動、不動GENだ」

「不動…？」

なんか妙に存在感のある人だな。

それから不動さんと話をして、挨拶や女性との接し方などの礼儀などを教えてくれました。

そして夕方頃になると。

「ネギ少年よ、また会おう」

すると不動さんは、突然消えてしまいました。

何だったんだらう？

数日後、魔法の射手サキタの練習マキカをしていたら、不動さんが来た。

「少年よ、鍛錬は順調か？」

「少し難しくして…」

「特訓だ」  
「へっ？」

すると不動さんは、魔法の射手のやり方を教えて貰い、一発だけだけど、無詠唱で出せる様にしてくれました。

「不動さん、ありがとうございました！」

「少年の頑張りの成果だ、私はそれを手助けしたに過ぎん」  
「不動さんはどうして僕に魔法を教えてくれるのですか？」

ネギは、前から思ってた事を言った。

「あんな危なっかしい方法では身に着く物も身に着かん。だから教えた」

「うっ……」

「ネギ少年よ、先はまだまだ遠い、最強の頂きはまだ遠い彼方にある。踏み越えて行け、ネギ少年！」

「はっ、はい！？」

そう言っただけでまた消えた不動さん。

不思議な人だけど、とても頼りになる人だな、不動さんて。

数カ月後、父さんの知り合いのタカミチという人が、僕に訪ねて来た。

~~~~~

〈タカミチサイド〉

僕はナギさんの息子のネギ君に会いに来た。

タカミチは、ウェールズの近くの湖が見えるちょっと小高い丘にい

るネギとアーニヤに近づいた。

「やあ、君がネギ君だね」

「…どなたですか？」

「僕と友達になつてくれないか？」

その後、しばらく話をして、ナギさん達の事で興味を持ちながら聞いていた。

そして一通り話をして戻ろうとしたところ、ネギ君が気になる事を言つて来た。

「タカミチや不動さんみたいな良い人に出逢えてよかったです！」

「（ん？不動さん？）ネギ君、その不動さんとは誰の事かな？」

「僕に挨拶の仕方や女性の接し方や、魔法の練習に付き合つてくれた人の事ですよ」

「そ、そうかい…」

不動：ネギ君に魔法を教えてる人物…一体何者なのだろうか？

タカミチは、帰宅時に誰かに尾けられている気配を感じた。

「誰だ！」

すると、茂みの中から、片目に傷の付いた男が現れた。

「失礼した、私は不動GENだ」

「！？不動！」

ネギ君が言っていた人物はこの男か！

しかし、一体何が目的なのだろうか？

「こちらが名乗ったのだから、次はそちらが名乗るのが礼儀ではないのか？」

「！？ああ…失礼した。僕は高畑・T・タカミチです。貴方は一体何者ですか？」

こちらから探りを入れてみた。
すると、

「創生の時を生きる者だ」

「……はっ？」

ふざけているのか？良く解らない回答をしてきたものだな。

「そして、ネギ少年に常識を与えているだけだ」

「常識を…ですか？」

どういった常識なのだろうか？

「ネギ少年の周辺の環境は、あの少年の為にはならない」

「！？それは…どういう意味ですか！」

「あの少年には、教育の中で足りない事がある」

「足りない事？」

ネギ君はちゃんと素直な子で…、

「それは叱る事だ。ネギ少年の周りにいる大人たちはそれを行っていない！」

「！？」

確かに、やってはいけない、分かってほしいという意味での叱ると

いう教育方法があるが、

「何故あの少年の教育方法にそれが無いか、それは…英雄サウザン
ドマスターの息子だから誰もが少年を特別扱いをしてしまうからだ
！」

「!？」

「そうやって特別扱いをし続けてれば、自分のしている事が全て正
しいと勘違いをする傲慢な性格をした少年になるのは目に見えてい
る！かつてのメガロメセンブリアの元老院の様に」

「!？貴方は一体…」

この男は一体何者なんだ!？

しかし、この男が言ってる事は間違っていない気がするな。

「自分で考える事をせず、周りの言う事だけ素直に聞いていれば、
何も考えずに済む。そういった考えを持つ可能性もある！」

「……………」

「このままでは、あの少年の為にはならない。だからこそ、私が影
ながらあの少年を導かねばならない」

「しかし…彼は素直で、頭も良い訳で、別に貴方が導かなくても…」

彼の言ってる事について僕は意見を述べたら、

「では何故あの少年は、魔法だけを勉強しているのだ？」

「えっ？」

ネギ君がナギさんを追いかける為に魔法を覚えようとするのは当り
前の事じゃ？

「魔法だけでは、魔法の知らない者達に出逢ったら、対処仕様が無

「いは明白」
「！」

確かに、魔法は秘匿されているモノ、魔法しか知らない者が魔法を知らない者にどう接すればいいか、迷うかもしれん。
タカミチは、不動の言ってる事が少し理解した。

「魔法は秘匿とされている魔法使いが、一般常識も分からずに魔法だけで解決出来ると考えがでてもおかしくは無い」

この男が言ってる事は、本当に正しいのかもしれない。

「秘匿のひの字も知らない少年には、少しずつでも常識を知る為に、こうして影ながら教えていると言う事だ」
「……………」

正論だな。もう何も言えなくなってしまった。

「これが、私の目的だが？」
「つまり貴方は、ネギ君の今後の事を気にして師事しているのか？」
「そういう事だ」

この男はまるで、教師のような男だな。
底の知れない男だが、

「すみませんが不動さん……」
「何だ？」
「僕と…手合わせしてくれませんか？」

僕は知りたい！彼の実力が！

「良かるう」

僕はポケットに手を入れ、不動さんが構えを取った。

そして僕は不動さんに向けて居合い拳をかました瞬間、不動が消えていたのだった。

そして気付いた、いつの間にか僕の背後にいた事を。

「隙だらけだな」

「いつの間に…」

タカミチは距離を取った。

こうなったら、あれをやるしかない！

「右手に気を…左手に魔力を…合成！」

僕は咸卦かんかほう法を使い、自身の能力を上げた。

「ほう、咸卦法か。少しばかり…手を出してみるか」

咸卦法を知っている！？ならば…、

「豪殺居合い拳…！」

先程出した居合い拳とは比べ物にならないほどの強力な一撃が不動を襲うが、

「ハアアアアッ！」

タカミチの豪殺居合い拳を、気を纏った手で吹き飛ばしたのだった。

「なっ、そんな!?!」

僕の最大の一撃が、不動さんの拳一つで吹き飛ばされるなんて…はっ、不動さんは!?!

忽然と姿を消した不動。

そして、タカミチのすぐ目の前に現れた後、

「てんくうけん天空拳…!」

ジャンプし、回転し始めた。

「しんりゅうてんらい昇竜天雷!?!」

「ぐあっ!?!」

なんて重い一撃!?!

タカミチは不動に蹴り飛ばされた。

予想以上だ…ナギさん達みたいないな強い人がまだいたなんて、

「参りました…!」

すると不動さんは、

「こちらこそ、我が弟子がいた紅き翼のメンバーの者と戦えて何よりだった」

「!?!」

えっ、我が弟子がいた紅き翼って!?!この人の弟子がメンバーの中にいたなんて、そういえばラカンさんが気になる事を言っていたな。ラウルさんの武器を取り出す能力、「昔、胡散臭いオッサンから習

つた」と言っていた様な。

まさか不動さんで、ラウルさんの師匠！？

「まさかとは思いますが、貴方はラウル・クルセイドの師匠ですか？」

「いかにもそうだが？」

なるほど、ラウルさんの師匠さんだったのか。通りで強い訳だ。

話を聞くと、彼は異世界出身らしい、異世界と言っても魔法世界の事ではないらしい。

まったく別の世界から来たのだという。

彼は不老らしく、一万二千年前から生きているとか？

彼の能力はA・C・Eというものらしい。

彼のいた世界の英雄達の能力を扱えるものらしい。

ナギさんの事を聞いてみたら知らないと言われた。

彼を麻帆良の教師にスカウトしようと思ひ、訪ねたら断られた。

不動さんはネギ君の事を影ながら見ていくようだ。

さて、僕もそろそろ戻ろうかな。

～不動サイド～

実に不思議だ。

私があれだけ元老院を叩きのめしたのに、まだ懲りていない輩がいたとはな。

案の定ナギとアリカがいなかったな。これがテンプレというモノか。ネギ少年がこれから先、碌な大人にならない様に原作が始まる前には一般常識を与えておかないと。

そして、まさかここでタカミチが現れるとはな。

ネギ少年についての事を聞かれ、私の目的を話したら、半信半疑に
なっていた。

そして勝負をする事になった。

居合い拳に関しては、ロクの体感時間停止のギアスとオーバースキ
ルで避けた後、タカミチの後ろに回った。

ん？何故、体感時間停止のギアスを使えるのかだと？私もまさか使
えるとは思っていなかったが、恐らく…コードギアスR2ルートの
プロローグ部分に少しだけ出ていた事から扱えるのだと思う。この
能力は、A・C・E・Rに出てる能力全てなのだからな。

その後咸卦法を使って来たので、少し本気でかかろうと思い、豪殺
居合い拳を撃ち出した後は、T・LINKナツクルとラムダ・ドラ
イバ（打撃）で吹き飛ばした後、レポートでタカミチの前に移動
し、空中回転蹴りをかました。

そしてタカミチには、今の私をラウルの師匠という事にしておいた。
タカミチは私を、麻帆良の教師にしようと勧誘して来たから断った。
確かに今の私は教師に近い存在だが…。

後の事は分身体に任せて、次に行くとしよう。

ラウルの暗躍 不動編（後書き）

教師と言ったら不動と考えてしまいました。

<名前>

不動GEN（男）？歳

<容姿>

見た目はアクエリオンの不動GEN
服装は私服

<立場>

ラウルの師匠ポジション

ネギの常識と行動の意味を教える人生の教師的立場

タカミチには怪しまれるが、さりげなくラウルの師匠的な事を言っ
て消える

今後はネギが壁にぶつかった時に意味深な助言をするサポート的立
場（設定）

ラウルの暗躍 ジェフリー編(前書き)

原作で役に立つ為の伏線です。
かなり短いです。

ラウルの暗躍 ジェフリー編

「ジェフリーサイド」

我々は今、旧オステイアの地下で秘密裏にある物を開発中だった。

「ボス、こっちは方は順調よ」

話しかけて来たのはボビー・マルゴ大尉だ。

「艦長、こちらも順調です」

こちらはモニカ・ラング曹長だ。

「艦長、こっちのエンジン部は少し時間がかかるそうです」

「艦長、駆動系部分の調整がまだ終わりません」

「手の空いている者はそちらに回せ、15年後までには完成させなければならぬからな！」

指示を受けたのはミーナ・ローシャン伍長とラム・ホア軍曹だ。

そう、原作が始まる前までには完成させなければならぬのである。

「順調か皆？」

「これはラウル殿」

「久しぶりジェフリー」

今来られたのは、我らのオリジナルであるラウル・クルセイド殿だ。もう解ったかも知れんが、我々はラウル殿の分身体だ。

3年前、ラウル殿の命により、ある物を開発に専念していた。

「それにしても、足部分が出来てきてんじゃないのか？」

「まだ調整が済んでいないのでな。調整が終わるまで、あと半年はかかるが…」

「うーん…まあ、わざわざ旧世界の（それも世界中の）軍備をちよるまかしているからな…」

今後の対策として、魔法世界の軍備はあてにならないからな。

「もう少し人員を増やしたくか？」

「出来ればありがたいんだが、それだとラウル殿の負担にならないか？」

「別にいいさ、出来るだけ早くアレを完成させたいからな」

「…分かりました」

ラウル殿がもう千人程技術者を増やして下さいました。

「それじゃあ頼むぜ、この…」

ラウル殿が、開発中のモノを見ながら呟いた。

「戦艦マクロスの、バトル・フロンティアとクォーターをな！」

そう言って出ていくラウル殿。

「ねえラウル、後であたしと一緒に飲まない？」

「…遠慮しておく」

…ボビー…空気を呼んでくれ。

ラウルの暗躍 ジェフリー編（後書き）

原作の為にバトル・フロンティアとクォーターを開発中なラウル達でした。

ボビー達の紹介は省きました。

<名前>

ジェフリー・ワイルダー（男）67歳？（正確な年齢は解らない）

<容姿>

見た目はマクロスFのジェフリー

服装は艦長服

<立場>

ある船の艦長

魔法世界である船を開発中

魔法世界に来たネギ達のサポートをする存在

ラウルの暗躍 シェリル編（前書き）

銀河の妖精登場。

マナージャーのあの人や、ボディガードに相応しい中国人とも出
ます。

てる様な…歌ってる時は心身ともにシエリルになりきるところか、シエリルそのものになって来てる様な、そんな感覚だわ。そろそろ終わりそうね。

シエリルは唄い終わった。

ふう〜、唄いきったわ。ん？

「ウオオオオオツ！シエリルウウウツ！！」

「オスティアの妖精、最高なのじゃあああああつ！！」

遠くで聞き覚えのある声が聞こえた様な…

シエリルはふと、特等席の方を見た。

「（あつ！？）」

そこにいたのは、ウホツ的な顔をして叫ぶジャックと、その隣で騒いでるテオの姿だった。すぐ後ろにいたゼロは俯いていた。

ゼロを通して見たところ、ジャックとテオは、デビューしたシエリルの大ファンだという。

しかも（勝手に新設された）ファンクラブの会員No.2がテオ、No.3がジャックとなっている（No.1は誰か知らないが、2番目と3番目はテオが権力乱用で手に入れたらしい）。

なんかあの二人…ランカちゃんの歌を聞いたゼントラーディみたいね…。

何故オスティアの妖精と呼ばれているのは、最初はオスティアで慰問の時に歌った事により、人々の絶望が希望になったのを切っ掛けにデビューした事から伝わってるわ。

ちなみにマネージャーはグレイスよ。これも私の分身よ。スケジュールについてはグレイスに任せてあるわ。

それにアイドルになると、必ずと言っていいほどの身边被害がある訳だから、ボディガードを雇ったわ。これも分身体だけどね。

そのボディガードの名前は黎^{リー・シンク}星刻よ。ちなみに星刻の設定は、昔は盗賊だったけど、シエリルの歌で自身の心を救われて改心して以来、シエリルのボディガードとなった。という事にしといたわ。そんな訳で、魔法世界と旧世界でアイドルをし、両世界のトップアイドルとして君臨した。

「皆ありがとう。愛してるー！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「

しばらく熱狂が続いた。

ラウルの暗躍 シェリル編（後書き）

シェリルたちの設定は次に出しておきます。

今回シェリルが歌ったのは射手座 午後九時 D o n · t
b e l
a t e でした。

オリ主設定3（前書き）

前回の後書きの所に置いておくには長過ぎると思ってここに置きました。

オリ主設定3

<名前>

シエリル・ノーム（女） 15〜20歳

<容姿>

見た目はマクロスFのシエリル・ノーム
普段はシエリルの私服と舞台衣装

<呼び名>

慰問員

オスティアの妖精

<立場>

千の体を映す水鏡で変身した姿、ラウルが側に居る時は分裂
後に分裂して魔法世界に残った

原作が始まる5年程前に、魔法世界で慰問員として活動

最初はオスティアで歌った時に、人々の絶望が希望になったのを切
っ掛けにデビューした

歌っている内に魔法世界のアイドルになった
麻帆良でもファンがたくさんいる

<名前>

グレイス・オコナー（女） 20〜25歳

<容姿>

見た目はマクロスFのグレイス・オコナー
服装はグレイスの服

<呼び名>

慰問員

シエリルのマネージャー

<立場>

千の体を映す水鏡で変身した姿、シエリル（ラウル）が側に居る時は分裂

原作が始まる5年程前に、魔法世界で慰問員として活動
段々アイドル化していくシエリルをサポートする存在
後に分裂して魔法世界に残った

<名前>

リー・シンク
黎星刻（男） 22〜27歳

<容姿>

見た目はコードギアスR2の黎星刻リー・シンク
服装は星刻の私服と戦闘服

<呼び名>

慰問員

シエリルのボディガード

<立場>

千の体を映す水鏡で変身した姿、シエリル（ラウル）が側に居る時は分裂

原作が始まる5年程前に、魔法世界で慰問員として活動
昔は賊だったが、シエリルの歌で自身の心を救われて以来、シエリルのボディガードとなった

段々アイドル化していくシエリルを守る存在
後に分裂して魔法世界に残った

オリ主設定3（後書き）

そろそろ本編に繋げようと思います。

次回は詠春の所の、このちゃんとせっちゃんに会いに行きます。

幼馴染として〜そして麻帆良学園へ（前書き）

色々合ったが、そろそろ原作に向けたいと思います。

幼馴染として〜そして麻帆良学園へ

「ラウルサイド」

久しぶりに京都に来たな。…前にも言った様な？
今回はなんと、俺の娘設定として、ランカ・リーを分身体にしました（もちろんランカの額にはコードがあります）。
ちなみに今は詠春のいる関西呪術協会の総本山の所へ続く千本鳥居を歩いていた。

「まだ着かないにや？」

「いいかげん、同じ景色で飽きてきたにや」

「も〜、クロもシロも、もう少しなんだから愚痴らないでね」

「なんか…微妙な気分になるにや」

「ホントにや」

好き放題言いやがって…まあいい、

「とにかく、クロとシロは着いたら喋らない事。ランカは俺の娘として振る舞う様に、良いね？」

「分かったにや！」

「うん、お父さん！」

さてと、そんなこんなで辿り着きました総本山。
門を潜ると、巫女服の女性が質問して来た。

「お待ち下さい。このような場所になにようか？」

「丁度良かった。アポ無しで悪いけど、詠春に会いに来ただけだ」

「何故ですか？」

険しい顔つきで質問を続けてきた巫女さん。

「そうだな。紅き翼のラウル・クルセイドが会いに来たと行っ
てくれないか？」

「紅き翼の！？すぐに伝えてまいります！」

紅き翼って言ったらすぐに信じたよ。

5分くらい待ったら、先程の巫女さんが来た。

「お待たせしました。こちらです」

そう言われ、広間の部屋に連れて来られた。

クロシロは足を念入りに拭かされて喋りそうになっていた。
すると奥から袴姿の詠春が来た。

「お久しぶりですねラウル」

「詠春こそ久しぶりだな。ってか、お前老けたか？」

「相変わらずですね、そうゆう所は……」

しばらく談笑した後、詠春はランカに気付いた様だ。

「そういえばラウル、そちらの少女は？」

「ああ、俺の娘のランカだ」

「娘！？」

「ランカ、挨拶しなさい」

「はい…えっと、ランカ・クルセイドです…初めまして」

そう言って俺の後ろに隠れるランカ。

「こらランカ、悪いな詠春、この子まだ人見知りがちで…」

「いや、構いませんよ。それにしても驚きましたね、まさかラウルが子供を作ったなんて」

「色々あってね…」

「まあ、深くは聞かない事にしましょう。ラウルはこれからどうしますか？」

「迷惑じゃ無ければ、しばらくここにいてもいいか？」

「別に構いませんよ。それに、ランカ君には木乃香の遊び相手になつてくれれば…」

「木乃香？」

「私の娘です」

「まあしばらく世話になるしな、ランカ、しばらくこの子と遊んでいていいぞ」

「う…うん…」

そんな感じで話を進めた。

「木乃香、来なさい」

「はあ〜い」

奥の部屋から女の子が来た。奥にもう一人隠れていた。この子が詠春の娘、近衛木乃香と、奥にいるのが多分、桜咲刹那だろつ。

「なあにお父様？」

「こんにちは木乃香ちゃん」

「ほえ？お父様、このお姉さん誰？」

この子にまで…、

「お父さんの友達だよ。ちなみに男性だから」
「ラウル・クルセイド、ラウルって呼んでくれ。ちなみに男だから俺」

？と浮かべる木乃香ちゃん。

すると木乃香ちゃんは、後ろにいたランカに気が付いたようだ。

「ほらランカ、木乃香ちゃんに挨拶して」

「は…はい、えっと…ランカです…初めまして」

「初めまして、うちは木乃香って言っくんよ。このちゃんって呼んでな」

「う…うん、こ…このちゃん…」

「ランカちゃんの事、ランちゃんって呼んでもええか？」

「えっ…うん」

微笑ましいなこの光景は。

「あっそや、うちな、もう一人友達おるんよ」

「えっ？」

「せつちゃん、おいでな」

すると、奥からもう一人の子が来た。

「あの、初めまして、桜咲刹那です」

「初めまして…えっと、ランカ・クルセイドです…」

「ランちゃん、この子がせつちゃんや」

「こ、このちゃん!？」

けっこうアクティブな子だな木乃香って。

「ランちゃん、一緒に遊ぼうな」

そう言っつてランカと刹那を引っ張って行った木乃香。
こうしてランカ（俺）は、木乃香と刹那の二人と一緒に遊ぶ事とな
った。

「なあ詠春……」

「はい？」

「あの刹那つて子、半分人間か？」

「！？分かりますか……」

「なんとなくな……」

「あの子は烏族のハーフでして、白い翼が原因で禁忌として扱われ
た子なんです。そんなあの子を拾って、木乃香の友達にしてあげた
んです」

「まあ、あーゆう子は友達が必要だよな」

すると詠春が真剣な顔で俺を見てきた。

「ラウル、実は頼みたい事があつて……」

「だいたい予想は着く、木乃香ちゃんの事だろ？」

「！？分かりますか……」

「正直言つて、あの子の魔力は半端ないな。ナギを越えてんじやな
いのかあの魔力は？」

「……貴方に隠し事は出来ませんね」

木乃香の事で詠春が話して来た。

「あの子には……魔法のことは黙っていてあげたい」

「……正直……無理だろそれ……」

ただでさえあの子は英雄詠春の血を引いてて、魔力はナギ以上だし。

「…それでもです。何時かは踏み込んでしまおうでしょう。それでも…その日までは平和で幸せな生活を送らせてあげたい！」

「…詠春」

気持ちは解らなくもないけどね。

「まあ、娘を持つちまってそういう考えになっちまった事は解らなくもない。俺もランカにそうゆう道には進めたくないからな」

「ラウル…」

「まあでも、組織としては最低の長でも、父親としては最高の父親だな」

「…ええ」

そんな感じで詠春と話をしていた。

~~~~~

〜ランカサイド〜

お友達になったこのちゃんとせつちゃんと一緒に川に来てます。

でもこっつて、このちゃんが溺れて、せつちゃんが責任を感じるよ  
うになるんじゃない？

「せつちゃん〜ん！ランちゃん〜ん！はよう来て〜な〜！」

「待ってよこのちゃん〜ん！」

「ま、待って…」

とりあえず、溺れない様にしなくちゃ！

「じっちゃんです」

あっ、もう川のすぐ近くに!?

「このちゃん、危ないよ」

「大丈夫やつせ…あつ」

このちゃんが川に落ちちゃった!?

「助けて〜!?!」

「こ、このちゃん!?!」

「どっしょ、このちゃんが!?!」

しょうがない、行きます!

「このちゃん!」

「えっ!?!」

あたしが飛び込もうとしたら、せつちゃんが先に飛び込んだ。じゃった。

「このちゃん…あつぷ…あつぷ…」

せつちゃんも溺れてるよ!?

とにかく、オリジナルにこの事を知らせないと、そして助けなきゃ!

「このちゃん!せつちゃん!」

ランカも飛び込んだ。

二人の下に泳ぎ着くが、岸まで少し距離があった。

「（やっぱり、届かない…）」

すると、

「ランカ！」

誰かが助けに来てくれた。

~~~~~

「ラウルサイド」

「おいおい、結局原作通りじゃないか!？」

「って呆けてる場合じゃなかった!早く助けに行かないと！」

「詠春、子供たちが川で溺れているぞ！」

「何!？」

「俺は直ぐに行く!お前は後から来い！」

すぐにレポートをして移動し、ランカ達が溺れてる川に着いた。

「ランカ！」

俺はランカと木乃香と刹那を救出した。

「大丈夫か皆？」

「うえ…ぐす…」

「このちゃん…」

「うん…」

うん、このままじゃ、刹那は歪んだ責任感に悩み続けちゃうな。どちらにせよ、こうなってしまっただけで、どうしようもないな。その日以来、刹那は木乃香とランカに距離を取ってしまっていた。一ヶ月後、そろそろ出て行こうかな。とりあえず、違和感無い様にしとかないとな。

「詠春、テオから連絡があつてな。帝国の方に戻らなくちゃいけないから、明日には帰るわ」

「急ですね。分かりました。ですが、木乃香にはちゃんと伝えておいて下さいね」

「分かってるって」

とりあえず、木乃香に事情を話した。

「ランちゃん…ホントに行くん？」

「うん…ごめんねこのちゃん」

「また会おうなランちゃん」

「うん！絶対また会おうねこのちゃん」

そんな感じで見守った後、刹那の方にも会いに行った。

「どうしたんだい刹那ちゃん？」

「!?!…その…」

やっぱりこの間の事があつたからな。

とりあえずランカが直接言わないといけないなこれは。

「せつちゃん」

「!?!ら、ランちゃ…ランカさん、また…会い…」

「せつちゃんどうしたの？」

「えっ!?!」

「せつちゃん、この間から、話してくれなくなったから…心配になつて…」

「その…ごめんなさいランカさん！」

そう言つて逃げる刹那ちゃん。

こりゃ思つてたより、傷が深いだろうな。

俺に出来そうな事はなさそうだな。

ともあれ、詠春たちと別れた後、また暗躍をし始めた。

~~~~~

〜テオドラサイド〜

最近の妾は不機嫌じゃ。

ラウルが勝手に出ていってしまったてからは退屈な毎日じゃ（分身体は置いていったが）。

ルルーシュ（分身体の名前、仮面を付けてる時はゼロと呼んでる）が偶に何かを作ってる様な感じじゃったから、気になって様子を見たら、人形が10体程並んでおつた。

「何じゃこの人形達は？」

「テオカ」

ルルーシュは人形達の紹介をした。

ルルーシュが言うには、シーズン隊と呼ばれる身の回りの世話や、使用人がやりそうな事をする人形達の事らしい。

「ではさっそく起動してみよう」

ルルーシュが、白髪の人形を起動させた。

~~~~~  
ルルーシュサイド

仕事を片付けるには、一人だけじゃさすがに身が持たんからな。だから世話をする人形ロボットを開発した。

技術レベルはロイドとラクシャータとセシル並だから短期間で製造が可能だった。

モデルはもう決めてある。A・C・E・Rでは敵キャラだったシーズンだ。

まずシーズンの春夏秋冬のシリアルナンバー1達を製造、その後、冬以外の三種のシリアルナンバー2、3を製造させれば、シーズンの出来上がりだな（期間約二か月程）。

テオも来たので、さっそくウィンターから起動させよう。彼がシーズンのリーダーだからな。

「ではさっそく起動してみよう」

ルルーシュは、ウィンター・ワンを起動させた。

ゆっくりと目を開けるウィンター。

そして、

「初めまして、我が創造主マイ・マスター」

「成功だな！」

「おお、動いたぞ！」

一応姿が変わっても主だと分かる様にプログラムしておいた。

ウィンターはキョトンとしていた。

「マスター？」

「ああ、すまん。お前の名は解るか？」

「シーズン隊のウィンター・シリーズのシリアルナンバー1、ウィンター・ワンです」

「よし、大丈夫そうだな」

「マスター、僕の任務は如何様に？」

「そうだな、私とテオの執事となってくれ。それと、お前をこのシーズン隊のリーダーになつて貰う」

「了解した、マスター」

よし、後は残りのを、

ルルーシュは、次にオータム・ワンを起動させた。

「初めまして、我が創造主^{マイマスター}」

「自分の名が解るか？」

「シーズン隊のオータム・シリーズのシリアルナンバー1、オータム・ワンです」

「よし、お前には我が秘書になつてもらおう」

「かしこまりました」

するとテオが、

「なんか…納得いかんのう、人形なのに無駄にスタイルが良いのう

…」

ブックサ言っていたが、無視した。

続いて、サマー・ワンを起動させた。

「お前が主か？」
「自分の名が解るか？」
「決まってる！シーズン隊のサマー・シリーズのシリアルナンバー1、サマー・ワンだ！」
「そうか…」

随分と態度がデカイな。原作でもこんな感じだったか？

「それで、俺の役職は？」
「ああ、お前にはテオのボディガードに任命する」
「了k「ちよつと待つんじゃ!？」」
「どうしたテオ？」
「妾をこんな筋肉と一緒にいるというのか!？」
「サマーは戦闘に特化した機種だ。成果は期待できる。それに、ラウルがいない以上、私がいつまでも側にいるとは限らないからな」
「う〜…」

渋々だが納得してくれたようだ。
最後にスプリング・ワンを起動させてと。

「お早うマスター！」
「自分の名が解るか？」
「解ってるよ！シーズン隊のスプリング・シリーズのシリアルナンバー1、スプリング・ワンだよ！」
「元気のある娘じゃな」
「あんたよりあるつもりだよ」
「何じゃと!？」
「仲が良いな。スプリングにはテオの付き人になってもらう」
「「ええーっ!？」」

「お待たせしました。僕について来て下さい」
「分かった」

タカミチについて行って、学園長室に来た。

「ふおっふおっふおっ、君がウィンター君かね？」
「……………」

初めて見る学園長に戸惑うウィンター。
本当にぬらりひょんみたいな頭をしているね。

「どうしたのじゃ黙りこんで？」

「どうやら僕の目は壊れている様だ。人間の頭があんなに長い訳がないからね」

「いえ、多分正常ですよ。実際本当に長いですし」

「ふおっ！？高畑君まで……」

学園長をからかった後、ウィンターが本題に入った。

「学園長、本日はマスターから手紙を預かっています」

「ラウル君からかの？」

「こちらです」

ウィンターの懐から出した手紙を学園長に渡した。
当然、自作自演の手紙の内容だ。

「確かに渡しました」

「ふむ」

学園長は、手紙に付いてる再生ボタンを押した。

『まずは初めまして学園長先生。俺は千の武器使い、サウザンド・ウエポンズ等と呼ばれてるラウル・クルセイドだ。用件だけ言っておく、近々俺の娘のランカを麻帆良に編入させるからそのつもりで、年明け頃にランカとオータム・フォーをそっちに向かわせるからな』

ラウルの手紙を黙って見ていたタカミチは、ウィンターに叫んだ。

「ラウルさんに娘がいたんですか!？」

「ああ、ランカ・クルセイド嬢だ。ちなみにオータム・フォーとは、お嬢の付き人で、僕と同じマスターのミニステル・ドールだよ」

「ふむ、そのランカ君を編入させたいと？」

「その為に、ここへ来ました」

「ふむ、分かったぞ。ランカ君の年齢を聞かせてもよろしいかの？」

「12歳だ」

「では中等部に編入させるよう手配しておくぞ」

「ありがとうございます。ああそうそう、こちらの方はマスターからの注意事項がありますので」

ウィンターは、もう一通の手紙を出した。

「「注意事項?」」

タカミチと学園長は首を傾げた。

そして、渡された手紙を見ると、

『追伸、ランカは魔法の事を知らないから、出来れば知らないまま
奥ルサイド・テストロイヤ
でいてくれ。もしバラしたら、広範囲殲滅者の名の由来を教える
からな』

内容を聞いた二人は恐怖した。
どうせバラすだろうから無駄な脅しだけどね。
さて帰るか。

「これで僕の用事は済みました。僕は失礼するよ」

「う、うむ…気を付けての…」

「ラウルさんにあつたら…よろしく伝えておいてくれませんか？」

「了解した。それじゃあ帰るね」

種はまいた。さてさてどうなるかな。

~~~~~

くタカミチサイドく

あのウィンターというラウルさんの人形が来た時は驚いたよ。

いや、もっと驚いたのは、ラウルさんに娘がいた事だ。

ラウルさんの娘のランカ君か…どうゆう子供なんだろうな。

すると学園長が、

「そっじゃった！」

「どうしたんですか学園長!？」

「思い出したんじゃない!? 以前婿殿から、ラウル君の娘がいたと」

「何故今頃になって思い出すんですか…」

目を細めて学園長を見たタカミチだった。

「そっといえばタカミチ君!？」

「何ですか学園長? (無理矢理話題を変えましたね)」

「エヴァンジェリン君の事は一言も言っていなかったの」

「あつ、そういえば…」

「解呪の事とかは一切無かったの、まさかナギの奴…伝え忘れたんじゃないかの…」

「あれから12年は経ちますから…多分そうなんじゃないでしょうか…」

エヴァンジェリンが彼の事をどう思っているかは知らないけど、ランカ君の事を知ったらどうなるんだろうか…。

~~~~~

（オータムサイド）

年も明けて新学期になる頃になりました。時が経つのは早いですね。私はオータム・フォー、本来いないはずのオータムシリーズの4番目。そう、マスターであるラウルの変身した姿でもあります。今私はランカ様を連れて学園に来ました。

「オータムさん、これからですね」

「そうですね、ランカ様」

「にゃ〜（周りに普通の人がいるから喋れないにゃ）…」

「にゃ〜（それはもうしょうがないにゃ）…」

もちろんランカ様も私です。それにクロとシロも一緒です。

事前に連絡を入れて、駅前で高畑さんと待ち合わせをする事になった。

あつ、ようやく来ましたか。

「すみません、お待たせしました」

ランカは前に出て自己紹介した。

「初めまして、あたし…ランカ・クルサイドです！よろしくお願
い
します！」

「初めまして、オータム・フォーです」

「初めまして、この学園の広域指導員をしている高畑です。よろ
し
くね」

「はっ、はい、こちらこそ！」

元気良く返事をするランカ。

そして学園長室へと向かった。

~~~~~

〜タカミチサイド〜

今日はラウルさんの娘のランカ君が来る日だったので、駅で待ち合  
わせをする事になったので向かい、それらしい子を探して…いた。  
あの猫達がいい目印だな。

「すみません、お待たせしました」

すると女の子が前に出てきた。

「初めまして、あたし…ランカ・クルサイドです！よろしくお願  
い  
します！」

「初めまして、オータム・フォーです」

「初めまして、この学園の広域指導員をしている高畑です。よろ  
し  
くね」

「はっ、はい、こちらこそ！」

元気のある子だな。額の紋章は継承されているみたいだね…。

その後は学園長室に行き、軽く学園長と話をし、ランカ君は今年の4月から中等部へ編入する事となった。そういえば住まいは何処になるんだろう？オータムさんがいるから女子寮には入れずらいし…。

その時、扉が勢いよく開いた。

「じじい！いるか？」

「ふおっ、エヴァンジェリン君！？今は来客中じゃぞ！？」

エヴァンジェリンが来てしまった！？ランカ君がラウルさんの娘と分かったら、どうなるんだ！？

~~~~~

～エヴァサイド～

何となく懐かしい気配を辿ってじじいの部屋まで来て入ったら、じじいの前に見知らぬ女と人形に近い女がいるな。

あの猫は確か、クロとシロじゃなかったか？だとしたらこいつらは、ラウルの関係者か？

「初めまして、あたし、ランカ・クルセイドです。よろしくお願ひします」

「えっ！？」

今なんと言ったこの小娘は！？…クルセイド…ラウルと同じ名字…ま、まさか…。

エヴァはとりあえず名前を言った。

「エヴァンジェリンだ…エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ…」

「エヴァンジェリンちゃんです、ランカ様、中等部の制服を着ていますので、恐らく同年齢か年上かと…」えっ!?!」

この小娘は私をちゃん付けで呼ぼうとしてたな。

連れの女がフォローしてくれたが、私は5度目の中等部をやらなくてはいけないからな。

私がここで縛られているのに、ラウルは別の女と一緒にになった揚句、子供まで…やはり私は…捨てられたのか…。

「マクダウエル様ですね？」

「ん？」

連れの女が私に何か言っ て来た。

「ラウル様から、住まいはマクダウエルって人の所に住まわせてくれと頼まれていますので」

「…ええっ!?!」「…」

エヴァと学園長とタカミチは驚いていた。

この女、いきなり何を!?!

「オータムさん、私が住む場所がこの子の所って?」

「以前ウィンター兄さんが麻帆良を訪れた時に調べて、ラウル様に確認を取らせた所、マクダウエル様の住まいがある事に気付き、そこに住ませようとお考えなのです」

「ウィンターにですか!?!」

タカミチが酷く驚いているようだ。

このオータムとかいう女は、ラウルの娘を家に置いておく気か？

「しかしのう、エヴァンジェリン君の家に住ませるには、ちと面倒な事になりかねんが…」

「それはどの様な面倒ですか？」

「あつ、いや、それはじやの……」

じじいが口ずさむのも無理はない。英雄と言われる者の娘が、悪の魔法使いである私と住ませようなんて、ここの連中は黙ってはいないだろう。

だがその時、

「あたしはいいですよ」

「…えっ!?!」

「あたしはエヴァンジェリンさんの所で良いですよ」

「し、しかしじや…」

すると、あのオータムとかいう女は一瞬でじじいの背後に回った。いつ瞬動したんだ？

「ふおっ!?!」

「ランカ様が自分でお決めになった事を、貴方は否定するんですか？」

オータムは低い声で言い、学園長の背後から殺気を出した。

「ふおっ、分かったから殺気を止めてくれんかの!?!」

「貴方の口から了承するまでやめません」

「分かった分かった！？ランカ君をエヴァンジェリン君の住まわせる事を許可しよう！」

「学園長……」

随分と強引だな。

それから許可を貰い、私の家にラウルの娘が居候をする事になった。

幼馴染として〜そして麻帆良学園へ（後書き）

この時はまだ茶々丸はいません。4月から動きます。

今回は再開したラウルとエヴァ、そしてHな展開に!?

<名前>

ルルーシュ・ランペルージ（男） 17歳

<容姿>

顔はコードギアスのルルーシュ

服装はゼロの衣装

<立場>

ラウルの替わりのテオの騎士

身の周りを任せるシーズン隊を作った

オリ主設定4（前書き）

学園生活ではこのキャラになります。

オリ主設定 4

<名前>

ランカ・クルセイド（女） 13〜15歳

<容姿>

見た目はマクロスFのランカ・リー

普段はランカの私服とエヴァとお揃いのゴスロリ服、学校内では麻帆良学園の制服、舞台ではランカの衣装服

正体を知っているのは、エヴァ・チャチャゼロ・茶々丸・超（未来人だから）・ハカセ（超経由で）

<呼び名>

麻帆良学園の生徒

麻帆良のアイドル

<立場>

千の体を映す水鏡で変身した姿

笑顔が可愛く、明るく元気っ娘設定

感情や仕草で両サイドの髪が動く様になってる（本人無自覚）
ラウルの娘という事になっている

シエリルとは幼馴染で姉の様な存在という設定

歌が上手で、歌ったら直ぐに麻帆良のアイドルになり、ファンクラブも出来るほどの大人気

<仮契約>

エヴァとの仮契約

戦場の歌姫

見た目はただのマイクのアーティファクト

マクロス7の歌エネルギーが備わる
主な効果はA・C・E・R・に出てるシリーズの歌を歌うと、あらゆる能力を上昇させる

<名前>

オータム・フォー（女）16歳？

<容姿>

容姿はA・C・E・Rのオータム・フォー

服装はオータム・フォーの服と茶々丸とお揃いのメイド服

<立場>

主にランカ（ラウル）の身の回りの世話をするメイド的存在（コードギアスの咲世子っぽく）であり、従者でもあり、戦闘も出来る

<武器>

ヴァリアブルアックス（A・C・E・Rのアルファートの大剣、銃にもなる）

相棒設定2（前書き）

シーズン隊の紹介です。

相棒設定2

<名前>

ウィンター・ワン(男) 18歳?

<容姿>

容姿はA・C・E・R・のウィンター・ワン
服装はウィンター・ワンの服

<立場>

ゼロとテオドラの執事として製造
シーズンシリーズの長的立場。
近衛学園長に会いに行った時はラウルが変身していた。

<名前>

オータム・ワン(女) 18歳?

<容姿>

容姿はA・C・E・R・のオータム・ワン
服装はオータム・ワンの服

<立場>

ゼロに仕える秘書として製造

<エヴァの別荘にいる者達>

オータム・ツィの容姿は、オータム・ワンにオレンジ色の短髪をした感じで、メイド長としてランカの所に行った。

オータム・スリーの容姿は、オータム・フォーに茶髪をした感じで、

同じくメイドとしてランカの所に行った。

<名前>

サマー・ワン(男) 24歳?

<容姿>

容姿はA・C・E・Rのサマー・ワン
服装はサマー・ワンの服+サングラス

<立場>

テオドラのボディガードとして製造

<エヴァの別荘にいる者達>

サマー・ツーとサマー・スリーの容姿は、サマー・ワンと変わらない。

二人は主に、前期はラウルやエヴァやチャチャゼロの相手、後期はネギの鍛錬の相手を務めている。

<名前>

スプリング・ワン(女) 12歳?

<容姿>

容姿はA・C・E・Rのスプリング・ワン
服装はスプリング・ワンの服

<立場>

テオドラの付き人として製造

<エウアの別荘にいる者達>

スプリング・ツリーの容姿は、髪型がポニーテールのカールヘアをした感じ。

スプリング・スリーの容姿は、髪型がツインテールのカールヘアをした感じ。

二人は、オータム2と3と同じくメイドとしてランカの所に行った。

十八年ぶりの再会（前書き）

ある意味R - 18モノです。

エヴァにとっては18年振りだろうけど、ラウルはリーナになっていたので16年振りです。

十八年ぶりの再会

「エヴァサイド」

結局家に入れてしまったな。

家の中をキョロキョロしてるラウルの娘と、その後ろで黙って突っ立ってる人形みたいな女、二人とも今日から家に住む同居人だ。

「わあ、お人形さんがいっぱいあるね」

まったく、ラウルの娘だから特別に入れてやったのだから、私の命令には聞いてもらおうがな。

エヴァは物騒な事を考えていた。

「マクダウエル様」

「ん？」

人形女が私に用がある様だ。

「出来れば二人きりで話せる場所はありませんか？誰にも気付かれない所に」

「どうやら何か裏がありそうだな。」

「地下に別荘がある。そこで話をしよう」

「ありがとねエヴァさん」

「なっ！？」

何故ラウルの娘が返事をする！？こいつは確か魔法の事は知らない

筈！？

「荷物はここに置いていいですか？」

「あつ、ああ…」

私たちは地下にある別荘の方へと移動した。

「さてと、怪しまれない様にしないとね」

ランカは仮契約カードを取り出した。

あれはパクティオーカード！？この娘、誰かと仮契約しているのか！？まさかラウルとじゃ…

「アデアット」

すると、ランカの身体が液状になり、そこから二つ程別れた。別れた二つは形を変えると、その姿は、ランカとエヴァにそっくりの姿だった。

「なっ！？」

「アベアット」

ランカが元に戻り、偽ランカと偽エヴァに指示を出した。

「あたし達が戻るまで上で待っていてね」

「はあ〜い」

「フン、仕方が無いな」

そう言って出ていく偽ランカと偽エヴァ。

「何なんだアレは！？意味が解らんぞ！」

「あれはあたしの分身体だよ。さっ行こ」

「ちよつ、おい！？」

「行つてらっしゃいませランカ様、マクダウエル様」

オータムは退場し、エヴァとランカは別荘の方へ入つて行つた。

何なんだこいつは！？ジジイの奴、こいつは魔法は知らないと言つておつたのに、バリバリ使っているではないか！まあいい、こいつから洗いざらい聞き出してやる！

「うわー広ーい！それに高ーい！」

別荘の中を見て驚いてるな。

「へえ、リゾートなんだあ」

「いいかげんに本当の事を話せ！貴様は一体何者だ！」

「そうだね。取り合えず出入口で話すより、落ち着けるとここで話しましよ」

そう言つて奥のくつろぎ場所まで進んだ。

テーブルの上で向かい合わせに座っていた。

「さあ話せ！貴様は本当にラウルの娘なのか？何の為に私に近づいた？」

「そうだね、敢えて言つなら……」

ランカが悩む素振りしていた。

「久しぶりにエヴァさんに会いに来た。かな？」

「久しぶり？戯けた事を言うな！私は貴様など知らんぞ」

「ふふっ、これを見ても？アデアット」

またこいつは何か変身する気か？
形を変えていったランカ。

ん、あれ？何処かで見た様な姿に…

「アベアット」

そして元に戻った元ランカ。

「ッ！！??？」

私は思わず絶句した。

目の前にいる人物が探し求めていた人物だという事に。

そう、こいつは…、

「久しぶりだな、エヴァ」

「ら、ら、ら…」

そして私は、無我夢中で目の前にいる人物に向けて抱き付いた。

「ラウルーーーーー！！」

ラウル…私が探し続けた…私が初めて愛した男が…ラウルが帰って
来た！

~~~~~

（ラウルサイド）



久しぶりにエヴァに再開した俺（リーナの姿で一度会ったから感動薄いけど）と、俺に抱き付きながら泣いてるエヴァ。

「ラウル…ラウル…ラウル…」

俺の名前を連呼して言い続けるエヴァ。

よっぽど寂しい思いをしたんだな。原作を知ってるとはいえ、こんなにも寂しく泣いてる子がいるのに、ナギの奴、早く会いに来りやいいのに。

ラウルは未だにエヴァがナギに惚れてると思い込んでいた。

「てか、エヴァはいつまで泣いてるんだ？」

「だってえ…」

…エヴァってこんなキャラだったけ？

「ラウル…寂しかったんだぞ…グスツ…お前が私に掛けた呪いを解呪してくれるって約束だったのに…グスツ…全然来てくれなかったんだから…グスツ…捨てられたのかと…グスツ…思ってたんだから…」

泣きながら愚痴を言ってくるエヴァ。

軽くキャラが崩壊してるぞ！？でもなんか可愛いなエヴァ…ちょっと待て！？俺が解呪するなんて聞いて無いぞ！？

「エヴァ、お前に掛けた呪いって？」

「グスツ…えっ？サウザンド・マスターから聞いてるだろ？奴が私に登校地獄の呪いを掛けて、この麻帆良から出られなくなったんだ。サウザンド・マスターは3年したらラウルに解かせるよ言っとくからって…」

ナギの奴…いい加減だな…。

「言っておくけどエヴァ、そんな話全然知らないが？」

「ええっ!？」

「おおかたナギの奴、俺に伝える事を忘れてんじゃないのか？」

「ふ…ふふ……殺す…殺してやる…次に会った時は肉塊も残さず消してやる！」

うわ…ヤンデレ(?)状態だな…。

「お…い…エヴァ…戻って来…い…」

「はっ、それはそうとラウル、早くこの忌々しい呪いを解いてくれないか？」

「ああ、ちよつと待ってて…」

俺はもう一つのパクティオカード、ナギとの仮契約の時に出来た方だ。

「アデアット」

アーティファクト、カーズブレイカーを取り出した。

見た目はただのサバイバルナイフで、あらゆる呪いを解呪する事が出来るナイフだ。

これならエヴァの呪いを解く事が出来るな。元々エヴァの呪いは解かせるつもりだったし。

「何だそのナイフは？」

「カーズブレイカー。あらゆる呪いを解く事が出来るアーティファクトだ」

「随分ととんでもないレア物を引き当てたな。まっ、今の私には好

都合だな」

「じゃあエヴァ、行くぞ！」

「来い！」

俺は呪いの対象者であるエヴァをカーズブレイカーで切った。

「!？」

でも安心してね。あくまでも切ったのは呪いであって人体に影響は無いから。

すると、エヴァの魔力が急激に上昇していった。

「ふははははは！やったぞ、ついにあの忌々しき呪いから解放された！こんなにすがすがしい気分は久しぶりだ！」

「良かったなエヴァ」

「ああっ、やはりお前とは私のパートナーに相応しい男だな！」

「それってどうゆう意味だ？」

あれ？ナギはどうなるんだ？

「500年も一緒にいておきながら、何故これをしなかったのか悔み続けて来たが、今なら結べる！」

「な、何を？」

「決まってる！パクティオーだ！私と仮契約するのだ！当然私が主だがな！」

どうやらエヴァは、ラウルと仮契約を結ぼうとしていた。

「っておいおいおい！？何故にパクティオー!？」

「それでその後はこんな所から出てって、それから二人だけの家庭

を築いて、出来れば子供はラウルのなら欲しいけど、その時は三ヶ  
夕程やり続けなければいだけだし、それからそれから……」  
「聞いてないし……」

エヴァはかなり危ない感じに進んでいた。

「という訳でさっそく……」

するとエヴァは、ラウルに飛び掛かった。

「何がという訳なんだー!?!」

エヴァはラウルに抱き付いた瞬間、何かに気付いた様だ。

「ん?」

「……? エヴァ?」

突然エヴァは、ラウルの体にの匂いを嗅ぎ始めた。  
すると、

「女二人の匂いがする……」

「えっ!?!」

エヴァは低い声で言った。

何で解るの!?! エヴァの嗅覚は犬以上なのか!?!

ちなみに二人とは、ナギを除けばテオとマナの二人の事だろう。

「……どうゆう事だラウル……」

「あの……その……え〜っと……」

エヴァはさらに冷たい声で言った。

その後、観念して、パクティオーカードを見せた。

そのカードには、液状になってるラウルと、ナイフを持ったラウルと、アーマード・マナ状態のマナの絵が載ってるカードだった。

「ふ〜ん…サウザンド・マスターのはともかく、私以外の女と仮契約したのか…」

なんだよこの状況…何で土下座の態勢なんだ俺？浮気が発覚した亭主を問い詰める妻みたいな状況は？

「これはこの小娘として、こっちのは何処の誰としたんだ？」

「へ…ヘラス帝国皇女のテオとしました…」

あまりの恐さに正直に話しました。

「ふ〜ん…そう…」

正直ここから逃げ出したいです。

すると、エヴァから鳴き声が聞こえた。

「私の…私の何がいけないんだ！やっぱり体か？体なのか！どうなんだラウル！」

「どわっ！？」

泣きながら猛抗議をするエヴァ。

「わ、悪かった。悪かったから落ち着けエヴァ！？」

「これが落ち着いていられるかコラー…！！！」

「むぐっ！！？」

突然俺の顔に近づくとエヴァが、口付けしてきた。

「ん、ちゅ…ピチュ…くちゅ、ん…ちゅ…ピチャ…ちゅく」  
「ムグツ、ん…ちゅ、ピチャ…ん…んぶ…つちゅ…」

時間は数秒か数分か数十分か分からないほど長時間キスをされました。

「どうだ！これで私がお前の一番だ！二度と他の女に目移りしない様に私一色に染め上げてやるううツ！！」

「言ってる事が良く解らん…って何服を脱ぎ始めてんだよ！？」

「言っただろ！私しか見えない様に染め上げると！」

「何をする気だ…てあれ！？いつの間に上着が！？」

脱げている！？ジャックの脱がし術並だぞ！？

「さあ、私と一緒に…合体だ！」

「合体！？」

すると、いつの間にか用意してあった鉄線をがんじがらめで俺を縛り、寝室へと連れて行かれた。

エヴァは俺をベッドの所に放り、エヴァは俺に馬乗りしてきた。

「ちょっと待てエヴァ！？お前、何でこんな！？」

「うるさい！私を一人ぼっちにして、こんな所に閉じ込められて、揚句お前は他に女を作って…」

「誤解を招く様な事を言っな！？」

「私がどれだけ寂しい思いをしたか、この18年分、思いつきり解消させてもらっからな！」

「え…エヴァ、エヴァさん、エヴァ様！？ず、ズボンを下ろさないだ「前だっただら？今更どうとでもあるまい」だからってこんな！？」

忘れてたが、前にも押し倒されてヤツちまった事があるとはいえ、このままじゃ…。

「さあラウル、10回や20回で終わると思ったたら大間違いだぞ」

エヴァはラウルの下着を脱ぎ始めた。

「ってか多過ぎだろ！？どんだけやる気だよ！？」

「私の気が済むまでだ！」

「ちよつ待t…あー——————！つ！  
！！？！？」

ここから先は、アクエリオン風に行きます。

「気持ち良い〜」

「ああ、もう夢みたい〜」

「ああ、良いかも〜」

「ああ、もつと良い〜」

「ああ、蕩とろけそう〜」

「ああ、効く〜」

こんな感じが十日程（別荘内の時間）続いた。

その後、ようやく解放されたラウルは、ミイラと化していた。そしてエヴァは鏡みたいに肌がつやつやになっっていた。

それからしばらくして、仮契約が行われた。当然エヴァが主。アーティファクトは戦場の歌姫が出てきた。

「見たただのマイクに見えるな。まあ、ランカとしては丁度良いアーティストファクトになりそうだな。」

「歌に関係してくる物かこれは？」

「そうみたいだな。歌ってみるかなこれで」

「ふむ、シェリルの様な素晴らしい歌手みたいに歌えるのかお前は？」

「ぶっ！？」

「ん？どうしたラウル？」

「どうしたじゃないよ！？何でエヴァがシェリル（自分）に興味あるんだよ！？」

「何でシェリルなんだ？」

「何故なら私は……」

エヴァがゴソゴソと何かを取り出した。

「シェリルのファンだからな！」

「ブフォアッ！？」

「おいおいおい……ここにいたよ……会員番号No.1の人がよ！？エヴァが取り出したのは、シェリルファンクラブの会員カードだった。」

「わざわざジジイに頼んで注文したんだ。CDだってあるぞ、別荘の中には無いけど」

「……………」

「おいおいおい……まさか俺のファン第一号がエヴァだなんて……世



間は狭いなあ。

その後、シエリルがラウルであるを知った時のエヴァは驚愕していた。

ファンだった人が、実は想い人本人だという事に運命的な何かを感じているエヴァであった。

そして別荘内で、腕試しにエヴァとチャチャゼロ（かなり久しぶり）と一緒に鍛錬をしたり、シエリルになって生ライブをしたり（観客はエヴァとチャチャゼロだけ）で、あつと言う間に、4月に入ろうとしていた。

## 十八年ぶりの再会（後書き）

若干エヴァがヤンデレっぽくなっちゃいました。  
そしてエロっぽくなったエヴァでした。

今回は中学生生活を堪能します。

そして学園生活へ（前書き）

中等部に編入したランカの生活編です。

## そして学園生活へ

（ランカサイド）

「皆さん初めまして、ランカ・クルセイドです。よろしくお願いますー！」

あたしは中等部1-Aのクラスに編入しました。出席番号は31番です（Ranka・Crusadeだから）。

席はエヴァさん（エヴァンジェリンさんと呼ぶと、他人行儀だからヤダって言って、エヴァさんと呼ぶ事にした）の隣です。エヴァさんは若干嬉しそうな顔をしてた。

それにしても、1-Aってよく見ると、見知った子達がいっぱいです。

出席番号順に言うと、神楽坂明日菜さん（アスナさんの事ね）、絡繰茶々丸さん（4月1日に超さんと葉加瀬さんから紹介して貰った）、このちゃんとせつちゃん（幼馴染として）、龍宮真名さん（マナさんの事ね）、超鈴音さん（茶々丸さんの紹介の時に知り合った）、葉加瀬聡美さん（茶々丸さんの紹介の時に知り合った）、長谷川千雨さん（千鳥さん経由でしってるから）、そしてエヴァさんです。改めてこのクラスの偏り具合が解ります（というより、やっぱり脅したにも拘らず、あたしを巻き込む気があったみたいね学園長先生は）。

HRが終わって休み時間になると、このちゃんとアス…いや、ここは初対面という事で名字にしないと…神楽坂さんが近づいてきた。

「なあ、ひょっとして…ランちゃん？」

「！？もしかして、このちゃん！」

「やっぱりランちゃんや！」

「？木乃香の知り合い？」

「そやで、幼馴染のランちゃんや」

「ランカです。よろしく願います」

「あたし神楽坂明日菜。木乃香とはルームメイトよ」

やっぱり記憶は消えてるみたいね神楽坂さん。

「ランちゃん久しぶりやな」

「もしかして、せつちゃんも来てるの？」

「う…うん…さっきな、声かけたんやけど…返事してくれなかったんや…」

やっぱりあの時の事をまだ気にしてるのかな？

「…後であたしも声をかけとくね」

「ランちゃんお願いね」

「？」

若干おいてけぼりになってる神楽坂さん。

せつちゃんの方に行って挨拶をした。

「せつちゃん、あたしランカだよ。憶えてる？」

「ら、ランセイ…ランカさん、お久しぶりです」

「どうしたのせつちゃん？昔みたいにランちゃんて呼んでくれないの？」

「い、いえ…さすがにそれは…」

「このちゃんも心配してたよ？せつちゃんに避けられてるみたいでっつて」

「…私は…お嬢さまの側には…」

「あたしは、あの時の事は気にしてないよ。だから、このちゃんに



実年齢なんだからな。

中等部に入ったら、あのランカという女に出会った。

魔眼で見ると、以前私と仮契約したミシエルと同じだった。

やっと見つけたぞミシエル！

後で確認を取る必要があるな。

「真名、どうした？」

「刹那か、いや、なんでもない」

そういえばさつき刹那と話してたな。幼馴染とも言っていたしな。

それらもまとめて聞いてみるか。

~~~~~

くエヴァサイドく

何なんだラウルの奴：他の女とべったりとお喋りしたりで、何か腹立つではないか！

帰ったら30回はして貰うぞ！

それにしても、ラウルが作ってくれたこの腕輪、本当に私の魔力を抑えているな。

以前出逢ったリーナと同じ効果のマジックアイテムを作った時は驚いた。

ラウルにペンダントは作れるのかと言ったら、細か過ぎて作れないって言ってたから、効果が同じの別のマジックアイテムという事だろう。

私のは羽の飾りをしている腕輪（効果は以前まで封じられてた魔力程度にしか感じないほど）。

ラウルのはチャーカー（一般人から魔法使いの素質がある程度）。そして何より、ラウルは私の夢を叶えてくれたマジックアイテムを

迂闊だったな。バレちゃったんじゃしょうがないな。

「そうだね…久しぶりですねマナさん」

「…出来れば、さん付けは止めてくれ。ミシエル、貴女は一体何者なんだ？魔眼で見ても、特定の人物を当てられる訳じゃないからな」

そうなんだ。

「この姿じゃ呼び捨ては出来ないんです。そうですね…ちなみに私の事は裏じゃどういう風に伝わってますか？」

「英雄サウザンド・ウェポンズの娘と聞いている」

「そういう風に流したからそうなるよね」

「！？まさか…貴方は！？」

「そう、英雄サウザンド・ウェポンズ、ラウル・クルセイド本人だよ」

「なんと！？」

やっぱり驚いてるな。

とりあえず事情を話した。

「そういう事か。しかし何故少女の姿に？」

「何故この姿かといえは、来年の3学期といえは分かるかな？」

「なるほど、サウザンド・マスターの子供の為か？」

「そういう事です。その子に一番近くで見届けるには生徒が一番だからね」

「貴方の目的は分かった」

「出来ればこの事は内緒に出来ないかな？」

「見返りは？」

「…この散弾砲ボクサーで手を打ってくれませんか？」

「いいだろう」

うづ…真名さん、ちゃっかりする様になっちゃったね…。
ちなみにせっちゃん的事も聞きに来たので、幼馴染として一月ほど一緒にいた事を話した。

何とか黙っててくれた真名さんと別れて、エヴァさんのログハウス（以降は家にする）に帰りました。
そこにはメイド服を着た茶々丸さんとオータムさんがいた。

「お帰りなさいませランカ様」

「お帰りなさいランカさん」

「ただいま茶々丸さん、オータムさん」

「やっと帰ったか」

「ただいまエヴァさん」

居間でだらけてたエヴァが起き上がってきた。

「それじゃあ別荘に行くぞ。いつもの用意をしておけ」

「はは…またですか…はいはい、アデアット」

ランカは分身体を作り出し、偽ランカ、偽エヴァ、偽茶々丸を出した後、別荘の方へ赴いた（オータムは留守番）。

別荘に着くと同時に俺も元に戻って、奥に行こうとしたら、エヴァがまたマイクロ・ゼントラーシステムに入って行った。

このマイクロ・ゼントラーシステムって何かって？簡単に言えばマクロスFに出て来る装置で、ゼントラーデイの人達がマイクロローン化する為に必要な装置を改良した物だ。

言ってみれば、マイクロローン（子供）で、ゼントラーデイ（大人）な感じにした。

エヴァは最初渋っていたが、試して施した後、装置から出て来たエヴァは、なんと驚いた事に、暴力的な肉体を持ったエヴァになって

いた。

これを分かりやすく言うなら、遣伝子が不器用なクラン・クランが、マイクローン時は見た目も中身も子供だったが、ゼントラ化すると見た目も中身も大人なクランの様なナイスバディになって出てきたのだった。

破壊力あり過ぎるだろ！？クラン設定なのかエヴァは！？前に幻術で見た姿よりもすごい体つきじゃないか！？

あれで攻められた時は、一日中ヤっても何故か衰えない感じだった…何故エロい方にパワーアップするんだエヴァは…。

他に作った物は、以前リーナの時に使ったゲフィオンネットの改良した物を、腕輪（モデルはシルヴィアとシリウスの腕輪と同じ）としてエヴァに送り、俺の分はチョーカー（リーナに似せた）を着けた。

学園長達には、オータムからラウルにエヴァの事で相談して、呪いを解く事は出来なくても、和らげる事なら、一週間ほどなら学園結界を通れるという事を話しておいた。おかげで誰も気付かずに過ごせるな。

今俺は魔法の鍛錬をしている。

今更必要かだつて？これからはランカとして生活する訳だから、A・C・E・（R・）には頼らない様にしようと考えたからだ。

対価として血と精を搾り取られた。不老不死でも腹上死しかねないなコレ…。

エヴァと鍛錬とエッチな事を除けば、部活動では図書館探検部（木乃香ちゃんに誘われて）と茶道部（エヴァに無理やり入られた）の二つ。

偶に外で歌ったところ、クラスの子に聞かれたが好評価だった。

修学旅行の時期が来たら、エヴァってば、朝4時に叩き起こされて、始発で行こう等と言ってくるものだから寝不足のまま行った。

呪いの所為で旅行という旅行は行って無かったのな、今回初めて行けるのだから興奮しちゃうのも無理は無いな。

まっ、そんな感じで時間は過ぎていくのだった。

~~~~~

〈超サイド〉

茶々丸のデータを通して見たところ、やはりランカサンはサウザンド・ウエポンズに間違いないネ。

今後の計画の為に、彼を味方に付けたいが、今は傍観する方が身の為ネ。

それにしても…エヴァンジェリンサンとの絡みはエロいネ…。

そして学園生活へ（後書き）

紅き翼時代からの馴染みがいるアスナちゃん、幼馴染のこのちゃん  
とせつちゃん、傭兵時代に行動してたマナさん等が関わってきます。  
今回はランカが1年の学園祭でアイドルになる。

麻帆良のアイドル誕生！（前書き）

ランカ「エヴァさん、期末テストは順調ですか？」

エヴァ「やる気がしないな」

ランカ「勉強しないと、夜の相手はしないよ」

エヴァ「この方程式と文法が解らないんだが、教えてくれるか！」

ランカ「分かりやすいねエヴァさん……」

茶々丸「記録中……記録中……」

オータム「記録は私が入りますから、茶々丸さんは試験勉強を手伝いに行ってください」

茶々丸「分かりました」

ランカ「（ううう）…ハッキリ言って低レベルだよ。ルルーシュとかコーデイナーとか無駄に頭が良い人達が多いから、どれも軽く百点とれそうだよ」

作者「こんな所を書いてしまって申し訳ありませんでした」



翌日からは、たくさんの人達にサインや握手をねだられる事が多くなりました。

クラスの皆からも賛辞してくれた。

「ちょっと、やるじゃないランカちゃん！」

「歌上手やったな〜ランちゃん！」

「歌、良かったですよ」

「あの…良い歌でしたよ…」

図書館探検部の早乙女ハルナさんとこのちゃんと綾瀬夕映さんと宮崎のどかさんから褒めてもらいました。クラスの皆も賛辞してくれた。

「ありがとう皆」

あたしもお礼を言った。

「後でまた聞かせてくれ」

エヴァさんが歌のアンコールを頼まれました。

その後、麻帆良祭を楽しんだ後、マスコミがあたしに殺到して来たので、何事だろうと思ったら、報道部の朝倉和美さんからインタビューされました。

「え〜、麻帆良のアイドルのランカちゃんは、麻帆良学園を卒業したらアイドルデビューするってマジですか？」

「ええっ!?!」

何でそんな話になってるの!?!



「えっと…どこからそんな話が？」

「巷じゃそうゆう噂になってるからね」

「そう…なんだ…」

知らない所で大きくなっちゃってるね。

その後も、また歌ってねとせがまれた事もあったけど、あたしも満更でもない感じだった。

夏休みの時期になって、女子寮の所に行つて、1-A限定のプライベートライブをしに行った。

場所は何故かお風呂場に来ています。クラス全員が入れる十分な広さはお風呂場しかなかったからだそうです。

ちなみに今は全員水着になってます。

『皆、抱きしめて、世界の、果てまで！』

歌う前のこのセリフは、もう定着してしまいました。

あれ？今気付いたけど、エヴァさんと茶々丸さんがいますね？二人とも、出かける時には家にいたよね？

まあ…そういうのは野暮にして、歌を披露します。

皆聞き惚れてる感じだね。

歌い終わって礼をすると、皆は拍手してきた。

～シエリルサイド～

『ワタシの歌を聴けえー！』

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

」

ランカちゃんの方はクラスの皆とただけど、こっちは魔法世界のほとんどから私の歌を聞きに来ているわ。

また来てるわね、あの二人。

あの二人は誰かって？

ジャックとテオドラよ。

そりゃデビューから聞きに来てるのは嬉しいけど…。

ジャックとテオドラは、シエリルを見て両手をバタバタ振ってアピールしてた。

あんな風にもつともなく騒いでると逆にウザいわね。いくらVIP席だからって…もうほつといて歌に集中してつと。

相変わらずアピールし続ける二人。

そろそろね。

歌い終わった後、控室に戻ったシエリルは、

「はあ、雇い主と仲間が私の歌を聞きに来るって…どうなんだろう…」

項垂れていた。

麻帆良のアイドル誕生！（後書き）

こうやって偶に皆の所で歌を披露しに行ってるランカでした。  
シエリルでも歌いました。

なんか歌ってはっかだな今回。

星間飛行〜マクロスF

Tomorrow〜フルメタル・パニック

What about my star?〜マクロスF

『皆〜、抱きしめて〜、銀河の、果てまで〜！』を『皆〜、抱きしめて〜、世界の、果てまで〜！』にしちゃいました。

今回は超がランカを勧誘しに動きます。

## 超の勧誘（前書き）

とうとう超が動きます。

前々から決めてたランカの今後の行動を出します。

## 超の勧誘

「ランカサイド」

「いらつしゃいネ、ランカサン」

今あたしは、地下研究所（原作で高畑先生やちび刹那さんが囚われてた所）にきています。

何故ここにいいのかというと、話は数日前に戻ります。

数日前

放課後、あたしは授業を終えて、エヴァさんと茶々丸さんのいる茶道部に来て、茶道の稽古をしていた。

稽古が終ると、茶々丸さんが訪ねてきた。

「ランカさん、次の休日に超さんからここに来るよう頼まれました」

茶々丸さんから紙きれを貰いました。

その紙きれは、地図だった。

そして休日、エヴァさんにどこいくのかと聞かれて、適当に誤魔化して出かけました。

念の為、途中で分身体を出して別れた。ちなみに今はキラ・ヤマトになっていきます。

地図の通り進むと、田中さん（ロボット）らしき人が立ち塞がっていた。

僕はキラ・ヤマトからランカに戻り、田中さんに訪ねた。

「あの…超さんに招待されました…超さんは何処ですか？」

すると田中さんは、

『此方デス』

と紳士風に案内された。

そして冒頭に戻る。

「いらつしゃいネ、ランカサン」

「こんにちはランカさん」

「こんにちは葉加瀬さん、あの…それで超さん、あたしに何の用ですか？」

超さんと葉加瀬さん、二人がいるって事は、計画についてかな？

「その前にちゃんと紹介するねランカサン、いや…千の武器サウザンウエポンス使いサ  
ン」

「!？」

バレてる!？

「あの超さん、彼女が本当に…あのサウザンド・ウエポンスなんですか？」

「間違い無いネ、ハカセ」

断言してる所を見ると、やっぱり未来人だからバレているのかな？

「えつと…元に戻った方が良いですか？」

「それは肯定と受け取った方が良いかね？後戻らなくて良いネ。さてと、単刀直入が良いかね？じっくり話した方が良いかね？」

「そうですね…あまり回りくどく話すのも面倒なので…単刀直入の方で」

「分かったネ。ランカサン、私の仲間になるネ！」

やっぱり勧誘ですね。

どうしようかな…ハッキリ言ってあたしのポジションはエヴァさんと同じく傍観していたかったのだけど…。

あれ？あたしの今の設定って、英雄の娘だよな？って事は、ネギ先生たちに巻き込まれる可能性が高いから、もしこのまま行くと、改変された未来にまで飛ばされる可能性もある訳だし…だからといって超さん協力って言っても、正直どっちもしたい訳だし…ん？そうだ！

「超さん、あたしの条件を飲んでくれれば、協力します」

「条件とは？」

あたしから出す条件、それは…。

「ランカとしては協力しない代わりに、あたしが持つてる技術を提供します。ちなみに、貴女の計画について教えてくれればですけどね」

一応こっちはA・C・E・Rの技術力を持つてるからね。それに、今言った言葉に気付けるなら…。

「別に良いネ」

「って良いんですか超さん!？」

あの様子だと気付いたかな。

普通ならぶざけてる言い分だと思うけど、「ランカとしては」を強

調したから…。

「いいハカセ、ランカサンは「ランカとして」は協力はしないと云ったネ。という事は、ランカサンじゃなければ協力するって事ネ」  
「ええっ!？」

さすが超さん、麻帆良の最強頭脳の異名は伊達じゃないわね。あたしの考えてる事が分かったみたいだね。

「つまりそうゆう事ネ、ランカサン？」

「ふふっ、超さん。そう、ランカとしては協力しません。でも、だからと言って、あたしは貴女たちの邪魔はしないわ」

「それは…サウザンド・ウエポンズとして、私の仲間になる意思表示と受け取ってよろしいかね？」

「いいですよ」

こうしてあたしは、超さんと影ながら協力する事を誓った。

「それで…貴女たちは何をしようとしているの？」

取り合えず超さんに訪ねてみた。

「それは再来年の麻帆良祭で、世界中に魔法の存在をバラす事ね」

「それはまた大胆な事をしますね」

「これから先必要になる事ネ、その準備ネ」

「それで誰かを救う…いや、世界を救う事になるのかな？」

「!？そっそうゆう事ね」

ちょっと動揺したみたいだね。



「それで、あたしは何を手伝えばいいの？」  
「地下に行けば解るネ。付いて来るネ」

その後、地下の広場に来た時は驚いた。

田中さん（量産機）や巨神兵モードキがいるだけでなく、なんと、バトルギヤラクシー（戦艦モード）やVF-27まであった事に驚愕したランカだった。

「超さん…あの…戦艦みたいなのって…何ですか？」

あたしは驚きながら超さんに話した。

「あれは戦闘銀河号ネ」

なるほど、バトルギヤラクシー戦闘銀河号って訳ですか…。

「あっちの戦闘機は？」

「あれは試作可変戦闘機27号ネ」

やっぱり変形するんだ。

「それで、あたしは何をすれば…」

「ランカサンは分身体を出す事が出来た筈ネ、その分身体をここで私の手伝いをして欲しいネ」

「分かりました」

取り合えずあたしは、超さんを10体程変身、分離させた。

「これでどうかな？」

「……………よろしくネ!」「……………」

「ハ…ハハ…よろしくネ…」

心底呆れながら返事をする超さんでした。

余談だが、調子に乗り過ぎて、ほとんどの戦車や飛行兵器をイコンの様に改造したり（母艦的な物は造っていない）、巨神兵モドキの内3体を、シースタンドコア（キャタピラ付き）、ジオスタンドコア、エアースタンドコアに改造したり、最終兵器用としてACEコア風の装置まで建造してしまった事により、葉加瀬は尊敬と憧れな顔をしていたと、超は呆れて頭を抱えていた。

~~~~~

（超サイド）

もうじきここにお師匠さま、サウザンド・ウェポンズであるラウルサンが変身したランカサンが来るネ。

貴方は私に技術と頭脳を与えてくれたネ。

あつ、来たみたいネ。

「いらつしゃいネ、ランカサン」

「こんにちはランカさん」

「こんにちは葉加瀬さん、あの…それで超さん、あたしに何の用ですか？」

あくまでランカサンとして接してる訳ネ。

「その前にちゃんと紹介するねランカサン、いや…千の武器使いサン」

「!?!?」

サウザンドウェポンズ

驚いてるみたいネ。

「あの超さん、彼女が本当に…あのサウザンド・ウエポンズなんですか？」

「間違い無いネ、ハカセ」

すると、観念したのか、

「えっと…元に戻った方が良いですか？」

と言つて来たネ。

「それは肯定と受け取った方が良いかネ？後戻らなくて良いネ。さてと、単刀直入が良いかネ？じっくり話した方が良いかネ？」

「そうですね…あまり回りくどく話すのも面倒なので…単刀直入の方で」

「分かったネ。ランカサン、私の仲間になるネ！」

出来ればお師匠さまを巻き込ませたくなかったけど、ここでは初対面だから釘を打つネ。

断られるかもしれないが、それはしょうがないネ。

「超さん、あたしの条件を飲んでくれれば、協力します」

「条件とは？」

驚いたネ、まさか協力してくれるとはネ！？

「ランカとしては協力しない代わりに、あたしが持つてる技術を提供します。ちなみに、貴女の計画について教えてくれればですけどね」

なるほど、「ランカとしては」ネ…。

「別に良いネ」

「って良いんですか超さん!？」

ハカセ、もう少し考えるネ。まあ相手が鬼才の策略家とも言われているからネ。

「いいハカセ、ランカサンは「ランカとして」は協力はしないと云ったネ。という事は、ランカサンじゃなければ協力するって事ネ」
「ええっ!？」

ランカサンは感心した様に見ていたネ。

「つまりそうゆう事ネ、ランカサン？」

「ふふっ、超さん。そう、ランカとしては協力しません。でも、だからと言って、あたしは貴女たちの邪魔はしないわ」

「それは…サウザンド・ウエポンズとして、私の仲間になる意思表示と受け取ってよろしいかネ？」

「いいですよ」

こうしてランカサンとは、影ながら協力してくれる事を誓ってくれたのだったネ。

「それで…貴女たちは何をしようとしているの？」

そろそろ教えとくネ。

「それは再来年の麻帆良祭で、世界中に魔法の存在をバラす事ね」

「それはまた大胆な事をしますね」

「これから先必要になる事ネ、その準備ネ」

「それで誰かを救う…いや、世界を救う事になるのかな？」

「！？そっそうゆう事ね」

驚いたネ！？さすがはお師匠さま。

「それで、あたしは何を手伝えればいいの？」

「地下に行けば解るネ。付いて来るネ」

その後、ランカサンと一緒に地下の広場に来て、あれ等を見た時のランカサンは驚愕していたから無理もないネ。

もっとも田中さん達や無名の鬼神に付いてる制御装置を造ったのは私と八カセだが、あの戦艦と可変戦闘機はお師匠さまが設計した物ネ。

「超さん…あの…戦艦みたいなのって…何ですか？」

お師匠さまが設計した物に驚くお師匠さまって…妙な気分ね。

「あれは戦闘銀河号ネ」

でもお師匠さま、何でこの名前にしたネ？

「あっちの戦闘機は？」

「あれは試作可変戦闘機27号ネ」

前にも思ったが、私が知り合ってた時は、試作機25号からだったネ。それ以前の物って一体…。

「それで、あたしは何をすれば…」

「ランカサンは分身体を出す事が出来た筈ネ、その分身体をここで私の手伝いをして欲しいネ」

「分かりました」

驚いた事に、私が10体ほど出してきたネ。

「これでどうかな？」

「……………よろしくネ！」「……………」

「ハ…ハハ…よろしくネ…」

私がいっぱいいるネ…。

その後は、BUCHIANAを勝手に改造して前より強力な物にしたり、鬼神の内3体も勝手に改造して、サソリっぽいのと、巨大な切削機みたいなのと、空飛ぶクモみたいなのにしたり、さらには私専用の人型装置まで造ったネ。正直やり過ぎネお師匠さま…。

「私、ランカさんに弟子入りしようかな」

ハカセが尊敬と憧れな顔をしているネ…。

……………

〈ランカサイド〉

それからは、何事も無く1年が過ぎていった。

クラスとは親交を深めていったし、エヴァさんとは毎日アレだし（控える様にギアスをかけた）、真名さんもエヴァ程じゃないけど積極的だったし、色々あったけど…これで舞台は整ったわ。

後はネギ先生が来るのを待つばかりね。

そして…原作開始まで…後数ヶ月。

超の勧誘（後書き）

まさかの超と協力をするランカ。

強大過ぎる兵器を開発しちやったね。

そして超は未来のラウルの弟子設定にしちやいました。

ACEコア風の装置は飛行船に取り付ける予定です。

次回はようやく原作突入です。

いよいよ原作開始（前書き）

原作開始です。

ネギが原作よりちょっと常識があります。

ラウルが不動として教育したが、基本的な性格は変わってないつもりですけどね。

いよいよ原作開始

（ランカサイド）

今日から三学期です。

と言う事は、ネギ先生が今日から赴任してくる予定ですので、ここからが原作だから、気を引き締めないとね。

「エヴァさん、早くしないと遅刻しちゃっよ」

「分かってる。行くぞ茶々丸」

「はい、マスター」

「行ッテ来ナー」

「行ってらっしやいにゃ」

「頑張ってくるにゃ」

「……………」

「どうしたんだにゃ？」

「何だろっ、すごく久しぶりだなんて思っって……」

「毎日会ってるにゃ」

「そうにゃ」

「ケケケ、ボケタカ？」

「そんなんじゃないけど……」

ほんと、何でだろう。

登校中、エヴァさんが聞いてきた。

「なあランカ、本当にナギの息子がこの学園に来るのか？」

「確証は無いけど、修行の為にここに来るのは間違いないと思っけど」

「もし来るのなら、どんな風に弄ってやるっかね」

「ははは…お手柔らかに…」

まあネギ先生についてはこれくらいにして、早く学園に行こうと。

「ところでランカ」

「何、エヴァさん？」

「一年以上もしてるのに子供が出来ないな」

「ぶっ!?!」

何で今その話するの!?!

「そろそろお前との子が欲しいな…なんて」

なんか恥ずかしくなってきたな…。

もうじき2・Aのクラスに着くね。

「ランカちゃん!」

あつ、パルさん（早乙女ハルナさんのペンネーム）だ。

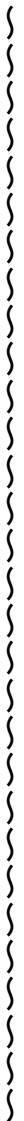
「ランカさん、お早うございます…」

「ランカ、お早うです」

のどかさんと夕映さんも一緒だ。

「パルさん、のどかさん、夕映さん、お早う!」

さて、頑張るぞ!



くネギサイドく

「うわ、ニッポンは本当に人が多いなあ」

今日から僕はニッポンの学園で先生をする事になりました。

父さんの様な立派な魔法使いになる為の試練として、今向かってる麻帆良学園の先生をやらなくてはいけません。

それにしても、このデンシャとか言う乗り物は人がたくさんいるからちよつと窮屈かな。

よく見ると周りにいる人は皆女の人で一杯です。

ネカネお姉ちゃんは、「女の子には優しくなさいね」と言われてるし、不動さんも、「女性には失礼の無い様に」とも言われたしね。

その時、カーブで電車が揺れた。

当然中は、反れた方にムギユギユくと押されていった。

「あつう……」

すると周りにいた女の人々がネギに話しかけてきた。

「僕、どこいくの？」

「ここから先は中学、高校だよ」

「いえ、その…ハ…ハ…ブツ!？」

「あつ、大丈夫僕？」

ネギはくしゃみする瞬間、咄嗟に口を閉ざした。

危ない危ない、僕って前からくしゃみすると魔力が飛び出しちゃう癖があるから、その所為でよくお姉ちゃんや幼馴染のアーニヤの服を飛ばしちゃったりしてたから、注意しないと。

『次はー、麻帆良学園中央駅ー』

「あ、着くよ」

「じゃあね坊や」

「えっ…」

「気を付けてね」

「時間やばっ、遅刻だ！急げ！」

皆すごい勢いで出て行っちゃった…。

『学園生徒の皆さん。こちらは生活指導委員会です。今週は遅刻者ゼロ週間です。始業ベルまで後10分を切りました。急ぎましょう。今週遅刻した人には、当委員会よりイエローカードが進呈されます。くれぐれも余裕を持った登校をしましょう』

周りにいた生徒は、ものすごい勢いで校舎に走って行った。

「わわわ…何これ！？すごい人！これが日本の学校か…」

ネギはふと懐中時計を見た。

「わっ、いけない！？僕も遅刻する時間だ！初日から遅れたらまずいぞー！」

ネギは足に魔力を込めて走った。

「ん？」

前にいる女の人達、占いの話をしているな。

あっ、失恋の相が出ている！これ、伝えた方が良いのかな？

ネギは不動の言葉を思い出した。

『人は時として、自分が親切な好意をしても、相手にとっては余計なお世話になる事がある』

うくん、言わない方が良いね。自分の好きな人に振られるのは嫌な事だから、言わないでおこう。

それより学園長先生は…どこだろう…。

さっきの女の人に聞いてみようかな。

ネギは、鈴の髪飾りを付けたツインテールの女性に近づいた。

~~~~~

（明日菜サイド）

やばいやばい！遅刻しちゃう！

あたしは今、友達の木乃香と一緒に登校していた。

それにしても、何で木乃香と一緒に新任教師の迎えに行かないといけないんだろう？

「にしてもアスナ足速いなー。うちコレやのに」

木乃香は、自分の履いているローラースケートの事を言っている。ちなみに明日菜は自分の足で走っている。

「悪かったわね体力バカで…」

ふと、後ろから風が来た感じがした。

「ん？」

明日菜は、隣に誰か走っている事に気付いた。

「あのー…学園長先生がいる校舎は何処ですか？」

「……ガキ？」

思わず立ち止まった明日菜と木乃香。

「何でガキがこんな所にいるの？」

「あ、かわええな。初等部の子かな？」

「あ、あの…僕は…」

「坊やこんな所に何しに来たん？ここは麻帆良学園都市の中でも一番奥の方の女子エリアやで、初等部は前の駅だよ」

「そういう訳だから、早く戻りなさい」

それに何でこんな所にガキがいるのよ？

「ほな、ウチら用事あるから一人で帰ってなー」

「じゃあね僕」

「いや、あの、僕は…」

すると、

「いや、良いんだよ明日菜君」

そ、その声は！？

明日菜は勢い良く振り返った。

「高畑先生！」

あたしの好きなダンディーなオジサマの高畑先生だ！

「おはよーございまーす」

「お、おはよー、ございm「久しぶりタカミチーッ」!?!?し…知り  
合い…!?!?」

明日菜は驚愕した。

な、高畑先生と知り合い!?しかもタメ口!?

すると高畑先生は、信じられない事を言ってきた。

「麻帆良学園へようこそ、ネギ先生」

「え…先生って…」

「あっはい、そうです」

ネギは一息入れて、挨拶した。

「この度、この学校で英語の教師をやる事になりました。ネギ・ス  
プリングフィールドです」

「え…」

明日菜は一瞬、思考が停止した。

そして、

「えええー！！！！っ！!?!?」

と叫んだ。



いよいよ原作開始（後書き）

常識あるネギにより、明日菜の第一印象は良好でした。

## クラス紹介と明日菜の記憶（前書き）

続いては1話目中編スタート。

仕事が忙し過ぎて、なかなか書けずにいました。

## クラス紹介と明日菜の記憶

（ネギサイド）

色々合つて、さっき知り合った人やタカミチと一緒に学園長室に着いた。

「学園長先生！一体どうゆう事ですか！？」

「まあまあ明日菜ちゃんや」

それにしても、学園長先生って…頭が長い人だな。

「なるほど。修行の為に日本で学校の先生を…そりやまた大変な課題をもちうたの」

「は、はい、よろしくお願いします」

「しかし、まずは教育実習とゆう事になるかのう」

「はあ…」

「今日から3月までじゃ」

よし、先生頑張るぞ！

すると学園長は、

「ところで、ネギ君には彼女はおるのか？どうじゃな？うちの孫娘このかな」  
「ややおじーちゃん」

か、カナヅチで突っ込んだ！？

「ちょっと待つて下さいってば、だ…大体、子供が先生なんておかしいじゃないですか！？しかも、うちの担任なんて…」

「ネギ君、この修行は恐らく大変じゃぞ。ダメだったら故郷<sup>くに</sup>帰らねばならん…二度とチャンスはないが、その覚悟はあるのじゃな？」

「は、はいやります！やらせて下さい！」

「…うむ分かった！では今日から早速やって貰おうかの。指導教員  
のしずな先生を紹介しよう。しずな君」

「はい」

部屋に入って来た女性、しずな先生が来た。

「分からない事があつたら彼女に聞くといい」

「よろしくね」

「あ、はい…」

大人の女性だ…。

すると学園長は、

「そうそうもう一つ、木乃香、明日菜ちゃん、しばらくはネギ君を  
君達の部屋に泊めて貰えんかの？まだ住むところ決まったらんのじゃ  
よ」

「げっ…！？」

明日菜は絶句した。

「もうっ、そんな何から何まで学園長…っ！？」

「ええよ「って木乃香！？」かわえーよこの子」

「ガキは嫌いなんだってば！」

うっ…さっきからこの人にいっぱい言われてるな…。

その後、明日菜さんと木乃香さんは先にクラスの方へと戻って行き  
ました。

「うう…やっていけるかな…」

「あの子はいつも元気だからね。でも良い子よ」

今僕はしずな先生と一緒に、僕が担当するクラスに案内してくれます。

「そうそう、はいコレ、クラス名簿」

「あ、どうも」

「それより授業の方は大丈夫なの？ネギ君？」

「あ…う…ちよ、ちよっと緊張してきました」

「ほら、ここが貴方のクラスよ」

僕は、僕が受け持つクラスを窓から覗いてみた。  
賑やかなクラスだな。

これが…僕がこれから教える事になる人達か…。

「そうだ、クラス名簿！」

ネギは、クラス名簿を見た。

1 . 相坂あいさかさよ

1940

・席、動かさない事

2 . 明石あかし裕ゆう奈な

バスケットボール部

・明石教授の娘さん

3 . 朝倉あさくら和わ美み

報道部

まほら新聞(内) B09-3780

4・綾瀬夕映あやせ ゆえ

児童文学研究会

哲学研究会

図書館探検部

5・和泉亜子いずみ あこ

保健委員

サッカー部(外部)

6・大河内アキラおおこうち

水泳部

7・柿崎美砂かきさき みさ

まほらチアリーディング

コーラス部

8・神楽坂明日菜かぐらさか あすな

美術部

9・春日美空かすが みそら

陸上部

10・絡繰茶々(ちや)丸からくりちや まる

茶道部

囲碁部

緊急時他 工学部(内) A08-7796

11・釘宮円くぎみやまどか

まほらチアリーディング

12・古菲クラフェイ

中国武術研究会

13・近衛木乃香このえこのか

書記

占い研究会

図書館探検部

学園長のお孫さん

14・早乙女ハルナさめめ

漫画研究会

図書館探検部

15・桜咲刹那さくらさくせつな

剣道部

京都神鳴流

16・佐々(さ)木まき絵さきえ

新体操部

17・椎名桜子しゅうなさくらこ

ラクロス部

まほらチアリーディング

18・龍宮真名たつみやまな

バイアスロン部(外部)

龍宮神社

19・超鈴音  
チャオリンシエン

お料理研究会

中国武術研究会

ロボット工学研究会

東洋医学研究会

生物工学研究会

量子力学研究会（大学）

20・長瀬楓  
ながせかえで

さんぽ部

忍

21・那波千鶴  
なばちしる

天文部

22・鳴滝風香（姉）  
なるたきふうか

さんぽ部

23・鳴滝史伽（妹）  
なるたきふみか

美化委員

さんぽ部

24・葉加瀬聡美  
はかせ さとみ

ロボット工学研究会（大学）

ジェット推進研究会（大学）

25・長谷川千雨  
はせがわ ちかめ

帰宅部

パソコンが得意



26・Evangeline・A・K・McDowell  
エヴァンジン・ヒロイン マクダウェル

囲碁部

茶道部

困った時に相談しなさい。

27・宮崎のどか  
みやざきのどか

学園総合図書委員

図書委員

図書館探検部

28・村上夏美  
むらかみ なつみ

演劇部

29・雪広あやか  
ゆきひろあやか

クラス委員長

馬術部

華道部

連絡網（始）

30・四葉五月  
よつば さつき

給食委員

お料理研究会

31・Ranka・Crusade  
ランカ クルセイド

図書館探検部

茶道部

エヴァと同居

32・Zazie・Rainyday

ザジ

レインデー

曲芸手品部（外部）

以上32名の2-Aの生徒でした。

「い、いつぱい…タカミチからの書き込みがある…」

「早く皆の顔と名前を覚えられるといいわね」

「あつ…」

うつ…こんなにたくさん年上の女の人達に教えるのか…？何だかドキドキしてきたぞ…。

つてか、さっきの人みたいのばっかだったらやだな…。

本当に僕、こんな異国の地で先生なんて出来るだろうか…お姉ちゃん、アーニヤ、不動さん…僕大丈夫かな…。

ネギは覚悟を決めて中に入った。

あつ、その前に魔法障壁を切っておこう。何も無い所で防いでいると、魔法使いだ言う事をばれちゃうかも知れないからね。

~~~~~

〜ランカサイド〜

明日菜さん達が帰ってきたから、そろそろネギ先生が来る頃かな？あつ、来たみたい。

「（おいランカ、廊下の方で魔力を持った奴が来るが？）」

エヴァさんが念話で話しかけてきた。

「（多分、ナギさんの子だと思っよ）」

「（やはり来たか）」

そして教室に入ろうとして戸を開けると、黒板消しが落ちてきた。そしてポフツとネギの頭に当たった。

あれ？原作だと魔法障壁が展開されてなかった？

ランカは、不動として教育した成果を過小評価していた。

その後、美空さんと風香さんと史伽さんが仕掛けた罠をことごとく引っかかって行った。

「（おい、あれが本当にサウザンドマスターの息子か！？かなりどんくさいぞ！）」

「（あはは…まあ多少は普通の子供みたいなお所があるみたいだね）」

エヴァさんに念話で突っ込んだ。

「……え？子供……！！……」

「君、大丈夫？」

「ゴメン、つきり新任の先生かと思って」

「いいえ、その子が貴女達の新しい先生よ。さ、自己紹介して貰おうかしら」

しずな先生は、手をパンパンと叩きながら場を収めた。

「ネギ君」

「は、は……」

教壇の上に立つネギ先生。

「あの…僕、今日からこの学校で英語を教える事になりました、ネギ・スプリングフィールドです。3学期の間ですけど、よろしくお

「ねえ、君ってば頭良いの？」

「い…一応大学卒業程度の語学力は…」

「スゴーーーイ！」

「いやあん」

「あーん、カワイー！ー！」

「わわー！」

「あうあう…」

なんかもう…ぬいぐるみ扱いだねネギ先生…。

「（何だアレ…）」

「（ははは…）」

もう苦笑いするしかないね。

「ネギ君はちゃんと教師の資格を持つてるけど、見ての通り貴女達より年下よ。お手俵かにね」

「……………ハーーーイ！！」「……………」

その後、いいんちよこと雪広さんが仕切って、クラスを纏めた後、改めて授業を開始した。

本来ならここで明日菜さんといいいんちよさんとケンカするんだけど、魔法障壁の件が無かったから、ケンカせずに進みました。

そして、緊張しながらも、黒板に字を書こうとするネギ先生だが、

「と…届かない…」

クラスの皆に笑われた。

いいんちよさんが高級そうな踏み台を用意した。

でもあれじゃ、迂闊に踏めないよ。

その後、若干授業になっていない内容だったが、何とかなった様子でも授業中、明日菜さんの方を見てたけど、消しゴムを飛ばすという事はしてなかったな。

かなり不満そうな顔をしてたけど。

そして授業が終わり、高畑先生が来て、明日菜さんが恋をしてる顔をして今日の事を話してた。

そして放課後、

「ねえランカちゃん」

「はい？」

パルさんが来た。

「この後ネギ先生の歓迎会をやるから、手伝ってくれる？」

「良いですよ」

「それじゃあ、のどかが戻ったら始めるから」

そういえばのどかさん、ネギ先生とフラグが出来るんですけどね。

「面倒です……」

「そう言わんと、はよやろうな」

「相変わらずのめんどくさがりね夕映は」

夕映さんも相変わらずですね。

「ランカ」

「ん？」

すると、真名さんが来た。

「何ですか真名さん？」

「君は、あの可愛らしい先生の事でこの学園に来たのだったな？」

「そうですよ」

「なるほど、英雄で戦友の息子が気になると？」

「そんな所ですね」

そう言つて離れて行く真名さん。

そして、エヴァさんと茶々丸さんが来た。

「ランカ、帰るぞ」

「ダメだよエヴァさん、これからネギ先生の歓迎会があるから帰っちゃダメだよ」

「面倒だな……」

「マスター、どうしますか？」

「仕方が無い、ランカが出るなら、面倒だが出てやらん事もないな」

何でツンデレなんですか？

～ネギサイド～

ふう、何とか始めての授業は無事に終えたな。

もう一度皆さんの顔と名前を覚えないとね。

ネギはクラス名簿を見た。

「えーつと……あつ、出席番号8番の、カグラザカ……アスナ……って言うのかな？それと、出席番号13番の、コノエ……コノカさんつと。

今日はこの二人の所で泊まられて言われたけど、明日菜さんは泊めてくれなさそうだし……どうしよう……」

朝、学園長室で否定的だったからな。

「ん？」

ネギはふと、大量に本を持っている少女を見かけた。

「あれは…出席番号27番の、宮崎のどかさん？それにしても、たくさん本持って危ないなあ…」

その時、のどかがバランスを崩し、階段脇に倒れかかった。

「あっ！？やっぱし！！！」

ネギは周りを気にせず杖を出し、のどかを浮かせた。

そしてネギはのどかを受け止めて、あたかもギリギリセーフで助けた様に見せた。

「あでぼっ！？アタタタ…だ、大丈夫ですか？宮崎s…」

ネギは絶句した。

目の前にいるのは、啞然としている明日菜がいた。

~~~~~

（明日菜サイド）

あたしは…今信じられないモノを見た。

本屋ちゃんが階段から落ちそうになって助けようと近くまで来たら、あのガキンチョが杖みたいなのを出した後、本屋ちゃんの身体が浮



いていた。

何アレ！？超能力！？

明日菜はネギの近くに寄った。

「あ…あなた…」

「あ…いや…あの…その…」

「う…せ…先生…？」

やばっ！？本屋ちゃんが起きちゃっう！？

明日菜はネギを無理やり森の方に連れ出した。

「あなた超能力者だったのねー！ー！ー！ー！」

「い、いやちg「誤魔化したってダメよ！目撃したわよ！現行犯よ！！」あうっくっ！！？」

「白状なさい！超能力者なのね！！」

「いえ…どちらかと言うと魔法使いd…あっ！？」

魔法使い！？何よソレ！？そんなのがホントにいたの！？そんな事より…

「どっちだって同じy…っ！？」

この時、あたしの中で何かが弾いた。

『アスナちゃん、君の記憶が消えた後、普通な暮らしの中に魔法の存在を知った時に、本来の記憶を呼び覚ませ！』

この声が聞こえた瞬間、初等部に編入する前の、失われた記憶が鮮明に思い出してきた。

あたしが…魔法世界のオスティアの王女で、黄昏の姫御子と呼ばれ

てた事、完全なる世界の連中に利用されて魔法世界を消そうとした事、そして、ナギ達紅き翼に助けられた事の記憶が、全部思い出してきた。

他にも、ガトウさんに拾われて、タカミト…高畑先生と一緒に暮らしてただけで、完全なる世界の残党がガトウさんを狙って来てた。ガトウさんは死ぬ寸前に、あたしの記憶を消すよう高畑先生に頼まれて、あたしの記憶は失った。

あたしの名前の神楽坂は、ガトウさんの名前から取っている。ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ、ガトウさんのミドルネームのカグラを少し加えて、あたしの名前にしてくれた。

その後は、麻帆良で普通の学生として過ごした。

何故今になって記憶が戻ったのかと言えば、ラウルがあたしにギアスを掛けたからだろう。

ラウルのギアスは、人の意思を無理矢理ラウルの意のままにする魔眼で、あたしの記憶が戻ったのも、そのおかげだと思う。

明日菜は、記憶が戻った事に呆然としてた。

「うっ…仕方ないですね…」

「えっ！？な、何よ」

そうだった！？あたしの目の前には、ナギの息子のネギに問い詰めてたんだった。

「秘密を知られたからには、記憶を消させて頂きます！」

「ええっ！？」

「ちょっとパーになるかもですが、許して下さいね…ムニヤムニヤ…」

「ギャー！！？ちょっと待ってー！っ！？ってかパーって！？」

と言う事は高畑先生…あたしがバカなのって、貴方が記憶を消した

後遺症って事ですか!?!?ってか自分で言っちゃったよバカって!?!?

「消えろーーーーっ!!!」

「きゃーーーーっ!!!?!?!?!?!」

すると、明日菜の服がブレザー以外消し飛んだ。

「あ…あれ?」

「いやーーーーーーーーっ!!!?!?!?!?!」

その後は思い出したくない…。

高畑先生が偶然近くにいた為に、あたしの半裸姿を目撃された…死にたい…色んな意味で…。

## クラス紹介と明日菜の記憶（後書き）

明日菜の記憶が戻りました。

記憶が戻ったと言っても、性格と好みは変わりませんので、しばらくは原作通りです。

次回は後編です。

## ネギ先生歓迎会（前書き）

長かったな1話分。

後編スタート。と言ってもかなり短いです。

## ネギ先生歓迎会

（ランカサイド）

のどかさんが戻って来たけど、何か顔を赤くしていた。

ああ、フラグを立てたんだね。

さて、もう歓迎の準備は出来たから、後は主役を待つだけだね。しばらくして、やっと戻って来た。

「……………ようこそ！ネギ先生————ツ！！！」

「……………へっ……………」

ネギ先生と明日菜さん、固まってるね。

そっぴえば明日菜さん、記憶戻れたかな？

「あつ…そーだ！？今日アンタの歓迎会するんだっけ…忘れてた！」

「え————っ!?!」

後はネギ先生を主役の席に連れてつてと。

宴会を始めた2-A。

懐かしいな、ナギさん達と一緒に結構騒いでたからね。

ランカは懐かしんでいた。

するとのどかさんは、ネギ先生の所に行った。

「あの…ネギ先生……………」

「え？あ、出席番号27番の宮崎さん」

「あの…さつきはその…危ない所を助けて頂いて、その…あの……………」

前から思ってたんだけど、微笑ましいなあのかさんって。

「これ…お礼です…図書券…」

「えっ!？」

「本屋がもう先生にアタックしてるぞー!」

朝倉さん…少し空気を読もうよ…。

「違います…それに私、本屋じゃないです…」

すごく照れてるねのどかさん。

その後は、いいんちよさんがネギ先生の銅像をプレゼントした。

それにしても、いつ作ったんだろっ、あの銅像？

そして銅像に対して明日菜さんが突っ込み、今日初めてケンカした。しばらくすると、明日菜さんとネギ先生が退室した。

いいんちよさんを筆頭に何人かが付いて行った。

そして廊下が騒がしくなった。

歓迎会はお開きになった後、エヴァさんと茶々丸さん一緒に家に帰りました。

「ただいまー」

「お帰りだにゃ」

「カエツタカ」

帰った後、エヴァさんがリビングでくつろいでいた。

「ふん、まさかここまで坊やだとは思わなかったぞ」

「まあ、ナギさんに比べれば、とても大人しい子供だったけどね」

「お前が来ていなかったら、あんな坊やでもアテにしてたかもな」

「そうかもね」

原作だと一応アテにしてたけどね。

「マスター、ランカさん、お食事の用意が出来ました」

「ランカ様、エヴァ様、お待たせしました」

メイド服に着替えた茶々丸さんと、半ば家政婦さんになってるもう一人のあたし、オータムさんが晩御飯の用意をしてくれました。さて、明日から色んな意味で忙しくなるわね。



## ネギ先生歓迎会（後書き）

後編は、あんまり必要なかったかも？  
次回は惚れ薬の件です。

## 惚れ薬騒動(前書き)

惚れ薬騒ぎです。

仕事が忙し過ぎて、平日3行ずつしか書けませんでした。

## 惚れ薬騒動

（ランカサイド）

朝になり、今日の事で悩んでいました。

今は女の子になってるから、惚れ薬の影響を受けるかもしれないし、どうしよう…。

あっ、そうだ！

「アデアット！」

ランカは少し、体の一部分を変化させた。

「アベアット！」

これで良し。

朝食頃、エヴァはランカの変化に気付いた。

「ランカ…気の所為だとは思うが、何か違和感がするんだが？」

「はい、あたし今、男の娘になってるから」

「そうか………ってはい!？」

エヴァさんは目を白黒して見てきた。

「はっ!?!?男だと!?!？」

「マスター、調べてみましたが、染色体がXX型からXY型になっています。男性です」

補足ありがとうございます茶々丸さん。

「何故いきなり男…はっ、いかんぞ！？一応これから学校に行くのだから、朝からするのは私も構わぬが…」

「違うから、今日は何だか男の娘になっておかないと危ない気がする…」

「どうゆう危険だそれは…」

「ん…、直感？」

「何だそれは…」

取り合えず男の娘になれば、惚れ薬の件は回避出来る分、今の体の事がバレたら厄介だから慎重に行こうっと。

～明日菜サイド～

「まったく、記憶を取り戻してるからと言っても、今まで通りにしてるけど、アレは無かったな。」

「つい勢いで惚れ薬作れって言っちゃったし、惚れ薬って犯罪だけど…まあ、今のあたしって何も知らない一般人なんだし、別に良いかでも、あのナギの子だから、本当に作っちゃいそうだし、一応注意しておくかな。」

「それにしても、あたしのベッドに潜り込む普通！？いくら従姉がいたからって、あたしの所に来る！？おかげでバイトに遅刻しちゃったし、もう最悪…。」

「取り合えずネギには色々と釘打っとくかな。自分の力で何とかするってね。」

～ネギサイド～

偉いなあ明日菜さんは。僕も頑張らないと。  
3月までの間、立派に先生を務めて…父さんの様な立派な魔法使い  
にならないと。

「ん？ん～～と…と、届かない…」

下駄箱の自分の使う場所に手が届かない…。  
誰かに頼んでもう少し低い所に移動出来ないかな？  
すると、誰かが自分の使う下駄箱を開けてくれた。

「おはようございます。ネギ先生」

あつ、出席番号29番のいいんちよさんだ。  
いいんちよこと雪広あやかが、ネギの替わりに靴を下駄箱に入れた。

「教室までご案内しますわ」

「ど、どうも…おはようございます。いいんちよさん」

「雪広あやかでございます。昨晚は良く眠れましたか？」

「ええ、とつても」

そう言ってる間に2・Aに着いた。

~~~~~

～ランカサイド～

今日のエヴァさんは、面倒だって言って授業をサボって行きました。
茶々丸さんも同行しました。

のどかさんは廊下側の窓から顔を出して、ネギ先生を待っている様子。

挨拶をしたからネギ先生が来たみたい。

いいんちよさんが黒板消しの罨を受け止めた為に、「ちっ」と悔しがってる風香さんがいます。

「き、起立……」

のどかさんが恥ずかしそうに言った。

「気を付け……」

「あ……ども……」

「礼い……」

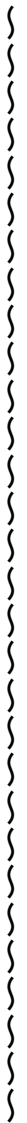
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

圧倒されたのかな、ネギ先生が若干怯んでいますね。

「お……おはよーございます……」

「着席……」

その後ネギ先生は、授業を開始した。



くネギサイドく

「二日目の授業頑張らないと！」

「……では、今の所を……」

え〜つと…誰に訳して貰おうかな？
皆目を逸らしてますね。

お世話になってる明日菜さんにしようかと思っただけど、かなり目を逸らしています。

いきなり指摘すると怒られそうだから、えっとクラス名簿で…最初は…相坂さん…はお休みみたいですね。

「じゃあ出席番号2番の明石さんから訳して下さい」
「うええっ!?!」

心底嫌そうな顔をして立ち上がる明石裕奈。

~~~~~  
〜ランカサイド〜

あれ? てつきり明日菜さんを選ぶかと思っただけど!?!?  
ちゃんと出席番号順に言っただけだね。

その後、出席番号順に指摘して行き、何事も無く授業が終わった。

「ねえランカちゃん」  
「はい?」

パルさんが訪ねて来ました。

「実は、のどかとネギ先生にアピールしようと思ってるんだけど」  
「何ですか?」

「あの子が10歳とはいえ、男性に抵抗が無いから、これを機に男性に慣れさせようと思って」  
「なるほど」

のどかさんはネギ先生が来るまでは、高畑先生を避ける程に男性に抵抗がありましたからね。

「何をすればいいですか？」

「一緒に来てくれる？」

「分かりました」

あたしはパルさんに連れられて、のどかさんと夕映さんと合流しました。

そして、モニュメントで休んでるネギ先生を発見した。

「あの…ネギ先生…」

「あ、はいっ!？」

「すみませんネギ先生。朝の授業について質問が…」

おずおずとしてるねのどかさん。

「あ、はいはい良いですよ。えと…出席番号14番の早乙女ハルナさん」

「あ、私じゃなくて、こっちの子なんですけど」

「あ、はい…あれ？」

「えっ？」

「宮崎さん、髪型変えたんですね。似合ってますよ」

「えっ…」

ピンと来たらしいパルさんと夕映さん。

「でしょでしょ!…可愛いと思うでしょ!…」

「えっ…!?!？」



すかさずパールさんはのどかさんの左側の前髪を寄せて、夕映さんは右側の前髪を寄せて、あたしは後ろから残った前髪を上へと上げた。

「この子、可愛ーのに顔を出さないのよねー！」

「あつ…!?!?」

のどかは顔を赤くして逃げ出した。

「あつ!?!?宮崎さん!?!?」

「のどかー!?!?」

「のどかさんー!?!?」

「あん、ちよつとのどかー!?!?ゴメンねネギ先生!」

その後、なんとか追いついた三人は、のどかを落ち着かせた後、謝罪した。

のどかさんが許してくれた後、あたしは教室に戻ってみると、なにやらむせているネギ先生の姿でした。

もう惚れ薬飲んだのかな?

~~~~~

「明日菜サイド」

ネギの奴、本当に惚れ薬を作ってきたみたいね。ナギとは別方向のバカねネギは。

良く考えたらあたしって、マジックキャンセル魔法無効化の能力があるから、そうゆうのは効かないから。

しつこく迫って来たみたいだから、無理矢理ネギに飲ませた。

すると、

「ネギ君って、よう見ると…なんかすごいかわえ〜な〜」

木乃香がネギにすり寄って来た。

それを見ていたいいんちょは黙っていなかった。

「ちょ、ちょっと、何をやってるんですか木乃香さん！？ネギ先生に対して、その様な如何わしい行為…を………」

するといいいんちょは、

「ネギ先生…どうぞコレを…」

何処から出したのか、薔薇の花束を差し出してきたいいいんちょ。
すると背後から、

「ネギ先生、コレ食べてー！」

「先生、コレも丁度子供用の服作ったところで…はい、ぬぎぬぎしましようね〜」

「ああー！？止めっ…止めて下さいーっ！…!?」

「（効いてる…）」

惚れ薬の効果でメロメロになった木乃香達は、ネギに纏わり付き、柿崎が服を脱がし始めた。
するとそこに、

「明日菜さん、このちゃん達どうしたんですか？」

「えっ！？ランカちゃん、無事なの！？」

「無事って…何があったんですか？」

何故かランカちゃんは無事みたいね。
ラウルの娘だからなのかな？
っていつの間にかネギがいないし！？

「ネギ先生ならついさっき出て行きましたけど」
「そっそう…ありがとランカちゃん」

全く…世話のかかるお子ちゃまね。

~~~~~

くランカサイドく

ふう、何とかネギ先生に惚れるという展開は防げましたね。  
それから数時間後、このちゃん達が正気にかえるのと、あたしは女子トイレに行き、男の娘から女の子に戻った。  
家に帰ると、

「ランカさん、男性から女性になっていますね」

「解りますか？」

「はい」

「朝感じた違和感が無いな」

そして晩御飯が済んだ後、あたしの携帯から電話がかかって来た。  
パルさんからだ。

ランカは電話に出ると、

『ランカちゃん、今暇？』

「一応暇だけど、何か用事ですか？」

『実は、この後ネギ先生の所で勉強会をするんだけど、ランカちゃ

んも来る？』

「分かりました。勉強道具を持って行きますね」

『後、着替えも持ってきてね。久しぶりに皆で入ろうと思ってね』  
「着替えもですね。分かりました」

今夜は確かお風呂イベントだったね。用意しておかないと。

えっ？女子風呂に入っても良いのかって？ラウルとしてはダメですが、ランカになってる時は、女の子の体を見ても差ほど気にしなかったので、精神的に同性同士だから気にしないという部分が出てくる為、気兼ねなく女子風呂に行けるんです。

まあ、あたしがラウルって気付いてる真名さんと超さんと葉加瀬さんは白い目で見てきた時は焦りましたけど、説明したら少し納得してくれた（真名さんには餡蜜奢らされたけどね）。

さて、エヴァさんに事情を説明しておくかな。

その後、エヴァさんは納得いかなかったが、戻ってきたら好きなだけ相手してあげると言ったら、素直に行かせてくれた。

今夜も別荘だね。

## 惚れ薬騒動（後書き）

ランカは保険の為、男の娘状態にしました。  
次回はお風呂と居残りです。

**お風呂と居残り小テスト（前書き）**

お風呂イベントと居残りイベントです。

## お風呂と居残り小テスト

（ランカサイド）

あたしはのどか達のいる学生寮にきました。  
もちろん勉強道具と着替えを持ってね。

「お待たせ」

「待ってたわよランカちゃん。じゃ行こっか」

「はいです」

「（コクコク）」

そして、ネギ先生のいる明日菜さんと木乃香さんのいる部屋にお邪魔した。

「ネギ先生こんばんはーっ。授業の質問に参りましたーっ」

「あ、宮崎さん。早乙女さんと綾瀬さんとクルセイドさんも、こ、こんばんはー」

「どうもー」

微笑ましい会話だね。

「わーそっかそっか、上がりー。何飲むー？」

「おじゃましますー！」

「水かお茶で良いですよ」

「持参して来たです」

そういえば、夕映さんは変なジュースを愛用してましたね。

前に進められたカレイ味のジュースというすごく微妙な物でした…。

少し騒がしい勉強会を始めようとした所に、

「ちょっと明日菜さん、どうゆう事ですか！？ネギ先生と相部屋で同居中だなんて初耳ですわっ！！」

いいんちよさんがやってきた。

「あーいいんちよ、今ちよーど勉強会が始まったとこやー」

「えっ！？ネギ先生と勉強会！？解りました、私もお付き合います」

「はいはい。ほな、そこ座りや」

委員長として当然ですわと言いつつながら参加したいいいんちよさん。

それから、勉強会の様な宴会の様な騒ぎを起こしてしまい、

「人の部屋で宴会すんなー！ー！ーっ！！」

明日菜さんに追い出されちゃいました。

「追い出されちゃったね」

「う…ん…」

「まああれだけ騒いでいたら怒鳴られるのが目に見えてたです」

夕映さん…分かっていたなら止めましょう…あつ、止められないでした。

「もう、何なんですの明日菜さん！？ネギ先生を独占して！」

「いやいいんちよ、別に独占してる訳じゃ…」



いいんちよさんが騒いでいたので、何とか抑えて、一緒に勉強会を開きました。  
しばらく勉強会をした後は、木乃香さんを連れて皆で大浴場に入りに行きました。

～明日菜サイド～

まったく、本当におこちゃまねネギの奴、風呂嫌いだなんで。水着を着てネギを風呂場に叩きこんだ。

「うっ…ひどいや…僕…明日菜さんの担任なのに………？」

するとネギは驚いていた。

「わー！…何コレー！…っ！！？」

「うちの寮自慢の大浴場よ。一度に百人近く入ったりするからこの大きなの。今の時間なら丁度誰も入ってこないから、とつとと済ませるわよ！」

「へえ、昔本で見た銭湯みたいだ！すごいや」

さして、準備が出来たつと。

「きちやない仔犬ちゃんを洗ってやろうかしら」

そう言った途端、ネギは逃げ出した。もちろん直ぐに捕まえたけどね。

「ほら、目をつむって」

「あつう〜…」

「まったくも〜、頭も自分で洗えないなんて、あんたホントに10歳なの？」

するとネギは…、

「はい…数えて10…」

「数えて10歳…？…て事は9歳！？ますますガキじゃないのよー  
ー！ー！ー！」

「あいたたたたたー！ー！ー！つ！！？？」

ム力ついたから強めに擦っちゃったじゃない。

「まったく、私は明日も新聞配達があるんだから、大人しく洗わせなさいよ」

「はい…え？ああバイト…新聞を配る仕事ですか…大変だなあ。何で中学生なのにそんな大変そうな仕事してるんですか？」

まあ記憶が無い時は胸張って言えるんだけど、今は記憶が戻ってるから…ね。

「…私…両親がいないから…学費は自分で稼いでるの…」

「え？今なんて…」

「だから親はいないんだって…」

20年前にね…。

「それで小さい頃から木乃香のおじいちゃん…つまり学園長の世話になってただけど…いつまでも迷惑はかけられないじゃない？まあ少しずつでも働いて返そうと思ってさ。学園長はいいって言って

くれてるんだけどね…」

実際には、魔法世界で道具として生きてきた私を、高畑先生と学園長が保護してくれたんだけどね。

「ん？」

ふとネギの方を見ると、ネギは号泣していた。

「うおっ！？」

何で泣いてんのよネギは！？

「な…何泣いてんのよっ！？」

「だってだって、明日菜さんが、そんな苦学生だったなんて、僕…ごめんなさーい！」

「ちょ、何で謝るのよ！？」

その時、明日菜は石鹸で滑り、ネギを押し倒してしまった。

「あ…っと…」

「ご、ごめん…」

「いえ…」

何で気まずくなるのよ…ん？

明日菜は脱衣所の方を見た。

「や、やばい、誰か来た！今日に限って早いじゃない！？」

「え？え？」

「マズいわ！風呂場に二人でいるの見られたら、なんか誤解されち



「学園長先生が？」

「へー、じゃあ私たちもネギ先生と相部屋になれるように木乃香のおじいちゃんに頼んでいよーかな？ねーのどか」

「パルさんのはのどかさんを見ながら言った。」

「えー！」

「なっ!？」

「ちょっと照れるのどかさんと慌てるいいんちゃん。」

「勝手に決めないで頂けます？ネギ先生と同居し、立派に育てるには、もっと相応しい人物がいると思いますわ！」

「育てるんですか？」

「思わず突っ込んだじゃったけど…。」

「いかに天才少年とはいえ、ネギ先生もまだまだ子供！」

「スルーされた!？」

「そんな先生を日々お世話するのは、もっと母性的で包容力を持った女性でなければ…そう、例えばプロポーションも完璧な、この私のような…！」

「何か…自画自賛してる人がいる…。」

「でも胸は私の方があるよね」

「うー、うん…」

「胸が大きい方が母性的とは言えるです」

「羨ましいなあ」

いつからだろう…パルさんを見てもっと胸が欲しいと思うようになったのは…。

「じゃー私たちの部屋で決まりつて事でー」

「(コクコク)」

「です」

「だね」

「ちよっ！？待ちなさいあなた方！」

パルさんの決定宣言に抗議するいいんちよさん。

「トップとアンダーの差では私の勝ちですわ！大体あなたの場合、少しお太り気味な…」

「おっと、勝負するか？いいんちよ」

「委員長さんのはちよつとやせ過ぎです」

「どちらにしても羨ましいなあ」

「(コクコク)」

するとそこに、

「おや？こんちやーでござる。いいんちよ」

「なっ…長瀬さん!？」

中学生とは思えないプロポーションの持ち主の長瀬さんが来ました。

「ま、まあ彼女は、身長からして中学生らしからぬ感じですし…」

「そ、そうよね…180cmだっけ？」

そして、那波さん、朝倉さん、真名さん達がやって来た。

「…ちよっと、このクラスには非常識な人達が多いですわね…」

「…む、胸の大きさを勝負するのは止めとこーか…」

よくよく見ればレベルの高い人達が大勢います。鬱になりそうです…。

「ねー、何の勝負してるんですか？」

「な、何でもありませんわー…」

史伽さんが聞いてきて、いいんちよさんがはぐらかした。するとそこに、空気の読まない夕映さんが言いだした。

「何でも胸の大きい人がネギ先生を貰えるという事です」

「……………えー……………?!?!?」「……………」

その後は皆で大騒ぎになった。

そして巨乳派と美乳派と貧乳派に分かれました。当然あたしは貧乳派です…グスン…。

するとランカの下に、真名が寄って来た。

「なあランカ、この状況は何だ？」

「いいんちよさんが、母性的で包容力を持った女性こそネギ先生を育てるに相応しいって言って、それをパルさんが勝負してただけだ、真名さんや朝倉さんや那波さんを見て勝負は止めようとしたんだけど、夕映さんが皆に煽ってしまい、こうなりました」

「なるほど…」

しばらく比べ合いをしてると、明日菜さんがネギ先生を押し倒して

るシーンになつてた。  
色々騒い出る内に有耶無耶になり、結局明日菜さんの所になつた。  
そして家に帰ると、

「帰つたか。ん？」

エヴァさんがあたしの匂いを嗅いできた。

「貴様：風呂に入つて来たな…」

「何で分かるの!？」

「ずるいぞランカ!元の戻つて私の背中を流せ!」

こうなつたエヴァさんは、言う事聞かないと拗ね続けるからな。

「分かつたから、後で別荘に行こつね？」

「絶対だぞ!」

その後も、元に戻つてエヴァ（マイクロ・ゼントラーシステムで大人化状態）の背中を流した後エッチしまくつた。

翌日、いつもの小テストがあつて、あまりにも点数が低い生徒は居残りだという。

あたしの成績ですか？ルルーシユの頭脳の所為で、オール百点は軽く取れるぐらいの実力はあるけど、それだと怪しまれるから、上の中辺りの成績です（学年15位くらいに妥協した）。

ホントは最初の頃は、50位だったんだけど、徐々に成績を上げて行つて、15位くらいになつちやいました。

ちなみにあたしは、パルさんとのどかさんの付き添いで夕映さんを待っています（エヴァさんは不満でしたけど）。

「…というわけで…2 - Aのバカ五人衆レンジャーが揃つたわけですが…」



「誰がバカレンジャーよ！」

バカレンジャー紹介

バカブラック（バカリダー）

綾瀬夕映（一番ましなバカ）

バカイエロー

古菲（まだましだけどバカ）

バカブルー

長瀬楓（中間バカ）

バカピンク

佐々木まき絵（ブービーバカ）

バカレッド

神楽坂明日菜（最下位バカ）

紹介終了。

「わざわざ紹介なんてしなくていいわよ!!?」

明日菜さんが紹介分に突っ込んで来た!?

そんなこんなで、テストを始めようとしていた。

「えーと、じゃあまずこれから10点満点の小テストをしますので、6点以上取れるまで帰っちゃダメですよ」

テストが五人に配られた。

「じゃあ…始めて下さい」

居残りテストが始まった。

始まってから1分後、夕映が手を上げた。

「出来ましたです…」

「えっもうですか!?!」

ネギ先生が採点を始めた。

そして、

「…うん！4番、綾瀬夕映さん、9点！合格です！」

「「「キヤーーーーッ!」「」」

思わず一緒に騒いじやった。

「全然出来るじゃないですか」

「…勉強…嫌いなんです…」

夕映さん…その気になれば良い点取れるのに、何で勉強しないんだろ？

「ちゃんと勉強しなよゆえー」

「そうですねよ、夕映さんはその気になればもっと良い点数が取れるんですから」

「やーだ」

夕映さん…。

「まあいや、本屋寄って帰るか」

のどかさんはネギ先生に照れながら一礼した。

~~~~~

く明日菜サイドく

うく解んない…。

他の皆は終わって帰っちゃったし、何か屈辱…。

途中高畑先生に目撃されて更に落ち込むなあ…。

こうなったのも、記憶消去でパーになっちゃったのがいけないのよ！
見てなさい（誰に？）、絶対に見返してやるんだから！（だから誰に？）

そして、ようやく合格ラインに到達したのが、PM8:00を回っていたという。

~~~~~

くランカサイドく

本屋寄って家に帰ったあたしは、期末テスト対策として、エヴァさんと茶々丸さんと一緒に勉強会を開いています。

「なあランカ、ここが解らないのだが…」

「そこはですね…」

「マスター、出来れば私にも頼って下さい…」

そう言えば最近出番が少なかったですね茶々丸さん。

その後は頑張ったご褒美としてお約束。

## お風呂と居残り小テスト（後書き）

何度も言いますが、ランカになってるラウルは女の肌を見たって何も感じない様になってるから、堂々としています。

居残りの方は手抜きでした。

今回はウルスラの人達とドッジです。

## ドッジボール対決？（前書き）

ドッジボール対決の話です。

不動さん出ます。

原作とは違い、11VS8で挑みます。

## ドッジボール対決？

（ネギサイド）

さつきはまで明日菜さん達が高等部の人達がもめ事を起こして大変な事になる所をタカミチがあつと言う間に纏めちゃったな。

僕も教師として負けずに頑張らないと…ん？あつ！？

今一瞬、不動さんを見かけた様な…でも、何でこんな所に！？  
ネギは校舎の影に隠れた不動を追いかけた。

「あれ、いない？やっぱり見間違いかな？」

見かけたと思つたのに…。

「どうしたのよネギ？こんな所に来て？」

「あつ明日菜さん！？」

追いかけて来てくれたのかな…。  
するとその時、

「少年よ…」

「っ！？」

声が出た方に向くと、そこにいたのは、不動さんだった。

「不動さん！？」

「ちよっ！？ネギっ！誰よあの渋いオジサマは！」

「あつ、明日菜さん…」

そういえばおじさん趣味だっというんちよさんが言ってたような。

「久しいな少年」

「お久しぶりです。不動さん」

「あっあの…あたしネギの保護者の神楽坂明日菜です！」

顔を赤くしながら言う明日菜。

「でもどうして不動さんがここに？」

「少年よ…数が多ければ有利とは限らない」

「え？」

「は？」

「限られた場所での多勢は、逆に不利になる」

「えっと…」

「少年達よ…」

不動さんは僕に指をさしながら叫んだ。

「攻めるなら、多く出るな！少数で行け！！」

「！！！！？」

不動さんの一言で、僕と明日菜さんはびっくりしました。

でも、不動さん…それって、どうゆう意味ですか？

すると、

「明日菜さん！ネギ先生を連れ出して、一体何をなさってるんですの！」

いいんちよさんが来た。

ふと不動さんの方を見たら、いなくなっていました。

相変わらず神出鬼没な人だな。

くランカサイドく

今日はまったくと教室でのんびり自主勉強してます。期末に向けてね。すると、外が騒がしい様な…ああ、確か上級生のドッジ部がケンカ吹っかけてきたのね。

一応不動さんを出しておいたから何とかなるでしょ。

「今日はサボれんな、屋上で体育をするからな」

「本当はサボっちゃダメなんだけどね…」

エヴァさんがまたサボろうとしてました。

そして体育の時間、体操着に着替えて屋上に行ったら、ウルスラの人達が占領してた。

当然皆は猛烈に抗議した。ちなみにネギ先生は既に捕まっています。

色々あって、ウルスラの人達と勝負する事になりました。

くネギサイドく

色々あって、上級生の方達とドッジボールをする事になりました。

「貴女達にハンデをあげるわ。こっちは11人で、そっちは倍の2人でかかって来ても良いわよ」



22人か…数で言えばこつちが有「…あれ？そついえば…不動さんの言つてた事に似てる様な？」

『数が多ければ有利とは限らない。限られた場所での多勢は、逆に不利になる。攻めるなら、多く出るな！少数で行け！』

ネギは、不動の言つていた事を思い出した。

数が多ければ有利にならない？多い方が勝ちやすいのに？限られた場所では…ん？

ネギはドツジコートを良く見渡した。

そつか！こんな狭いコートで多く人がいたら逃げられない！あの人達、最初から自分が勝ちやすい様に仕組んでるんだ！

「分かつたわ」待つて下さい明日菜さん！」ね、ネギ！？」

「？どうしたのネギ先生？」

「貴女達は卑怯です！これはハンデじゃない、そちらに都合が良いだけです！」

「なっ！？」

「どうゆう事ネギ？」

「これは罠です！確かに多くいれば勝てるかも知れないという先入観に吞まれてはダメです。このコートを良く見て下さい！このコートで22人なんて大人数がいたら、身動きが取れなくなります！」

「あつ、言われてみれば！」

「これって、ただ単に的が当てやすくなるだけじゃない！」

「ぐうっ！？」

ウルスラの人達が苦虫を噛み潰したような顔をしています。

「ハンデを行うなら、そちらの方の数を減らす事が本当のハンデです！」

「ぐううう……分かりましたわ……11VS8で挑みますわ！」

よし、これでこっちの不利は無くなって対等だ。

出場メンバー紹介。

明石裕奈

綾瀬夕映

和泉亜子

大河内アキラ

神楽坂明日菜

古菲

佐々木まき絵

超鈴音

宮崎のどか

雪広あやか

ネギ・スプリングフィールド（特別参加）

の11名です。



相変わらずのツンデレさんだね。  
余談ですけど、ウルスラの人達がネギ先生にドッジ部にスカウトを  
しました。

## ドッジボール対決？（後書き）

不動さんの表現がなっていないと思いますが、出来れば気にしないで下さい。

選抜した11名はこんな感じで出しました。

一巻分終わりました。

次回は期末試験についてです。

期末テスト編・図書館島の冒険（前書き）

期末テスト編は何回かで分けます。  
最近肉体労働な仕事が増えて来て、帰ってもクタクタの状態の為、  
なかなか書けずにいました。

期末テスト編・図書館島の冒険

「ランカサイド」

「そこはこうであって、そこはそうですよ」

「うーん…」

「マスター、そこは違います。そこは…」

今あたし達は期末試験に向けて勉強中です。

もちろんあたしは常に上位クラスなので勉強する必要はないんだけど、エヴァさん達の成績が悪いから、少しでも良くしないと。

去年のエヴァさんの成績はあまりにも勉強になっていなかったから500位台くらいになってしまいましたけど、あたしが少しずつ教えた甲斐があって、今じゃ400位台です。

茶々丸さんだって本来ならもっと上位にいける筈なんだけど、マスターであるエヴァさんより良い点数を取る訳にはいかないからこの成績だけど、あたし個人としてはエヴァさんにもっと頑張ってほしいと思う。

~~~~~

「ネギサイド」

皆の挨拶嬉しいな。何か最近先生として受け入れられてるっぽいし、

この分なら結構簡単に立派な魔法使いになれるかも。

そう考えながら周りの教室を見ると、何やら必死に猛勉強してる人達がいる様だけど、明石さんと椎名さんに聞いた所、来週の月曜に期末試験があるからだと言う…って期末試験！？何でのんびりしてるんですか！？

しかも2 - Aは毎回学年最下位と聞きました。全然大丈夫じゃないでしょあんまり〜!?

すると、学園長から僕への最終課題が出て慌てましたが、内容を見ると、期末試験で2 - Aを最下位脱出出来れば正式な教師に任命と書かれていた。

この内容だったら皆に勉強をがんばる様にすれば何とかなるだろう… 何とかなるよね？

急に不安になってきたネギだった。

「えーと、皆さん聞いて下さい！今日のHRは大・勉強会にしたいと思います！次の期末テストはもうすぐそこに迫って来ます！実はうちのクラスが最下位脱出出来ない、（僕が）大変な事になるので、皆さん頑張って勉強していきましょ〜！」

「ネギ先生、素晴らしいご提案ですわ」

「はい、提案提案」

「はい！桜子さん」

桜子さんが何か思い浮かんだようですね。何故かいいんちよさんは先を越されたって顔をしてるみたいなの？

「では！お題は、「英単語野球拳」がいーと思いまーす！」

桜子さんの提案で皆さんが盛り上がって行きました。

野球が入ってる事は、それを取り入れた勉強法なのかな？何となく面白そうだけど… というルールなんだろう？ちょっと聞いてみよう。

「すみません桜子さん、英単語野球拳ってどうゆうルールなんですか？」

「それはねネギ先生、英単語が言えなかった人が服を脱ぐっていう

ルールだよ」

「へ〜、言えなかった人が服を脱ぐ…って、えっ!？」

あれ?服を脱ぐって……………ってええー!ー!ーっ!?!?

「ちよっ、だめですよ!それはいけない事ですよ桜子さー!ーん!
!」

こ、こんな能天気な勉強法を思い付くなんて…これは…本気でマズ
イかも…?

~~~~~

〜ランカサイド〜

野球拳は却下してくれたみたいだね。よかった。

ふとエヴァさんの方を見ると、

「命拾いしたな坊や…本当に野球拳なんかやって、ランカを脱がせ  
ようとしたら…八つ裂きにしてやる所だったんだがな…」

エヴァさんが小声で物騒な事を言っています!?!怖いです!?!

休み時間になってネギ先生が何かやるうとしてたら、明日菜さんが  
止めました。

その後明日菜さんがネギ先生を連れ出して行きました。

多分、魔法を封印する為のイベントと、図書館島に行く前振りです  
ね。帰ったら早速準備しないと。

そして家に帰った後、エヴァさんと一緒にお風呂(別荘じゃ無い方)  
に入った後、茶々丸さんが妙な事を言ってきた。

「マスター、ランカさん、放課後妙な噂をお聞きしました」

「「妙な噂？」」

「次の期末試験で最下位を取ったクラスは解散との噂が流れており  
ました」

「…は？」

エヴァさんが心底呆れ顔をしてました。気持ちは分かりますけど。

「他にも、特に成績の悪い生徒は、良くて留年、悪くて小学校から  
やり直しとの噂も」

「アホか」

「さすがにそれは…そんな変な噂を信じる生徒はいくらなんでも」  
ブルルルッブルルルッ」あつ電話！」

あたしは携帯を取って出た。

『ランちゃん、今用事ある？』

「このちゃん？ううん、今は特にないけど？」

『実はな、うちらこれから図書館島に行くんよ。良かったらラ  
ンちゃんも行くえ』

「図書館島に？どうしたの？」

『実はうちらこのままやと、小学生からやり直さなあかんの！だか  
ら手伝ってえな』！』

分かっていたとはいえ…いましたよここに！？

「えっと…その理由はよく解りませんが、とにかく手伝いに行けば  
いいんですね？」

『ホンマに！？ありがとなランちゃん！』

待ち合わせ場所は現地集合（図書館島前）に集合で電話が切れて、エヴァさん達に事情を話した。

「まさか本当に信じるバカがいたとはな…」

「それでランカさんはその人達と一緒に図書館島へ行かれるのですか？」

「うんそうだよ。多分泊まり込みになるからしばらく離れるね」

「何！？ちよつと待て！？なぜそうなるんだ！？」

原作だと二日間地下で勉強するかもしれないからね。

「あそこで勉強会をするから、もしかしたらそこで寝泊まりするかも思つて」

「だったら、私との勉強会はどうなるんだ！？」

「オータムさんをお願いしたら？一応あたしなんだから」

「そ、それもそうだったな…あと、オータムにはナニを付けて貰うぞ！」

「わ…分かりました…。それじゃあ準備するね」

「お手伝いします、ランカさん」

準備をした後、図書館島に向かったランカ。

そこにいたのは、バカレンジャーとネギと図書館探検部がいた。

「皆あ、お待たせ！」

「待ってたわよランカちゃん！」

そして、地下に行くメンバーは、

バカレンジャー

ネギ

図書館探検部（木乃香とランカ）

が行く事になった。

あたしが地下に行く事は、地下で勉強会確定ですね。

~~~~~

～明日菜サイド～

今更ながら私バカだなんて思うわホント…。

いくら記憶が戻って魔法の事が解ったからって、夕映の魔法の本発
言でつい行く事を勧めちゃったからなあ…。

一応ネギも連れて来たけど、失敗したわ…まさかネギが魔法を封印
しちゃったなんて…ホントにどうしよう…。

私たちは図書館島に入って行った。

「この図書館島は明治の中頃、学園創立と共に建設された…世界で
も最大規模の巨大図書館です。ここには二度の大戦中、戦火を避け
るべく世界各地から様々な貴重書が集められました。蔵書の増加に
伴い、地下に向かつて増改築が繰り返され、現在ではその全貌を知
る者はいなくなっています。そこで、これを調査する為、麻帆良大
学の提唱で発足したのが…」

夕映が長つたらしい説明をした後、扉を開いた。

「私たち麻帆良学園、図書館探検部なのです！」

「中・高・大合同サークルなんや」

「うあ〜っ」

「わーっ！？本がいつぱい！ホントにすごいよ！」

思わずびっくりしたわよ！？何この本棚、宙に浮かないと取れない物ばかりじゃない！？…もしかして、この図書館作つたのって…魔法使いの人達！？こないかにも怪しい本棚を普通に取れる様にしたときなさいよ！昔の人達は一般人に見られても怪しまれない自信があつたの！？

「ここが図書館島地下3階…私達が中学生が入って良いのはここまでです」

するとネギが本棚にある本を取ろうとしたら、矢が飛んで来た！？夕映が言うには、盗掘者対策の罠が設置されているとか…って、下手すりゃ死ぬわよそれ……っ！！？

～ランカサイド～

地下に入って本棚の上を歩いたり、トラップを古菲と長瀬さんが片付けて、広間で夜食を取ったり、かなり高い本棚の上を歩いたり、地底湖を進んだり、本棚の崖を下りて、今は天井の低い所でほふく前進しています。

ホントなんですかここは！？人外魔境ですか！？

「ゆ、夕映ちゃん…まだなの…」

「いえ…もう、すぐそこです」

「夕映、けっこ燃えてるやろ」

「ふふ、分かります？」

夕映さんは顔には出しませんが、けっこう燃えていました。

「この区域には大学の先輩もなかなか到達できません。中等部では私達が始めてでしょう。ここまで来れたのはバカレンジャーの皆さんの運動能力の賜物です」

すると、夕映さんは止りました。

「おめでとうです。さあ、この上に目的の本がありますよ」

夕映さんの指差した方には、天井から四角形の光が洩れていました。何とか天井を開けると、そこには広間になっていて、それぞれ剣とハンマーを持った2体の石像があった。片方が学園長先生が化けていますね。

「魔法の本の安置室です。とうとう着きました」

夕映さんが感動してます。でもこの後景は魔法世界でよく目にした様な？

するとネギ先生が奥にある本に気付いたみたい。

「あつ、あれは！？」

「ど、どうしたのネギ！？」

「あれは伝説のメルキセデクの書ですよ！信じられない！？僕も見るのは初めてです！！何故こんなアジアの島国に！？」

「てことは…本物？」

「ほ、本物も何も、あれは最高の魔法書ですよっ！？確かにあれなら、ちよつと頭を良くするくらい簡単かも…」

「えーーーーっ！？ホント！？」

「ネギ君詳しいな」

魔法隠匿はどうしたんですかネギ先生…。

「やったー！」

「これで最下位脱出よー！」

「一番ノリあるー！」

「あー、あたしもー！」

バカレンジャーの皆さんが駆け出した。

ネギ先生とこのちゃんと一緒に皆を止めようと一緒に駆け出した。

「あ、皆待って！？あんなに貴重な魔法書、絶対罠があるに決まっています！気を付けろ…！」

ガコン

「えっ？」

突然、本へと続く足場が開いて、あたしも皆さんも落ちました。

「「「「「キヤー」「」「」」」」

ドシーンと音を立てて落ちました。

「いたた…！」

「わ、私とした事が…！」

「アイヤー！」

「ネギ君、大丈夫？！」

「あたた…！」

「落ちちゃったー！？」

あたしはうつかり落ちかかって、必死にしがみ付いています（本当は楽にしがみ付いていられるんだけど、か弱そうな感じでいつてます）。

「あつ、ランちゃん！？今引つ張るえ！」

このちゃんのおかげで何とかなりました。
すると明日菜さんとまき絵さんが気付きました。

「え…な、何コレ…？」

「コレって…？」

そこに書かれていたのは、

英単語 T W I S T E R V e r 1 0 . 5

と書かれていた。

「つ、ツイスターゲーム…？」

その時、

『フオフオフオ……』

石像が突然動き出した。学園長先生…ノリノリですね。

『この本が欲しくば、ワシの質問に答えるのじゃー、フオフオフオ』

「「「「「キヤーっ!?!?」「」「」

「ななな…石像が動いたっ!?!」

「いやーん!?!」

「……………(声が出せない位驚いている)!!?!」

「おおおお!?!」

「ふむ」

「どうなってるんでしょうアレ…」

「一応驚いておかないとね。」

『参加者は、その頭の悪そうな五人だけじゃ』

「ちよつと、頭の悪そうになって何よー!?!」

原作もそうだったけど、ネギ先生とこのちゃんとあたしは参加できないのね。

そして、動く石像ゴレムに化けた学園長先生からの問題が出された。

『第一問、デファイカルト「DIFFICULT」の日本語訳は?』

「ええー!?!」

「何ソレー!?!」

DIFFICULT(難しい)ですね。

「み、皆さん落ち着いて!大丈夫です!ちゃんと問題に答えれば、罫は解ける筈!落ち着いてデファイカルト「DIFFICULT」の訳をツイスタゲームの要領で踏むんです!」

「ちよつ、そんな事言っても!?!」

「でい…でいふいころと…って何だっけ先生ー!?!」

『教えたら失格じゃぞ』

「いつ、イージー「EASY」の反対ですよ!えと…あつ、簡単じゃないです!」

ネギ先生…それ答えに近いヒントですよ。

「む」

「ず」

「い、ね」

ちゃんと答えようよ…。

『む、「むずい」……（一応）正解じゃ……』

「や、やった！」

「キヤー、これで本GETだねー！」

「あれ？ちよつと待って下さい」

「……ん？」「……」「……」

安心したらだめですよ皆さん。

「あの石像さん、さっき第一問って言ってませんでしたっけ？」

「……えっ！？」」「……」

『第二問、「^{カット}CUT」』

「ってコラコラ!？」

「ちよつとちよつとーっ!？」

その後、何問か立て続けに出されて、明日菜さん達は…、

「あたたたたたっ！」

「い、いたいです…」

「死ぬ、死んじゃう~~~~っ!」

「問題に作為を感じるです…」

かなり無理な体勢になっています。ネギ先生があわあわしています。

「は、早く次を…」

『最後の問題じゃ』

「やった、最後だった」

『「DISH」の日本語訳は？』
ドイツ

「えっ…ドイツシュ…？」

「ほら食べるやつ！食器の…」

「ナイフとかフォークとか箸以外にも食器あるでしょ！」

「メインドイツシュとかゆーやる！」

「わ、分かった！お皿ね！」

「お皿、OK！」

そして、

「お

「さ

「らー！」「らー！」「らー！」

明日菜さんとまき絵さんが踏んでいる場所は、「る」と書かれています。

「」「」「」「」……………「」「」「」「」

「……………おさる？」

「違うアルよーっ！？」

その結果、

『ハズレじゃな。フオフオフオ』

無常にも学園長先生ゴレムにより、足場をハンマーで破壊され、

「明日菜のおさる……………!!」

「皆ごめ……………んっ!!」

全員奈落の底へ落とされた。

~~~~~

「オータムサイド」

本日私は、エヴァ様のお相手を務めさせていただきます。

「まずは足を舐めろ」

「かしこまりました」

どうやら今宵は、主従プレイを御希望の様です。

その様子を、何故か羨ましそうに見つめてくる茶々丸さんの姿も見かけました。

期末テスト編・図書館島の冒険（後書き）

次回は地底図書室で勉強会です。

期末テスト編・地底図書室で勉強会（前書き）

明日菜とまき絵のミスにより奈落の底へと落とされた一行は、一体どうなるのか？

ストーリー風にしてみました。

あと8月頃に、フェアリーテイル〜虹の滅竜魔道士〜を再開しようと思いますので、もう少しお待ち下さい。

## 期末テスト編・地底図書室で勉強会

（ランカサイド）

気を失っていたようです。

目が覚めてみると、そこであたし達が見たモノは…、

「って…ここはどこの…！…！…！？」

明日菜さんが叫んだ。

まあ叫びたくなりますよね。

「こ、ここって、図書館の地下なの？」

「す、すごい…落ちてきた天井があんなに高く…ねえ、地下の筈なのに明るいよ、壁が光ってるし」

すると夕映さんは、

「こ、ここは幻の地底図書室！」

興奮状態で叫んだ。

「地底図書室！？」

「何やそれ夕映？」

「地底なのに温かい光に満ちて、数々の貴重品に溢れた…本好きに取ってはまさに楽園と言う幻の図書館…」

夕映さんがキラキラしながら言った。





「（エヴァ、エヴァ、返事するにや）」  
「（ん？お前達は！？）」

目の前にいたのは、クロとシロだった。

「（お前達何故ここにいる）」

「（実はにや、オータムから伝言を預かって来たにや）」

「（オータムから？）」

「（そうにや、オータムを通してランカからのメッセージが届いてるにや）」

「（何！？それで内容は？）」

「（あたし達の事は心配いらぬにや、だからエヴァも試験勉強に専念して欲しいにや」と言っていたにや）」

「（そうか、余計な心配だったな。分かった、お前達はもう帰っていいぞ）」

「（分かったにや）」

そう言っつて、クロとシロは帰って行った。

さて、私も少しは勉強しないと。

~~~~~

（ランカサイド）

あれから1日が経って、あたしたちは勉強中です。

というより、参考書になる本が山ほど見つかった時はすぐ違和感を持ちました。まあ学園長がここで勉強しやすい様に仕組んだからなのだろうけど…。

「でも不思議だねー。こんな地下なのに都合良く全教科のテキスト

があつたり、トイレにキッチン食材付きで…」
「至れり尽くせリアル」

確かにね。

「本に囲まれて温かくて、ホント楽園やな」

「一生ここにいてもいいです」

「コラァッ！夕映も勉強しなよーっ！」

その後、古菲さんに誘われて、まき絵さん楓さんと一緒に水浴びを
してたら、ネギ先生が偶然覗いてきた。

「「キヤァァァッ！！ネギ（先生・君）のエッチァァァァァッ！！」

「「アルァァァァァ！！」

ハッ！？あたし…無意識に叫んだ！？うっ…感性が女性に近くなっ
てる…帰ったらギアスで根本的な部分を維持しないと…。
ランカが心の中で頂垂れていた。
ネギは逃げようとしたが、楓に捕まった。

「くすくす。ネギ君ったら、顔真っ赤にしちゃって、カワイー」

「ち、ちがつ！？」

「ネギ先生…そうゆうのはいけない事だと思っよ」

「あうっつ、降ろしてー！？」

「ネギ坊主、10歳なのに女の子の裸に興味あるアルか？」

「こないだの風呂場では気にしなかったでござるが…」

「びみよーなお年頃ってカンジ？」

「うりうり〜。おっぱいアルよ〜」

「古菲さん…あんまりからかったらだめだよ〜」

それ逆セクハラですよ古菲さん…。
するとネギ先生は、

「あのっ…そのっ…僕…ごめんなさ〜い！」

「あつ、ネギ坊主ー!？」

「あ〜んネギ君、もつと遊ぼうよ〜！」

ネギ先生は楓さんを振りきって逃げて行った。

「二人とも…あれは明らかに逆セクハラだよ」

「「あははは…」」

「ニンニン」

まき絵さんと古菲さんは顔を逸らしながら苦笑していた。
その時、何かが近づいて来た。

~~~~~

〈明日菜サイド〉

しばらく一人で泳いでいたら、ネギがやって来て、落っこちて来た  
時に出来た傷の手当てをしてくれた。

それにネギから聞いた話じゃ、私達が留年どころか、小学校からや  
り直しというあの噂はやっぱりデマだった様で、本当はネギのクビ  
かどうかだという。

まったく人騒がせなんだから…。

その時、

「「キヤーーーーーッ!?!?!」」

まきちゃんとランカちゃんの叫び声が聞こえた後、木乃香が慌ててこっちに来た。

「大変や明日菜ー！ー！？」

「どうかしたの木乃香！？」

私たちは急いで声が聞こえた方向に向かった。するとそこには、

「誰か助けてー！ー！つー！！」

『フオフオフオ』

まきちゃんが昨日のゴーレムに捕まっていた。

「またあのデカイの！？」

「ゴーレムですよ明日菜さん！？一緒に落ちてたんだ！？」

「どうすんのよネギ！？」

「といわれましても、僕は魔法を封印しているので…魔法が使えないし…」

あーもー、いざって時に役に立たないわね！

『フオフオフオ、ここから出られんぞ、もう観念するのじゃ！迷宮は歩いて帰ると、三日はかかるしの〜』

「ええっ！！？」

「み、三日！？」

「それじゃテストに間に合わないアル！？」

「み、皆、諦めないでっ！？」

「そうよ！私たちは諦めないんだからねっ！明日の期末テストまで

に絶対ここを抜け出してやるっ!」

じゃなきゃ、ここで勉強した意味が無いじゃない!

「とにかく、皆逃げながら出口も探すのよ!」

『フオフオフオ、無駄じゃよ。出口は無い!』

木乃香とランカちゃんが皆の服を取りに行った。  
すると、夕映ちゃんが何かを発見してみたみたい。

「ん? あっ! ? 皆さん、あのゴーレムの首の所を見ます!」

「あっ!」

あれって…魔法の本!? 一緒に落ちて来たの! ?

「あれは、メル……何とかの魔法の書! ?」

「本を頂きます! まき絵さんクーフエさん楓さん! !」

「OK! バカリダー!」

クーちゃんが仕掛けた。

「中国武術研究会部長の力、見るアルよー! ハイッ! !」

ドンッ

『フオ! ?』

すごっ! ? 一撃でゴーレムを怯ませた! ?

「アイっつヤッ! !」

「キヤツ!?!」

すかさずクーちゃんは、まきちゃんを捕まえてるゴーレムの腕を攻撃して離れた。

「よつと」

『フオ!?!』

そしてまきちゃんを離れた瞬間、楓さんがまきちゃんを救出した。

「やあつ!」

『あつ!?!』

リボンで本を手に入れた。まきちゃん…よくあの状態でリボンを使えたね。

「キヤ、魔法の本取ったよ!」

『ま、待つのじゃ!?!』

うわっ!?!追っかけて来た!?!とにかく…

「良しっ、目的の本を手に入れたからには、ズラかった方が良いわね!」

「あのゴーレムの慌てよう、きっと何処かに地上への近道がある筈です!」

とにかく逃げるわよ!?!…ってあれ?ランカちゃんがないような?すると、

「皆!?!」

「ランカちゃん？」

何で滝の所に？

「この滝の裏に非常口があったのー！きっとここが、出口になるかもー！」

『フォーーーーーー!?!?』

「何ですとー！」

「でかしたランカちゃん！」

ランカちゃん最高よ！急いで脱出しないとー！

~~~~~

くランカサイドく

あたしは滝の裏に出口がある事を急いで皆に報告した。

『ま、待つんじゃない?!?!?』

「キヤー!?!?」

「は、早く中へ…って何コレ!?!?」

「扉に問題が付いてる!?!?」

「問1英語問題、「read^トの過去分詞の発音は？」です…」

「ええー!?!?何ソレー!?!?」

「そんな事いきなり言われてもー!?!?」

red^トって答えたい様な…。それにしても、手の込んだ脱出路ですね学園長先生。

「ムムツ!?!?いや…ワタシ、コレ解るアルよ!?!?」

「えっ!?!」
「答えは「red」アルね!」

ピンポン

どこからともなく正解音が聞こえた。

「おおっ!?!」

「ひ、開いたー!」

「皆、急いで中へ!」

『コレー!』

「も、もしかして、この本のパワーで!?!」

「持つてるだけで頭が良くなたアル!」

そんな都合の良い事がある訳無いでしょ。貴女の実力だよ古菲さん。

「うわっ、何コレ!?!」

「螺旋階段!?!」

「コレ、上まで登るん?」

「でも、出口がこの上にあるなら登った方がいいと思いますよ」

「ランカちゃんの言う通りね。急いで登るわよ!」

あたし達は螺旋階段を登って行った。3階ぐらい登った所で、ゴレムが乗り込んで来た。

「キャッ!?!」

「追って来たー!?!」

「しつこいアルなー、ゴレムが無理矢理追ってくるアル!?!」

『ならぬならぬ!?!本を返すのじゃ!?!』

「べ〜〜〜っ」

「もー返さないアルよ〜」

しばらく進んで行くと、途中石の壁が阻んでいた。

「あつ、また石の壁と問題が!？」

「わっ!?!今度は数学問題じゃん!?!」

「問2 数学問題、下の図でXの値を求めよ」です!」

図の方は都合により出せませんので、漫画の方を参照して下さい。
作者さん、メタですよ。

分かっていません。

あたしが脳内突っ込みをしてる間に、ゴーレムが迫って来た。

「あやー、来たえー!?!無茶やな〜」

「ぼ、僕がやりましょうか?」

すると楓さんが、

「う〜ん、 $X \parallel 46$ 。かな?」

ピンポン

ガコオン

「開いた!正解みたいよ!」

「おおお!?!長瀬さんまで!」

その後、順調にバカレンジャーが答えて進んで行った。

「す、すごいです!バカレンジャーの皆!」

「アスナとマキエが答えられるなんて、この魔法の本、本物アル!」

「悪かったわね!!」

ハモッてるね。

しばらく進むと、

「あつっ!?!」

「夕映ちゃん!?!」

「夕映さん!?!」

「こ、こんな所に気の根が…足を挫きました…」

「ええー!?!大丈夫!?!」

「さ、先に行つて下さいネギ先生…この本さえあれば、最下位脱出が…」

「だ、だめですよ夕映さん!?!長瀬さん、夕映さんをお願いします!?!」

「任されたでござる。ニンニン」

「ありがとうございます楓さん」

あれ?確か一度ネギ先生がおぶるんじゃない?

そんなこんなで一時間ほど登り続けて、ようやくエレベーターの所に辿り着いた。

「ああつ、皆見て下さい!地上への直通エレベーターですよ!」

「こ、これで地上へ帰れるの!?!」

わざわざ1F直通つて…しかも作業用つて書いてあるし、何で皆その辺突っ込まないんだろう?

「皆急いで乗つて乗つてーっ!」

「キヤー、早く早く!」

「僕が降ります！皆さんは先に行って、明日の期末を受けて下さい！」

「えっ！？」

「ネギ、だってあんたは…」

「ゴーレムめ、僕が相手だ！」

「ネギくーん！？」

「ネギ坊主！？」

「ネギ先生！？」

『フオフオフオ、いい度胸じゃ。喰らえーい！』

ネギ先生が構えるが、明日菜さんはネギ先生を引っ張った。

「あつっ！？」

『フオ！？』

「あ、明日菜さん！？」

「あんたが先生になれるかどうかの期末試験でしょ？あんたがいな
いまま試験受けてもしょうがないでしょーが！ガキの癖にカッコつ
けてもー、バカなんだから」

「え…でも、このままじゃ、あのゴーレムに…」

「こーすんのよー！！」

「えっ！？そ、それは！？」

明日菜さんの手に持っている物は、魔法の本だった。

「あ…」

「やはりアルか…」

「ですね…」

「それー…っ！」

明日菜さんが魔法の本をゴーレム目掛けて投げた。

「あーーーーーっ!?ま、魔法の本がーーーーっ!?」
『なっ!?!』

魔法の本がゴーレムに当たった。

ネギ先生…未練がましいよ。

『フォツ…フォツ、フォーーーーーー!?!』

バランスを崩したのか、ゴーレムは階段から落ちて行った。
ブザーが止まり、エレベーターの扉が閉じた。

「や、やった、動いたーっ!」

「脱出よー!」

「ふゝ、何とかなっただね」

「で、でも本が…」

「いや、図書館島は散々だたアル」

「ハハハ」

「楽しかったけどね」

「今の時間分かるん夕映?」

「今は日曜の夕方頃ですが…」

「あ、あの皆さん…本…」

「誰も気にしてないよ、ネギ先生」

「えっでも…」

すると、一階に着いた。

「わっ!?!」

「眩しっ!?!」

丁度夕日が差し込んでいたから眩しい。

「まあ、とにかく…外に出れたー！ー！ーっ！！」
「…いえーっ」「」

何とか脱出出来たあたし達は、最後の悪足掻きとして勉強会を開くのだった。

期末テスト開始まで、後15時間後、どうするバカレンジャー！？

~~~~~

（オータムサイド）

本日も私は、エヴァ様のお相手を務めさせて頂きます。  
今宵は茶々丸さんも一緒にエヴァ様の御奉仕をしております。

「マスター、気持ち良いでしょうか？」

「エヴァ様、胸のコリはホグレましたか？」

「ん…ハア…イイ…つか茶々丸ん！？お前…アツ…いつの間に…う  
ウ…そんな上手に…んん！？」

私はエヴァ様の豊満な胸を揉み扱き、茶々丸さんはエヴァ様の秘部を舐めていた。

「はい。いつもランカ様やオータムさんの行為を見て、私なりに練習していました」

「そ…そうか…もういいだろ！オータム、早く入れてくれ！」

「分かりました」

「マスター、オータムさん、私は続けて舐めてもよろしいですか？」

「ああ構わん」

「それでは行きます」

しばらく私たちは交わり続けていた。

何故明日テストだと言うのに、こんな事しているかですか？  
それはエヴァ様が、

「あゝもゝ飽きた！オータム、行くぞ！」

勉強に飽きて行ったという事です。

そして茶々丸さんも一緒なのかというと、

「何故だか知りませんが、マスターとランカ様やオータムさんの行為を見て、私もと思いました」

茶々丸さんが以外にも乗り気でした。

少し経ちましたら勉強再開としましょう。

**期末テスト編・地底図書室で勉強会（後書き）**

茶々丸が参戦しました。

次回は期末テストが行われます。



## 期末テスト開始（前書き）

何とか地上に戻れた一行は、果たして成績が良くなっているのか？  
ネギの首は繋がるのか？本編を待て。

## 期末テスト開始

くエヴァサイドく

……遅い……もうすぐテストが始まる時間だというのに……まだ来ないのか？

「もう予鈴が鳴ってしまいましたわよ！あのバカレンジャーはまだ来ませんの！？」

「来ないですー、もーダメかもー」

「ほら君たち、テスト始めるから早く席に着いて」

ランカあ……テストに出ないのかあ……早く戻って来おい……。

若干上の空状態なエヴァだった。  
その時、

「あつ、見て！」

ん？村上が何か言ってるな？

「バカレンジャー達が来たー！」

「図書館組とネギ先生も一緒よ！」

「皆ー！早く早くー！始まっちゃっうよー！」

やっと来たか……私を心配させるなランカ。

~~~~~

くランカサイドく

あたし達は何とかテストに間に合った。

『試験時間は50分です…では始め』

そして期末テストが始まった。

「うう…やっぱり難しい…」

「それに眠いアル…」

「やっぱり徹夜は失敗だったかな…」

「コラ、私語をしない！」

うう…眠くて集中出来ない…まずいかも…。

その時、良い香りがした。

そうか、ネギ先生がリフレッシュの魔法を掛けてくれたみたいです。これなら何とかかなります。

しばらくして、終了時間となった。

どうしよう…リラックスした所為で全部解けちゃった…のどかさぐらいに留めて置きたかったのになあ…。

「どう！？出来た？」

「「「……………」」」

「やるだけやたアル…」

「もう遅刻するなよ」

新田先生が退室した。

放課後、家に帰りました。

「まったく、遅いぞランカ！」

「ごめんなさいエヴァさん…」

「間に合ったから良かったものの、お前が出られなかったら意味無いではないか！」

「うっ…」

「とか言いつつも、ランカさんが帰って来ないと右往左往してお」「黙れボケロボ！回してやる回してやる！」ああ…いけません…マスター…」

照れ隠しをしながら茶々丸さんのネジを回すエヴァさん。

その後別荘でいっぱいエヴァさんの相手をしました（魔法の鍛錬やら性行為やら）。

そして、クラス成績発表会の日になった。

「いよいよ今日ですね。ネギ先生の運命が決まるのは」

「茶々丸…誰に言ってるんだ？」

「何となくです」

「エヴァさん、あたし自分のクラスに食券30枚程賭けました」

「そんな無駄遣いするなよ」

「ですので、この食券は茶々丸さんが預かって下さい」

「分かりました」

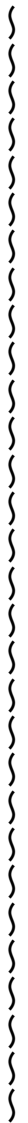
解りきってますけどね。

「それじゃ先に行ってくださいね」

「ああ」

「行ってらっしゃいませ」

早く皆に合って結果と一緒に見ないとね。



～三人称～

ネギとバカレンジャー達は、中等部のラウンジにいた。どうやら結果発表が始まる様だ。

「うっ、ドキドキする!」

「まったくウチの学校は何でもお祭り騒ぎにするんだから。トトカ
ルチョもやってるし…」

近くで古菲がS・Bに賭けていた事がその証拠。

「でも、最下位で小学生からやり直しがデマで良かったです」
「発表もちよつと気が楽アルね」

「コラッ! くーふえ、ゆえー!」

「ム、そうだたネ…そのかわりネギ坊主がクビに…」

「いえ…」

「大丈夫やてネギ君、皆頑張ったし。ウチも自信あるえ」

「そうですよネギ先生、きつと大丈夫です」

「は、はい、ありがとう木乃香さんランカさん」

いよいよ結果発表の時間になった。

1位、2位と別のクラスの名前が出ていき、残るは三クラスとなつた。

『下から3番目の22位

2・P!70・8点!』

「ひいっ!?!」

「ま、まずいよ!?!次出て来ないと最下位決定…」

いよいよ残り二クラス。

『次は下から2番目…』

「2 - A！」

「2 - A 頑張るアル！」

『ブービー賞です』

ゴクッ

生唾を飲む様な音がこだました。

『えーと、これは…』

結果は…

『2 - Kですね。平均点69.5点。次回は頑張ってくださいね』

「「「「「「「「「「「「（え…という事は…）」「「「「「「「「「

ここに、2 - A最下位が決定した。

そして、

「「「「「「「「「最下位確定————！！？」「「「「「

「」

ただ今バカレンジャー達は呆然自失状態です。
ネギはそつとその場から出て行った。

~~~~~

ランカサイド

ネギ先生がいつの間にかいなくなつて、皆慌てていました。さつき明日菜さんが、急いで外に出ていたのを見たので、後を追いかけてきました。

すると、改札口にいるネギ先生と明日菜さんを発見しました。

「ま、待つてーネギくん！」

「ネギ坊主ー！」

「み、皆!？」

「!?!、今更合わせる顔が無いです!さよなら明日菜さん!」

「あつ、ネギ!？」

ネギ先生が逃げだそうとしたが、

「それっ!」

「あぶっ!?!」

「キヤー!?!ごめんネギ君!」

まき絵さんのリボンで止めた事で転んだネギ先生。

皆が改札口を飛び越えてネギ先生を説得し始めました。飛び越えて良いのかな?

「ネギ君、もう一度お爺ちゃんに頼み行こ。な?」

「えっ…」

「そうだよ!ネギ君こんな子供なのに厳し過ぎるよー!」

「も一度テストやらせて貰うアル!」

「い、いえでも、最終課題は僕も納得の上での事ですから…」

すると、後ろから声が聞こえた。

「フオフオフオ、呼んだかのう？」  
「え？」

そこにいたのは…

「……………がつ、学園長先生……………!?」  
「……………」

ぬら「…学園長先生だった。

ここで点数を言うイベントだね。

「いやーすまなかつたのネギ君。実はの…遅刻組の採点をワシがや  
つとつてのう。うっかり2-Aのクラス全体と合計するのを忘れ取  
つたんじゃよ。報道部の生徒にこっぴどく叱られてしまったわい」  
「……………えっ……………」

一声溜めて…

「……………え……………!?何ですかそれ!?」  
「……………」

意図的なのか本当にうつかりなのか解りずらいですからね学園長先  
生は。

「そ、それって、つまりウチら9人分の点数が入ってへんゆー事？」  
「じゃ、じゃあ…ひよつとしてひよつとすると、私たち最下位じゃ  
ないって事も？」

「で、でも私たちバカレンジャーの点数を足したくらいじゃあんま  
り……………」



「では、ここで発表しちゃおうかの」

良いんですか学園長先生？

「まずは…佐々木まき絵、平均点66点。ようがんばったの」

「ええっ！？うそっ…66点！」

「部活熱心なのは良いが、もちっと勉強もな」

「は、はいっ…」

まき絵さんが照れながら喜んでいた。

「次に古菲、67点。長瀬楓、63点。この調子で頑張るのじゃ」

「ホ、ホントアルか！？」

「うむ」

「ニンニン」

古菲さんは驚き、楓さんは微笑んでいた。

「綾瀬夕映、63点。普段からもっと真面目にの」

「(やだ…)」

夕映さんは相変わらず無表情です。多分心の中でやだって考えてるでしょうね。

「早乙女ハルナ、81点。宮崎のどか、95点。ランカ・クルセイ  
ド100点満点。木乃香、91点。この辺は問題無いのう」

バカレンジャー達は啞然としてあたし達を見た。多分あたしだけを見てるのかも知れない…。

「最後に神楽坂明日菜、71点」

「えっ…?」

「あっ、すごい!」

「ようやくた明日菜ちゃん」

これで結果が判りましたね。

「あ…じゃあ…!」

「うむ、これを2・Aに合計すると…平均点が81・2点となり、0・4の差で…なんと!2・Aがトップじゃ!」

「……………や…やった……………っ!」「……………」

見事1位に輝きました。

その後、皆でネギ先生を胴上げして、1位になった事を喜び、分かち合った。

そして放課後、

「ただいまー!」

「帰ったかランカ」

「やりましたねエヴァさん!」

「まさか本当に1位になるとはな」

「大穴当てちゃいました!」

「おめでとうございます、ランカさん」

「という訳で、皆で外食しない?」

「外食か…偶には良いか。なっ茶々丸」

「はいマスター」

三人で行こうとしたら、

「オイ、俺達モドツカ連レテケヨ！」

「偶には外で食べたいにゃ」

「そうだにゃ」

「じゃあ、皆で行こ。オータムさんも一緒に」

「分かりました、ランカ様」

チャチャゼロとシロとクロが言いだしてきたので、連れていく事にしました。

オータムさんは分身とはいえ、仲間はずれはしたくなかったから一緒に行く事にしました。

~~~~~

〈オータムサイド〉

ランカ様達と食事した数日後、学園長にちょっとしたお仕置きをする為に学園長室に来ました。

「おや？オータム君かの？ワシに何の様じゃ？」

「はい、マスターから手紙が届いたので、学園長に渡す様頼まれました」

「なんと、ラウル殿からかの！？」

「はい」

学園長に手紙を渡しました。

そして手紙を展開させた。

『ラウルだ、つーかアンタ、ランカに何か危険な目に遭わせてねーかここ最近でよお。ランカに怪我させたのなら、学園諸共消すぞ！一応忠告したからな』

「ふおっ!?!」

「先日ランカ様が話していました。図書館島の地下で動く石像に襲われたとか?」

「ふお…そ…そうなのか…の…」

慌ててますね学園長は。

「マスターからの忠告ですので、くれぐれもランカ様に手を出さないで下さいね。私が監視しますので、逐一マスターに報告しますので」

「き…気を付けるのう…」

これでランカ様には下手な事は出来なくなりましたし、学園長も少しは大人しくなるでしょう。

期末テスト開始（後書き）

マクロス7要素は全然必要無かったので消しました。
次回は千雨と双子のイベントとランカのイベントです。

ちゅと散歩部とアイドルと(前書き)

今後、歌詞は全部省きます。

これからは曲名だけを書きます。

新作の締め切りは8/31にします。

ちつと散歩部とアイドルと

（千雨サイド）

「まったく、この学園って何から何までおかし過ぎるっての！特にあのガキだ！

あのガキは何にもしてねーのに皆支持してるし、つか1日サボってたじゃん！それに、10歳で教師って、労働基準法を軽く無視してるだろ！誰か突っ込めよ！！

千雨は学校を休んだ。

そもそもあのクラスはおかしいんだよな、1年の頃から思ってたけど…異様に留学生が多いし、何かデカイのやら幼稚園みたいのやら…。

「だいたい何だあのロボは！？何で誰も突っ込まないんだよ！？どー見てもロボだろロボ！？」

千雨は様々な愚痴を言った。

「極め付けはあの子供教師！？ムキーーーーッ！？あたしの普通の学園生活を返せーーーーっ！！」

あたしを理解してくれるのは、かなめ先輩だけだ！あの人と愚痴り合った中で、この学園であたし以外の常識人だからな。

その後、あの子供先生がやって来て、あたしがネットアイドルという秘密がバレてしまった。

やっぱあのガキ、いつか社会的に抹消してやる…。

~~~~~

く千鳥サイドく

千雨ちゃんも大変ね…。

今日、千雨ちゃんからメールが来てた。

『かなめ先輩…あの普通じゃないクラスに恥ずかしい目に遭いました』

実際その状況をランカを通して見てたから、何とも言えないけどね。取り合えず返信しとくわ。

『千雨ちゃん、何があつたかは知らないけど、次の休みに一緒に買い物でも行かない？気分が少しでも晴れれば良いけどね』

と返信した。

~~~~~

くネギサイドく

春休みに入って少し経った頃、明日菜さんと木乃香さんと一緒に学園内を見て回ろうと思ってきましたが、二人と逸れてしまいました。

「でも、麻帆良学園は自然がいっぱいで良い所だな」

そう思ってたなら、

『ピンポンパンポーン。迷子のご案内です。中等部英語科のネギ・スプリングフィールド君、保護者の方が展望台近くでお待ちです』

思わずこけてしまいました。

「うわーん、僕先生なのにー！」

僕は急いで展望台に向かい、明日菜さんと合流した。

展望台を見渡して見たら、かなりの規模の学園都市だと思い知りま
した。

その後木乃香さんは、学園長からのメールが来て、明日菜さんと一
緒に用が出来てしまったそうです。

一人で行こうとしたら、

「ネギ先生ー、何してんのー？」

「あつ、鳴滝さん達だ。こんにちはー」

学園の案内は鳴滝さん達にお願いして、一緒に回る事になりました。
中等部の体育館に案内されました。

裕奈さんのいるバスケ部やまき絵さんのいる新体操部など回りました。
でも、更衣室に連れて行こうするのは止めて下さいね風香さん
…。

次は屋内プールです。

アキラさんのいる水泳部がありましたけど、水着だらけで目のやり
場に困りました…。

次は屋外体育クラブに来ましたけど、柿崎さんと釘宮さんと椎名さ
んのチアの格好でもうコメントが出来なくなりました…。

何でそうゆう所しか見せないんだる風香さんは…。

結局1日では全部回れないらしい、文化部の方は何と160個もあ
るらしい。ホントどんな学校ですかここ…。

すると、歌声が聞こえてきました。

「あれ？歌？」

「あつ、ランカちゃんの歌です」

「えっ、ランカさんの？」

「ランカの歌はファンが多いからね。麻帆良のアイドルって言われる程歌が上手なんだよ」

「へ」

「そうだ！ちよつと覗いてみようよ」

「えっ！？でも邪魔になったら悪いですし……」

「いいからいいから、行こネギ先生」

「ちよ、ちよつと〜！？」

「お、お姉ちゃん！？ネギ先生！？待つて下さい〜！？」

風香さんに連れられて、歌の聞こえる方へと向かった。

茂みの奥から聞こえるみたいだ。

しばらく進んでようやくランカさんを見つけた。

「~~~~~」

不思議な感じになる歌だな……。

何故だろ？何だか子守唄みたいな聞こえるような……。

「~~~~~」

んも！？

「あつ、〜めんなさい！？」

歌を中断させてしまいました！？

~~~~~

〜ランカサイド〜

あたしは偶に一人で歌う事があるから、今日は茂みの中で唄おうと。  
ランカは、アイモを唄った。

「~~~~~」

唄ってる内に何か気配を感じる様な…。

ランカは唄いながらも、周りを注意して見たら、

「~~~~~」  
「…つえ、ネギ先生！？風香ちゃん、史伽ちゃんも!?」

「あつ、ごめんなさい!?!」

ネギと鳴滝姉妹が目に入った。

な、なんか恥ずかしいな…。

「歌の邪魔をしてしまったってごめんなさい!」

「えつと…ネギ先生、別に構いませんよ。歌は一人で歌うより、誰かに聞いた方が良いと思いますので、良かったら聴きますか?」

「良いんですか?」

「やったー!麻帆良のアイドルの生ライブだー!」

「お姉ちゃん!?声が大きいですよ!?!」

そして、歌を披露しました。

それが、愛でしようと、君に吹く風を唄いました。

パチパチパチパチ

三人とも拍手をしてくれました。

「サイコー!」

「素敵です!」

「良い歌でした！」

「ありがとうネギ先生、風香ちゃん、史伽ちゃん」

あたしはネギ先生と別れて、その辺を散歩しながら帰ろうとしたら、

「ん？ランカじゃないか」

「あつ、真名さん、こんにちは」

真名さんに会いました。

「最近つれないじゃないかランカ」

「えっ？真名さん？」

「私だってな、お前とイチャイチャしたいんだからな」

「ぶっ！？」

いきなり何言うの真名さん！？

「ちよつと真名さん！？いきなりどうしたの！？」

「ああ、最近エヴァの様子を見てたら、女というものが先に進み過ぎてる様に思えてな」

そ、それは…ほとんど毎日の様に…シテるから…。

「私もお前としたいぞ！お前は私のマスターなんだからな！」

「そ、それとこれとは話が違います…って真名さん！？」

その後、無理矢理龍宮神社に連れられて、真名さんの始めてをシマした。

家に帰った後、こうゆう事に敏感なエヴァさんに嗅ぎつけられてバ  
してしまい、お仕置き用のペ バ ドを装備したエヴァさんに…

いや…ここからは言いたくないです…。痛かった…。  
あの後必死で、男の尊厳が無くならない様にと、自己ギアスを念入りに掛けました。

~~~~~

くネギサイドく

うっ…僕先生なのに…子供扱いして…クラス名簿に書くって。

「あれ？ネギお帰りー。どーだった？あの双子の学園案内は？」

「え…べ…別に…うまくいきましたよ…」

「んー？何か態度がおかしいわね？顔真っ赤だし」

「クラス名簿に何書いとるん？ネギ君」

明日菜さんと木乃香さんはクラス名簿を取り上げて中を見たら、何故か二人は顔を赤くしていた。

どうしたんだろうと、ネギも覗いてみると、

鳴滝 風香

大人の味

鳴滝 史伽

意外とテクニシャン！？

と書かれていた。

「えっ…あれ！？うそっ！？僕こんな事書いてん」あ…あんだ達、何やって来たのよー！？」ええっ！？」

「ネギ君、詳しく聞かせてー」

「あーっ、ちがつ、違いますーっ！っ！？」

何でこんなのが書かれてるんだよーっ！っ！？」

~~~~~

〜風香サイド〜

クラス名簿にちょっと書き足しちゃいました。

くくく…ネギ先生、ボクらを子供扱いした罰だよ。

「お姉ちゃん！私の所になんて書いたのっ！？」

いいじゃん別に。

## ちつと散歩部とアイドルと（後書き）

折角 A・C・E・R・に出てる作品のほとんどの歌を聞きながら書いたのに、歌詞の無断転載が出てしまったから、歌を全部消しました。

俺が調べて書いた2週間分返せよ。

遂に真名とランカの始めてを喪失しました。

尚、クラス名簿のランカの所には、「歌がとっても上手」と書かれています。

新作候補のゼロのロストマジック使いのオリ主は、主人はルイズにしますか？テファにしますか？

アイモくマクロスF ED2テーマ曲

それが、愛でしようくフルメタル・パニックくふもっふ OPテーマ曲

君に吹く風くフルメタル・パニックくふもっふ EDテーマ曲

今回はネギの婚約騒ぎです。

パートナー探しとお見合い？（前書き）

お久しぶりです。

雪広あやかの話は、ランカは出ないので飛ばします。



パートナー探しとお見合い？

（ランカサイド）

あたしはエヴァさんと茶々丸さんと真名さんと一緒に喫茶店に来て  
います。

何故この状況かというところ、散歩に行こうとしたあたしをエヴァさん  
と一緒にいくと言い出して、茶々丸さんも同行して、途中真名さん  
と出会ってエヴァさんと一悶着あったので、喫茶店で落ち着こうと  
考えたので喫茶店に来ました。

「言っておくが、正妻は私だからな真名！」

「そうはいかんぞエヴァンジェリン、私も狙っているのだからな！」

何の話でしょう？一体二人は何を話してるんでしょう？

「鈍感ですねランカさん……」

茶々丸さんにそう言われましたけど、鈍感ってどういう事ですか？  
相変わらず色恋に気付かないランカだった。  
するとそこに、

「ネギ先生ー！是非とも私をパートナーにー！」

「私も私も、ネギ王子ー！」

「わあー！ーっ！ーっ！？」

3・Aのクラスのほとんどの女子がネギを追いかけていた。

「何だ…アレは？」

「今朝の事、本気にしてたとはな…」

「今朝の事って何ですか？」

「ああ…実はな…」

真名さんの話では、鳴滝姉妹がネギ先生が実はお嫁さんを探しに来た騒いでいた事で、クラスの皆さんは本気にしてネギ先生にアプローチしに来たとか…よくそんな話になっているのね…。

「下らんな、どうせ魔法使いの従者パートナーの事を曲解して伝わっただけだろ？」

エヴァさん大正解です。

そして、

「パートナーと言えば、私とランカは仮契約を結んでいるから、ランカは私のモノだぞ真名！」

「何を言うエヴァンジェリン！それを言うなら私の方が早くにランカで仮契約をしているのだ！」

二人の間に火花が出てる様に見えるのは、気の所為と感じていたいです。

「鈍感ですねランカさん…」

また茶々丸さんに言われました。

~~~~~

くネギサイドく

ネギは今、クラスの子供達から逃げる為に空を飛んでいた。
何か…僕の従者の話に変な風に伝わっていますし、どこかに隠れな
いと…。

そう言つて学校付近に身を隠す事にしたネギ。

「ふう、ここならあれ？びっくりしたあ」「え…あつ!？」

ネギの目の前にいたのは、着物服を着た女性がいた。
しまった…全然知らない人に魔法を見られちゃった!？

「ど、どこのどなたか存じませんが、今のはつまりあのその…」「ネ
ギ君ネギ君」あれです!今流行りのワイヤーアーク!ってゆうか…
CGなんです!」

テンパリ過ぎなネギだった。

「ウチやウチ」

「え?ウチつて…あつ!？」

ネギは気付いた様だ。

「木乃香さん!？」

着物を着た女性は、木乃香だった。

「何や急に出て来たからびっくりしたわ。そーかCGか、なる
ほろ」

「わースゴイ!それキモノですよね!キレイーっ!木乃香さん何で
そんな格好を？」

「ネギ君こそどうしてこんな所に？」

その時、

「木乃香様ー!?!」

「どこですかー!」

「ん…アレは?」

「あっ、アカン!?ネギ君、ウチ逃げなアカンの!」

「えっ、逃げ?実は僕もなんです!」

ネギと木乃香は、教室へと逃げた。

そしてネギは、木乃香の事情を聞いた。

「えーっ、木乃香さんがお見合いー!?!」

「そーなんや、おじーちゃんがお見合い趣味でな。いつも無理矢理勧められるんよ」

木乃香さんがお見合いですか…:そういえば、

「お見合いって、何ですか?」

「ありゃ」

木乃香はずっこけた。

木乃香さんが言うには、将来の結婚相手を探す日本の慣習だとか?相手の写真を見た所、皆さんカツコイイ人ばかりですね。職業も立派な人もいますし、医者とか弁護士とか。でも木乃香さんは不満そうですね?

「まだウチら子供やのに、将来のパートナーを決めるなんて、早過ぎると思わへん?」

「うーん…そうですね。分かります木乃香さん!」

「そういえばネギ君もパートナー探し中やったっけ？」

本当は従者をなんですけどね。

それで木乃香さんは、僕のパートナーがどんなのか占ってくれる様です。

何でも木乃香さんは占い研究会の部長さんでしたとか、木乃香さんの占いつて何となく当たりそうだな。

「ネギ君の将来のパートナーはな、ものすごく近くにおるで」

「えっ!？」

「その人は…この春休みまでに、ちよつとでも仲良くなった女の子やな」

「ふむふむ…」

クラスの半分はいますね。

明日菜さんとか木乃香さんとか、宮崎さんにバカレンジャー、鳴滝さん達やランカさん、運動部の人達に早乙女さんに長谷川さんにいんちよさんとか。

「あらややなあ、ネギ君今日までその子のパンツを見とるえ」

「え、っ、ぱぱ…パンツ!？」

そう言えば結構見てるかも…。

「ん、そしてその子は…ツインテールと鈴がチャームポイントのちよつと乱暴者な女の子やな」

「ぶっ!？それってまんま明日菜さんじゃないですか!？無理矢理占わないで下さいよー!」

「アハハ、今のは冗談や」

まったく木乃香さんは人が悪いですよ。

「それにネギ君、ウチもな…」

「え…?」

木乃香さんがそつと僕を抱き寄せた。

「ネギ君が来てから、可愛い弟が出来たみたいで嬉しいえ」

「こ…木乃香さん…」

するとネギは、

「ぼ、僕は弟じゃなくて先生ですよー!」

「ネギ君怒ったー」

すると木乃香は、着物に足が引つ掛かってすつ転んだ。

「わ!?!」

「きゃ!?!」

み、見ちゃった…木乃香さんのパンツを…。

「あちゃー、ウチもパンツ見られてもーたかな」

「いえっ、その…」

その時、背後から声が聞こえた。

「ふふふ…お二人とも、仲がよろしい様で…」

「えっ?」

後ろを振り向いたら、明日菜さんといいんちよさんがいました。

「ネギ… あんたねー、心配して探しに来てみれば…」

「あっ… 明日菜さん…」

「木乃香さん… 貴女という人は… 大人しそうな顔してネギ先生を誘惑するとは… き、着物まで用意して…」

「いやないんちよ、これは違うねん…」

「あっ、明日菜さん、誤解だ… こっちだぞー！」えっ！？」

嫌な予感！？

そう、クラスのほとんどの女子＋木乃香のボディガードが教室に押し寄せて来たのだった。

「ネギ王子ー！」

「発見ー！」

「木乃香お嬢様ー！？」

「ネギ王子ー、私と私とー！」

「わ… 私もー…」

「木乃香お嬢様！今日は逃がしませんよ！」

「玉の輿だー！」

「木乃香さん！抜け駆けは許しませんよー！」

「あーん、明日菜助けてー！？」

「明日菜さんー！？」

「ええーい、うっとうしいー！？」

結局皆さんが来て、騒がしくなっていました。

~~~~~

（ランカサイド）

「さあランカ！思いっきりヤルぞ！」

今日のエヴァさんはいつになく積極的です！？  
昼間に真名さんとケンカした時から何か熱くなっていますけど、それと関係が！？

「恐らく、真名さんにランカさんを取られたくない一心での行為だ  
と思います」

「うっさいぞポケロボ！思いっきり巻くぞコラ！」

「とうかが助けて下さい茶々丸さん！？」

日に日に激しくなってますんかエヴァさんの行為は！？



パートナー探しとお見合い？（後書き）

真名に嫉妬するエヴァでした。

次回はいよいよエヴァのイベントです。ランカの方もあのキャラになってエヴァに協力します。

桜通りの吸血鬼と千の時を生きる魔女（前書き）

久々の投稿です。

実際千年生きてる訳じゃありませんが、例えとして出しただけです。そして、ラウルが新たに变身します。題名を見れば誰に变身するか分かりますよね？

## 桜通りの吸血鬼と千の時を生きる魔女

（ランカサイド）

もうじき春休みが終わりますね。

ちなみにエヴァさんは、学園長先生に呼び出されて今はいません。多分もうじきネギ先生の魔法試験的な展開が起こる為の準備だと思いますね。

最初はこの流れは特に感じませんでした。魔法世界の事を考えると温く感じてしまいますね。

だから、あたしも手伝おうと思います。…あ、帰ってきましたね。

「帰ったぞ」

「エヴァさん、学園長先生から何の話だったんですか？」

「ん？搔い摘んで話せば、坊やを鍛える為の踏み台になれって言われてな」

「身も蓋もありませんね…それで、具体的にはどうするんですか？」

「向こうで吸血鬼の噂を流すそうだから、適当に生徒を襲って、坊やに気付けさせる様仕向ける事だな」

やっぱりそうきましたか。

「そういえばエヴァさん、よくその話を飲みましたね？」

「ジジイが言ってきたのでな。やってくれたら呪いを少し軽減させようってな」

「もう掛ってないの？」

「ああ。腹の中で爆笑物だったが、抑えるのに必死だったぞ」

と言う事は、向こうはエヴァさんの呪いがもう解けてる事に気付い

てないって事ですね。

「それでエヴァさん、さっそく行くんですか？」

「ああ、春休みが終わる辺りで動いてくれとも言われてるからな」

「じゃあ、あたしも手伝いますね」

「はあ！？待てランカ、お前が関わったら色々とマズイだろ！？」

「大丈夫ですよ。手伝うと言っても、「ランカ」としてじゃありませんよ」

「なるほど、例の分身体か」

「そうですよ」

これで、あたしとエヴァさんの悪巧みが始まった。

~~~~~

〜ネギサイド〜

この一年、真面目に先生の仕事をこなして、立派な魔法使いになるぞ！

ネギはそう意気込み、自分のクラスへと向かった。

「……………3年！A組！ネギ先生っ！！」

「……」

「（バカどもが……）」

「（アホばっかです……）」

「えっと…改めまして、3年A組の担任になりました、ネギ・スプリングフィールドです。これから来年の3月までの一年間、よろしくお願いします」

「……………はい！よろしく〜！！」

この学園に来てから春休みまでの間、仲良くなった生徒さんがいっぱい出来ました。

それでもまだお話してない生徒さんがいっぱいいるなあ。この一年間で32人全員と仲良く出来るかなあ？
すると、ネギは何かに気付いた。

「ん？（何だ！？この鋭い視線は？）」

その視線の先を見ると、（ネギ目線で）左側の一番奥の席のエヴァンジェリンを見た。

ゾクッ

っ！？何、この寒気は！？

あの娘は…出席番号26番、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルさん…「困った時に相談しなさい」ってタカミチが書いてあるけど…あの娘は一体？
すると、しずな先生が教室に入ってきた。

「ネギ先生、今日は身体測定ですよ。3・Aの皆もすぐ準備して下さいね」

「あ、そうでした。分かりましたしずな先生」

こんな時こそ慌てずにとって不動さんが言ってたしね。

「では皆さん、僕が退室したら準備しておいて下さいね」

そう言ってネギは退室した。

~~~~~

くランカサイドく

前々から思ってたのですが、やっぱりこの世界のネギ先生は原作と少し違うよね。

原作だと無自覚セクハラな事してたのに、こっちだとそうゆうのは少ないなと思いますね。

後、身体測定があるから、皆下着姿になってるのに君は良いのか？  
っと思う人もいるかもしれないけど、重ねて言いますが、あたしはランカになつてからはそうゆうのは感じなくなつて、むしろ真名さんや長瀬さんみたいにスタイルが良い人を見ると逆に落ち込みやうあたしがいます。

あつ、柿崎さんが例の吸血鬼の話をし始めましたね。

「真つ黒なボロ布に包まれた…血まみれの吸血鬼がー！」  
「…キヤーツ!?」「」

今ので鳴滝さんたちとのどかさんが怯え始めました。  
するとエヴァさんが、

「噂の吸血鬼はお前の様な元気で粹の良い女が好きらしい。十分に気を付ける事だ」

そう言ってますね。それはそうとエヴァさん。  
ランカはエヴァに近づいた。

「エヴァさん」

「何だランカ？」

「エヴァさんて、実は明日菜さんが好みとか？」

「なわけ無いだろ!」



そうだ、今の私は魔女だからな。

「C・C<sup>シイ</sup>だ」

そう、コードギアスの魔女、C・C・（服は黒の騎士団時の服）になっっている。

念の為に家にはランカ（分身体）を残しています。

「…何でC・C・何だ？」

「この姿の本名のイニシャルだ」

「イニシャル…ですか？」

「気になるぞ」

「ふっ、後で教えてやる」

「さっきからムカつくな、その喋り方は…」

こうゆう言い方なのだ。しょうがないだろ？

C・C・がそう言っと、持ってきたピザを食べ始めた。

しかし、C・C・になると、ピザが極上の味になるな。これならピザ以外は食う気がなくなるのも頷ける。

「何故ピザを食べているんだ？」

「私の主食だからだ。これからはこの姿になってる時は毎食これにするからな」

「飽きませんか？C・C・さん」

「この姿になっっている時のピザは極上品だ。他の料理なんか食う気がしなくなるぐらいにな」

「了解しました。C・C・さんになられてる間は、ピザをお作り致します」

「やらんでいいー！」



「エヴァンジェリン、私を餓死させる気か!？」

「他のを食べ他を!」

「やだ!」

そうは言ってもな、C・C・はピザ以外の物を食べてる姿は見た事が無いぞ？

すると、茶々丸が誰か来る事に気付いた。

「マスター、C・C・さん、宮崎さんが来ました」

「では私たちは手筈通りに動くでしょう」

「私はここだとゆう時にしか出ないが？」

「構わん、そうなった時は頼むな」

「分かった」

エヴァンジェリンは、宮崎のどかを襲った。

~~~~~

〜エヴァサイド〜

新しく変身したC・C・か…何気にスタイルはあったな。

おっと、余計な事を考えている場合じゃなかったな。

さて、坊やは来るかな？来なければまた自分の生徒が犠牲になるぞ。

「怖くない…怖くない、です…怖くない、かも…」

臆病な奴がよくやる自己暗示しながら歩いてるな宮崎のどか。

そろそろ姿を現すか。

照明の上に立つエヴァ。

「えっ…ひっ!?!」

「出席番号27番、宮崎のどかか…悪いけど、少しだけその血を分けて貰うよ」

「キヤアアアアアッ!?!?!」

のどかの前に下り、血を吸おうとするエヴァだが、

「待てーっ!?!」

「!?!」

「う〜ん…」

来たか坊や!

のどかはシヨックのあまり気を失った。

「ぼ、僕の生徒に何をされるんですかーっ!」

ネギは、魔法サキタの射手・戒めマギカの風矢アエールを放カフトウーラエってきた。

「もう気付いたか。氷楯レフレクシオー…」

エヴァは魔法瓶を出して氷の盾を出し、ネギの魔法の矢を跳ね返した。

ほう、以外にやるな。しかし魔力が戻ってるとはいえ、魔法薬を使うというのはめんどくさいな。

「僕の呪文を全部跳ね返した!?!」

だが少しは驚いてやらんな。

「くっ…驚いたぞ、凄まじい魔力だな…」

自分で言っておいて何だが、意識して芝居をすると結構疲れるな。

「えっ！？き、君はウチのクラスの…え、エヴァンジェリンさん！？」

「フフ…新学期に入った事だし、改めて歓迎のご挨拶と行こうか先生、いや…ネギ・スプリングフィールド。10歳にしてこの力…さすがに奴の息子だけはある」

こう言っておけば、坊やは必ず奴の事を聞き出そうとするからな。

「な、何者ですか貴女は！？僕と同じ魔法使いなのに何故こんな事を！？」

「この世には…良い魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよネギ先生」

エヴァは再び魔法瓶を取り出した。

フリーゲランネクセルマティオー
「氷結、武装解除！！」

エヴァの武装解除は、ネギが風で服を吹き飛ばす様に、エヴァは服を凍らせて散らせた。

「うあっ！？」
レジスト
「抵抗したか、やはりな」

ネギは咄嗟に防いだが、のどかの服が9割散った。

「ハッ、宮崎さん、大丈夫…ってわあっ！？」

ほぼ全裸に近いのどかの状態に慌てるネギ。

「あわっ、あわわ!?!」

するとそこに、

「何や今の音!?!」

「あっ、ネギ!」

ちっ、誰か来たか。まあいい、坊やなら私の後を追いかけて来るだろうから、引かせて貰うぞ。

エヴァはドサクサに紛れて去って行った。

~~~~~

くネギサイドく

明日菜さんと木乃香さんが来た時は驚きましたけど、今はエヴァンジェリンさんを追いかけないと!

ネギは明日菜と木乃香にのどかを任せてエヴァンジェリンを追いかけた。

でもショックだな…魔法を悪い事に使ってるだなんて。そう言えば前に不動さんから聞いた事があるな。

『魔法使いは世の為人の為に使うとも言われてるが、中には魔法を悪い事に使ってる者もいる』

『えっ!?!何でなの?』

『悪に走る魔法使いが少なからずいると言う事だ』

『何で悪に走っちゃうの?』

『魔法使いとて絶対正義ではない。魔法を道具の様に使って悪さする者もいれば、やむを得ない事情を抱えて犯罪に染まってしまっ者

も少なくないという事だ』

不動さんの言ってる事が正しいなら、エヴァンジェリンさんは何かやむを得ない事情があつて悪になつたのかな？

それに、「奴の息子」って言っていたし、あの人は…僕の父さんの事を知ってるのかな？

いや、今はそれより、エヴァンジェリンさんを追いかけないと！しばらく走っていると、橋の上にエヴァンジェリンを見かけた。

「いた！」

「速い、そう言えば坊やは風が得意だったな」

そう言つてエヴァは橋から飛び降りた。

「あつ！？」

しかし、エヴァは飛んで行つた。

「杖も箒も無しに空を飛んだ！？ただの魔法使いじゃないぞ！？」

ネギも杖に跨り、エヴァを追いかける為に飛んだ。

「でもおかしいな…凄腕の魔法使いにしてはさっきの魔法は威力が弱いし、さっきから呪文の発動に態々魔法薬を触媒に使つてるのも変だ」

ネギはそんな疑問を思いつつも、エヴァを追いつつていた。

「待ちなさい！エヴァンジェリンさん、どうしてこんな事するんですか！先生としても許しませんよー！」

「はは、先生、奴の事を知りたいんだろ？ 奴の話の聞きたくはないのか？ 私を捕まえたら教えてやるよ！」

「!?!」

父さんの事を…。

「…本当…ですね」

エヴァは軽く笑った。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル、エウオカーティオ・ウアルキヌサポホルはアグラディアアリー風精召喚!! 剣を執る戦友

僕は8体の風精を召喚して、エヴァンジェリンさんをつままえようとした。

「分身!?! イヤ、サモン・エレメンタル精霊召喚か」

「つまえて（アゲ・カピアント）!!」

風精達はエヴァに向けて飛んだが、魔法瓶を取り出して防いだ。また魔法薬! やっぱりだ、何故かこの人は魔力が全然弱い。勝てる! 風精の一体がエヴァに攻撃して隙が出来た。

「追い詰めた! これで終わりです! フランス風花・エクセルマティオー武装解除!!」

「!?!」

エヴァのマントがコウモリとなって飛散した為、下着姿になってしまった。

そして、女子寮の屋根の上に降りた。

「やるじゃないか先生」

うわっ！？下着…取り合えず、見ないようにしないと。

「こ、これで僕の勝ちですね。約束通り教えて貰いますよ、何でこんな事したのか…それに、父さんの事も」

「お前の父、即ち…「サウザンドマスター」の事か？ふふ…」

何故それを！？やっぱりエヴァンジェリンさんは父さんを知っている！？

「と、とにかく！魔力も無く、マントも触媒も無い貴女に勝ち目は無いですよ！素直に…」

「これで勝ったつもりか？」

すると、一つ高い屋根の上から、誰かが降りて来た。

「さあ、お前の得意な呪文を唱えてみるがいい」

新手！？仲間がいたのか！仕方ない、二人まとめて…

「風の精霊11人、縛鎖となって敵を捕らえる…」

「ふ…」

もう一人の方はネギに近づき、

「魔法の射<sup>ギ</sup>…あたっ！？」

デコピンした。

「あたた？えっ、あれっ！？」

ネギは驚愕した。

「き、君は、ウチのクラスの…」

現れた人物、茶々丸がペコリとお辞儀した。

「紹介しよう。私のパートナー、3-A出席番号10番、魔法使い<sup>ミニステル</sup>従者、からくり茶々丸だ」

「えっ、なっ…ええー！ー！ーっ！！？茶々丸さんが、貴女のパートナー！？」

「そうだ。パートナーのいないお前では、私には勝てんぞ」

「な…パ、パートナーくらいいいなくて、風の精霊11人、ばkあうっうっ！？」

ネギが呪文を唱えてる内に茶々丸が近づき、顔を引っ張った。

「風nはぴゅっ！？」

また詠唱を中断された。

「な…」

「驚いたか？元々ミニステル・マギとは戦う為の道具だ。我々魔法使いは呪文詠唱中は完全に無防備となり、攻撃を受ければ呪文は完成しない。そこを盾となり剣となって守護するのが従者の本来の使命だ。今や恋人探しの口実となってしまっているがな」

し、知らなかった…。

「つまり、パートナーのいないお前は我々二人には勝てないという



事さ」

「そそそそ、そんなー！ー！！？」

「茶々丸」

「はい、マスター」

茶々丸はネギに近づき、拘束した。

「申し訳ありませんネギ先生……」

「うぐつ！？」

「マスターのご命令ですので」

「うぐぐぐ……」

「ふふふ……ようやくこの日が来たか、お前がこの学園に来てから今日という日を待ちわびたぞ……お前が学園に来ると聞いてからの半年間、ひよっこ魔法使いのお前に対抗出来る力を付ける為、危険を冒してまで学園生徒を襲い、血を集めた甲斐があった。これで奴が私に掛けた呪いが解ける……」

「え？の、呪い……？」

何の事？呪いつて？

「そうだ……真祖にして最強の魔法使い、闇の世界で恐れられたこの私が舐めた苦汁……」

段々震えてきたエヴァ。

「私は貴様の父、つまりサウザンドマスターに敗れて以来、魔力も極限にまで封じられ……」

そしてネギに掴みかかるエヴァ。

「もう15年もあの教室で日本の能天気な女子中学生達と一緒に勉強させられてるんだぞ!!!」

すごい気迫でネギを威圧するエヴァ。

「え…そんな…僕、知らな…」

「このバカげた呪いを解くには、奴の血縁たるお前の血が大量に必要なんだ！悪いがたくさん吸わせて貰うぞ」

「うわああー！ー！ん！？誰か助けてえええええっ！！？」

エヴァはネギの肩に噛みついた。

「ん…」

「うあっ！？」

ちゅうつうつうつうつうつ

血を吸い始めたエヴァ。

「あつっ…あつ…ああ…あ…」

こ…こんな事になるんだっ…たら…誰かパートナーを探しておくんだ  
ったよお…。

~~~~~

～C・C・サイド～

ふむ、ナギの事で相当溜めこんでいたな。

しかしナギ、エヴァがあれだけ慕ってるのに約束を忘れて良い気な

ものだな。

未だにC・C・は、エヴァがナギに惚れてると思いついていた。しかし見てて興奮するな。人が吸われてる所は。その時、誰かが近づいて来た。ん？あれは…明日菜か。

「コラー！この変質者共……！」
「ん？」

明日菜が来たか。念話で私に対処しようエヴァに言っておこう。

「（エヴァンジェリン、明日菜は私が止めよう。お前は気にせず吸っててくれ）」
「（分かった）ん……」

エヴァは再びネギの血を吸い始めた。

「ウチの居候に、何し「ガシツ」んのよっ!？」

C・C・は明日菜の服の後ろ襟を掴んでいた。

「ちよっ!？何すんのよ!」
「何をするとはこちらの台詞何だが？」
「邪魔しないでよ!ネギが変質者に!」
「悪いがお前はそのままにしておく、友人の食事中だからな」
「友人で、離さないよ!」

未だに掴んでるC・C・の手を振り解こうと暴れる明日菜。掴んだままにするのって、意外と疲れるな。

あ、向こうはどうやら吸い終わったみたいだな。というより大丈夫

かネギは？

解放されて倒れるネギは、少し痙攣していた。

「ネギ！？」

「神楽坂明日菜か」

「あれっ！？アンタ達、ウチのクラスの…ちょっと、どーゆう事よ！？てか、ネギに何したの！」

「案ずるな、血を吸わせて貰っただけだ」

「血を吸わせてっ…じゃあ、あんた達が吸血鬼事件の…！」

「そっだ、神楽坂明日菜。貴様のその足りない脳みそでも判断出来る事だろっ？」

「う、うるさいわね！あんたと絡繰さんは分かるけど…さっきっから私を掴んでる人は誰よ！」

「そいつはC・Cだ。私の古き友だ」

事前に打ち合わせしておいて良かったな。

「あ、あんたも吸血鬼なの？」

「いや、私は単なる千年程長生きした人間だ」

「いやそれ普通じゃないでしょ！？」

さすがに千年は長過ぎるか？

それはそうと、そろそろ離しておくか。

C・Cは明日菜を離れた。

「キヤッ！？」

明日菜は尻餅をついた。

「それじゃあエヴァンジェリン、茶々丸、用が済んだなら帰ろうか

「？」

「そうだな。それなりの収穫はあったからな」

「それでは神楽坂さん、ごきげんよう」

私たちはこの場を去った。

所変わって家に着いた。

「それでエヴァンジェリン、ネギの實力はどうだったか？」

「そこそこだったぞ」

「だろうな。さすがはナギの息子と言った所か」

「それはそうとC・C」

「何だ？」

「そろそろラウルがランカに戻れ。そのままだと落ち着かんぞ」

確かにそうだな…少しからかってみるか。

「私は別に構わんぞ。それに…このままでも楽しめるしな」

「ちよつと待て！？何故近寄ってくる！？」

「いや、ちよつと興奮してきてな、ただだこつかと」

「いや待て、そういうのはベッドd…ングツ！？」

私はエヴァにディープキスをした。

「ぢゅっっっ、んっ、じゅるじゅるるっ、ずずっ」

「ムグツ！？んんん！？」

「じゅるじゅるっ、じゅるるっ、ちゅっっっ、ちゅるるっ」

「ムウウウウウツ！！？」

そのまま10分程続いた。

ふむ、この姿だと大胆な行動が素で出来るのか。

C・Cの足元には、悶絶したエヴァが倒れていた。

~~~~~

「茶々丸サイド」

すごい光景を見てしまいました。

C・Cさんがマスターにキスをして数十分程続いたのを見て、私にもしてほしいと考えてしまった私がいいます。

最近の私はどこがおかしいですね。超さんとハカセに見てもらわないと。

桜通りの吸血鬼と千の時を生きる魔女（後書き）

マガジン見てて思ったんですが、今書いてるフェアリーテイル〜虹の滅竜魔道士〜は、天狼島編で終わりにしようと思います。次回は淫じゅ…オコジヨが出ます。

## オリ主設定5（前書き）

C・Cは前から出す予定でした。



## オリ主設定5

<名前>

C・C・(女) 設定年齢1000歳以上、見た目年齢17歳  
設定本名クレア・クルセイド(Crea=Crusade)

<容姿>

見た目はコードギアスのC・C・  
普段は拘束着、エヴァとお揃いのゴスロリ服、戦闘用はR2の黒の  
騎士団服、学校内では麻帆良学園の制服

<呼び名>

謎の女

千の時を生きる魔女

エヴァの古い友人

ピザ女

<立場>

千の体を映す水鏡で変身した姿、ランカ(ラウル)が側に居る時は  
分裂

設定は気楽かつ傍若無人な性格で、常に棘のある言葉や冗談を言っ  
て相手を翻弄する様に喋る

エヴァの古い知り合いという事にしてある(正体を知っているのは、  
エヴァ・チャチャゼロ・茶々丸)

ネギVSエヴァの時に介入して、ネギに実力の差を教える為に変身  
した

C・C・と設定したからにはピザしか食べない

ラウルの母親、ランカの祖母という設定

百合系でかなりディーブ

## エロ獣騒動（前書き）

今回はやっとエロ獣ことオコジヨがでます。

## エロ獣騒動

「エヴァサイド」

昨日は散々だった…C・C・になったラウルは容赦が無かったからな。

私が何度もイカされてしまったからな。その所為か眠いな。

今日のエヴァンジェリンは、学校に来て早々サボっていた。

「ふわあゝあ…昼は眠い…」

その時、

「む！？何か来たな。結界を越えた者がいる、学園都市内に入り込んだか…」

何かが結界を越えた事に感知したエヴァ。

「だが、もう呪いは無い。放っておこう」

そのまま昼寝をするエヴァだった。

~~~~~

「ランカサイド」

やっぱりネギ先生は昨日の事で悩んでいますね。

茶々丸さんを見ただけでもものすごい慌ててました。

授業の方も力入ってない感じで過ごしてたし。

あっ、和泉さんにパートナーの事で質問しようとしたけど、思いとどまったみたい？

やっぱりネギ先生って、魔法秘匿についてある程度注意してるね。授業が終わった後、皆はネギ先生を元気付けようと画策していた。

~~~~~

〈明日菜サイド〉

「ネギーッ！」

授業でも落ち込んでいたわねネギは。

まあ吸血鬼なんて普通はそうゆうのは遭遇しないのに、ましてやいきなりコテンパンにされちゃったから悩んじゃうのも無理ないわね。一応私の能力があれば多少は大丈夫だけど、やっぱりパートナーがないときついわね今のネギは。ナギだったら気にせず挑んでそうだけ…。

明日菜がそう考えてると、いつの間にか隣にいた筈のネギがいなくなっていた。

「ちょっと、どこいったのよ。…あっ!？」

ネギを探していたら、エヴァと茶々丸と遭遇した。

「ほう、神楽坂明日菜か」

後ろにいた茶々丸はペコリと頭を下げた。

「アンタ達！ネギを何処にやったのよ！」

「ん？知らんぞ」

「え…？」

てつきりエヴァンジェリンが攫ったのかと…。

「安心しろ神楽坂明日菜。少なくとも次の満月までは私たちが坊やを襲ったりする事はないからな」

「え？」

そういえば吸血鬼って、満月の夜になると力が増すタイプ…だったよね？

「次の満月が近づくまでは私もただの人間、坊やを攫っても血は吸えないという訳さ」

昨日ネギが、エヴァンジェリンはナギが魔力を封印したから、魔力も低いんだっけ？

「それまでに坊やがパートナーを見つけられれば勝負は分らんが、まあ魔法と戦闘の知識に長けた助言者、または賢者メンターでも現れない限り無理だろうな。ふふ」

「な、何ですってえ！」

言っててムカつくわね！

「それよりお前、やけにあの坊やの事を気にかけるじゃないか？」

「えっ！？」

「子供は嫌いじゃなかったのか？同じ布団に寝ていて情でも移ったか？」

エヴァは「くくっ…」と笑っていた。

「なっ、関係無いでしょ！とにかく、ネギに手を出したら許さないからねあんた達！」

「ふっ、まあいいがな」

そう言つて去ろうとするエヴァ。

あっ、そうだ！もう一つ言う事があった。

「待つてエヴァンジェリン！」

「今度は何だ？」

「昨日アンタといた黒い服の女の人は何なの？」

昨日私を止めてた女の人、あの人は何者なの？

「C・Cの事か？私の古い友人だ」

「エヴァンジェリンの友人？てか、何でC・Cなのよ？」

「本名は明かしたくないらしいのでな、私以外は名乗りたくないぞうだ」

「どうゆう事よ？」

「奴にも色々あるという事だ。話は終わりか？これで失礼するよ」

エヴァは今度こそ去つて行った。

結局何も解らなかつたわねC・Cって人の事…。  
すると、

『キヤーツ！？』

「ん！？」

何、この悲鳴は！？大浴場の方ね！

その後、大浴場に着くと、

「ネギ!どうしたのよ!」

「あ、明日菜さん!」

すると、明日菜に向けて何かが飛んで来た。

明日菜は咄嗟に桶を持って迎撃した。

しかし、何故か服ははだけた。

そして、飛んで来た何かは、どこかへと消えた。

「な、何よ、今の小さいのは…」

後ろで感心した様な拍手が聞こえたから振り向くと、そこにはネギとクラスのほとんどが全裸でいた。

「コラァッ!アンタ達、ネギを連れて素っ裸で何やってるのよ!」

「いえ明日菜さん、これは誤解っ!??」

「元気付ける会だよ!!??」

全裸でやる事かー!

その後、ネギを連れて部屋に戻った。

「ふゝ、また今日もドタバタな一日だったわね」

「でも、皆のおかげで少し元気が出ました」

「へ〜…」

あれで元気ね〜…。

その時、

『景気の悪そうな顔してるじゃんか大将、「!??」助けがいるかい

？  
』

「だ、誰！？」

「え？」

今の誰の声？

すると、下の方から何か聞こえてきた。

「あっ！？」

「俺たちだよネギの兄貴、アルベール・カモベール。久しぶりさー」

「あーっ、カモ君！？」

オコジヨがいた。

てかこれさっきの！？

「へへっ、恩を返しに来たぜ兄貴！それはそうとそこの姉さん、中々やるなー」

また何か変なのが来たわ…。

~~~~~

〜ランカサイド〜

そろそろ淫獣こと、オコジヨのカモ君がネギ先生の所に来る頃ね。
この世界のネギ先生は比較的常識人っぽいから、悪影響が出ないか心配です。

プルルルルッ

あっ、電話ですね。

ランカが携帯に出てみると、

『あつ、ランカさん？こんばんわ』

「のどかさん？こんばんわ。どうしたの？」

のどかさんから電話がかかってきました

『さつきネギ先生がペットを飼い始めたの』

「ペットですか？どうゆうのですか？」

『白いオコジヨです。可愛いよ』

「オコジヨなの？どうゆうのが明日見てみたいね」

『うん』

電話が終わったら、

「ランカ、戻ったぞ」

「ただいま帰りました、ランカさん」

「あつ、エヴァさん、茶々丸さん、お帰りなさい」

エヴァさんと茶々丸さんが帰ってきました。

「昼間何者かが結界に入ったんだ、お前の方で何か変わった事は無いか？」

「さっきのどかさんから、ネギ先生がペットのオコジヨを飼い始めたって電話があったよ」

「オコジヨ？…ああ、オコジヨ妖精か」

「恐らく、それが侵入者かと」

「だろうな、一応ジジイの所に報告しておくか」

その後お休みしました。

「えーっ！？寮の裏手で不良に唐揚げされてるってー！？」
「カツアゲっス…カツアゲ」

僕は急いで宮崎さんを助けるべく向かった。

急いで着いた僕が見たものは、おめかしした宮崎さんが立っていただけだった。

あれ？唐揚げにされてたんじゃ？

「あ、あのう、ネギ先生…わ、私なんかが…ぱ、パートナーで…いいんでしょうか？」

「へ？」

パートナーって…て事は！？

「（か、カモ君！？）」

「（すまねえ兄貴、手っ取り早くパートナーの契約を結んで貰う為、一芝居打たせて貰いましたぜ）」

騙したねカモ君…！？

話を聞くと、早くパートナーを決める為の後押ししたとか…。

すると宮崎さんは、この前エヴァンジェリンさんに襲われた時に助けた事で、何かお役に立てたらと顔を赤くしながら言っていました。カモ君の話によると、クラスの中で一番僕の事が好きらしい…って！？…そんなの僕困るよ…！？

そしてカモは、魔法陣を展開させた。

バクティオー
「契約！」

「わっ！？」

「きゃっ！？」

カモ君！？勝手に魔法陣を！？

「ん…せ、先生…これは？…この光…な、何だが…ドキドキ…します…」

あれ？僕も何だか…ドキドキしてきたな…。

ネギは、カモから仮契約の方法を教わった。

その方法が、キスだという事も。

「つてええ！？キス？」

「一番簡単な契約方法さ。（他にもあるけど、めんどいし）」

カモが後に言ったのは小声だったから、ネギはよく聞きとれなかった。

「だ、だめだよ！それに宮崎さんだって、こんな騙したみたいな格好d「き、キスですか？」え？」

「わ、私も初めてですけど…ネギ先生がそう言うなら…」

「えっ！？」

「それに…私も何だか…胸がドキドキして…」

のどかは目をつむり、キスの受け入れ態勢を取っていた。

「えっ…ええー！ー！っ！！？そ、そんな、僕、心の準備が…」

「ここまで来て名に迷ってるんだよ！パートナーが欲しいんだろ？男ならホラッ、ブチュ〜ってウラ！」

カモは怒鳴る様に後押しした。

ぼ、僕もまだキス何てした事無いし…宮崎さんは僕の生徒だし…あ

うっ…。

するとのどかは待ちきれなくなったのか、自分からキスをしようとした。

「あ…」

ネギとのどかがキスするまで秒読みだ。

「よ、よっしゃー、行け！兄貴！ホラ、ブチューー！これで俺たちも晴れて無罪放…」「コラ！このエロオコジョー！」「ぶぎゆる！？」

突然やってきた明日菜がカモを踏みつけた為に、魔法陣が強制解除した。

その為、契約は執行されなかったので、中にいたネギとのどかは弾かれた。

明日菜さんの話によると、カモ君は下着を二千枚程盗んだ罪があるって、カモ君一体何してたの！？

カモ君から事情を聞くと、病弱な妹の為に保湿効果のある女性の下着で温めてる内に罪を取られたって「立派な下着ドロじゃない」。

僕の所に来たのは、マギステル・マギ候補生のペットならすぐには捕まらないと考えたからだという。

ネギ達に事情を話したカモは、立ち去ろうとしたら、

「待つてカモ君！知らなかったよ…カモ君がそんな苦勞を…」

「なっ…」

「あ、兄貴…」

「分かったよカモ君！君をペットとして雇うよー！」

「あ、兄貴ー！いい、良いんですかい！？こんな脛に傷持ちの俺たちで！？」

カモは、月給五千円でネギのペットとなった。

「いや…まあ、いいんだけどね…」

明日菜は複雑そうにして二人を見ていた。

その後、のどかを下駄箱の所で介抱させて、様子を窺ってた。

「あれ？…はっ！？い、いやです私、こんな所で寝ちゃって…しかも、何てはしたくない夢を…」

のどかは恥ずかしくなって寮へと戻って行った。

ご、ごめんなさい、宮崎さん…。

エロ獣騒動（後書き）

正直「虹の滅竜魔導士」は辞めようかなって思ったけど、10/19のマガジンを見て続けようかなって思いました。でも、もしかしたらIF作品を書くかもしれない。

次回は茶々丸を尾行のを少し変えてみました。

立派な魔法使いを目指す者として（前書き）

茶々丸尾行のイベントを少し変えてみました。

立派な魔法使いを目指す者として

（明日菜サイド）

あのエロオコジョは、人の下着に包まってんじゃないわよ！
学園に着いて早々キョロキョロし始めたネギ。
すると、

「お早う、ネギ先生」

「!?!」

「今日もまったりサボらせてもらっよ」

エヴァンジェリンがやってきた。

「フフ、ネギ先生が担任になってから色々楽になったな」

「え、エヴァンジェリンさん!?! 茶々丸さん!?!」

ネギが臨戦態勢を取ろうとしたが、

「おっと、勝ち目はあるのか？ 校内でおとなしくしておいた方がお互いの為だと思うがな」

その言葉で動けなくなるネギ。

しかし、この場を制御できる者が現れた。

「コラ、エヴァさん！ちゃんと授業に出ないとダメでしょ！」

「ら、ランカ…」

「ランカちゃん!?!」

「あ、お早うございます、ネギ先生に明日菜さん」

「お、お早うございます……」

「さあエヴァさん、教室に行きますよ！」

「ちょ、押すな！？押すなってランカ！」

ランカちゃんに押されていくエヴァンジェリン。

「それでは……（ペコリ）」

茶々丸さんもその後を追っていった。

「」「」「」

その様子を唾然として見ていたネギと明日菜とカモ。

「えつと……クルセイドさんて……すごい人ですね……」

「あの嬢ちゃん……兄貴のパートナー候補に出来るな」

「ランカちゃんて……結構アグレッシブなのね……」

まだ呆けていた。

「それにしてもすごいですねクルセイドさんて、あのエヴァンジェリンさんを……」

「そうね……」

「兄貴、あの二人が例の問題児なんスか？」

「うん……」

「でもよ、あの様子じゃお目付け役の嬢ちゃんがいるんだから大丈夫だろ？」

「そういえばランカちゃんてこの二年間、ずっとエヴァンジェリンと一緒にいるよね？」

「えっ！？」

ランカちゃんの事で驚くネギ。

「クルセイドさんがエヴァンジェリンさんを!？」

「そうみたいよ? そういえば木乃香から聞いたんだけど、ランカちゃんて、エヴァンジェリンと同居してるって」

「ええっ!？」

エヴァンジェリンと同居してる事に更に驚いたネギ。

「というか、何でランカちゃんは、エヴァンジェリンと同居してるんだろ？」

「何でクルセイドさんがエヴァンジェリンと!？」

「知らないわよ!」

「それよりも兄貴、あの二人が一体何すか？」

「あの人は、実は吸血鬼なんだ…しかも真祖…」

するとカモは、

「く、故郷へ帰らせていただきます…」

「コラ」

逃げようとしたので捕まえた。

「そしてあの茶々丸さんがエヴァンジェリンさんのパートナーで、僕はあの二人ともう一人の人に惨敗して、今も狙われてるんだよ…」

「(なるほど、あの二人に契約の力を感じたのはそのせいか…) それにしてもよく生き残れたな兄貴、吸血鬼の真祖って言やあ、最強クラスの化物じゃないツスカ」

「何か魔力が弱ってるらしいのよ。次の満月まではおとなしくして

「るつもりらしいけど…そんなにやばいの？」

「なるほどな…つか、もう一人つて？」

「エヴァンジェリンの友人のC・C…って人」

「C・C…？聞いた事が無え名だが、こいつも余程の悪党に違えねえ！」

「だと思っね…どうしよカモ君…」

するとカモは不敵な笑いをした。

「フフ、でも安心しろよ、そーゆーコトなら手がない訳でもないぜ」

「え！？何か勝つ方法があるの！？」

「ネギの兄貴と姐さんがサクツと仮契約を交わして、相手の片一方を二人がかりでボコツちまうんだよ！」

つまり、私とネギで茶々丸さんを…って、

「えー…！っ！？何それっ！？」

「僕と明日菜さんが仮契約ー！？」

「姐さんの体術は昨日の風呂場や脱衣所で見せてもらいやした。良いパートナーになりますぜ」

「で、でも、二人がかりなんて卑怯じゃ…」

「ひきよーじゃねーよ！兄貴だって二人がかりでやられたんだろー！？勝つ為には二人がかりでいくしかないツスよ！やられたらやり返す、漢の戦いは非情さ！」

「で、でも…」

「ちよつと、私はイヤよ！仮契約って昨日のアレでしょ？何かバカみたいだし…」

ガキンチヨなら尚更よ！

「…ああ、もしかして姐さん、中三にもなつてまだキッスを済ませ
てないとか?」

「なっ!?!」

「フッフ…いや、これは失礼。じゃあ仮契約と言えど、抵抗あるで
しょーな…」

「なっ、何言つてんのよ!?!チューぐらい別に何でもないわよ!た、
ただ、何で私がパートナーとかやる必要が…」

「じゃOKと言う事で」

「こ、コラ!?!人の話はちゃんと…」

しまった!?!乗せられた!?!

「大丈夫、この作戦なら楽勝つスよ。兄貴はどーです?」

「うっ…」

ネギは軽くテンパっていた。

そして、

「分かった!やるよ僕!」

「よっしゃ!そーこなくちゃ!」

「えー!?!何勝手に決めてんのよー!?!」

その後、ネギが必死になつて懇願するから、仕方なくおでこにキス
をした。

~~~~~

〜C・C・サイド〜

あのオコジヨの所為で折角マシになつた坊やが、原作の様に茶々丸

に攻撃をしないかどうか心配だな…。

一応C・Cの姿になって茶々丸の後を追っていた（気配が分からぬように、フルメタのM9のECSで透明化して）。

案の定、坊やと神楽坂明日菜とオコジヨが茶々丸の尾行をしているな。

ちなみに、今の恰好は学生服だ。しかも中等部用（それなりにスタイルの良い連中もいるんだから大丈夫だろう？）。

しばらく歩くと、茶々丸が初等部の子の為に風船を（飛んで）取ってきた。

坊や達はポカンとしていたな。

「そ、そういえば…茶々丸さんて…どんな人なんです？」

「えーと…あれ？あんまり気にした事なかったな…」

「いや、だからロボだろ？さすが日本だよな。ロボが学校通ってるなんてよう」

「「ええっ!?!」」

「じ、じゃあ人間じゃないの茶々丸さんって!?!」

「変な耳飾りだなあとは思ってたんだけど…」

「うをおおい！見りや分かんたるお!?!」

「い、いやあほら、私メカって苦手だし…」

「僕も実は、機械は…」

「そゆう問題じゃねえよお!?!」

…漫才かこれ？

というより、カモが思いつきり怒鳴ってるな。私が認識障害の魔法を掛けてなかったら大騒ぎだぞ？

その後も茶々丸は、歩くのもひと苦労な老婆が階段を登ろうとしているのを目撃した茶々丸は、老婆を反対側まで背負ってあげた。

「いつもありがとうございます茶々丸さん」

老婆がお礼を言い、茶々丸はお辞儀した。  
しばらく歩いていくと、橋の上で野次馬達が騒いでいた。  
川の方を見ると、猫が入ってる箱が流れていた。  
茶々丸は急いで川に入り、猫を救出した。  
周りの野次馬達は茶々丸に歓喜の声が上がった。  
やはり良いな茶々丸は。  
それを見ていたネギ達は、

「メチャクチャ良い奴じゃないのーっ！しかも街の人気者だし！」  
「偉い！」

「い、いや、油断させる罠かもだぜ兄貴……」

疑り深いなあのおコジヨ。

その後茶々丸は、教会の裏に赴いた。

そこにはたくさん野良猫がいた。

茶々丸に気が付くと、一斉に群がってきた。

茶々丸は、買ってきた猫缶を開けて、猫達に食べさせた。  
見てるだけで和むな。

「……良い人だ……」

ネギと明日菜は感動していた。  
それをブチ壊したのは、

「ちょっと、待って下さい二人とも！ネギの兄貴は命を狙われたんだ  
ろ！？しっかりして下さいよう！」

おコジヨ……空気読め……。

そろそろ出る準備をしよう。

ネギ達は、茶々丸の前に現れた。  
それを感じたのか、猫達は一目散に散って行った。

「こんにちは、ネギ先生、明日菜さん。油断しました、ですがお相手はします」

茶々丸は臨戦態勢を取った。

「……………」

「ね、ネギ？」

「兄貴、どうしたんですかい？」

ネギは考え込んでいた。

するとネギは、茶々丸に質問をした。

「…茶々丸さん、どうしてエヴァンジェリンさんは僕の事を襲ったんですか？」

「申し訳ありません、私にはお答えすることは出来ません」

「そうですか…じゃあ、C・Cさんと一方は何者ですか？」

「マスターのご友人です」

「…僕以外にも…僕の生徒さん達を襲う気はあるんですか？」

「マスターは女性や子供を殺す気は有りませんし、クラスの方々を自ら襲う気はもうないそうです」

「分かりました、ありがとうございます」

何故礼を？

「?どうしてお礼を言うんですか？」

「本当は…貴女を倒すつもりだったのですが、今日の貴女の行動を見て、考えが変わりました」



「ネギ!？」

「あ、兄貴!？」

「貴女の様な優しい人に、僕は戦えません」

何か、意外な事になって来たな…？

「…そうですね」

「おいおい兄貴!？今こいつをたたんじまわないと、兄貴が不利になりますって！姐さんも何か言っちゃって下せえ！」

「私もネギの意見に賛成よ」

「って姐さんもかよ!？」

どうやら、取り越し苦労で終わりそうだな。

原作だと、坊やと明日菜が二人掛かりで襲いかかっていただろうか  
らな。

C・C・は、ゆっくりと歩きながらネギ達に近づいた。

「フッフ…良かったな茶々丸、向こうの気が変わって」

「!？」

「誰っ!？」

「何処に居やがる!」

「…C・C・さん？」

C・C・は茶々丸の前辺りでECSを切り、あたかも横から突然現れた様に見せかけた。

「うわっ、出た!？」

「貴女は!？」

「こいつか！兄貴の言ってたC・C・って女は!」

「C・C・さん、こんにちわ」

こんな時でもお辞儀をする茶々丸。

「茶々丸、お前は先に戻ってていいぞ」

「分かりました。それではネギ先生、私はこれで失礼します」

「はい、ではまた明日」

そう言い、茶々丸は背中のジェットを使って飛んでいった。

C・Cはネギ達の方に向いた。

「さて坊や達、私と少し話をしようじゃないか？」

「そんな事言つて、本当は兄貴を始末しな」  
「黙れ小動物！」  
「ヒッ！」

C・Cはカモに向けて殺気を浴びせた。

「それで、僕たちに話とは？」

「そうだな、私から言う事はだな：お前は今まで出会ったマジステル・マギとは違つのだなと思つてな」

「えっ？どつという事ですか？」

話に食い付いてきたな。

「お前は自分の身が危ないからと言って、自分の生徒を抹殺せずに済んだという事だ」

「えっ！？」

「抹殺つて！？」

「何言つてやがんでい！」

「だってそうだろ？真祖の吸血鬼とその従者がいるとはいえ、坊やが受け持っている生徒なのだろ？それを、自分が狙われてるからっ

て始末しなくちゃと思うのは何故だ？」

「そ、それは…」

「兄貴を狙ってるからだろ！そんな事分かりきってる事じゃねえか！」

このオコジヨは…本当にあのクズな連中と同じだな。

「そう、自分が狙われてるから、やられる前にやる。それはある意味当り前の事だ。だが今のお前は教師だ、自分の受け持つ生徒を自分で倒すのはどうかと思うぞ？」

「うっ…」

「だが、マギステル・マギ達は坊やと同じ状況だろうと、そんな事にせずにそいつらを簡単に始末しているがな」

「えっ？」

「ほら、兄貴もマギステル・マギを指してるならそれぐらいは…」

「どうしてですか!？」

「て兄貴？」

ネギはC・C・に質問を続けた。

「簡単な事だ、マギステル・マギ達はそいつを悪と決め付けてるからだ」

「悪…ですか？」

「そうだ。やつらは一度でもそいつを悪だと認識すれば、どんなに善行をしても悪は悪だと決めつけ、揚句始末される」

「え…?」

「つまりマギステル・マギ達は、悪は成敗されるものだと考えてるから、相手がどんな存在だろうと躊躇なく殺るだろうな」

「そんな…!？」

C・C・の言っている事に困惑するネギだが、

「騙されるな兄貴！ 惑わされちゃダメっスよ！」

カモがそう否定していた。

「一方的に悪だと決めつけ、相手がどういふ存在かも知らずに手を出す… マギステル・マギはいつもそうだ、悪だの何だので勝手にそう認識して、勝手に判断して、勝手に始末する… 相手の事なんか何も考えていないからな」

「そんな事…」

「無いと言えるのか？」

「う…」

さて、そろそろ溜まってる鬱憤を出すか。

「そもそもマギステル・マギという意味を履き違えてないか？」

「えっ？」

「坊や、お前はマギステル・マギとはどんなものだと考えている？」

「えっと、世の為人の為に陰ながらその力を使い、導いて行く事です！」

「フ… それではマギステル・マギにはなれんな」

「えっ！？ 何故ですか！？」

「お前が言ったのはむしろ慈善事業家の意見だ」

「慈善… 事業…？」

坊やの言っ様なマギステル・マギは、全体の1〜2割程で結構少ないからな。

「ほとんどのマギステル・マギ達は、悪を… つまり敵を倒す為だけ

に力を注いでるんだ」

そっちの方が圧倒的と言えるほどの数だったからな。

「敵を倒す…ですか？」

「そうだ、マジステル・マジ達にとっては、その方がてっとり早く有名になれるからだ」

「えっ、てっとり早く？…どういう事ですか？」

「簡単な事だ。人を救うよりも、悪を倒したって方が名が上がりやすくなるからだ」

「えっと…どゆ事？」

「何故人を救うより、悪を倒した方が良いのですか？」

ちよつとした引つ掛けな質問をしようか。

「…例えばだ、目の前にパンを盗んだ者がいた。坊やはどうする？」

「その盗んだ犯人を捕まえます！」

「そう、普通はそう考える、だが…その犯人は、お腹を空かせた子供達の為に別け与える為に犯罪を行ったら、坊やはどうする？」

「えっ…」

言葉が出せずにいるネギ。

「それでも坊やは、その犯人を捕えるのか？目先の事しか考えず、残された者達がどうなるか考えない、そんな存在になりたいのか？」  
「……………」

とうとう俯いてしまったネギ。

「やいやいやい！さっきから屁理屈ばかり並べて、兄貴を惑わせ

ようつたつてそうはいかねえぞ！」

「黙れ小動物！」

「ピイツ！？」

C・Cはまたカモに向けて殺気を浴びせた。

「僕は……」

「悩んでいるな、犯罪を犯した者にも事情がある事に」

「はい……確かに盗みは犯罪です。でも……その人は、子供の為に犯罪を犯したんです……それは、どうしたらいいかわかりません……」

俯きながら答えるネギ。

「その時は悩め」

「悩む……ですか？」

「そうだ、悩んで考えて、そして自分が信じる答えを出せ。それが出来れば、本当の立派な魔法使いだと、私は思うがな」

やはり坊やが良い方向に進んでいるな。

迷いがあるから、人は過ちを認識出来る。正しいのか悪いのかの判断が付く様になる。

だからこそ、迷いは必要だと、私は思うがな。

「自分の信じる答え……ですか」

「ああ。もつとも、ほとんどの者達は迷い無く盗んだ奴を捕まえるだろう。それが、今のマギステル・マギだ」

「えっ!？」

「坊や、奴らは悩む事無くそれが出来るのは、相手が悪だと決めつけ、それを退治すれば、周りから称賛される。これが、人を救わず、悪を倒していった者達だ」

「…名声欲しさに…ですか…」  
「そうやって伸し上がって行ったマギステル・マギを千年間見続けてきたからな」

ホントはエヴァンジェリンと一緒に行動した五百年間だな。

「そんな…」

「では再度訊くが、坊やの魔法は何が得意？」

「えっと、風の魔法と魔法の矢と武装解除などです」

「ふむ、主に戦闘向けばかりだな」

「戦闘向けですか？」

「ああ、何故戦闘向きな魔法だけしか身に付けていないんだ？」

「そ、それは…」

前々から疑問に思っていたんだがな…。

「立派な魔法使いを目指しているのなら、怪我や病気を治す治癒魔法や、呪いや石化とかを解呪する魔法を使えば充分なのに、何故敢えて戦闘用の魔法ばかり覚えてきたんだ？」

「あつ、そういえばそうね」

「確かに治癒や解呪と言った魔法で救ったマギステル・マギの話も聞いた事あるけど…」

「……………」

「これでは悪と戦う魔法使いとしか見られないぞ？」

「ぼ、僕は…」

「坊や、お前も内心こう思っていたんじゃないのか？「悪を倒せば僕はヒーローだ」と」

「そ、そんなことありません!？」

動揺しつつもちゃんと言うネギ。

「ある男が言っていた。「日常で人を殺せば罪になるが、戦場ならば殺した数だけ英雄となる」と」

以前戦ったルキアーノの言っていた言葉だがな。

「同じ人殺しでも、立場の違いなだけでこつも違った考えが出る事が世の常だ」

「ぼ、僕は…そんなつもりは…」

「ネギ!？」

「兄貴!？」

泣き崩れたネギ。

「自分の行動次第でどうゆう結果になるか、よく考えてみる事だな」

そう言つてC・Cは、ECSを使って透明になった。

言いたい事は言った。後は坊や次第だな。

（ネギサイド）

C・Cさんが後ろを向いた途端、突然消えた!？  
多分去つたのだろう。

「兄貴、気にすんなって、たかが性悪女の戯言ですぜ」

「でもカモ君…正直、迷つてるんだよ…」

「いや、兄貴だって、あの吸血鬼に命狙われてるんだって…」

「よく考えたら、エヴァンジェリンさんに狙われてるのだから、父



さんに掛けられた呪いを解く為に僕を狙ったのなら、エヴァンジェリンさんだつて必死だったんじゃないかって思つて…」

「兄貴すっかりして下せえよ!？」

「ここでウジウジ悩んだつてしょうがないでしょ？ほらネギ、一度寮に戻りましょ。」

「…うん」

明日菜さんの一言で纏めて、寮へと帰りました。

~~~~~

〈茶々丸サイド〉

C・Cさんと別れてから、私のボディが熱く感じています。

以前から私は、ラウルさんの事を考えているとどこかおかしくなります。

マスターと話をするランカさん、マスターと組手するラウルさん、私と一緒に家事の仕事をするオータムさん、そして、昨日マスターにディープリキスをした時のC・Cさん。

全部ラウルさんですが、私の脳内カメラが一杯になるくらいラウルさんを見て、どうしてか私のボディが熱くなつていきます。

やはり私はどこか不調の様ですね。マスターの所に帰る前に超さんの所で診て貰いましょう。

茶々丸がその不調の意味に気付くのは、もう少し先の話になる様だ。

立派な魔法使いを目指す者として（後書き）

自分なりの解釈ですので、変に感じてしまったらすみません。

茶々丸がラウルに恋心を抱きつつあります。

次回はナギの真実とラウルがエヴァの気持ちに気がきます（今頃！？）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5883p/>

魔法先生ネギま！～異界を切り裂け!A.C.E.(R)の翼～

2011年10月28日02時06分発行